イソップ物語

イソツプ物語

楠山正雄譯

東京　冨山房發行　神田

狼と小羊

序

彌〻出で〻彌〻佳いといふことは、人間社會の、不易の、最上の理想でなくてはならぬのだが、これが、兎角休みたがる動物であり、乾固まり易い動物である吾々人間に取つて、中々むづかしいことである。そこで盛極まれば、いつでも衰へるのである。賣物なぞも、ちつと評判がよいと思ふと、忽ち品がわるくなる。念入であつたものが粗末になる。然るに、此普通の病弊を脱して、おひ／＼向上の實のあるのは、冨山房刊行のお伽叢書で、此最新刊の「和譯イソツプ物語」の如きは、たしかに其類書中の白眉である。

深切な解説、精到な考證、面白い挿畫の工夫、就中ほとんど劇的と評してよい程に、一々の會話に特色を持たせて譯しながら、尚常に家庭用、幼年

93
A
3
國立國會
24.12.23
圖書館
144773

用といふ目安を忘れず、品よくなだらかにと注意した譯者の周細な經營に、私は感服した。

斯ういふ類のお伽物が、廣く全國の家庭に行き渡るやうになれば、おのづから趣味性の涵養上にも好結果を及ぼすに相違ない。

八月下旬

坪内逍遙

おぼえがき

一、「イソップ物語」――と云ふと、これつきとした一部の書物のやうに聞こえますが、さてこれが原書と指して云ふべきものは本元の希臘は元より近世歐洲の何處の國にもありませぬ。國に依つて本が違ひ、本に依つて話の内容も違へば文章も違ひます。この譯書は英吉利のヴノン・ジョーンズが一九一二年の新譯本を基に二三の異本をも補遺として用ゐた外に、羅馬のファイドルスの韻文喩言集と佛蘭西のラ・フォンテエヌの同じく韻文の喩言集とから、三四章づつを拔いて見ました。前者は今日でまづ「イソップ物語」の根源となつてゐて由緒最も久しい書物、後者は近世のイソップ文學に最も名高い古典、佛蘭西語の學生には至つておなじみの深い書物です。共に參考までに出して見たのです。別に我國に古くからあつた文祿及び慶元寛治の伊曾保物語、及び明治初年の和譯本から同じく三四章を見本として拔いたのも同じ意味からです。

一、すべては別項の「解説」に書いて置きましたやうに、本來のイソップといふ母家に巣を食つた古今東西の動物喩言を根よく寄せ集めると七百以上の數にも及ぶさうですが、それでは際限がありませんから假りに三百三十三と數を定めました。しかもそのうち一題の下に三四種の同題の話をまとめたものもありますから事實はそれ以上の數に上ほるでせう。それでも或は他の和譯本に出てゐる話でわざとここに省いたものも少々はあります。しかし中でも粹選りの秀逸として世界到る所最も廣く行はれてゐる喩言凡そ百ほどは、ほぼ遺漏なく入れて置きました。

一、これまでの和譯本の多くは譯者が意匠を加へて、いろいろに面白く解りやすいやうに碎いて書いてありますが、この度はわざとできるだけ元の簡潔な格言風を學んで譯しましたから、幼い方

には或は敎訓の趣意が呑み込めぬところがあるかも知れませぬ。これはそれぞれに敷衍して說き明かして頂くやう、目上の方に願つて置きます。

一、卷末に附けた「イソップ傳」は古くからある有名なものですが、これはもとプラヌウデエスといふ坊さんの作り話といふことになつて、近來の新譯本には全然省かれてゐます。ましてわが國では知る人も少いやうですが「イソップ物語」の一部として讀めば、妄誕の中に諷刺もあり敎訓もあつて、面白い讀物であると思つて、このたびはそれをも加へて抄譯しました。

一、この譯書はともかくもこれまで出た同題の何れの書に比べて遙かに話の數も多く、その他いろいろの點で體裁の整つたものであると信じますが、しかしそれは偶然この書が最も後れて出て、今まで出た澤山の書物から十分の恩惠を仰ぐ便利があつただけの功績に過ぎませぬ。

一、この書の精神はしかし文章よりも繪畫に在るので、その點に編者は却つて多少の自信を持つてをります。裝幀の全部と、本文挿畫の大部分とは名取春仙君を煩しました。就中本文の色刷挿畫の殆ど一切は同君の才筆に依つて限りなき興趣を加へました。原色版及び石版の圖版は一二を除く外例に依つて岡本歸一君の苦心に成り、從來に比し更に一層の美しい出來榮であると思ひます。この外に佛蘭西の有名な挿畫畫家ギュスタアフ・ドレエがラ・フォンテエヌの喩言集の爲めに描いた挿畫が、アアサア・ラックハム、エドワアド・ジェイ・デットモルド、リチァアド・ハイウェイ、その他の英吉利畫家の作と共に、少からずこの書を潤してゐることを特に記して、遙に異鄕の藝術家に感謝したいと思ひます。ただ時代の新古のあるため畫風の多少折合はぬところのあるのは殘念です。

大正五年八月　　　編者

解　說

「イソップ物語」——我國に於てすら傳來最も古く、足利時代の末頃から切支丹のお宗旨と一所に渡つて來て、江戸三百年の間「伊曾保物語」の名で弘まつてゐたこの有名な動物の譬喩談は、その由來が久しいだけに、その傳統も複雜で、歐洲ではこれ專門に研究考證を重ねた書籍や論文だけでも一廉の書物庫が建つ位。その細かいことは調べも屆かぬ、今日までの研究の大略を、精々間違ひのない程度で、ざつと解說代りに書いて見よう。(「イソップ物語」又は「伊蘇普物語」といふ和名の標題は、明治になつて英譯の "Æsop's Fables" を和譯した以來の通り名であるが、もとの希臘流に訓めば、イソップはアイソポス Aisōpos でなければならず、フェエブル Fable を簡單に「物語」といつて了ふのも穩でない、唯の假作談といふ外に、處世の敎訓から政治の諷刺までも含めた意味で、まづ「喩言」「寓話」又は「たとへばなし」などと譯すべきであらうが、呼び慣れた名はやはりいいものである。)

1. イソップとは何人?

まづイソップとは何人であるか。今日ぼんやり「イソップの喩言」と稱して傳はつてゐる話の數は、一冊にまとまつただけでも五百以上に及ぶものがあり、(例へば英人レストレンジ L. Estrange の集など) その外いろいろの異本から變つた話を寄せ集めたなら七百以上にも及ぶさうだ。この夥しい喩言を、イソップといふ人が自分一代で作り出したのでもなければ、書き集めたわけでもな

い、いはゞわが國でいへば宮本武藏の講談にいろいろ違つた武者修業の英雄譚が附會され、大醜拙きの例話に支那印度の賢人の傳説までが飜案される、あれをずつと大仕掛に行つて、イソップといふと、希臘の大昔から中世を經て近世に至る二千年の長い間に、動物のたとへばなしの總本家であり、大問屋である形になつて、本來のイソップ喩言の外に、印度、アラビヤの話から近代の歐洲諸民族の話までも、動物の話といふと何がなしに跡から跡からその中に書き込まれたわけである。が、さて正味のイソップ喩言といふものはどれどれであるか、見當のつかぬばかりでなく、肝腎のイソップその人の本體が殆んど分からない。これまでも久しい年月、有るが如く、無きが如く、影の如く幻の如き人物として取扱はれてゐたが、その實在の人物であることだけは、ともかくも近來の定説となつた。しかし乍ら、さてその人がどれどれの喩言を語り、または書きのこしたものやらやはりはんたうには分からぬ。喩言の根源や傳統の研究は、後にもしるすやうに、まるでイソップその人の實傳とは交渉なしに行はれてゐる。從つて今日まづ確實と信ぜられてゐる斷片的なイソップの事蹟は、その喩言を讀む人に取つて殆んど何の興味もない、それに比べては、この書の末に抄譯して置いた中世の僧プラヌウデエスの「フリジアの人イソップが傳」といふ御伽噺めいた傳説の方が(元はヘブライの賢人アキイルの傳説を燒直した作り話だとはいふが)わが一休和尚や曾呂利新左衛門の輕口咄でも讀むやうでもあるし、その中にはイソップの喩言をも巧みに織り込んであつて、却つて吾々には興味が深く思はれる。

しかし一應イソップの正傳として承認せられてゐる二三の記事を摘いつまんで見ると――。

イソップの名の正史に見えた始は、希臘の最も古い歷史家ヘロドオトスの書に、美妓ロオドピス

Rhodepis の事を記し、その序にイソップの名を擧げてこの美妓と同じ奴隷の身分であつた云々と書いてある、その後プルタルコスの英雄傳に、賢人ソロンと共にリヂアのクレエソス王が首都サルヂスの宮廷に饗遇された逸事を傳へてゐる位のものである。これらの書に見えた記事やその他を湊

ヴェラスケス筆「イソップの像」

(西班牙マドリッド府プラド畫堂藏)

首は尖り眼は窄う然も出て、眸の先は平かに、兩の頬は垂れ頭は歪み丈は低う、横張りに、背は屈み腹は膨れ、垂出て、言葉は吃でおぢやつた。此等の相を以て醜いこと天下無双………(「文祿舊譯伊曾保物語」)

合して見ると、イソップは凡そ基督紀元前五五〇年の前後に在世した人物で、その生地はいろいろに云ふが、ともかくも小亞細亞のフリジア島であることは確かで、卑しい牧者の家に生まれて奴隷にされた。イソップが「異形不思議な人體」とか「天下無双の醜い男」だつたといふ昔からの傳説に

は別に何の證據もないさうだ。さてこのイソップが奴隷として最初に仕へた主人はサモス島のクサントス Xanthos 次ぎに同じ島のヤドモン Iadmon といふものであつたが、イソップが天眞の奇才は深く後の主人ヤドモンを敬服させ、奴隷の身分から解放されて自由民となることができた。

それからイソップは得意の辯舌と機智とを以て雅典、コリントその他の希臘の都市を遍歷し、その君主達の宮廷に召され、市民の集會に臨んで到るところに喜ばれた。アリストテレスは、イソップが公衆演說家として、當代に盛名のあつたことを記してゐる。イソップがその輕妙な喩言を以て公衆を勸戒するやり方は、例へばサモス島に居つた頃、或大官が公財を私消して彈劾をうけた、その時イソップは公衆に演說して「狐と蝟」の喩言(本書喩言一二〇)を引き、この公盜を捕へて處分した後には、更に新しくもつと慾心の盛んな公盜を迎ふるにすぎない、むしろ滿腹して欲心の薄くなつた公盜をそのまゝにして置いた方が損失が少いといつて喩したり、また雅典でピシストラトスが僭主として專制政治を布いたとき、市民が不平を云つたので、イソップは蛙共王を求める話(本書喩言九九)を語つて、彼等の我儘を戒めたり、そんなことが傳へられてゐる。雅典人はイソップ死後二百年その德を慕ふあまり、有名な彫刻家リイシッポスに囑してその像を作らせ、希臘七賢の記念像の前に立てた。

沸くが如き才藻、轉ばすが如き辯舌、イソップの名聲は希臘の本土から小亞細亞の諸島の到る所に弘まつたが、遂に當時富貴と文化第一を以て聞こえたリヂアのクレエソス王は、イソップを招いてその宮廷に止め、奧向の話相手にした。プルタルコスの英雄傳にはこんなことが書いてある。

クレエッス王賢人ソロンに、その壯麗なる宮殿と、累々たる財寶を示し、「朕は今世界最大の幸福者を誰なりと思ふや」と問いた。ソロン曰く、「雅典のテラスなり、貧窮なれど善く其子等を敎育し、終に國家のため戰死せり、これ最大の幸福者なり」云々。王懌ばず、イソップ傍よりこれを窺ひ見て、「乞ふ、臣をして答へしめよ。リヂアの王クレエソスこそ天下最大の幸福者なれ、世間の幸福は小川の如く細く流れ、我王の幸福は大海の如くに漲る」と云つた。王大に喜び、「フリヂア人の言はいみじくも人の心を穿てる哉」と云つて賞めた。その後「イソップの言葉」といへば「人の心を穿つ」と同意義の諺となつた云々。

この一條の話を讀むと、阿諛するが如く戲弄するが如く、何となしに太閤樣と曾呂利新左といつた趣があるではないか。クレエソス王は賢明を以て聞こえた王ではあるが、當時の希臘人はまだ家長時代を脫したばかり一般に政治思想が發達せず、上には無學で我儘で專制ずきな君主が威張つてゐてその下の人民はまだ後世のやうに文化が開けてゐない時代であるから、鹿爪らしい理屈で眞向から論じ立てるよりも、輕口のうちに通俗な敎訓をふくんだイソップ式喩言が上にも下にも喜ばれた。こゝらの工合がいかにもわが能狂言の無學な大名と、狡猾な太郎冠者式に出來てゐる。別に出したプラヌウデエスの「イソップ傳」にはまことにそこらの趣がよく出てゐると思ふ。

さてその後イソップは、このクレエソス王の命をうけて、デルフォイの神殿にまで託宣を受けに上つた、この使に兼ねてイソップは銀四ミノみデルフォイの市人に贈ることを言ひ付かつて來た。しかしイソップは、デルフォイへ來て見ると、市人は神殿の御利益を笠に着て、他國の參詣者から祝儀や賄賂を貰ふことに狎れ、碌々働きもせず、のらりくらり日を送つて各自に我慾ばかりをつのらせてゐる。イソップはこの有樣に胸を惡くしてしまひ、到頭市人と喧嘩をした果に、祝儀にもつて來た銀を本國へ送りかへしてしまつた。デルフォイの市人はこれを遺恨に思つて、イソップを苦し

めるため、アポロン神殿の寶物になつてゐる黄金の盃を秘かにイソップの行李の中に隱して置き、イソップが立つて行つた跡から追つかけて行つて、荷物の檢査をして、まんまとイソップを盜賊の罪に落した。そして、イソップが鼠と蛙の喩言（本書喩言一六〇）を引いて、天の譴を說き喩すのを耳にも入れず、市に引いて行つて、ヒパニアの崖の上から突き落して殺してしまつた。しかしながらデルフォイ人が無慚の惡業は果して天の怒を蒙つて、間もなくはげしい惡疫が流行した。市人は漸くイソップの舊主人であるヤドモンの孫に贖罪金を拂つて罪障を消除することができた。この時デルフォイの市人のうけたはげしい復讐は、後代までの語り草に傳へられて、「イソップの血」といふ言葉は、殺人者の必らず罰せられるべきことを誨へる諺となつた。

イソップが生前いろいろの機會に語りのこした巧妙な喩言は、その後人々の口から口に云ひ傳へられ、そのうちに籠められた人生の教訓は、久しきを經るに從つて愈々その滋味を加へた。最初まづこれを韻文に書き綴つたものはソクラテスであつた。然かもこの賢哲が死に先つ數日獄中に於ける絶筆であつたとプラトオンは記してゐる。その後はアリストテレスこれをその「修辭學」の中に推讃し、ホラエウス、エンニウス等羅馬の詩人以後幾人かの美しい詞藻に依つて裝飾された。別に一部の「イソップ物語」として集成せられたものについては次々に說くが如くである。

2. イソップ物語の由來

さて「イソップ物語」と古くから呼び慣れてはゐるが、不思議なことには、未だ嘗てこれが「イソップ物語」の原本だと云ふものは、希臘語にも羅甸語にもはた近世語にも一つもない。前にも一寸

述べた通り、五百乃至七百の夥しい動物喩言が「イソップ物語」といふ母屋の下に何がなしに集まつて巢を食つてゐるだけのことである。從つてこれが正文といつて指すものもない、さまざまの異本ごとに話の筋道だけを同じくして、その文章は或は散文或は韻文、形式も長短も勝手氣儘に違つてゐる。今日文書として傳はる喩言集の最も古いものは紀元一世紀の希臘人フィドルス Phaidrus が羅甸語短長律の喩言集と、同じく三世紀の羅馬人バブリウス Babrius が希臘語韻文の喩言集と、この二種であるが、前者は二百種、後者は三百種の喩言を收めて、共にイソップ原作（？）の喩言と及びその流風を汲んだ新作の喩言を集成したものである。しかし、お互ひの間には異同出入が仲々はげしい、二書はもと同一の原本を元に補綴增修したものではなく、各別に材料を仰いだものと見られる。即ちこの二人の時代に於いて、口傳に依つてか又は筆寫に依つてか、とにかく當時二三百の動物喩言が民衆の間にひろく行はれてゐて、それを二人が別々に集成して羅甸及び希臘の韻文に書き改めたものであらう。それならばこの二三百の喩言は元どこから起こつてどうして流布するやうになつたものであらうか〔以下英國の童話學者ジョセフ・ジェイコブス Joseph Jacobs がその新譯喩言集の卷頭にのせた「喩言小史」及びわが上田敏博士の「伊曾保物語考」をもとに、二三の補遺を加へて見る。〕

抑も動物を主人公とした說話の元はイソップ又はその他或る二三の個人の發明に歸すべきものではない、いはば何れの民族の間にも古くから自然に發生し發育した民俗說話 Folklore の一種である。ただ未開の民族の間に在つては單に迷信的に動物も人間のやうに談話し嬉笑するものとして語り傳へられるにすぎないか、それがやゝ發達して多少の寓意諷誡をふくむやうになり、更に發達してこの動物譚に道德上の教訓を寓する眞の意味の喩言—— Fable となるに至つて、理性のない

獸の動物が恰も人間らしい分別と感情とを備へて活躍するのである。而して古代の民族は、彼此交通の間に一つの說話を甲乙兩民族の間に貸借し合ひ、又は一民族分かれて數民族となつて各地方に分散する毎に祖先傳來の說話を流布するやうなことがあつて、その何れを本何れを末と定めがたいものが多く、その中で一民族として獨立に發達した動物譚を有したものは印度人と希臘人とあるのみであつた。希臘にも印度にもその古代文學について見れば、そこここの章句に、或は文章のいろどり、或は警句諷喩の類として動物喩言が引用されてゐることを發見する。これはたしかに動物喩言が一冊の書として集められる前から、民俗說話の一種として流布の久しかつたことを證據立てるものである。ここで希臘印度双方とも各特別な事情からこの動物喩言が後に單純な民俗說話から進んで、獨立した立派な文學の一形式として發達するに至つた。

その事情といふのはかうである。前にもいつたやうに希臘に於ては、共和政になる前に君主統治の專制時代が久しく榮えた、この時代に政治上の言論がひどく壓迫されてゐたので、政論家は民間に行はれてゐる動物喩言を使つては諷罵の材料にした。わがイソップはこの方法を用ゐて有名になつた政論家の一人にすぎないのであつたが、どうかいふ拍子でイソップといへば直ちに動物喩言を意味するほどの大きな名になつてしまつたのである。さてこの後、動物喩言を言論に應用する風は僭主政府倒れ、自由民主の時代になつて後も盛んに續いて、修辭學上の巧妙な方式として研究された。その上元々頓才と輕口の產物であるだけにひろく雅俗の翫びものになり、宴席の談話などに用ゐられては社交上の要具の一になり、内容も形式も益々彫琢されて行つたのである。

かやうにして動物喩言の數も段々多くなり、いろ〳〵に作りかへられて内容も複雜にはなつたが

しかしまだ文字に書かれて一冊の書にはならなかつたのを、紀元前三〇〇年頃かのアレクサンドリア文庫の創立者であるデメトリウス・ファレルス Demetrius Phalerus が、自分の手に、集め得た限りの動物喩言凡そ二百を一冊の書に編んでこれを「アイソポスの物語集」Logōn Aisōpeiōn Synagōgē と題した。これが恐らくイソップの名を冠した最初の希臘喩言集であらう。この集はその後、アレクサンドリアの言語學者達が折々の補修を經て、そこの文庫に珍藏になつてゐたのであらうが今日は散佚して傳はらない。その代り紀元一世紀頃羅馬のアウグスツス帝に仕へた希臘人ファイドルスこの集に依つて別に羅甸短長律の韻文喩言集を作り、これが今に傳はつて現に最古の希臘喩言集として珍重されるに至つた。そして今日「イソップ物語」として世界に流布してゐる喩言集の本家本元はこのファイドルスであり、更にその源はディメトリウスの集に出てゐるのであるから、今若し「イソップ物語の原作者は誰ぞ」といふ問が出たならば、まづ「デメトリウス・ファレルスその人」と答へる外はないであらう。

さて翻つて印度に於ては動物喩言がどういふ形を取つて發達したか、初めて民間の動物譚を道德上の教訓に用ゐた、即ち純粹な動物喩言の形に引き直した最初の人は釋尊である、否、釋尊に先つて婆羅門の徒が早くこの方式を考へた、釋尊はそれを大成したとも見られる。釋尊の最代表的な喩言集は、その前生を動物草木に托した闍多伽 Jātaka（本生經）であるが、この中に覺者迦葉波 Kāśyapa といふ名が、ちやうどファイドルスの喩言集に屢〻喩言の說者としてイソップが引合に出されると同じやうに出されてゐる。即ち闍多伽以前、覺者迦葉波の名を冠した喩言集（Itihāsa）があつた、そして佛徒等これを弘法の方便に用ゐるため、その喩言をとつて闍多伽の材料としたので

あらう。闍多伽には佛陀の前身が直ちに鶴となり小羊となつて喩言中の主要な役柄を勤めてゐる。さすがに輪廻轉生の信仰が深く民俗にしみ込んでゐた時代のことである。

さてこの覺者迦葉波の喩言集が闍多伽と共に紀元前二四〇年錫蘭に渡つて行つた。それから凡そ二百年後、即ち紀元九〇年頃錫蘭の使節再びこれを携へてアレクサンドリア府に至り、そこで希臘語に飜譯されて「リビヤ喩言集」(Logon Lybikoi) といふ名が付いた。ところがこのリビヤ喩言といふ名は舊くから希臘人が本土固有のイソップ系統の喩言以外、外來――專ら印度傳來の喩言をば汎然と呼んでゐた言葉で希臘及び多島海附近の民族の間には可なり古くから希臘系統以外に印度系統の外來喩言が傳はつてゐたのである。それでこの時渡來した迦葉波及び闍多伽その他の印度喩言集にも早速「リビヤ喩言集」の名がついた。そしてその作者は「キュビセス」"Kybyses" と呼ばれることになつた。バブリウスの喩言集の序歌にも「喩言の先祖は希臘でアイソボス、リビヤでキュビセス」と言つてゐる。このキュビセスとは何人であるか分からぬが、Kybyses 即ち Kâsyapa であつて、キュビセス喩言集即迦葉波喩言集でないとは云はれぬ。ともかくもこの喩言集には一々、末に格言がついてゐて、かの闍多伽の末に伽陀 Gatha (偈) といふ韻語の金言があつて喩言に含まれた教訓を綜合してゐると同樣の形式を追つてゐるのである。今日普通行はれるイソップ物語には大抵一一訓言がついてゐるか、これは本來の希臘風ではない、印度風から來たものである

さてその後羅馬に於て前にいつたデメトリウスが希臘系統のイソップ喩言集と共に、このリビヤ即ち印度系統の「キュビセス一喩言集」を初めて「デカミチア」Decamythia (十卷書) と題した一大喩言集として編輯された。この編者はマルクス・オレリウス帝の宮廷に仕へた修辭學者ニコストラト

ス Nicostratus 時代は紀元二世紀である。さて後、三世紀の初め、紀元二三〇年頃に、アレクサンドル・セヱルス帝の太子の傅ワレリウス・バブリウス Valerius Babrius 初めて、この二大喩言イソップ及び「キュビセス」の喩言合せて二百章の一大結集の全部を希臘韻文に譯した。かくて更に下つて四世紀の末に至つては、アヰアヌス Arianus といふもの、このバブリウスの集中、主としてリビヤ系統の喩言四十二章を抜いて、これを羅甸語に韻譯した――。以上でこの喩言小史はその上代期を終つたわけである。

以上、現今行はれる「イソップ物語」の由來を尋ねて、そのうち希臘及び印度の二大系統を含むことを知り、一はイソップの名の下に久しく傳唱せられて、紀元前初めてデメトリウス・ファレルスの「アイソボスの物語集」となつて一部の書籍の形を成し、他は闍多伽その他の佛典として歐州に渡來し、リビヤの「キュビセス喩言集」の名の下に飜譯せられてイソップの喩言と並び行はれた。そして純粹の「イソップ物語集」がファイドルスの羅甸韻譯喩言集となり、イソップ及びキュビセスの二大喩言集はニコストラトスの結集を經て、バブリウスの希臘韻語喩言集となつた。かくてこの羅甸及び希臘韻語に成る二大喩言集が、中世期に於いて更にさまざまと流轉漂泊の奇運命を辿つた後、近世期に入る、その大略の經過はほゞ次にしるす。

3. 中世に於ける「イソップ物語」

中世期に入つて、學者社會に「イソップ物語」を代表したものはいふまでもなくファイドルスの喩言集であつた、しかし不思議なことには久しい間にその羅甸韻文はいつの間にかただの散文のやう

に扱はれ、その著者の名まで五世紀以後十五世紀まで湮滅して傳はらず、その寫本も十六世紀の末、佛蘭西人ピトウ P. Pithou の手で初めて發見されて再び世の中へ出ることになつた。從つてその間に大分散佚もし改竄もされて、元の形は失はれてしまつた。今日存する中世喩言集のうち、ロムルス Romulus といふもの〻名で傳はつてゐるのは、ファイドルスから八十ほどの喩言を拔抄したもの、これは十世紀カルロ大帝の頃のもの。もう一つの散文喩言集はアデマアル・ド・シャバン Ademar de Chabanne の編、喩言の數六十七、中には散佚したファイドルスの原作の章句を存してゐるところもある、これは一〇三〇年の開板である。

イソップの喩言は中世を通じて殊にノルマン人の間に喜ばれ、佛蘭西と英吉利は喩言流行の中心であつた。佛蘭西の女王マチルダ Matilda が親ら梭をとつて英吉利征伐の顚末を織出したと傳へるバイユウ B yeux の壁掛の縁には、「狼と鶴」以下十二種の喩言が織込まれてゐる。十二世紀のアンジュウ朝英國は殆んど喩言の總本家たる形になつて、この時代にいろいろ注目すべき改作や新版が出た。そのうちでもウォルタア・ジ・イングリッシュマン Walter the Englishman 撰と傳へる羅甸韻語の喩言集は中世基督教諸國に最もひろく行はれた。以上は專ら一つのファイドルス喩言集がいろいろの人手に渡つてさまぐ〜に形を變へた大略であるが、他のアヸアヌスが羅甸韻文喩言集も同じやうな徑路を經て韻語から散文に書直され、更に別な韻語に書直された後英國から輸出されて歐洲大陸を漂泊した。

一方、バブリウスの希臘韻語喩言集の辿つた不思議な運命もこれには劣らなかつた。即ちその韻文は拙劣な希臘散文に書き變へられ、それが今日に傳はつて、或はイソップが自ら筆を執つた原作

であると思はれてゐる。更にこの散文喩言集から五十章ほどを拔いたものに東洋の喩言十二章ほどを加へ、シンチパス Syntipas といふあやしげな波斯の聖者の喩言集といふことになつて、シリアに傳はり、シリア語に譯されてこれから更にアラビヤに轉々し、すつかりアラビヤ風にそこでは傳說的なロックマン Lôqman 物語といふ名に變つた。また一層大きい散文喩言集はその後アラビヤに入り、印度、アラビヤのビドパイ Bidpay 物語六十章を加へ、それでもなほイソップの喩言集と稱して行はれてゐた。このアラビヤ語の喩言集に收むる所百六十四章。これかリチャアド一世の第三十字軍の後、英國に渡つて、アルフレット Albred と稱する一英人の手で羅甸語に譯された。この飜譯を手傳つたオクスフォオド大學の猶太人ベラキア・ハ・ナクダン Berachyah ha-Nakdan といふ人、別に獨力でヘブライ韻語の喩言集を作り、題名をミシュレ・シュアリム Mishle Shualim と付けた。「狐のたとへばなし」の意味である。さてまたアルフレットのイソップ喩言集は、後その一部分頭韻の英語に改譯され、これが更に一二〇〇年マリィ・ド・フランス Marie de France といふ婦人の手で佛譯された。そしてこれは元アルフレット大王の新作に依つたといふやうな說が附會された。ともかくもこの佛蘭西の閨秀詩人に依つて、東洋系統の喩言が著しくイソップ喩言集の中に加はつた、而してこの女以後また中世を通じて甚だしき補修改竄は行はれなかつた。

4. 近世歐洲に於ける「イソップ物語」

さて近世期に入つて、洋々たる文藝復興の機運に乘し他方には印刷術發明のことあり、圖書出版の事業大に興つた際に於て、まづ先つて、この希臘以來由來最も久しき大喩言集の集成を企てたも

のは、獨逸人ハインリヒ・スタインヘエエル Heinrich Steinhöwel であつた。このスタインヘエエルが獨逸語の大喩言集は、上はファイドルス、バブリウス以後中世期に於いて歐洲から東洋諸國までを轉々した間に寄生的に竄入した喩言集までをも含めて、上代中世喩言集の一大結集たるのみならず、實に近世喩言集の根元となり典據となつてゐる。この結集の出來上がつたのは一四八〇年その後五年を經て近世出版業の鼻祖古書翻刻の恩人として有名な英人ヰリアム・カクストン W. Caxton 更にリヨンの僧マショウ Jules Machau't の佛譯からスタインヘエエルの本を英語に重譯して刊行した。今日英國に行はれてゐる大小幾十種の「イソップ物語」も畢竟皆このカクストン本を改譯したもので、餘はただその後世に現はれた希臘語の喩言集から多少の增補を試みたにすぎぬ。

今、スタインヘエエルの喩言集は次の七部門から成立つてゐる。

A. 十三世紀ビザンツの學僧マキシモス・プラヌ.ウデエス Maximos Planudes の作と傳へる「イソップ傳」（これは本書の末に別に抄譯して置いた。）

B. ロムルス Romulus 作と稱する喩言集四卷、實はファイドルス喩言集の散文改譯。ただし現存のファイドルス集に散佚した喩言をも收めてゐる。

C. ファビュラ・エクストラヴガンテス Fabulae Extravagantes と唱へる動物喩言といふよりも動物諷刺譚に近い「狐の裁判」流の物語、これは中世期に新らしく加はつたもの、前述のマリイ・ド・フランスが新喩言集から出た材料である。

D. 希臘散文のイソップ喩言。一寸イソップ自作の原文のやうに見えて實はバブリウスの律語譯の改譯であることは前述の如し。スタインヘエエルはこれを伊太利亞の學者ラヌチオ・

ダレッツォの拔萃本から更に拔萃した。

E. アヸアヌスの喩言集（主として印度系統のリビヤ喩言集）の拔萃。

F. 十二世紀初葉西班牙在住の猶太人ペトルス・アルフォンシ Petrus Alphonsi 及びポッジョ・ブラッチオリニ Poggio Bracciolini 編の雜話集拔萃。
この部門に屬する話は古代の希臘小亞細亞に動物喩言と共に行はれて多くの人を喜ばした輕い笑話の類で、必らずしも教訓を含んだ喩言ではない、主として東洋殊に印度邊の笑話を中世の僧侶や學者が集めたものである。

スタインヘエエルの集成本一度出でてより、イソップ喩言集は歐洲全土の流行となり、二十年ならずして、前述べた英佛譯をはじめ、伊太利亞（一四八五年ツッポオ Tuppo 譯）和蘭陀（一四九〇年）西班牙（一四九六年インファンテ・エンリック Infante Henrique 譯）の各國語に飜譯流布するに至つた。更に英國では、レストレンジ及びクロクサル Croxall 獨逸ではブラント Brandt ワルヂス Waldis これに多少の追加を試み、また十七世紀佛蘭西の詩人ラフォンテエヌ La Fontaine 流麗な韻語に改譯して、これに印度アラビヤのピドパイ物語その他からとつた喩言十數章を加へ、今は佛蘭西文學の一古典となつてゐる。しかし乍ら、近世「イソップ物語」の母體は飽迄もスタインヘエエルの集成本であつて、その中の說話は幼童の讀本に御伽噺に、傳誦せられて、喩言といふ一形式は近世歐羅巴の民俗說話の重要な役柄をつとめてゐる。そしてその餘波は東洋にまで及んで、早く戰國の末天主教の經典と共にイソップ喩言集は我國に將來され、十六世紀の末、わが豐太閤の文祿初年天草に於いて俗語譯の「エソポの喩言集」の開板を見、その書、今日に傳はつて偶然にも西洋文學和

譯の嚆矢を爲すに至つたことは更に說く。支那に於ても、十七世紀の初一六二五年、(文祿二年より
おくれること三十餘年)に最初の漢譯「况義」出で、十九世紀の半頃に「意拾喩言」(道光二十年)
の新譯開板せられて上下の愛翫をうけてゐる。(我國にも明治九年阿部弘國訓點の飜刻本がある。)こ
の「意拾喩言」の二二章は本書の末に引抄して置いた。(本書喩言三三三參看)外に赤山崎士の「海
國妙喩」(光緒十四年)喩言七十章を收めてゐる。
なほ以上長々と述べ來つた「イソップ物語」の由來と傳統とを一目に見得るために、ジェイコブス
氏の喩言集に出した表を本に「イソップ物語傳統一覽」を文末に付けて置いた。

5. 日本に於ける「イソップ物語」

最後に、日本に於ける「イソップ物語」飜譯の書目を一通り書き記して、いかにこの書が我國に
於てその傳來流布の久しかつたかを記念する材料としようと思ふ。
我國に於ける「イソップ物語」最初の和譯が、早くわが文祿二年(西曆一五九三年)わが文藝復興
の搖籃期ともいふべき桃山時代に於て試みられ、更に再び慶長元和の間に別手に依つてその試みが
重ねられ、偶然にもそれが近世江戶時代の末に至るまで、わが最初のそして唯一の西洋文學飜譯とし
て殘つたことは、近年新村文學博士の紹介に依つて多く人の知るところとなつた。すべてこれに關
する巨細は新村博士の論著その他に委しいことであるから、繁雜を厭ふて覆說することをやめ、直
ちに右の文祿本慶元本以下、明治時代を經て本譯書の編者に至るまで、和譯「イソップ物語」の書目
をば、編者の知つてゐる限り年代を追ふて擧げてみる。

和譯「イソップ物語」年順一覽

一 "Esopono Fabulas" (新村博士編開成館版「文祿舊譯伊曾保物語」)
文祿二年天草耶蘇會學林開板。原書羅馬字を以て綴り、同じ天草出版の「平家物語」と合綴してこれのみ
にて雁皮摺小形本九十七頁、現に大英博物館に珍藏されてゐる。先年わが新村博士この原本を筆寫して
歸り、その後全部を國字に書改め「文祿舊譯伊曾保物語」と名づけて公刊した。收むる所の喩言七十、別
に「エソポが生涯の物語略」と題して、本書にも抄譯したプラヌウデエスの「イソップ傳」を添えてゐ
る。羅甸文の喩言集に據つて、狂言詞に近い桃山時代の輕い俗語で譯したものである。本書の末にもそ
の二三章を引抄して置いた。(本書喩言三二〇――三二七參看)

二 「伊曾保物語」
三卷。譯者不明、或は京都の公卿衆(烏丸光廣?)などの手に成つたといふ臆說もある。江戶初期の假名草
子風の俗文體で書いてある。まづ慶長初年にできたものといふ。收むる所の喩言六十四、文祿版とはま
るつきり體裁も喩言の內容もちがつてゐるが、卷頭に例の「イソップ傳」をのせたことは同一である。
(全三卷の半以上を占む。)しかし元々據つた原書がちがつてゐるのであるから面目は全く異つてゐる。
この「伊曾保物語」には慶長版、元和版、寬永版、萬治版其の他いろいろあるが、みな同じ原書の改
刻にすぎない。中では萬治二年の新刻本が西鶴物に見るやうな浮世草子式の挿畫十數葉を挿んでゐるの
が異色である。挿畫の意匠をすつかり時代の風俗に直し、イソップがお坊主と太郎冠者を一所にしたや
うな風體に畫き出したのもおもしろい。或は雛屋立圃の意匠だといふ。その挿畫の一部分はその文章と

共に本書の末に出して置いた。（本書喩言三二一——三三〇參看。）

なほ文祿本と、この「伊曾保物語」とを比べて見ると、前者はパナヂウスの希臘羅語喩言集に「イソップ傳」を加へた伊太利亞のラヌチオの羅甸譯本に據つたらしく、後者は直ちにスタインヘエヹルが集成本に據らないまでも、ともかく集成本ができて以後の新譯本に據つたと見える。從つて文祿本に收めた喩言には、割合に中世期以後の竄入の少い本來の「イソップ物語」の面目を存し、慶元萬治本には中世期に流行した東洋種その他の雜種な說話を交へてゐる。

以上の外江戸時代のイソップ文獻としては、雛屋立圃作伊曾保物語の繪卷物があり、爲永春水作と稱する草双紙「繪入敎訓近道」にイソップ喩言の飜案があるさうだ。（新村博士「西洋文學飜譯の嚆矢」）

三「通俗伊蘇普物語」

木版本六卷。渡邊溫新譯、猶々曉齋畫、明治五年新刻。收むる所の喩言二百三十七。輕易な假名交りの通俗文體で、對話などもきびきびした江戸言葉で行つてゐるところは、一九か三馬の滑稽本を讀むやうだ。曉齋の畫もおもしろい。この譯本の文章も挿畫と共に二三本書の末に出す。（本書喩言三三一—二參看）なほ譯者渡邊氏は同時にこの書の支那時文譯を企て、中田敬義氏に囑して「北京官話伊蘇普喩言」として明治十一年出版した。その一章をも參考として對比して置いた。

四「イソップのはなし」

西村隙步譯。東條鉦太郎畫。「世界少年文學」第五編。所收喩言二十四。明治三十五年富山房版。

五「新譯伊蘇普物語」

上田萬年博士解說。梶田半古畫 所收喩言百六十、外に印度喩言集「パンチヤ タントラ」の說話九章を附す。

明治四十年鐘美堂版。

六「イソップ御伽噺」

巖谷小波評。杉浦非水、太田三郎畫。所收喩言百六十。明治四十年三立社版。

七「イソップ物語」

雨谷一菜庵譯。繪入。所收喩言三百十三。明治四十年吉川弘文館版。

八「正譯イソップ物語」

佐藤潔譯。所收喩言百二十六。繪入。明治四十年尙榮堂版。

九「伊蘇普物語二百話」

西垣覺則譯。所收喩言二百。明治四十四年立川文明堂版。

十 ポケット「新譯イソップ物語」

馬場直美譯。繪入。所收喩言二百六十。明治四十三年盛花堂版。

この外英獨語學生の參考用を目的に作られた「イソップ物語」（紀太藤一譯註、英學生文庫、大正三年）、「イソップ物語講義」（石原益治譯註、大正三年）、「エソップ物語」（小野秀雄譯註、獨逸國民文庫大正四年）等の對譯書類を別として時に譯者の名を記さぬ通俗の赤本類も五六種を下らぬやうである。若し夫れ諸家の文集に散見する和文及び漢文の喩言斷片譯に至つては諸種の讀本、童話類に收められたそれと共に無數といふべく、なほブラヌウデエスの「イソップ傳」がラフォンテエヌの佛文に依りて、明治三十三年頃「伊蘇普實傳」（報知友、秋野紫吉共譯）として單行されたことも序乍ら記して置く。（上揭明治以後の出版の新譯本には今日絕版のものを省いた。）

「イソップ物語」傳統一覽
印度喩言
希臘喩言
ビドバイ物語
シリヤ喩言集
アラビヤ喩言集
希臘散文喩言集
ロムルス
アギアヌス
ラヌチオの羅甸譯
獨逸人スタインヘエルの「イソップ物語」集成

喩言總目次

全彩 寫眞 挿畫 圖版目次

序の詞

その昔、喩言の先祖イソップが語り初めたことを、
やさしい詩の言葉で書いて見ようと思ふ——
凡そこの物語の功德は二つある、
それは讀む人々がおもしろがつて
笑ひながら、利口になることだ。
だが鹿爪らしい理屈好に云はせたら、
鳥獸や草木が人間のやうに物を言ふか、と叱るだらう。
さういふ人にはまあ考へてもらひたい、
嘘も方便、何も悪氣でするのぢやない、
お子供衆のなぐさみがてら、嘘の話をこしらへて
世の中の眞實の道理をそつくりと
知らせて上げたい老婆心さ。

（ファイドルスに依る）

が或る日お腹をへらして歩いてゐると、可哀さうに連れにはぐれてうろうろしてゐる小羊に出會つた。このいたいけな樣子をした子供の命をばさすがの狼もむざとは取りにくいやうな氣がした。そこで何か、もつともらしい難癖をつける工夫はないかと考へた。

「小僧め、去年貴樣は俺に失禮なまねをしたな」と狼が云つた。

「そんなことはありやしないよ、をぢさん」と小羊はおどおどしながら、「その時分、わたいまだ生まれないんだもの。」

「それはそれとして」と狼は「貴樣は俺の牧場で草を喰べた」

「嘘だよ、をぢさん」と小羊は首を掉つた、「わたいまだ生まれて草なんか喰べないよ」

「ぢやあ貴樣は俺の所の井戸へ來て水を飲んだらう」と狼は畳みかけた。

「何だなあ」と小羊は困つて「わたいまだ母さんの乳しか飲みやしないんだせ。」

「まあ何方にしろ」と狼は到頭本音を吹て、「兎に角俺は夕飯を食べなきやならん」

かう云ひながら小羊の上にとびかゝつて、ぐうもすうもなく咬殺してしまつた。

と狼が水を飲うと小川の流に落合つた。

小羊は川下に、狼は川上に、

狼は咽を鳴らしながら、いきなり喧嘩を吹掛た。

「やい何故川を掻廻す、水が汚れて了つたぞ」

小羊は怯々と、「どうして川を汚しませう、流は上から下るのに、私は下に居るのです」

理屈で負けた狼は、「生意氣云ふな、やい小僧、半年前のことだつた、貴樣は俺を馬鹿にした」

「半年前には生まれません！」

「そんなら親父の畜生だ！」

さう云ふ間もなく狼は、氣違ひの樣に飛付いて、可哀さうな小羊は、喰殺されてしまひました。

【訓言】無理が通れば道理ひつこむ。

〔ファイドルスに依る〕

2

狐と假面

が、役者の假面を

見て、

不思議な顔で云ふことに、

「おやおや、これはおどろいた、

見れば立派な男だが、

惜しいことには腦がない――」

【訓言】外見ばかり立派でも役に

立たぬ。

〔ファイドルスに依る〕

3

獅子の王國

獅子の王國

が、この地上の百獣の上に君臨してゐた時には、決して壓制でもなく、亂暴でもなく、却つて王様らしい寛大な柔和な君主だつた。この獅子王の御代に諸獣の總會を開き、大小强弱に依らず萬獣は同等に平和を樂しむべしといふ布令が出た。狼と小羊も、虎と鹿も、豹と犢も、犬と兎も、みんな一所になつて、永久變らぬ友情と平和を樂しむことになつた。その時兎が云ふやう、

「ああどうもありがたい御時勢になつたものだ。わたし達は永い間どうかしてわたし達のやうな弱いものも、强い者を恐れずに暮らして行ける世の中になるやうにと、それぱつかりを望むでゐたのだからなあ。」

鶏と寶石

が餌を拾はうと思つて、地面を掻いてゐるうちふと、そこに落ちてゐた寶石をほぢくり返した。

「おやおや」と鶏は云つた、「なるほどお前は結構な品物だね。お前の持主が見付けたらどんなに喜ぶだらう。だがわたしにして見ると、まあ世界中の寶石を殘らず集めて、眼の前に積んで貰ふよりは、たつた一粒でも麥粒の方がありがたいのさ。」

【訓言】物の價は用に由つて生ず。

5 薔薇と鶏頭

薔薇と鶏頭が花園で隣同士並で咲いてゐたが、或日鶏頭は薔薇に、

「ほんたうにあなたはいつもお美しくつて香の高いのがお美ましうございますね。それでは世界中の人に可愛がられるのも無理はありません。」

と云ふと、薔薇は却つて浮かぬ調子で、

「いゝえあなた、わたくしの盛りはほんの一時ですわ。花瓣が直きにしぼむで落ちてしまへば、わたくしの命も枯れるのですもの。それから見ればあなたの花は切り取られても決してしぼむといふこともない、ほんたうにお美ましいことだと思ひますわ」と云つた。

6 鷲と鷹

鶯と鷹

鶯が樫の樹の枝に棲つて、いつものやうに美しい聲で歌を唄つてゐた。それをお腹を空かした鷹が見付けて、鶯の小さな身體の上に一勢鋭く舞ひ下りたと思ふと、爪の間に押へつけてしまつた。鶯はあはやずたずたに嚙み裂かれさうになつたので、哀れな聲を出し、

「わたくしはこのとほりのみすぼらしい體、とてもあなたが、たんのうなさるだけの御馳走ではありませぬ。どうかもう少し實になるやうな大きな鳥と取り換へて、わたくしをおゆるし下さいまし」

と歎願した。鷹はそのとき蔑視むやうな眼付きをして、

「貴樣は、俺を、さしあたり心當りもない御馳走を當てに、ともかくも一度捉まへた獲物を、おいそれと放すやうな馬鹿と思ふか」

とどなりつけた。

【訓言】手の中の一羽の鳥は籔の中の二羽に優る。

大山鳴動

或る時山がすさまじい音を立てゝ鳴り出した。石を飛ばし砂を降らし、天地が一時に粉微塵に砕けるやうな大さわぎになつた。こりやあたゞごとではない、と近所の人達は蒼くなつて、集つて來て、あれかこれかと評議をしてゐると、やがて山が眞二つに割れたやうな大變な地響がして、ちよろちよろと小鼠が一疋、そこへ出て來た。

【訓言】何でもないことに騒ぎ立てるものではない。

大山鳴動

神像を運ぶ驢馬

驢馬が背中に神像をのせて、町の神殿へ運んで行つた。途中、往來の人がこの一行に出會ふとみんな帽子を脱いで丁寧に禮拜して行く。これは云ふまでもなく神樣を拜むのではあるけれど、驢馬の奴は馬鹿なものだから自分が尊敬されてゐるのだと自惚れて、すつかり大得意になり、往來に立ちはだかつたまゝ、一足も動かうとはしない。その時驢馬追ひは驢馬の强情を張るのを見て、いきなり鞭をふりあげて、したゝかに打叩き乍ら、かう云つた、

「いやはや、何といふとんでもない馬鹿だらう。貴樣は、この世界に、驢馬なぞを拜む人間が一人でもあると思つてゐるのか。」

9

百姓と飼犬

百姓が打ち續く暴風雨に降りこめられて、一足も小屋を出ることができず、自分のためにも家族のためにも食物を外へとりに行くことができない、そこでまづ羊を殺して食事の代りにした。それでもまだ暴風雨がやまないので今度は山羊を屠つたが相變らず天候は一向によくならないので、愈〻思ひ切つて大事な牡牛を殺して食べた。かうして手飼の獸が片つ端から亡びて行く運命を見た飼犬共が、お互に密々囁き合つて云ふには、

「こりやもういゝ加減足元の明るい中にこの家を出た方が得だらうせ、此度はどうしても俺達の番だらうから。」

10

蟹の母子

の婆さんが息子に向つて、

「何だつて、お前は、そんな風に、横ばひに這つて歩くのだね。真直に歩くものですよ」といふと、若い蟹は答へて、

「母あさん、ぢやお真直に歩いて見せておくれ、わたいもそのとほりにやつて見るから。」

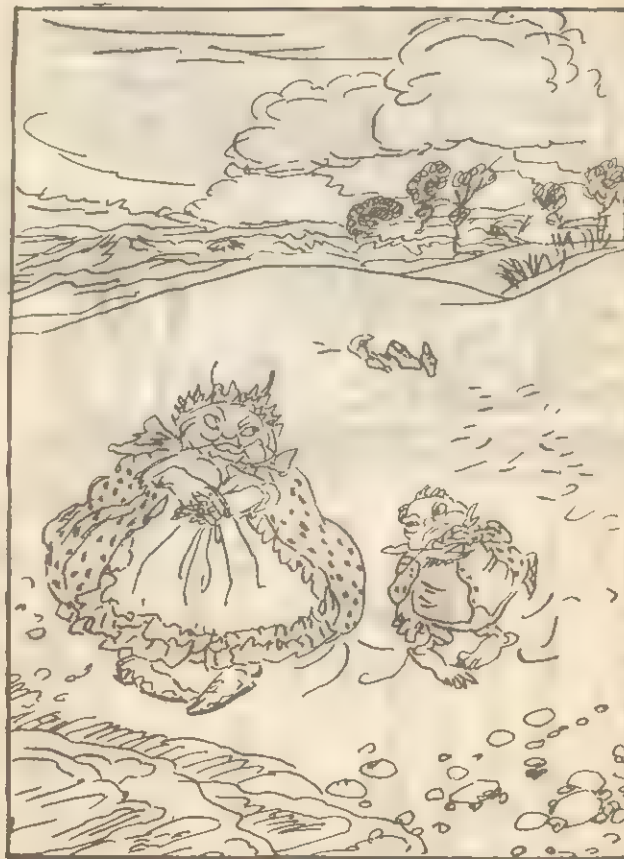
そこで蟹の婆さんは一生懸命真直に歩いて見せようとしたがだめだつた。そして息子ばかり間ちがつてゐるといつて責めるのは惡かつたと悟つた。

【訓言】口で敎へるよりまづ身に行へ。

10

蟹の母と子

11

捕虜の喇叭手

喇叭手が軍隊の先頭に立つて、勇ましい音を吹き立てて、戰友の勇氣を鼓舞したが、不仕合はせにも敵軍の手に捕はれた。

「わたくしをお助け下さい。わたくしは誰をも殺しません。全くわたくしはこの喇叭の外に、なんにも武器をもつてはをりません」と喇叭手は云つたが、敵は承知しないで、

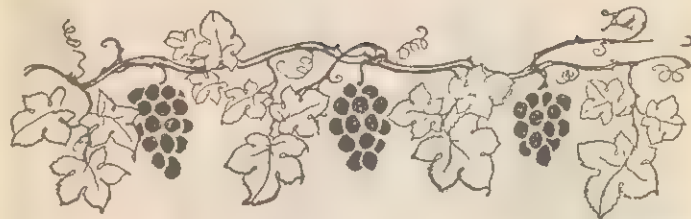
「それだから餘計貴樣の命を取らなくてはならん。よし貴樣自身武器をもつて戰はぬまでも、外の兵卒を煽動して戰爭をさせた罪は重いぞと叱つた。」

12 鴉と鵲

が、同類の中でも鵲だけ、不吉の鳥だと云ふので、人間から大事にされるのを見て、羨ましくつてたまらず、自分もどうかしてあゝいふ名譽を取りたいものだと考へた。そこで或日旅人が二三人通りかかつた時、行成ばたばたと道傍の樹の梢に飛んで行つてありつたけの大きな聲を出し、てカアカアと啼き立てた。旅人達はこの聲を

聞いて、さては何か惡い兆候ではないかと顏色を變へたが、そのうち一人が樹の上を仰いで見て、笑ひながら、連れに「おいおい、心配しないで出かけようよ。何のただの鴉が啼いたのだ、下らない」と云つた。

【訓言】自分に備はらない長所をあるらしく飾つ見せても、笑はれものになるばかりだ。

13 狐と葡萄

露の垂れるやうな葡萄が、高い棚の上から鈴生りにぶら下がつてゐる、それをお腹の減つた狐が見て、ああおいしさうだなあと思ひながら、一生懸命に飛び着いて見たものゝ、とても背が屆かないので、がつかりしてやめてしまつた。それでも、わざと高慢らしい、濟ました顏をしながら、「あの葡萄は、もう熟してゐることだと思つたら、なあに、とても酸つぱくつて食べられたものではない」と、負惜しみを云つて、出て行つた。

【訓言】自分の力に及ばぬと見ると惡口をいひたがる。

鷲と狐

炭燒と洗濯屋

炭燒が、一人で世帶を持つて家業を勉強してゐると、そこへ、偶然、洗濯屋が近所へ越して來て、商賣をはじめた。炭燒はこの洗濯屋と知り合ひになつてから、いつそ來て一所にならないかと云つて勸めた。

「さうすれば一層お互ひが仲善しになれるし、くらしの上にも經濟だ。」

洗濯屋は禮を云つて、

「だがどうもそれはできない相談だよ。何故と言つてわたしが骨を折つて布を白くしても、直ぐ傍からお前さんが炭を燒いて眞黑にしてしまふだらうからね。」

15

鷲と狐

と狐とが友達になつて、鷲が樹の天邊に巣を作るゝ、狐はその根方の藪の中に住居を定めて、子供達のために寢藁を敷いてやつた。或る日狐は森の中へ餌を探しに行つた留守、鷲も何か自分の子供達のために食物をと思つて、眼玉を光らせると、樹の根方の藪の中に狐の子供を見つけたので、摑み上げて自分も食べ、家内の御馳走にもした。やがて狐が歸つて來て留守中の出來事を知ると、子供を失くした悲しみよりも、まづ鷲の餘りな仕打を怨めしく思ふ心と、こんな惡企みをされても相手が鷲では歯が立たぬ、と思ふ口惜しさとで胸が一杯になつた。しかしその後間もなく、狐のために復讐の機會が來たといふのは、或る日、犧牲の山羊が近所の神樣の廟へ上がつた。それを鷲が上から見て、火のついたまゝ浚つて巣の中へ持ちかへつたが、折あしく風のひどく吹く日だつたので、消え殘りの火は直ぐ鷲の巣に燃えついた。そして半焦げになつて落ちた鷲の子供は、親の見てゐる眼の前で、狐にゆるゆると賞翫された。

【訓言】 信義に背く者は人間の罰を免かれても神罰を免れることはできぬ。

16

子供と蛙

いたづらな子供達が五六人、池の緣で遊んでゐたが、淺瀨に蛙が泳いでゐるのを見付けると、おもしろ半分に石を打つけはじめ、忽ち五六匹の蛙を殺してしまつた。やり切れなくなつて到頭一匹の蛙が水の上に首を出して、かう云つた。

「あゝ、もう勘忍して下さい、勘忍して下さい、後生です。あなた方を遊ばせるお蔭で、わたくしどもが命を失くさなくてはなりませんよ。」

【訓言】 兩方いいことは無い。

狐と鶏

が或る夏の朝、百姓家の裏庭を通り掛つて、罠に捕へられた、それを鶏が見て怖々のぞきに行つた。狐はいい所へ來たといふ顔付で「ああ鶏君、驚いたねえ、僕は今朝こゝを通ると君のいつもながら勇ましい啼聲がきこえた、一寸寄つて朝の御挨拶をしようと思つて入ると、いきなりこの始末だ。可哀さうだと思つて棒切を一本恵んでくれ給へ。僕はそれでこの罠を撥返して外へ出るからね、え、後生だ、頼んだよ」

鶏は心得て棒を持つて來た、しかも註文とは違つた恐しく大きい棍棒を百姓が抱へて來て一打に狐の息の根を止めた。

蜜蜂とユピテル

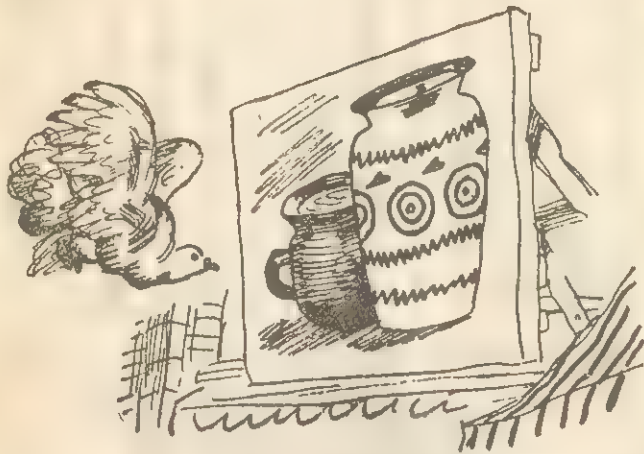
蜜蜂とユピテル

蜜蜂の女王が、オリンポスの神座まで飛んで來て、新らしい蜜を萬物の主ユピテルの大神に献納した。大神は大層喜んで、何んでも女王の好きなものをやらうと約束された。女王は
「どうかわたくしに劍を下さい、その劍でわたくしの所から蜜を盜んで行かうとする人間奴を刺してやります」
と云つた。

大神は、人間を可哀がつてゐられることゆゑ、それを傷めるやうな道具を蜂にやることを好まれなかつたが、約束だから仕方なく望むまゝに劍を蜂に下すつた。

けれどもこの時、大神の下すつた劍といふのは、それで蜂が人間を刺せば、劍は相手の創口にのこつて、蜂はそのために、命を落さなければならぬやうなものであつた。

【訓言】惡念の報ひは鳥が塒へかへるやうにかへつて來る。

咽の渇いた鳩

鳩がひどく咽を渇かして、目が眩んだまぎれ、或る店の看板に、コップになみなみ水を盛つた畫の書いてあるのを、本物と間ちがへて、すさまじい勢で空を切つて飛んで行き、いきなりそこへ、嘴をぶつつけると、可哀さうに腦天をしたゝか打つて、氣絶してしまつた。

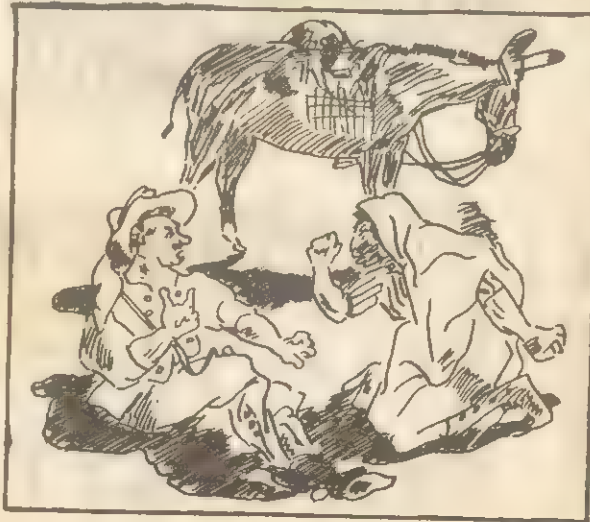
【訓言】鹿を追ふ獵師は山を見ず。

20

驢馬と驢馬の影

或る男が夏の半に驢馬を一頭雇つて旅行した。持主は驢馬の後から追立て、ついて行くのであつた。やがて日盛りになつて來たので、旅人は下て驢馬の影で少し休まうと云つたが、驢馬の持主は自分にその氣があるので承知しない。持主が云ふには、旅人は驢馬は雇つたらうが驢馬の影までは雇はない筈だと云ふのである、旅人の方はまた、とにかく一時でも驢馬を雇つた以上、その一切は俺の自由だと云ひ張る。こんな言爭ひから到頭樸り合になつた。かうやつて二人がせつせと喧嘩をしてゐる間に、驢馬はとこ〳〵後足で砂を蹴てどこかへ行て了つた。

旅から歸つた人の話

旅から歸つた人の話

外國の旅行に出た男が歸つて來て、自分が旅先でやつて來たことだと云つて、いろいろ不思議な話をした。そのうちに、ロオヅ島で幅飛の競爭の仲間入をして、空前の大レコオドを作つた話をして、

「まあ、まあ、ロオヅ島へ行つて、誰にでも聞いてごらんなさい。誰れだつてそやあほんたうだ、と云つて、今でも島中の一つばなしにしてゐますからねえ」

と云ひ足した。

このとき座中の一人がいふには、

「あなたがそのお話のとほり、そんなに素敵な幅飛をおやりになるのでしたら、何もわざ〳〵ロオヅ島まで行くにもあたりません。それ一寸の間、ここをロオヅ島だと想像して、よろしいか、さあ、――一、二、三、ほら飛んでござらんなさい。」

【訓言】論より證據。

獵犬と兎

が兎の寝込を驚かして、しばらくは、元氣な勢で追つかけて見たが、やがて追ひつきさうになつて、ふとやめてしまつた。この競走を見てゐた百姓の男が、獵犬の歸り途を待ちうけて、

「おい、負けたぢやないか」

とからかふと、獵犬は平氣な顏をして、

「そりやさうですがね、何しろこれで一寸晝めしの代をかせぐために駈けるのと、自分の命とかけがへに駈けるのとでは、同じ駈けるのでも、力の入れ方が違ひまさあね。」

【訓言】一心ほど強いものはない。

狐と樵夫

蚤と力士

蚤が一匹、力士の太股に止まつてちくりと刺した。力士はびつくり仰天、死ぬやうな聲を出して神様のお助けを呼んだ。蚤が二度脚の裏に飛んで行くと、力士は腸のちぎれるやうな聲を出して、

「やあれやれ神様、あなたのお力で、この蚤一匹どうすることもできないやうでは、もつときつい奴が出たらどうしませうぞ」

と叫び立てた。

【訓言】小さな事にも騒ぎ立てゝ他人の助を呼ぶ者には、大きな幸運もめぐつては來ない。

狐と樵夫

が獵犬に追はれて來る途中、樵夫が槲の樹を伐つてゐたので、どこかへ隱して下さいと頼んだ。樵夫は、そこの木挽小屋に入つてゐろ、と敎へたので、狐は中へもぐり込むで隅に小さくなつてゐた。間もなく獵師は獵犬をつれてやつて來て、樵夫を見ると、ここに今狐が來なかつたかと聞いた。樵夫はそんなものは見ないとは云つたが、さう云ひながら片手の人指指は始終狐の隱れてゐる方に向いてゐた。でも獵師はこの相圖には到頭氣がつかなかつたと見えて、其儘先へ行つてしまつた。やがて皆の影がすつかり見えなくなると、狐は徐々這ひ出して來て、それなり樵夫の方は見返りもせずに行かうとした。樵夫は腹を立てて

「何だ貴樣はひとのおかげで助けて貰ひながら、挨拶もせずに行く奴があるか」

と云ふと、狐はせゝら笑ひながら、

「なるほどお前さんが口で仰しやるほど、心の底までも深切な人なら、お禮をいくら云つても云ひ足りるわけのものではないが、どうも先き程の手つきは隨分怪しい御深切でしたからねえ」と云ひ捨てゝ、すたすた行つてしまつた。

【訓言】二心のある友を信ずるな。

獅子の同盟

が、自分より弱い獸達と同盟を結んで、森の中を横行した。或る時同盟の一個が美事な鹿を一匹捕つて來た、獅子は四つに分けた一部を指し、

「俺は百獸の王たる獅子王家の正統だ、これは當然俺の權利だ」と云つた。それから

「全體お前達が今日を安心してくらして行けるのは皆俺の威光だぞ」と云つて、第二の分前と共に、更に第三を取つて、

「さてこれはお前達臣下が當然の禮物」

と云ひさして、殘りの獲物を掻き集め、

「最後にこれは俺が同盟の一人として働いた當然の分前、早速こゝで賞翫する。」

【訓言】力は權。

驢馬と蟋蟀

が、蟋蟀のいい聲で歌を歌ふのを聞いて羨しくつてたまらず、一體何を食べたらあんないい聲が出るのだらうと思つて、蟋蟀に聞くと、

「露をお上がり」

と云つて呉れた。それからは後生大事に露ばかり吸つてゐると、二三日も經たないうちに、お腹が減つて死んでしまつた。

【訓言】人毎に己れの長所を知らねばならぬ。

子供と榛の實

子供と榛實

子供が榛實の入つてゐる壺に手を突込んで、掌の中に摑めるだけ摑んだ。けれどその拳を固めたまゝに拔かうとすると、どうしても拔けない、その筈だ、壺の口は至つて狹いのだから、どうもそんな大きな握り拳の通るわけはないのである。摑んだ榛實を離すのは厭、かといつて手は拔けず、子供はじれて泣き出した。その樣子を見た母親が、子供に

「坊や、まあ、そんなに慾張るものではないよ。その半分だけで我慢をおしなさい、さうすればわけもなくその手はぬけるのですよ」

と云ひ聞かせた。

【訓言】一度に慾を張るこ損をする。

鶴と雁

雁と鶴とが一所に畑へ下りて餌をひろつてゐた。鳥網を打つ男がそこへ來て網をかけた、鶴は羽が輕いので鳥捕が來たと見ると、ぱつと飛び立つた。雁の方は身體は重いし、羽は利かないので、みんなつかまつてしまつた。

燈火

油を一杯注いでもらつた燈火が、勢好く煌々と燃え乍ら、「これでは太陽よりも明るいだらう」と大に熱くなつてゐた。すると間もなく一陣の風が吹いて來て忽ち燈火を吹き消してしまつた。その時人が來て、マッチを擂つてまた火を點けて、かう云つた。

「お前はさうやつてお前の身分相應に光つてゐればいい、太陽のことなどを考へるな。馬鹿々々しい、太陽どころか小つぽけな星だつてお前が今して貰つたやうに、二度も三度も火をつける世話はないのぢやないか。」

鷄と猫

鸚鵡と猫

或る人が一羽の鸚鵡を買つて家の中へ放し飼にした。鸚鵡は自由自在の身になつたので大燥ぎに燥いで、早速爐棚の上に飛び上がつて腹一杯の大きな聲を出して叫び立てた。この物音に爐前の敷物の上に丸くなつて眠つてゐた猫が眼を醒まして、寢惚眼で見上げると、思ひも依らない闖入者が坐つてゐるので、

「お前は誰れだい、一體何處から來たのだい」

とどなりつけると、鸚鵡は、

「お前の所の御主人に買はれて、今しがた一所に歸つて來たんだよ」と答へた。

「この無作法な鳥の奴、新參者のくせにして、そんな無遠慮な大聲を出す奴があるか。見ろ、俺なんざこの家で生まれて、一生この家でくらして來た身分だが、それでも下手にニャンとでも云つて見ろ、みんなに物をぶつけられて、家中追つかけまはされるのだぞ」

とたしなめると、相手はぬからぬ顔をして、

「お上さん、まあお默んなさい。これでもわたしが何か云ふと、その度にみなさんが喜びますがね、お前さんの啼聲なんか七里結界だつて云つてますよ」と答へた。

馬と馬丁

馬丁が毎日長い時間かかつて、主人から預つた馬の毛を刈つたり櫛を入れたり、世話を燒いて、そのくせ馬の飼料を盜んでは自分の役得にしてゐた。おかげで馬は段々いけなくなつて來るので、到頭こらへきれなくなつて、或日馬は馬丁にかう云つた。

「お前さん、わたしをほんたうに奇麗な丈夫な馬にしたいと思ふなら、身體に櫛を入れることは怠つても、飼料をたつぷりにして下さい。」

鳩と鴉

鳩が籠の中に飼はれ乍ら、子供を澤山に育てたといつて自慢をした。それを外で鴉が聞いてゐて、大きに嘲笑ひ、

「まあまあそんな馬鹿げた自慢はいい加減にするがいい。お前さんの一族が殖えれば殖えるほど、籠の鳥の憂目に泣くものが餘計に殖える、といふだけの話ぢやないか」

と云つた。

駱駝と造物主

駱駝が牛の角を見て羨ましがり、自分も一つああいふものを頭の上にのつけて貰つたら、もう何が攻めよせて來ても心丈夫だと思つて、萬物の主ユピテル大神の所へ願ひに出た。

大神は駱駝があれほど大きな胴體と強い力を持ちながら、それに滿足しずに何かと面倒なことを頼みに來るのをうるさがつて、角をやらないばかりではなく、あべこべに滿足だつた兩耳まで引ちぎつてしまつて、

「持て生まれた福分の上を望むだ罰だ」と言はれた。

34 牝獅子と牝狐

牝獅子と牝狐とが四方山の話をしてゐるうちに、母親のくせで互ひに子供の自慢をはじめ、うちの子供はほんたうに、身體はまるまると丈夫に育つて、毛並は美しいし、兩親に生寫しだなどと言ひ合つた。

「ほんたうにうちの子供達は澤山で樂しみでございますよ」

と牝狐は云つて、少し意地惡く

「けれどもあなたのところでは、なんですか、お一人しかおできにならないやうですね」

と言ひ足した。

「あゝさうだよ」と牝獅子はむつとした顔をして、「だが一人でも獅子の子だ」と云つた。

【訓言】分量よりは實質。

35 狂犬

やたらに嚙み付く癖のある犬があつて、どうもしないのにいきなり飛びついては、主人の家に來る客を困らせた。そこで主人も弱つて、犬の首に鈴をつけて、その音で客に用心させるやうにした。ところが犬は鈴をつけて貰つたので大得意になり、ちりんちりんやりながら、大威張で歩きまはつてゐると、年をとつた犬がそれを見て、傍へ來て云ふには、

「おい貴樣あんまり威張らない方がいいぞ。貴樣はその頸につけた鈴を、名譽の勲章だとでも思つてゐるのかい。どうして大違ひ、それこそは自分の不名譽を廣告する目標なのだ。」

【訓言】評判になるといふことが、どうかすると、名譽をあげたといふことゝ間違へられる。

が森の中で野猪に出會した、その時驢馬が高慢な顔をして
「おい兄弟、早いぢやないか」
と聲を掛けた。驢馬風情にそんな馴れ馴れしい挨拶をされたので、野猪もむつとしてどなりつけると、驢馬は膝をついてお辭儀をしながら、相變らずけろりとした顔で、
「まあ親方怒んなさんな。兄弟と云はれちや不足かも知れないが、鼻息の荒いところは似てゐますせ」
と云つた。野猪は益々癇を募らせて、危く一突きに突き殺しさうな權幕を見せたが、それでも思ひ返して、
「その生意氣な舌の根を止めてやるのは譯もないことだが、貴樣のやうな碌でなしの血で汚してはこの牙が勿體ない」
と云ひながら行きすぎた。

【訓言】馬鹿な奴が他人を笑はせて御機嫌をとるつもりで、却つて相手をおこらせてさんだめに逢ふことがある。

馬と鹿

馬が牧場を我物にして草を食べてゐると、或日一頭の鹿が來て、自分も草を食べる權利があると主張して、牧場の最上等の場所を占領した。馬はこの癪に觸る新米の客に復讐をしたいと思つて、人間に加勢を頼んだ。その時、

「ああ、いいとも」と人間は承知した、「だがそれにはどうもお前さんの口に轡をはめて、わたしが背中でお前さんを自由に乘廻すのでないと工合よく行かないのだがね。」

馬はこの相談に應じた、そして二個して譯もなく鹿を牧場の外へ追拂つてしまつたが、その代り馬はその後厄介千萬な主人が出來て、毎日乘廻されねばならなかつた。

【訓言】一時の憤怒を晴らすために永久の苦痛を招くことがある。

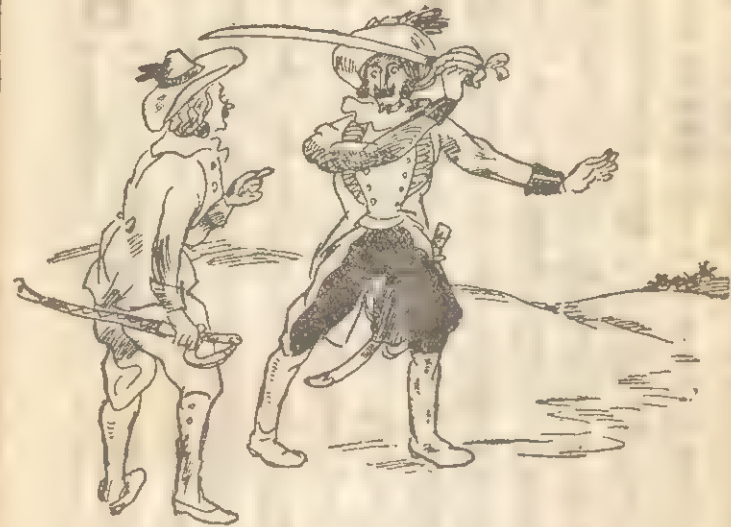
百姓と白嘴鴉

百姓が麥の種をやつと播いたばかりのところへ、鴉や白嘴鴉が澤山來て穀物を穿るので、百姓は毎日油斷なく見張りに行く、息子も一所に石投げを持つてついて行つた。しかし百姓が息子に向つて、「石投を」といふと、もう白嘴鴉の方では感づいて逃げてしまふ、そこで百姓は考へて、

「どうも癪にさはる奴だ。それではこれから、(石投を)とは言ふまい、たゞ(ウン)と云ふからな、さうしたらそれを直ぐ渡すのだよ」

と吩咐けた。やがてまた鴉の群がやつて來た。「ウン」と百姓は云つた。けれど白嘴鴉は氣がつかなかつた。その間に百姓が石投を取つて續様に五六發放すと、鴉共は逃げ出すひまもないうちに、一匹は頭を、一匹は脚を、一匹は羽をうたれてしまつた、やつと免れた鴉共は、命から〳〵引揚げる途中で一匹の鶴に出會つた。

「おい、どうした」と云つて鶴がたづねると、一羽の鴉は、

「どうしたと云つてお前さん」と呆れた聲をして、「人間つて奴は惡黨だねえ。とてもあんな奴の傍に寄るもんぢやない。彼奴等はちがつたことを云つて同じ意味に通じさせる手段を持つてゐる、おかげで可哀さうに友達は殺されましたよ。」

二人の武士が連立つて旅をして行く途中強盗に逢つた。一人の方はすぐ逃げ出したが、一人は踏み止まつて太刀を拔きかざし、勇ましく強盗と渡り合つたから、強盗はその勢に避易してなんにも取らずに行つてしまつた。もはや大丈夫と見ると、例の臆病者はこそこそ戻つて來て、

此度は相手もゐないのに、太刀を閃めかして強さうな聲を張り上げ、

「曲者はどこへ行つた、出てこい出てこい、目にもの見せてくれるぞ」

とどなつた。

もう一人の武士はこれを聞いて、おだやかに、

「君、少し來やうが遲かつたね、まあそれをもう少し前に言つて呉れると、君の言ふ言葉がほんたうに聞こえるし、僕もおかげで後楯ができてどれほどか氣強く思つたらう、今となつてはまあ慌てずに、その刀をしまふはうがよささうだ。もう刀を振り廻す必要がないのだからなあ。君はそれでもまだ外の人を欺いて、自分を獅子のやうな勇氣のある男だと思はせることができるかも知れない。だが僕だけはもう、君といふ人が、危險がやつて來ると、早速兎のやうに逃げ出す男だといふことを知つてしまつたからだめだよ。」

蝙蝠が地面の上に落ちて、鼬鼠に捉まつた、そして直ぐもう殺されさうになつたので一生懸命命乞ひをした。鼬鼠はしかし、鳥といふ鳥はみんな己の仇敵だから、ゆるすことはできないと云つて肯いてくれない。

「おやおや、とんでもない」

と蝙蝠は云つた。

「なんでわたくしが鳥なものですか。わたくしは鼠でございますよ。」

「さうだつたか」

と鼬鼠は考へて、

「ぢやあまあ勘忍してやらう。」

かう云つて離してくれた。その後しばら

く経つて、この蝙蝠がまた同じやうにして外の鼬鼠に捉まつた。そして同じやうに命乞ひをした。

「ならん」

と鼬鼠は権もほろゝに、

「俺は鼠といふ奴を、どうも見のがすことはできないのだ。」

蝙蝠はこゝぞと、

「でもわたくしは鼠ではございません。鳥なのですから。」

「おや、さうだつたか」

と鼬鼠は云つた。そして此度もまた蝙蝠を放してやつた。

【訓言】 その時々の風向を見定めるといふことは、世渡りの道だ。

が狐を供につれて、いつも一所に獲物狩に行く時には、まづ狐が獲物を見つけて、獅子が行つて一口に咬み殺す、跡では各自分に應じた高で分配するといふ風にしてゐた。けれどいつでも分配の高は獅子の方が遙かに多く、狐の方はほんのお餘りを頂戴するだけだつたから、狐は詰らなくつてしかたがない。そこでこれからは自分一人獨立して獲物を稼がうと決心して、まづ手はじめに羊小屋へ忍び込んで小羊を一匹盜み出したが、羊飼がそれを見付けて番犬を嗾しかけた、そこで狩人が此度はあべこべに狩り立てられる方になつて、早速に追ひ付かれて、嚙み殺されてしまつた。

【訓言】 獨立する力の無いものは人に從つて居る方が安全だ。

が背戸口で日向ぼつこしてゐると、そこへ狼が跳んで來て、一口に咬み殺さうとしたが、犬は哀れつぽい聲を出して、

「ごらんなさい、この通りわたしは痩せつこけてゐて、とても上等な晝飯にはなりますまい。ああ、さう、いいことがありますよ。まあ、五六日待つて下さい、家の主人が大宴會を開く筈です。そのときはおあまりの肉や骨にもたつぷり有り付けることだと思ひますから、それで見違へるほど肥るでせう。同しことならその時のおたのしみにとつて置いて、ゆつくり召上がる方が御德用ですよ。」

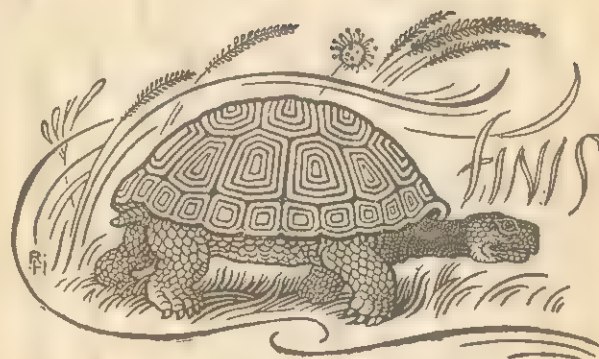
狼はなるほどこれはうまい考だと思つて、其場はおとなしく歸つて行つた。それから五六日して、狼はまた例の背戸口へ來て見ると、犬はとても届きさうもない廐の屋根の上に高上がりをしてゐる。

「下りて來い」と狼はどなつた、「下りて來て食はれろ。約束は忘れまいな。」

これを聞いても犬は澄ました顏をして、

「お前さん、此度から背戸口でわたしの寢てゐるところを捕へたら、その時はもう當てにならない御馳走の約束なんぞに欺されない方が利口だよ」と嘲つた。

龜と兎

龜と兎

が或る日龜に向つて、隨分お前の足はのろいなあと云つては、頻りにからかつた。すると龜も負けない氣になつて、

「よしよし、それでは兎さん、一つ駈けつこをしよう。きつとわたしが勝つから賭をしてもいい」と云ふと、兎も、龜の言草を大變おもしろがつて、

「ほう、素敵だね、やらう、やらう」

と承知した。そして狐を頼み、決勝點に着席して審判官の役を勤めてもらうことに

43 兎と龜

した。やがて一、二、三の懸聲と共に二個は出發したが、直にもう兎はずつと龜をぬいてしまつたので、この分ならまづ一寢入して行つても大丈夫だと云ふので、ごろりと横になるうちにぐつすり寢込むでしまつた。この間に龜の方は一生懸命のそりのそりと這ふやうにして、いつか決勝點に著いてしまつた。その跡で假寢の夢から醒めた兎がびつくり仰天、ピヨンピヨン、ピヨンピヨン、全速力で駈け出して見たもの丶、優勝旗はもうとつくに龜に取られてゐた。

【訓言】おそくともたゆまず進む者が競爭に勝つ。

驢馬と主人

植木屋に使はれてゐる驢馬があつたが、食物は少し、重たい荷物を背負はされて、その上始終小つぴどく打ち叩かれた。驢馬もやり切れなくなつて萬物の主ユピテルの大神の所に出かけて、何とかして奉公先を替へて頂きたうございますと願ひ出ると、大神も可哀相に思召して瀬戸物師の處へ住込ませてやつた。けれども主人の取扱は先よりも一層ひどいので、驢馬はまたもや大神に不平を訴へると、大神はいやな顔もされずに、今度は柔皮師へ行くやうにして下すつた、しかし此度の新主人の商賣が何だといふことを始めて知つたとき、可哀さうに、驢馬は失望しきつて、

「先の主人は二軒とも仕事は辛いし、取扱ひはひどいし、苦しいことは苦しかつたが、それでも今となつては、何故それを辛抱しなかつたらうと思ふよ。先の主人達はともかく私が死んでも順當に土の下へうめてくれるだらうが、此度といふ此度は、死ねば皮桶の中へつゝ込まれるのだ」とつぶやいた。

【訓言】奉公人こいふものは悪い主人を持つて見ないうちは先の主人のいいこころがわからぬものだ。

白鳥

白鳥と云ふ鳥は一生にただ一度——愈々自分の最期が近づいたと分かつた時に、歌を唱ふと云ふことだ。この白鳥の歌のことを話に聞いた男が、或る時市場で白鳥の賣物を見つけ、買取つて家に持つて歸つた。それから四五日して、この男は友達を晩餐に招待して、その席の御馳走に白鳥の歌を聞かせようと思つて、白鳥に吩咐けたけれど、どうしても歌を唱はなかつた。さうかうするうちに月日が經つて、白鳥も愈々年を取つてもう餘命も纔になつたことを悟つたので、その時はじめて清らかな聲でかなしい歌を唱つた。この歌を主人が聞いて腹を立てゝ云ふには、

「何だ、この鳥は死に際になつてはじめて歌を唱ふのか、さうと知つたらあの時、ああやつてやいやい云つて、歌を唱へとせめるよりか、つひ一ひねりこの首をひねつてやればよかつたのだつた。」

百姓と息子

百姓が老病で愈々臨終といふときに、息子達に一大事の秘密を語りたいと云ふので、一同を床のまはりに集めて云ふやう、

「子供達、わたしはもう程なく死なねばならぬ。それゆゑお前達に知らして置きたいと思ふが、あの庭の葡萄畑に實は財寶がかくしてある。だから私の死んだ後で、お前達はゆつくり土を堀つてさがし出すがよい。」

父親が息を引取つてしまふと、早速息子達は手に手に鍬や鋤をかついで、葡萄畑の土をここかあそこかと、財寶の隱してありさうなところを目あてにほじくり返して見たが、到頭何んにも見つからなかつた。しかし、こんなに根氣よく土をほじくり返したおかげで、その年の葡萄はこれまでにつひぞない立派な收獲であつた。

【訓言】勤勉は財産を作る。

百姓と息子

鷲と人間

或る人が鷲を捕へて、羽を切つて鶏小屋の中に放して置いた。鷲は大層いくぢのないみぢめな樣態で、鶏共に馬鹿にされながら隅の方にひく〳〵してゐた。そのうちに鷲の主人は、隣の人の懇望に任せ、鷲を賣つてやつた。隣の人は鷲を飼つてからせつせと羽の生え揃ふやうにしてやると、やがて鷲の羽はすつかり元のとほりに回復したので、早速飛んで行つて兎を一匹捕へて恩人のところへ持つて行かうとした。これを見た狐が、鷲を止めて云ふには、

「その進物をあの人のところへなんかもつて行くことはありませんよ。それよりか初めてお前さんを捕へた主人のところへそれを持つて行くはうがいい。そしてあの男と仲直りをするんですね。さうすればあの男ももう二度とお前さんの羽を切らうとは云はないでせうから。」

驢馬と鶏と獅子

と鶏とが一つ小屋で遊んでゐる處へ一匹の獅子が空腹を抱へてやつて來て、いきなり驢馬に飛び掛つて晝飯にありつかうとした、其時鶏は勢一杯高く飛び上つて啼立てた。此聲を聞くと一所に慌てゝ獅子は逃出た。その有樣を見た驢馬はすつかり高慢になつてしまつて、鶏にさへあの通り負て逃る位だから、獅子だなどと大きな顔はしても、とてもこの驢馬の手に立つ者ではないと、とんでもない考を起こした。そして止せばいいのに、逃て行く獅子の跡からとことこ追つ駈けた。所がもう鶏の眼も聲も屆かぬ所まで來ると、獅子はいきなり振向いて、驢馬に飛び掛つてずたずたに引き裂いた。

49

藪醫者

或る人が病氣になつて床に就いた。いろいろと手をつくして醫者の世話になつて見たが、大抵は差當つて命に別條はないがたゞ長びく病氣だと云つた。所が一人一番終ひの醫者が匙を投げて、二十四時間とは持たぬと云つた。所がこの診斷はまんまと外れて、それから五六日經ないうちに病人は床上をして、そろ〱外へ散歩にでるまでになつたが顏色だけは幽靈のやうに蒼ざめて見えた。暫く散歩をしてゐると、彼方から例の匙を投げた醫者がやつて來て、顏を見ると、

「いよう、どうしましたい。彼世から出て來たばかりでせうな屹度。あちらの様様はどうです、連中はどうしてゐますね」と云つた。病人も白々しい調子で、

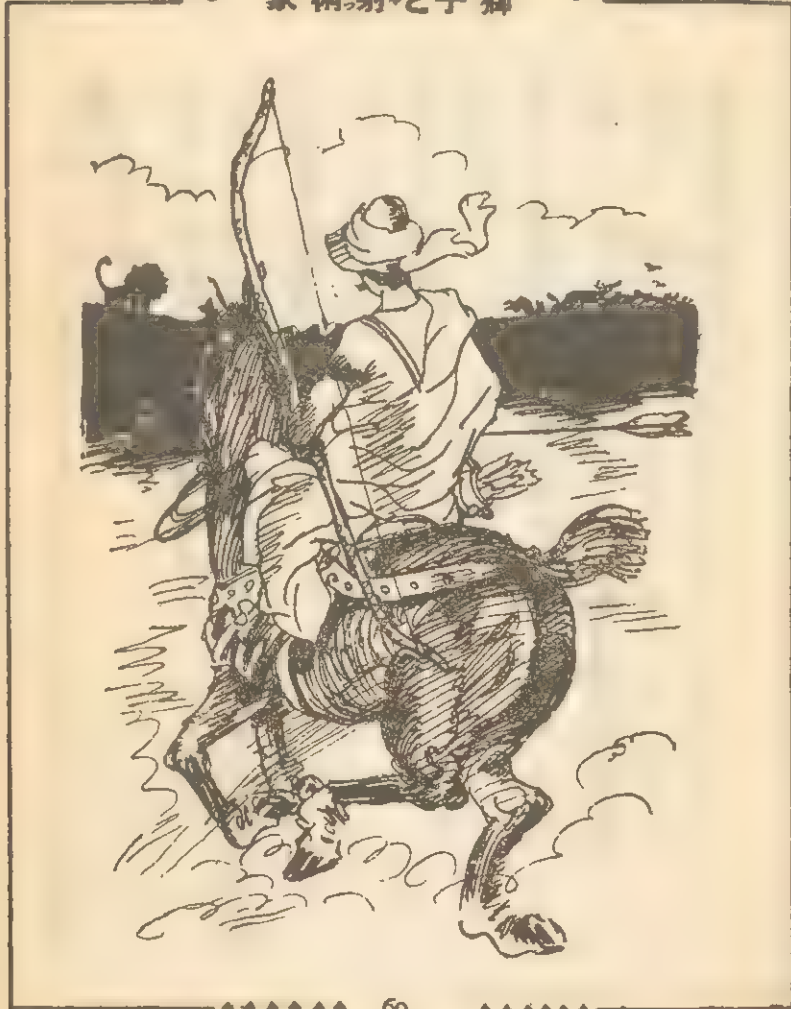
「隨分元氣ですよ。それはさうとわたしが冥土を出てくる時お閻魔様の廳では、どうも醫者といふ奴は、病人が自然の命數で死ぬものを死なせずに、醫術の力で命をとり止めようとするのは怪しからんと云ふので、醫者といふ醫者をのこらず冥土へ呼び出して、訊問する手配をしてゐましたよ。それにはあなたなぞも勿論そのお仲間に入つてゐるのだが、わたしが行つて、いやあの男は醫者ではない、たゞの虛吐きですと云つて證明して上げたので、あなただけは放免になりましたよ。」

50

逃げた鴉

を或る人が捕まへて、足に糸を結び付けて、子供達のおもちやにやつたけれど、鴉はどうしても人間の仲間に入つてゐることが厭やでたまらないので、程立つて、大抵馴れたやうに見えたので、油斷をして、嚴しく看守されないのを幸ひ、そつと拔け出して元の舊巢へ飛び立つて行つた。ところが運惡く例の糸がまだ脚に結び付けられたまゝだつたので、直きに樹の枝に引つ掛かつて、それからはどんなにもがいて見ても體が自由にならない。今は鴉ももう百計盡きて、溜息ばかりつきながら、

「いやはや、自由を得たおかげで命を失ふとは」

と云つて泣いた。

射術家が山の中へ入つて矢を射る稽古をした。それを見た山の獣はみんな逃げて行つた。中にただ一匹獅子だけが跡に殘つて、射るなら射ろと云ふ樣子をした。しかし射術家は忽ち一矢で獅子に射中てゝしまつた。

「どうだ、俺が今送つた使者の手並を見たか。さあ此度は俺が自身に出掛けて貴樣を捕へてやる」と射術家は叫んだ。その時獅子は段々矢の痛みが體に感じてくると、一生懸命足に任せて逃げ出した。この一伍一什を見た狐が獅子を見て、

「さあ、そんな憶病なことがあるものですか、何故逃げ出さずに、人間と戰をしないのです」

とからかつたが、獅子はもう懲々したと云ふ顔付で、

「とても逃げ出さずにはゐられないよ。何故と云つて見ろ、使者だといふ奴からしてあの位强いのだから、本物の主人はどんな恐ろしい奴だか底が知れたものではない、とても俺の手には合はぬ、合はぬ」と嘆息した。

【訓言】遠方から攻撃する者には用心せよ。

52 土鼠の母子

土鼠といふものは生まれたときから目の見えないものなのに、それを土鼠の子供が母親に向つて、何でも

「母あさん、あたいはたしかに目が見えるせ」

と言ひ張つて聞かなかつた。ぢやあ試して見ようといふので、母親は小供の眼の先に乳香を二三粒置いて、

「何だかあててごらん」

と云つた。子供は言下に、

「石塊だよ」

と答へた。母親はがつかりした聲をして、

「おや〳〵まあこの子は、眼が見えない上に、鼻まで利かないのかねえ」

と叫んだ。

【諺言】 附焼刄ははけ易い。

53 狼と獅子

狼が一匹の羊を盗んで、ゆつくり穴へ持つて行つて食べようと擔いで行く途中、獅子に出會つて引奪られてしまつた。勿論獅子には歯が立たないので口惜しいけれど、狼も泣寢入の外はなかつたが、それでも獅子の姿が少し遠ざかると、

「いくら獅子でも、横合から出て他人のものを引奪つて行くとはほんたうにひどい」

と怨めしさうにつぶやいた。獅子はこれを聞いてから〳〵と笑ひながら、大きな聲で、

「おいこれはまつたくお前のものに違ひないと云ふのか。自分も何だ、やはり他人のものをさらつて來て置きながら、馬鹿な奴だな。ははは。」

が鷲に攫はれて子供の様に悲鳴を揚げた。雀がこれを見て嘲るやうに、「兎さん、お前はいつも足の速いのが自慢のくせに、そのざまは何だい。いくぢのない話だなあ」と毒口を利いてゐる間もなく、此度は鷹が飛んで來て一息に雀の息の根を止めてしまつた。兎は雀の死んだのを見て心地よささうに、自分の苦しいのも忘れて、

「それ見ろ、たつた今他人の不幸を見てうれしがつてゐた奴が、俺より先に死んで行くとはいい氣味だなあ」

と云つた。

【訓言】平生薄情な者は災難に陷つても他人の同情を惹かぬ。

後家さんと女中

儉約家で働きものゝ後家さんが、二人の女中を置いて、はげしく追ひ使つた。女中は朝もゆるゆる寢てゐることができず、鷄が鳴き出すと一所に起こされて仕事をしなければならなかつた。女中はこんなに朝早くから、しかも冬の眞中などに起こされることをひどく辛がつた。それで女中達が思ふには、これといふのもあの鷄奴がむやみに早朝から啼立てゝ人をおこすからだといふので、可哀さうに鷄をつかまへて頸をしめてしまつた。けれど女中の考はあさはかだつた。何故といふに、後家さんはその翌朝いつものやうに鷄が啼かないので、時間の見當が付かず、却つていつもよりもずつと早く、眞夜中から起き出して來て女中を働かせたから。

番犬と獵犬

或る人が獵犬と番犬と二頭の犬を飼つてゐた。獵をして歸つてくると、いつも獲物の中からたつぷり取つて、留守居の番犬にも分けてやつた。それを獵犬が見てひどく忌々しがり、番犬に向つて、

「お前は家に遊んでゐて碌な働きもしないのに、俺が大汗かいて山からとつて來た御馳走を、存分せしめてゐるのは隨分横着だなあ」

と厭味を云つたが、番犬は平氣な顏をして、

「その小言ならお前旦那に云ふがいい。旦那は俺に、自分で働かないでも他人の働いてとつて來た食物を食べて、世の中を渡るやうにしつけて下すつたのだからなあ」

と云つて笑つた。

【訓言】子供の惡いのは親のしつけの惡いためだ。

57 牛と鼠

が小鼠に鼻をかぢられて、怒つて追つかけると、鼠はちよこちよこと逃げて行つて、壁の破れにもぐり込んでしまつた。牛は恐ろしい勢で壁に向つてしきりと突貫を試みたけれど、一向に手答はなく、骨折損のくたびれもうけで、がつかりして、地面にへたばつてしまつた。愈々牛の奴參つたなと思ふ時分を見計らつて、小鼠はちよこちよこと飛び出して來て、性懲もなく、又もや牛の鼻をかぢつた。牛の先生、怒るまいことか、後足で飛び上がつて、いきり立てたものゝ、その時分にはもう相手は逸早く穴の中にもぐり込んでしまつたので、さすがの牛もただ大きな聲で唸つて、フウフウ息を吹くばかり、どうすることもできなかつた。その時壁の中で、小さなきいきい聲がこんなことを云つた。

「どうだい、お前みたいな胴體の奴でもいつも思ふやうには行かないだらう。どうかすると俺達のやうな小さい奴にも敵はないことがあるのだぞ。」

【訓言】戰は強いものが勝つとはきまらぬ。

58 狐と猿

が、狐に頼むであの大きな邪魔らしい尻尾の毛を切つて貰つたら、おかげで此見つともない赤いお尻が隠せて、つまり兩得だと考へて、狐の所へ出掛けて行き「一體そんな馬鹿々々しく長い尻尾をぶら下げて君はどうするつもりだね」と猿が云つた、「そんな重たいものをわざわざ地面の上に引きずつて歩くことはないぢやないか。」

「大きにお世話だよ」と狐は權もほろゝに答へた、「長すぎようが重たからうが、それをお前なぞに切つてやる位なら、この儘泥濘の中でも、荊藪の中でも、曳きずりまはつてゐた方がよつぽど優だよ。自分の着てゐるものを脱いで、他人の様子をよく見せるやうな馬鹿な眞似ができると思ふか。」

【訓言】慾張りは有りあまるものでも他人にはくれぬ。

が百姓家の裏庭に遊んでゐる鳩を見て、いかにも不足なく食物をあてがはれてゐるのを羨ましがり、自分も鳩の姿に化けて仲間に入り、甘いことをしてやらうと考へた。そこで鴉は頭から脚の先までまつ白に塗り立てて鳩の群に交つた。それでも、鴉が口を利かずにゐるうちは、鳩もまさかこれが鴉の化物だとは知らなかつた。けれどある日のこと、鴉はうつかりカアカア云ひ乍らとび上がつたので、直ぐに化の皮を見破られてしまひ、多勢鳩の仲間が寄つて來て、情容赦もなく啄き立てたので、さすがのづうづうしい鴉も居たたまれず、また元の古巣へ逃げてかへつた。ところが此度は鴉の仲間が、この白塗の化け鴉を自分達の仲間とは見ず、一所に食物を食べることを厭がつて直ぐ追ひ出してしまつた。さういふわけでこの馬鹿な鴉は到頭宿無しになつて、そこらの空をかなしさうにうろうろ啼き廻つてゐた。

【訓言】節操のないものは何處にも味方が無い

子供が蝗を取りに行て一匹の蟋を見付ると蝗だと思つて行成捕へようとした。その時蟋は劍を振り立てて云つた。「坊ちやん、わたしに手でも觸つて御覧。わたしを捕へる所か、あべこべにそこの手に持つてゐる蝗まで離させて見せるから。」

機會

はげあたま、赤裸、人間の形をして
あぶない剃刀の刄をわたりながら
すはといへば双の翼で逃げて行く、
そのくせ髪はちよんぼりと、前の額にあるばかり——
この男、捕へたら決して離すまい、
一度手を、放したが最後もうだめだ。
ジョオブの神でも及ばない。
これこそは我々が、毎日毎夜ねらつてゐる
「機會」の姿であるさうだ。——
青年は老い易い、大事な月日をうかうかと
仇にくらして悔いぬやう、
「時」の象を書に殘した
昔の人の教へ草
皆さんとつくり聞き給へ。

【ファイドルスに依る】

秣槽の中の犬

が秣槽の枯艸の中に寝てゐて、折角自分達のためにとつてあるのだからと思つて、外の馬や牛がそれを喰べに行くと、犬は吠え猛るやら、噛み付くやら、傍へ寄せつけようともしない。

「何といふ意地悪根性な奴だらう」と一匹の馬が怒つて仲間のものに云つた、「彼奴は自分には喰べられもしないくせに、それを他人が喰べようといふと邪魔をするのだ。」

二つの鞄と二つの壺

誰れでも、二つのカバンをかけてゐる、一つは前に、一つはうしろにかけてゐて、どちらにも「過失」が一杯入つてゐる。前の方のカバンには、他人の「過失」が入つてゐる、うしろの方のカバンには自分の「過失」が入つてゐる。そこで誰でも自分の「過失」は自分には見えないが、他人の「過失」をば決して見のがさないのだ。

【訓言】 他人の振見て我振直せ。

* * * * * *

瀬戸物の壺と眞鍮の壺とが大水に流されて、河の上を浮いて行つた。眞鍮の壺は瀬戸物の壺に向つて、なるたけ傍にくつついて行け、俺が保護してやるからと云つたが、瀬戸物の壺は、御深切はありがたいが、どうか傍に寄つて下さるなと云ふ。

「そのわけは」と瀬戸物の壺が云つた、「わたしのこの體が一度あなたの體にさはつたが最後粉微塵になるのですから。」

【訓言】 強い者ご弱い者ごが仲間にはなれぬ。

猿とユピテル

萬物の主ユピテルの大神が、生物類一切に向つて、大神が一番美しいと御覧になつた子供を生んだ親に褒美をやるといふふれを出した。このおふれに應じて出た中に猿があつて、一本の毛もない、鼻の平べつたい小妖物のやうな赤ン坊を抱いて出た。神様達はこの猿を一目御覧になると、こらへきれす哄と笑ひくづれた。けれど猿はさも大事さうに子供を抱きしめて、

「ユピテル様が[illegible]れに御褒美を下さらうとも、それはそちらの御勝手ですが、わたくしはそれでも、この子を世界中の誰よりも一番美しい子だと思つてをります。」

蠅と駄馬

蠅が荷車の轅の上にとまつて、車を曳いてゐる駄馬にかう云つた。

「お前隨分遲いなあ、もつと早く步けよ。さうでないと俺は針で突つつくぜ。」

かう云はれても駄馬は少しもさわがない。

「俺のうしろの車に俺の御主人がゐる。その御主人が手綱を引つぱつて、鞭で俺を打つ、それに俺は從つてさへゐればいいのだ。貴樣なぞの差出口を聞いてやる必要はない。ぐづぐづなまけてもいい時と、さうでない時と、俺は自分でちやんと分かつてゐるのだぞ」

と云つた。

獅子と狐と驢馬

と、狐と、驢馬とが一所に獲物狩に行つた。やがて夥しい獲物を仕込んで歸つて來ると、獅子はまづ驢馬に獲物の分配を命じた。驢馬はそこで獲物を三つに平分して、さて恭しく、一山づゞどれでもお好きなのをとつて下さいと云つた。これを聞くと獅子は火のやうに怒つて、いきなり驢馬に飛び掛つてずたずたに嚙み裂いてしまつた。そして此度は狐の方を睨みつけて、もう一度獲物の分配をし直せと云つた。狐は恐る恐る獲物の中からほんのしるし

66 獅子と狐と驢馬

だけを自分の分にのこして、跡はのこらず山のやうに獅子の前に積上げた。
「いや君、どうも恐ろしく氣が利いてるなあ」と獅子は云つた。
「わたくしがですか。へヘ、驢馬の庇蔭で學問をしましたから」と狐は苦笑した。
【訓言】他人の不幸から教訓をうけるものは仕合せだ。

＊　＊　＊　＊　＊

と狐が仲間になつて、食物をさがしに行つた。いくらも行かないうちに向から獅子が出て來たので、二個はびつくり途方にくれた。けれど利口な狐は早速の謀計、わざとつか〳〵獅子の傍へ進み寄り、耳に口をよせてさゝやいた。
「私の命を助けていたゞけば、お骨を折らずにあの驢馬の奴を捕へて上げます。」
獅子はこの申出を承知したので、狐はまた戻つて驢馬と一所になり、二足三足行くうちに驢馬を誘つて獵師の掘つた陷穽に首尾よく落してしまつた。獅子は驢馬が十分陷穽にかゝつて、手も足も出なくなつたのを見すますと、まづ狐の方に向つて來て、只一口に片附けてしまつた。それから悠々と驢馬の御馳走に舌鼓を打つた。
【訓言】人を呪はば穴二つ。

67 人間と馬と牛と犬

或る冬の日の、ひどい嵐の眞最中、一匹の馬と、牡牛と、犬とが人間の家に一夜の宿を求めた。人間は快く一同を迎へ入れてくれ、寒さは寒し、體も濕つてゐるといふので、火をおこしてあたゝめてくれた。そして馬には燕麥を、牡牛には乾草を、犬には晩食の餘りを分けてやつた。やがてその翌朝、嵐が凪いで一同暇を告げて出立しようといふ間際になつて、何がな主人の好意に報いる方法をと云ふので、一同相談の上から云ふことを極めた。それは、三匹で銘々人間の一生を分配し、その一つづゝに、自分達の特別な天性を分けてやらうといふのである。さて籤引の結果、馬は靑年の時代を取つたから、そこで靑年は馬のやうに元氣が盛んで、抑へても抑へてもはねまはるのである。牡牛には中年の時代が當つた、從つて人間は中年の時代にはどつしりと落ち着いて、力一杯働く。さて最後に犬は老年の時代を擇んだ、道理で人間は年をとると、おこりつぽく癇癪もちになつて、とんと犬のやうに、自分をなぐさめてくれるものには懷くけれど、自分を大事にしなかつたり、自分を厭がつたりするものを見ると、嚙みつきたがるのである。

鼬鼠と人間

或る人が、始終家の中をきい〳〵云つて、あばれ廻つてゐた鼬鼠を捕へて、盥の中に水を入れて殺してしまはうとすると、鼬鼠は一生懸命命乞をしていふには、

「あなた、どうしてわたくしの命をお取りなさることはできませんよ。わたくしはこれまでお宅の害をする鼠や蜥蜴を退治して、隨分御役に立つてゐるのでございますから、どうかその御褒美に命だけはお助け下さいまし。」

これを聞いた主人はちよいと考へて、

「ふむ、過ちの功名なら、お前もまるつきり家に功がないでもない。だがあの鷄を取つたのは誰だ。牛肉を盜んだのは誰だ。だめだ、だめだ。貴樣が言譯をすればするほど、罪が重くなるばかりだ。死んでしまへ。」

【訓言】下手な言譯はするだけ損。

蟻と蟋蟀

冬の天氣のいい日に、蟻達がせつせと、長雨にしめつた貯への穀物を乾してゐると、そこへ瘦せ衰へた蟋蟀が來て、食物を何でも惠んで下さいと賴んだ。

「ほんたうにわたしは饑えて死にさうなんですよ」と蟋蟀は云つた。

蟻達は自分達の主義には反くけれど、仕方なしにしばらく仕事の手を休めて、蟋蟀の相手をした。

「ちやあ聞くが、お前さんこの夏は一體何をしてゐなすつたね。この冬の用意に食物を集めては置かなかつたのですかい。」

「實は」と蟋蟀は答へた、「わたしはあんまり歌計り唱つてゐたものですから、外の事をする暇がなかつたのです。」

「お前さん、夏の間歌を唱つて暮したといふのなら、この冬はまあ踊を踊つて暮らすより外に仕方はあるまいね。」

かう蟻は答へて、あははは笑ひながら、相變らす仕事にかかつた。

【訓言】將來のために計れ。

貧乏な後家さんがたつた一匹の羊を後生大事に持つてゐた。いつもの毛を剪つてやる時分になつたが、毛皮屋へ連れて行つて剪んで貰ふお金を倹約して、自分で剪刀を持つたけれども、馴れない仕事なのでどうも思ふやうには行かず、やたらに羊の肉をちくちく剪むので、羊はそのたんびに痛がつては跳び上がり乍ら、

「奥さん、奥さん、どうしてそんなにひどいめに逢はせるんです。わたしの身體から出る血で毛の■方がふえるのですか。奥さん、わたしの肉が御入用なら、肉屋に頼めば一思ひに殺してくれますよ。それともわたしの毛をとる思召しなら、毛皮屋に頼んで下さい、痛くないやうに剪んでくれますから」

と云つた。

【訓言】 一文惜みの百損。

福の神を賣る男

福の神の木像をこしらへて市場へ賣りに出た男があつた。けれども誰一人、それを買はうと云ふものがないので、男は大きな聲で、しきりと神樣の御利益を廣告して廻りながら、

「福の神はいかゞ、福の神はいかゞ。これさへあれば開運繁昌疑ひなしの福の神でござい」

とどなつた。それを傍の人が聞いて、

「それほど御利益のある神樣なら、お前が自分で大事にして拜むでゐたらよささうなものぢやないか」

と笑ふと、男はぬからぬ顏で、

「この福の神樣の御利益に決しておろそかはありませんが、今が今直ぐには現はれませぬ。ところでわたくしは只今目の前に御利益の欲しいところなんですよ」

と云つた。

子供と蝸牛

百姓の子供が蝸牛を探しに行つた。やがて兩手に一杯拾つて來て、火をつけて燒いて喰べようとした。火がついて殼が明るくなつて來て、それからお尻が段々熱くなると、蝸牛はいつものとほりとユツとユツといふ音を立て乍ら、殼の中へ身體を引込める、この音を聞いた子供が、

「お前達はほんとにのんきな奴等だなあ。自分の家が燒けるといふのに、おもしろさうな口笛なんか吹いてゐるのかい」

と云つた。

73

羊と番犬

が或る時羊飼ひに向ひ、自分達と番犬との間に取扱の厚薄のあることを嘆いて、

「あなたのやり方はどうも不思議です、そして大層不公平ぢやありませんか。わたし達はあなたに羊毛と小羊と、それから羊乳までも差上げてゐるのに、わたし達のあなたから頂くものは草ばかりです。その草だつてわたし共が自分で探して喰べてゐるのではありませんか。ところがあの犬はあなたに何一つ上げるわけでもないのに、いつもあなたの食卓の御馳走を分けて頂いてゐるのです」

と云つた。この談が早速に犬の耳に入ると、犬は大きな聲でどなりつけた。

「そりやあさうさ、だがそれでいいのだ。考へて見ろ、俺といふものがなかつたなら貴様達どうなると思ふ。盜坊が來て盜んで行くだらう。狼も來て喰ひあらすだらう。ほんたうさ、俺といふものがあつて貴様達の見張をしてやつてゐるからいいやうなものゝ、さもなければ貴様達は安心して草も食べてはゐられないのだぞ。」

羊はこの言葉を成程と感心して、その後はもう再び主人の待遇に不平を並べないやうになつた。

74

三人の商賣人

或る町の住民が集つて、町の防備をするために外廓を築く相談をして、就いては材料には何を使つたら一番堅固にでき上がるだらうといふ話になつた。

その時、大工は立ち上がつて、それは材木に限ります、容易に手に入れることができて、工事が樂に捗りますと云つた。すると石屋が立つてこれに反對し、材木は直きに火事で燒けやすい、これは石に限りますと云つた。最後に、此度は柔皮師が起立して云つた。

「私の意見に從へば、柔皮ほど德用な物は何もありませぬ。」

【訓言】我田引水。

アフリカの黒ン坊を奴隷に買入れた人があつた。ところが主人は、どうもこの奴隷の色のまつ黒なのは、先の主人がぶしやうをして、體を洗はせなかつたせゐだらうと思ひ込み、なんでも精々磨いて奇麗にしてやるに限ると云ふので、やたらに石鹸をつけて、ブラシでごしごし擦つて、ざあざあお湯をぶつかけてやつたが、一向に色は白くならないどころか、肌は愈々黒光りに光るばかりで、そのうち可哀さうに奴隷は風を引いて、死ぬほどな目にあつた。

有りあまるほどの物を食べて、そのわりに仕事の少い騾馬が、大得意で、自分をひどく立派なもののやうに自惚れてしまひ、

「わたしの親父はきつと元氣のいゝ競馬馬だつたに違ひない。そこでわたしはそつくり親父を生寫だ」

と云ひながら跳ね廻つてゐた。けれどこの元氣も束の間で、間もなく騾馬は窮屈な轅にかけられ、重たい荷物を後につけて長い路を跑歩かなければならなかつた。一日追使はれて夕方家へ歸ると、騾馬は普段馴れない勞働に疲れきつて、喪心勢のない聲で、わたしは親父を買被つてゐたがなあにやはり唯の驢馬に相違なかつたと云つた。

牛飼と失つた牡牛

飼が家畜の世話をしてゐるうちに、一番大切にしてゐる牡牛を一匹亡くした。そこでおどろいて、早速探しにでかけたけれど、見つからないので、氣ちがひのやうになり、この盜坊さへつかまへたらユピテル樣に犢を上げませうと誓ひを立て、なほも蚤取眼で探して歩くうちに、ふと藪の中で大切な牛を獅子が喰べてゐるのを見つけた。これを見た牛飼は震へ上がつてしまつて、兩手を天にさし上げて、思はず叫んだ。

「ユピテルの大神樣、わたくしは牛の盜坊を見つけたら、犢を一匹差し上げるお約束をいたしましたけれど、どうして此度はわたくし自身が、あのおそろしい獅子の牙からのがれることさへできましたなら、それはそれは丸々と肥つた牡牛を一匹さしあげまする。」

蛇と樵夫

樵夫の小さい息子が蛇に咬まれて、その傷のために死んだ、樵夫は氣のちがふほど悲しんで、蛇がにくくつてたまらず、斧を持つて蛇のかくれた穴の口に行き、蛇が出たら打殺してやらうと待ちかまへてゐた。やがて蛇が這ひ出して來たので、早速一撃喰はせたけれど、ほんの尻尾の尖をちぎつただけで、蛇はまたするするると這込んでしまつた。そこでもう喧嘩はあきらめたと云ふ風を見せかけて、もう一度此度は御馳走で釣り出さうとした。けれども蛇もさるもの、その手にのらず、

「わたしは尻尾を失くしたし、あなたは子供を失したのだから、兩方共にそのうらみだけでも、仲好しになれやう筈がないではありませんか」

と云つた。

【訓言】自分に敵害を加へたものを眼の前に見てその痛害を忘れることはできぬ。

盗坊と母親

子供が小學校へ通ふ頃から友達の本を取つて來ては母親に見せた。それを母親は叱りもしなかつた。其の次には外套を盜んで來たが、あべこべに母親に褒められた。その子供が大人になつてます〳〵盜坊がうまくなり、澤山人の品物を掠取つた揚句、到頭見付かつて縛られてしまつた。さて愈々死刑と極まつて仕置場へ引いて行かれる途中、この盜坊の母親が見物の中に交つてゐて、わが子の淺ましい姿を見ると、胸を拊つてなげき悲しんだ。その時盜坊は、

「母に一言言ひ殘したいことがございます」

と願つた。母親が許されて傍へ寄つて來ると、盜坊はいきなり母の耳に口を寄せて、一口にアングリその耳を嚙み取つてしまつた。母親は怒る、人々は騷ぐ、その中に盜坊は大きな聲で、

「お母さん、わたしが度々友達の本を取つて來たとき、お前はなぜわたしを打つて異れなかつたのだ。そのおかげで到頭こんなざまになつて、情ない死にやうをすることになつたのだぞ」

と叫んで口惜し泣きに泣いた。

144773

猫と狐

と狐が森の中で話をした。狐が云つた、「どんな災難がふつてわいても僕はおどころかないよ。臨機應變、千變萬化の計略を運らして、僕はきつとのがれて見せる」

猫が云つた、「さうかねえ、僕はどうもそんなわけには行かない。僕の奥の手はたつた一つしきやないのだから、それが外れるともうだめだよ」

かう云つてゐるところへいきなり向ふから獵犬が七八匹列を作つて飛んで來た。猫は早速に樹の上に駈け上がつて枝の中からのぞいてゐた。狐は千變萬化の計略も一向役に立たず、追つかれて咬殺された。

81 人間の創造

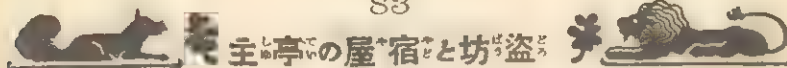
そのむかし、萬物の主ユピテルの大神の命令を蒙つてプロメテウスが初めて人間とその外の動物の創造にかかつた。ところができ上がつて見ると、物の道理の分かる人間の數の方が、物の道理の分からない動物の數よりもずつと少ない。大神もこれではいけないと思召して、もう一度プロメテウスに吩咐けて、動物の中から少し人間を作り變へて、人間と動物の數の平均がとれるやうにやり直せと云はれた。プロメテウスは早速仰せの通りに取り計らつた、そのせゐで今日人間のうちに、人間の形はしながら、動物の心を持つてゐるものが澤山にあるのだ。

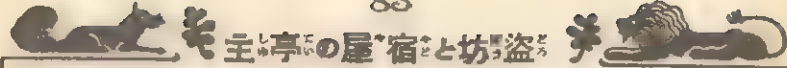
82 禿頭と蠅

蠅が禿頭の上に止まつて嘗めた、禿頭の人は怒つて、夢中になつて蠅と一所に禿頭をぴしやりと叩いたけれども、蠅は素ばしこく逃げて、からかふやうに

「わたしがちよいとお頭を嘗めただけであなたはわたしを殺さうとなさるのですか。それではそのやうに小つぴどくあなたの頭を叩いたあなた御自身の手には、どんな成敗をなさるんです」

と云つた。すると禿頭の人はいまいましさうに、

「頭を打たうが叩かうが、俺の手は始めから惡氣でしたのではないから俺はおこりはしない。だが貴樣のやうな下等な虫けらのくせに、人間の體から生血を吸ひ取らうとする奴は、叩き殺してやつてもまだ足りないのだ」と答へた。

盗坊がある宿屋の一室に泊り込んで、隙があつたら何か盗つてやりませうと狙つてゐた。けれどどうもいい機會が見付からなかつたが、ある日のこと町のお祭だと云ふので、宿屋の亭主も例になく新調の晴衣裳を着て、家の前の涼み臺に出て風を入れてゐた。盗坊はこの上着に目をつけると、これは甘い仕事ができるわいと一人で呟いた。しかし別になんにも取り付きがないので、何氣なしに亭主の傍に行つて腰をかけて、何かと世間話をしかけた。しばらく話し合つてゐるうちにふと盗坊は、だしぬけに大きな聲を出して欠を一つして、それから狼のやうな凄い聲を出して吼えた。亭主はびつくりして、どうかなすつたかと云つて心配するので、盗坊はしてやつたりと思ふ色も見せず、

「ええ、それではそのわけをお話しますがね、その前にまづ、このわたしの上着を少し預つてゐて下さい。全體どうしてこんな大きな欠の出る病氣にとりつかれたか、わたしにも分からないが、多分何かの惡行のむくいでせう。しかしわけはどう

でも、とにかくわたしは三度つゞけて欠をすると、忽ち見る間に恐ろしい狼の姿に變じて、人間の喉笛にくらひつくことだけは事實です。」

かう云ひ終るか終らぬに盗坊はまたつづけて二度めの欠をして、そして前のやうに高く吼えた。亭主は盗坊のいふことをのこらずほんたうだと思ひ込み、狼に向つて來られてはこりや大變だと云ふので、あはてて家の中へ逃げ込まうとした。けれども盗坊はしつかり亭主の上着の尻をつかまへて引止めながら、大きな聲で、

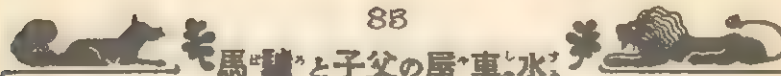
「お待ちなさい、お待ちなさい、わたしの上着を預つてゐて下さい、それでないとわたしは、この着物をここでみんな失くしてしまひますから。」

かう云ひ乍ら盗坊は大きな口を開いて三度めの大欠をはじめた。亭主は狼に喰はれてはたまらぬとびつくり敗亡、上着を盗坊の手にのこしたまゝ、體だけすりぬけて家の中に飛び込み、戸の鍵をしつかりかけてしまつた。盗坊は跡で悠々と分捕物を抱へて引上げた。

龜とユピテル

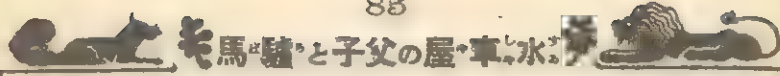
萬物の主ユピテルの大神が奥方を迎へることになつたので、地上の生物のこらずを宴會に呼んで婚禮の御披露をしようと思ひ立たれた。お招きに應じて生物はのこらず大神の宴會に集まつたが、ただ一個龜だけはかいくれ姿を見せないので、大神はどうしたのかと不審に思はれた。その後大神が龜に逢はれたとき、先日は何故來なかつたと聞くと、龜の云ふには、
「わたくしは外に出ることは嫌ひです。自分の家ほどいいところは何處へ行つてもありませんから。」
大神はこの答を聞いて、大層腹を立たれ、それからといふものは、龜は自分の家を背中へ背負つたまゝ、自分で出たいと思つても、もう再び家の外へ出ることのできないやうにされてしまつた。

水車屋の父子と驢馬

水車屋の爺が、小さい息子を連れて市場へ驢馬を賣りに行つた。その途中若い娘達の群に出會つたが、驢馬のうしろからひよこひよこついて行く親子の姿を見ると、この娘達は可笑しがつてきやつきやつと叫び立てた。
「まあ隨分馬鹿げた人達だわねえ。驢馬に乘つて行けばいいのに、砂つぽこりの道を後生大事に、ぽこ〳〵ついて行くなんて。」
水車屋の爺は娘達の云ふこともなるほどと思つたので息子を驢馬の上にのせ、自分は、その側に引つ添ふて歩いた。暫らくすると此度は向ふから仲間の者が五六人やつて來た、そして水車屋に向つてかう云ふのであつた。
「何だ、君は自分が歩いて子供を馬に乘つけて行くなんて、子供を甘くしてしまふぢやないか。子供のくせに贅

澤な、歩かせろ歩かせろ。それが何より藥だよ。」

水車屋の爺はこの友達の忠告に從ひ、息子を馬から下して自分が代りに乘り、息子は馬のうしろからとぼ〳〵ついて行つた。それからまたたんとも行かないうちに、女と子供が一團、父子の姿を見てかう云つた。

「まあ隨分自分勝手な爺だねえ。自分ばかり氣樂さうに驢馬にのつかつて、可哀さうに小さな子供が、あとからせいせい云ひながらついて行くぢやないか。」

これを聞いて水車屋は早速息子を自分のうしろに載せてやつた。それからまた歩いて行くと、二三人の旅人が通りかかつて、水車屋に向ひ、その乘つてゐる驢馬は自分の持物か、それとも他處から借りたものかと聞いた。水車屋はこれは自分の持物で、これから市場へ賣りに行かうと云ふところだと答へた。

「そりやあ大變だ」

と旅人は云つた。

「可哀さうにそんな弱い動物に、人間が二人まで乘つてたまるものではない、それでは體がすつかり痛みきつてしまつて、折角向ふへ連れて行つても誰れも見向くものもなくなつてしまう。そりやあお前さん。どうしたつて擔いで行つ*

*てやらなきやだめだよ。」

そのとき水車屋の爺さんは云つた。

「なんでも仰しやる通りにいたしませう。」

そこで親子は驢馬を下りて、驢馬の四足を繩でしばつて、天秤棒にぶらさげ、父子二人の肩に擔いで、うんすん云ひながらやつとこさと町へ着いた。その樣子がいかにも馬鹿げきつ

てゐるので、彌次馬が方々から集まつて來て、この行列を指さしては罵りさわぎ、中には氣違ひだ氣違ひだと叫び立てるものもあつた。この騒ぎの中を押し分けて父子はとある橋の上に差し掛かると驢馬は彌次馬のわい／＼さわぎですつかりのぼせ上がつてしまひ、やたらに足をばた／＼もがくうちに縛つた繩が切れて、それと一所に重みに引かれて、驢馬の體は河の中に落ち、あはやと見る間にあぷ／＼水を飲んで死んでしまつた。このとんでもない結末を見た水車屋は、情ないやら、恥づかしいやら、可哀さうに、しほ／＼と家へ歸つて行つた。そしてみんなの人の云ふことを聞いてやつて、そのくせ誰れにも有り難くも思はれないのみか、大事な大事な驢馬を失くすとはなんと云ふ馬鹿なことをしたのだとつく／＼後悔した。

【訓言】誰にも喜ばれようとするものは却つて誰にも喜ばれぬ。

が正體を見現はされまい用心に、途中に落ちてゐた羊の皮を、これ幸ひと頭から被つて、羊に化けて、その仲間に紛れこみ、自由に惡事を働かうと巧らんだ。

羊の皮を被つた狼は、大勢の羊の牧場に出てゐる中へ入つて行き、まんまと羊達を欺きおほせて、その夜は外の羊と一緒の檻に入れられた。ところがその晩、ふいと羊の肉を食卓につける必要ができて、羊飼ひはほんたうの羊とまちがへて狼をつかまへた、そしてその場でいきなりナイフを狼の腹につつこんで殺してしまつた。

の子供が二匹池の縁で遊んでゐると、そこへ牛が水を飲みに下りて來て、そゝつかしく一匹の蛙を踏みつぶしてしまつた。母親の蛙は子供が一匹見えなくなつたので、弟の蛙に聞くと、

「お母さん、兄さんはね、死んでしまつたんだよ」

と子供は答へた。

「四足をした恐ろしい大きな奴が出て來てね、兄さんが今朝池の縁で遊んでゐるところを踏みつぶしてしまつたんだよ。」

これを聞いて母親の蛙が、

「恐ろしい大きな奴だつて。この位の大きさかい。」

と云ひながら、一杯息を入れて、一生懸命大きく膨れて見せた。

「ああ、さうだね。もつとずつと大きいよ。」

と子供は答へた。

蛙はまた一息入れて身體を膨らませた。

「この位かい。」

「ああ。どうして、どうして、もつとずつと大きいさ。」

「ぢやあこの位、この位……。」と云ひながらだんだん蛙は體を膨らませるうちに、風船球のやうにまんまるくなつてしまつた。

「ぢやあこの位…………」ともう一度云はうとするはづみに、――ボンと音がしてお腹が破裂してしまつた。

海豚と鯨と小鰮

海豚が鯨と喧嘩をして双方の眷族多勢入れ交つて戦をした。戦は仲々劇しくつづいて、いつ止みさうにも思はれなかつた。そこで小鰮が、一つ俺が仲裁に入つてやらうと考へて、戦の眞中へ割つて入り、もう喧嘩は止めて仲よくおしなさいと勧めて見た。これを聞いた海豚の一匹が馬鹿にしたやうな顔をして答へて云ふには、

「俺達は、小つぽけな鰮風情に仲裁して貰ふくらゐなら、いつそみんな喧嘩して死んでしまふ方が優しだぞ。」

月と月の母

月が或るとき母親に上着を拵へてくれといつて頼んだ。

「とてもだめだよ。」と母親は云つた。

「お前の體に合ふものがどうしてできよう、三日月に成たり、滿月に成たり、間には何方つかずの形をして居るのぢやないか。

野猪と狐

野猪が森の中に入つて、一本の大木の根元でせつせと牙を研いでゐると、そこへ狐が通り掛かつて、野猪の爲ることを見ながら、かう云つた。

「まああなたはどうしてそんなことをしてゐらつしやる。今日は獵師も出てゐないし、外に何もさしあたり危險なものはないやうではありませんか。」

「そりや、さうだよ」と野猪は答へて、「だがわしの命が愈々危いといふ間際になれば、この牙を使はなくてはならないのだ。そのときになつて、牙を研いでゐるひまはなからうではないか。」

【訓言】平生から用意が肝腎。

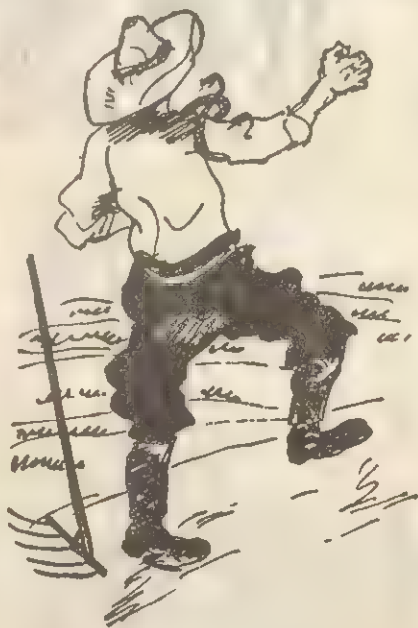
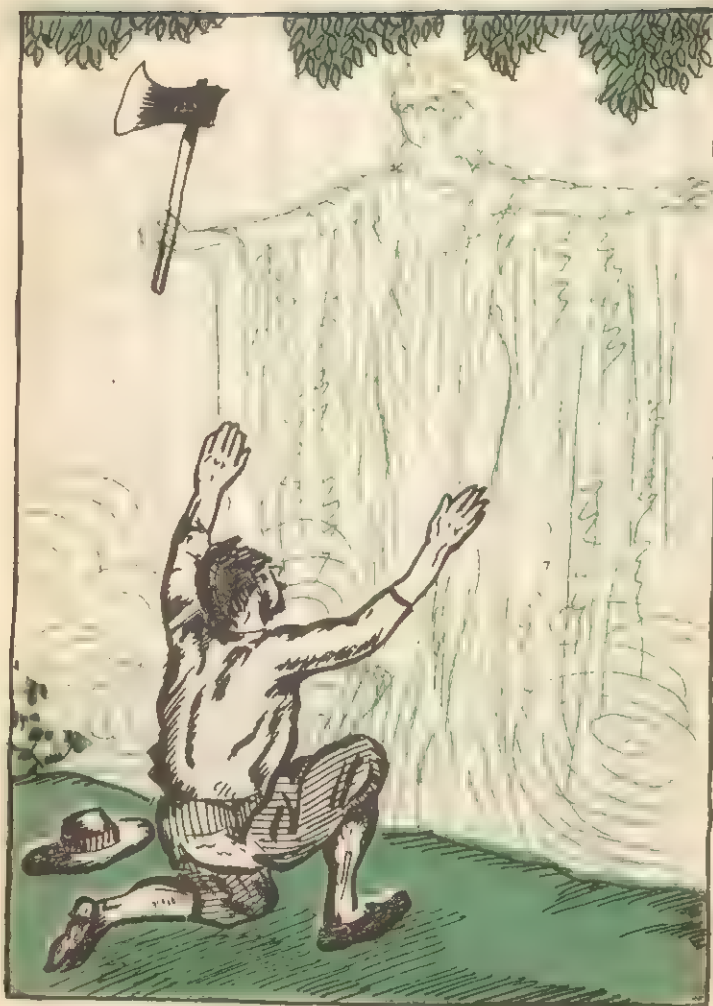
百姓と蝮蛇

或る冬の日に、百姓が、寒さのために凍えて死にかけてゐる蝮蛇を見付け、可哀さうに思つて拾ひ上げて懷に入れてやつた。蝮蛇はやがて體の温みで息を吹き返すや否や、忽ち鎌首を上げて恩人に向ひ、毒のある齒で咬みついた。かうして可哀さうな百姓は、苦しい息をつきながら、

「これと云ふのもわたしが恩を掛けまじきものに恩をかけた罰が中つたのだ」

と云ひ云ひ死んで行つた。

樵夫と水の神

盗坊と番犬

盗坊が或る家に忍び込まうと思つて、番犬を手なづけるために牛肉を用意して行つた。ところがそこの家の犬は、肉を投げてもらつても見向きもしずに、かう云つた。

「その肉で俺をだまして、口を利かせまいとしてもそりやあだめだよ。見ずしらずのお前さんが急にそんな親切をして見せても、永年お世話になつてゐる御主人には替へられるものではないのだ。」

樵夫が河の畔で樹を伐つてゐたが、斧を振り上げる手先が狂つて思はず手を放すと、斧は河の中へ飛び込んでしまつた。樵夫は河縁に立つて、斧の亡くなつたことを嘆いてゐると、水の神様が現はれて、何を悲しむでゐるといつて尋ねた。そして譯をきくと大層氣の毒がつて、早速水の中へ斧をとりに行つてくれたが、やがて黄金の斧をもつて來てこれではないかと聞く。樵夫がそれではないといふと、また水の中に潜つて、此度は銀の斧をもつて來て、これでもないかと聞いた。

「いゝえ、それでもございません」と樵夫は答へたので、もう一度神様は水の中に潜つた。そして失くなつた斧を持つて出て來た。樵夫は品物が戻つたので大喜び、夢中になつて御禮を言つた。神様は樵夫の正直なのを大層感心されて、外の金と銀と二本の斧をも褒美にくれた。樵夫が歸つてこの話を仲間の者にすると、その中でも友達の仕合せを羨ましく思つた男が、自分も一番、運試めしをやつて見よう

と思ひついた。そこでわざわざ河の畔へ出かけて行つて、わざと斧を水の中へ落した。神様は前のやうに現はれて、斧を落した話をきくと、直ぐ水の中に潜つて、やはり黄金の斧をもつて上がつて來た。そして、「これはお前のか」ともなんとも云はないうちに、慾張の樵夫は、「それです、それです」と叫びながら、手をのばして獲物を取らうとした。けれどもどつこい、神様は、此奴の不正直を憎むで、決して黄金の斧をやらないばかりか、水の中へ落した斧までもとり上げてしまつた。

【訓言】正直は最上の政略。

章魚と海豚

章魚が海豚に追はれて一生懸命、水煙を立てながら逃げて行く、海豚はどこまでもと追ひかける、あはや追ひつきさうになつたのでこれは大變と勢好く體を振つて沙濱に跳び上つた。海豚の方も夢中になつて追かける勢ひで一所に陸の上に揚つてしまひ、今はお互ひにすうすう云ひ乍ら虫の息をついてゐる。でも章魚は海豚が動けなくなつたのを見て、小氣味よげに、「これでわたしももう死んでも心のこりはない。何故と云ふにあのとほりわたしをこんなにした奴がお陰で同じ憂目を見てゐるのだからなあ」と云つた。

狼と犬

が或る時、犬に向つて、「なんだつて吾々はお互ひにいつまでも敵同士で啀合つてゐるのだ。人間は君達を打叩いたり頸の周に重い頸輪をはめて無理矢理に羊や牛の番をさせる、それでゐて一番悪いことは食物といつては骨ばかりぢやないか。いつそ羊を吾々にくれて一所の仲間に入つて甘いものの食あきをしようぢやないか。」

犬共は甘々誑されて狼の洞窟に行つた。けれど犬が中に入るや否や、狼共に咬み殺された。

【訓言】謀叛人の終りは必らず悪い。

近頃夫に死に別れたばかりの女が、毎日お墓詣をしては死んだ人のことを憶つて泣き悲しんでゐた。その墓の直き近くの畑を耕してゐた百姓が、この様子を見て、この女を自分の女房にしたいと思つた。そこで鋤も何も田の中へ投り出したまゝ女の傍へやつて來て、やはり同じやうに坐つてせつせと自分も涙を流し初めた。女は不審に思つて、どうして泣くのだといつて訊くので、男はここぞと思ひながら、

「わしは近頃大事な女房を亡くしましてなあ、悲しくて悲しくてどうにもならない、が、まあかうして泣いてゐれば悲しみも紛れますのさ」

と云つてまた泣いた。女も誘はれて、

「まあ、わたくしもやはり夫を亡くしたのでございますよ」

と云つて、これも泣き出した。そしてしばらくは二人とも物も言はず、むやみに涙をこぼしてゐたが、やがて時分を見計らつて百姓は、

「かうしてお互ひに境遇の似たもの同士であつて見れば、これはいつそ二人結婚して一所に暮したらどうだね。わしはお前さんの死んだ御亭主の代りにならうし、お前さんはまたわしの亡くなつた女房の代りになつてくれるだらう。」

これはいかにも理窟に合つた考らしいので、女も直ぐ承知して、涙にぬれた二人の眼は忽ちに乾いてしまつた、ところがこんなことをしてゐる間に盗坊がのつそりやつて來て、百姓が犂と一所に置放しにした牛を盗んで逃げて行つた。それを初めて知つたときの百姓の驚き方といつてはない、胸を拍いてくやしがり、今度こそは腹の中から大きな泣聲を出して叫び立てた。女は男の泣聲を聞きつけて傍へ寄つて來て、

「おやおや、あなたはまだ泣いてゐるの」

と云ふと、男は、

「ああ、今度はほんたうに泣いてゐるのだ」

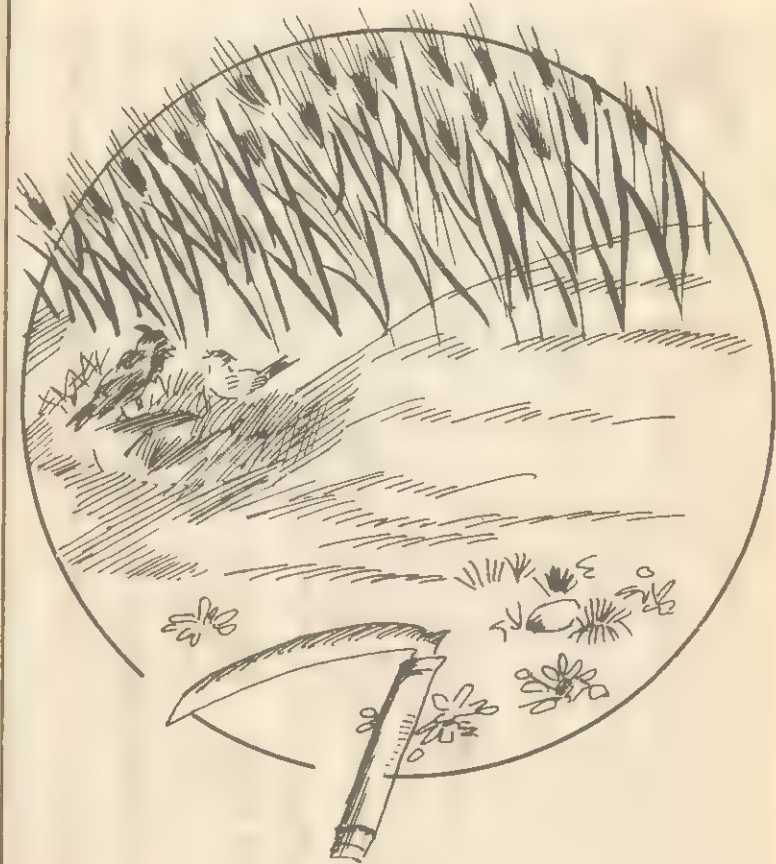
と答へた。

雲雀の母と子

雲雀が麥畑の中に巣を作つて、熟しきつた麥の穂の下に雛を隱して育てゝゐた。その雛がまだ巣立たないうちに、或る日のこと、百姓が麥畑を見分に來て、すつかり麥が黄ばんで來たのを見て、

「さあ麥も美事に熟つて來た、近所の人達を頼んで刈入をせずばなるまい」

と云つた。これを子雲雀の一個が小耳に引挿んで大變びつくりし、母雲雀が歸ると早速、外へ巣を移さなければいけないと云つたが、母雲雀は平氣な顔をして、

97 雲雀の母子

「あはてることはないよ。近所の人達の手傳ひなどを頼んでゐるうちは容易なことではないから、安心おしなさい」
と云ひ聞かせた。それから五六日すぎて百姓はまたやつて來たが、麥はもう熟り切つて、波を打つて、地に垂れた穂先からは實がこぼれるやうになつてゐる。
「もうぐづ／＼してはゐられない」と百姓は大きな聲で「今日こそ愈刈入をはじめなければならない。さあみんな俺の跡について働け、働け」
とどなつた。
その時母雲雀はこれを聞いて子雲雀に向ひ、
「さあ子供達、愈々お引越をしなければならないよ。百姓がもう他處の人達ばかりを宛てにせず、自分で仕事にかゝると云つてゐるからね」
と云つた。

【訓言】自ら助くるものが最も善く助くるもの。

98 百姓と林檎樹

百姓が庭に林檎の樹を育てゝゐたが、少しも果實は生らないで、たゞ雀や螽蟖が、その陰に來ては日を避けたり、枝に棲つて歌を唱つたりするだけだつた。そこで百姓も愛想をつかし、一層一思ひに切倒して了はうと云ふので、斧を持つて樹の下へ出かけた、雀と螽蟖はこの様子を見て、これは大變なことになつたと思ひながら百姓に、どうか樹を切倒さないやうにと嘆願した。
「あなたがこの樹を伐つておしまひになれば、わたくしどもは他處へ棲處を探さねばなりません。さうするとあなたもこれからお庭へ出てお仕事をなさりながらわたくし共の歌を聞いてお慰になさることができなくなりますよ。」
かう云つて頼んだけれども百姓は耳にも入れず、樹の胴中から眞二つといふ勢で仕事にかゝつたが、二三度斧を當てるうちに、樹の幹が空洞になつてゐて、その中に澤山の蜜蜂が蜜を作つてゐることを知つた。百姓はこの思はぬ見つけ物をして大よろこび、斧も何も放り出してしまつて、
「やはりこの古い樹は大事にしておく價値がある」と云つた。

【訓言】大抵の人間は趣味よりも實益で物の價値を定める。

共があるとき、がやがや會議を開いて、どうだ、吾々も人間並に王樣を立てることにしようではないかと云ふ決議をした。そこでユピテル大神に向つて、是非わたくし共の王樣を下さいますやうにとせがむと、大神はこの願ひをうるさいことに思はれ大きな丸太を一本蛙共の捿むでゐる池の上に投げ落して、これを汝等の王にせよと申渡された。蛙共ははじめ丸太の落ちて來たとき、ドブンと、劇しい水音の立つたのに驚いて、池の底へ深く逃げ込ん

で小さくなつてゐたが、やがて丸太が水の上に浮いたまゝ身動きもしないのを見て、一匹二匹とこは〲首を出して來て、樣子をうかがふ中に段々大膽になり、しまひにはすつかり馬鹿にしきつて丸太の上にのつかつてピョンピョンふざけ廻るやうになつた。そこでどうもこんな薄のろの王樣を戴いてゐるのでは、自分達の估券に拘はるといふので、もう一度大神に向ひ、こんないけない王樣はやめて、もつといい王樣をよこして下さいと申出た。大神も度々、何かとうるさい請求を持ち出されるのに疳癪を起こして、今度は鸛をやつて、これが汝等の王だと申渡された。するとこの王樣は來るが早いか、片端から見つけ次第に蛙共をとつて食べてしまつた。

狐と狼

が人里へ出て、あまるほどの食物を仕込んで山へ持ち歸り、穴の奥ふかく隠して一人でこつそり樂んでゐた。それを狐が勘付いてそれとなく樣子を見に行くと、狼は病氣だと逃げて逢つてくれない。狐は忌々しがつて直ぐその足で羊飼のところへ行き、今狼が羊を穴の中へ引込んで食べてゐるから、打殺しておやんなさいと告口をすると、羊飼は早速出かけて行つて、狼を殺してしまつた。狐は跡で舌を出しながら、早速狼の穴を占領して、殘してあつた食物を散々喰ひ荒らした。しかしこの榮華も永くはつづかず、その後先日の羊飼がそこを通りかかつて、ふと狼の穴をのぞくと、狐が寢てゐるので、何だ此奴はと云ひも果てず、一打に殺してしまつた。

【訓言】他人をのろはば穴二ツ。

狐と狼

子供と茨

子供が籬根の苺を摘むでゐるうちに、茨に刺された。びりびりする手を抑えたまま、子供は母親のところへ逃げ歸つて、しくしく泣きながら、

「母あさん、あたい、ほんとにちよいと觸つたばかしだつたんだよ」と言ひ付けると、

「さうさ、それだからお前は刺されたのですよ」と母親は云つてきかせた、「お前がいつそ思ひ切つて、ぐつと摑んでやれば、却つて刺されはしないのだよ。」

驢馬と騾馬

と騾馬と一頭づつ持つた人が、或時二頭の背中に荷物を積んで出立した、路がまだ割合に平らな間は、驢馬も仲々元氣だつたけれど、やがて險しい石高道に差しかゝると、驢馬はすつかり參つてしまつた。そこで驢馬は連れの騾馬に向ひ、少し背中の荷を助けてくれと頼んだが、騾馬は承知してくれなかつた。するうち到頭驢馬はへとへとに疲れて、ふらふらと切崖の上で足を踏み外して死んでしまつた。荷主は蒼くなつたが、外にしやうもないので、今まで驢馬の背にのせてゐた荷物を下して、のこらずそれを騾馬の背につけ、その上死んだ驢馬の皮を剝いで、二頭分の荷を一緒に積んだその上に、この皮をのせた。重荷の上に重荷を小付けにされて、騾馬はよたよた苦しさうによろめきながら、かう獨言を云つた。

「因果應報だ。最初驢馬に頼まれたとき素直に云ふことを聞いてやれば、今更こんな重荷を背負つた上に、驢馬の皮まで小付にされないでも濟むのだつた。」

人間と森の神

人間が、半分人で半分羊の形をした森の神のフオオンと知合ひになつて、森の中のその住居に同居することになつた。初めは何事もなく仲善くくらしてゐたが、或る時、冬の寒い日であつた、雪の降る中を二個は戸外へ出ると、人間はしきりとフウフウ手を吹いてゐる。森の神は不思議に思つて、

「何故そんなことをするのだ」と聞くと、

「冷たいから手を温めるんです」

と人間は答へた。

人間と森の神

それからその同じ日である、家へ歸つて夕飯になると、何しろ寒いからといふので、ぼつぼと湯氣の立つお粥をすすりながら、人間はまだフッフッと吹いてゐた。森の神はまた眼を圓くして、

「何故そんなことをするのだ」と聞くと「お粥を冷ますのです」と人間は云つた。森の神はその時つと立ち上つて「さあ出て行つてくれ」と云つた。「もう一刻も置くことはならない。そんな同じ口で熱さを吹いたり、寒さを吹いたりする人間とお交際は眞平だ。」かう云つて人間を扉の外へ押出した。

蚤と牡牛

蚤が或る時牡牛に云つた。

「お前さんのやうな大きな胴體をした、强力な奴が、人間にこき使はれて朝に晩に荒仕事をさせられてゐると云ふのはどうしたものだ、それに引きかへ、わたしなんぞは御覽の通り小つぽけな奴こそしてゐても、人間の體を食料にして、腹一杯血を濟つてやるが、それがため別にお禮一つ人間に云ふわけではない」

と云つた。これを聞いた牡牛は答へて、

「人間はわたしに大變親切にして吳れるから、わたしもありがたいと思つてゐるのだ。人間はわたしを養つてわたしのために家を作つてくれる、そして時々はわたしの頭や首を叩いて可哀がつて居るのだ。」

蚤はこれを聞いて負けぬ氣で、

「人間は此方で叩かしてやれば俺達をだつて叩くのさ。だがわたしは氣をつけて叩かせないやうにしてゐるのだ。それでないとわたしの體が臺なしになつてしまふからなあ」と云つた。

狐と河

狐が澤山河の縁に集まつて、水を飮まうとしたけれども、流が大層强い上に底がいかにも深さうで危なツかしいので、みんな河岸に立つたまゝ、お互ひにこはがつてさあさあと云つて、勵まし合ふばかり、さて進んで水を飮まうとするものもなかつた。そのうちに一個負け惜しみの强い狐が、意氣地のない友達を出し拔いて、自分の勇氣を自慢したい一心で、

「僕はちつともこはくなんかありやしない。ほら、この通り水の中へ入るぞ」

と云ひながら、入りかける間もなく、流に足をさらはれて引つくりかへつた。この狐が段々川下へ流されて行くのを見た外の狐共は、

「おいおい、僕達を置去りはひどいぞ。早く歸つて來て僕達にも水の飮める法を敎へてくれ」とからかつたが、相手も減らぬ口で、

「どうも今直ぐには出來ないよ。僕は今ちよいと海の方へ出て見たいと思ふんだ、それにはかうして流に乘つて行けばうまく行かれるといふものだ。やがて歸つてさへ來れば、その時は喜んで敎へて上げるよ」と云つた。

【訓言】死んでも負け惜しみは止まぬ。

二人の旅人が夏の日盛りに、砂ほこりのひどい道を歩いてゐた。やがて一本の篠懸樹の下まで來ると、これでやつと助かつたと喜びながら、樹の枝のこんもりとさし交した下に休んで日光を避けた。しばらくかうして休んでゐるうちに、ふと一人が樹の空を仰いで連れの男に向ひ、

「どうもこの篠懸樹といふ樹位役に立たないものはないなあ。果實が一つなるではなし、人間にはまるつきりなんの利益もないものだね」

と云つた。上でこれを聞いた篠懸樹は大きに腹を立てて、

「この恩知らずめ」と叫んだ。「お前達は現にわたしの涼しい葉蔭で燒き付くやうな太陽の熱を避けて、そのとほり樂々と休みながら、わたしの惡口を云つて、無用の樹だのなんのと、人を馬鹿にするのも程があるぢやないか。」

【箴言】恩になりながら恩も思はずにゐるものが世間には多い。

貧乏人が木で作らへた福の神の像を毎日拜むでは、どうか金持になれますやうにと祈つてゐた。大分長い間祈つてゐたけれど一向御利益がないと見えて、相變らず貧乏暇なしなのに業を煮やし、ある日福の神の木像を掴んで、力まかせに板の間目がけて叩きつけた。その勢ひがあんまりえらかつたものだから、木像の頭が二つに割れて、中から金貨がざくざくとこぼれて出た。貧乏人は見るよりがつがつして金貨をひろひながら、

「お前さんも隨分意地の惡い神樣ですねえ。わしが一生懸命あんたを大事にして祈つてゐるうちは、ちつとも御利益を下さらねえで、このとほり亂暴なめにあはせると、直ぐもうお金持にして下さるといふのはどうも」と、ほくほくし乍ら云つた。

阿呆鴉

萬物の主ユピテルの大神が、鳥類第一の美しい鳥を撰んでその支配者とするといふ布告を出した。鳥共はその選擧の日を待ち兼ねてみんな泉の畔に集まつて我劣らじとお化粧を始めた。鴉もその中に交つては見たが、どうも自分にもこのみつともない羽では及第はおぼつかないと考へて、わざと鳥共がみんなお化粧をして行つてしまつた跡に殘つて、そこに落して行つたいろ〳〵の鳥の羽の中でも、一番けばけばしい奇麗な羽を拾ひ集めては滅茶苦茶に自分の身體にくつつけた、おかげで今では外の鳥よりもきらびやかな姿に見えた。さて愈々定められた當日となつて、鳥類一同大神の玉座の前に畏つて控へた。大神は一同を順々に見て巡られた後、あはや鴉が鳥類の王として撰ばれようとした時、一同の鳥は一齊にこの鳥王の侯補者の體に取りついて、借り物の羽を一つ一つ剝がしてしまつたので、あはれや忽ち元の鴉の見すぼらしい姿をそこへさらしてしまつた。

漁師と小魚

漁師が一日釣をしたが、運惡く唯一匹小魚が上がつたゞけだつた。何の事だと舌打をしてゐると、小魚がどうか水の中へ放して下さいと云つて哀願した。

「わたくしはこのとほり只今ではちつぽけな魚です。けれどいつかは大きな魚になるでせう。そのときまたいらしつて、お捕へになつたら、今よりももう少し御役に立ちませうから。」

かう云つて賴んだか漁師は聽かない。

「いいやだめだ。今捕へたらはなすまいよ。何故といつて、ここでお前を放してしまへば、この後また逢へるかどうだか、知れたものではないのだからなあ」

と云つた。

鷲と龜

龜が地面を這ひ廻つてゐる生活がつくづく厭になり、鳥共がおもしろさうに空を翔り廻るのが羨ましくつてたまらず、鷲に向つて空を飛ぶ術を敎へてくれと頼んだ。鷲は、でも生まれつきお前には空を飛ぶ翼が授かつてゐないのだから、そんなことをして見てもむだだと云つて止めた。けれども龜はどうしても聞かないで、御禮はたんとするからまあ空を飛ぶ術だけ敎へて下さい、さうすれば翼がなくつても跡は出來ると言ひ張つた。鷲も仕方なく、ちやあとにかく自分の力にできるだけはやつて見ようといふことになつて、爪の間に龜を摑んだまゝ空高く飛び上がつた。そして思ひ切つて天邊まで翔したところで、爪を離すと、可哀さうに馬鹿な龜は、眞逆樣に巖の上に落ちて、身體は微塵に碎けてしまつた。

【訓言】 及ばぬ望を起こすものは身を亡ほす。

110

鷲と龜

111

犬と狐

が五六匹、獅子の皮を見つけると、みんなして歯でかぢつて引っ張り合つて遊んでゐた。その時狐が通り掛かつてこの樣子を見ながら、

「君達は勿論自分では大變えらいつもりでゐるんだらうね。だがこれが生きた獅子だつたら、その爪は君達の歯に比べて何層倍强いか知れまいぜ」と云つた。

* * * * *

獵犬が森の中でしきりと吠え立てゝゐるうちに、一匹の獅子を見つけたので、いつもの小さな獲物を獵り立てる氣で、一番大物をせしめてやらうと考へながら、獅子の跡を追つた。そのとき獅子は追つかけられてゐることを悟つたので、急に立止まつて獵犬の方に振り向いて、一聲大きく吼えた。その一聲に獵犬は、いくぢなくちぢこまつてしまひ、尻尾をふつて逃出した。その逃げ出す姿を一匹の狐が見て、

「おやおや。あすこに獅子を追つたはいいが、一聲どなられると早速、尻尾をまいてにげ出した臆病者が行く」と嘲つた。

【訓言】臆病者が虚勢を張つても笑はれるばかりだ。

112

蟻に噛まれた男と神

或る男が海濱に出て沖を見てゐると、一艘の船が難船して乘組の人を一所にのせたまゝ海の底へ沈んで行く、この光景を見てその男は言葉荒く神々の非道を責めたてた。

「神なんてものは人間の天性の善い惡いは一向わからないのだ。善人も惡人もない、みな同じやうに亡ぼしてしまふのだ。天道の掟も何もあつたものぢやない。」

とかうつぶやいてゐる時に、その男の足の下へ蟻が來てチクリと刺した。腹を立つた男は、ふと見ると直ぐ傍に蟻の塔があるので、いきなり足を上げてしたゝかに蟻の塔を踏んづけたから、可哀さうに罪もない蟻が一度に何百匹もつぶされてしまつた。その時突然そこへ海の神樣が姿を現はして、鞭でその男をきびしく打ちたゝきながら、

「この惡人め、貴樣の今云つた天道の掟は何處にあるのぢや」

と責めた。

鳥類が或る時集會を開いて王を選擧しようとした。その時眞先に候補の名乘りをあげて、多勢の前にその目のさめるやうにきらびやかな羽をひろげたのは孔雀であつた、みんなは孔雀の輝くやうな威光に打たれて、一も二もなく王位に即けようとした。その時ちよこちよこと鵲が一羽、群衆の前に進んで出て、孔雀に向つてかう云つた。

「陛下よ、吾々鳥類の王として陛下の如き立派な方を得ましたことはこの上もない吾々の幸福であります。この後永く陛下の御威勢に依つて、吾々の生命の安全を保證することのできますやう、ひたすら御願ひ申し上げる次第でございます。また陛下に於せられましても既に吾々の王として君臨せられる以上、吾々年來の仇敵たる鷲、隼乃至鳶の類までが何百羽一所に團まつて押し寄せませうとも、いつでもこれを追ひ斥ける御工夫は十分についてゐることと存じますが、念のためそれを前以て承知いたしたいのでございます。」

かう云はれて孔雀は急にへどもどした。それを外の鳥共が見て、こんな身なりばかり立派で、一向に意氣地ない王樣ではだめだと云つて選擧は止めてしまつた。

二人の旅人と斧

二人の男が連れ立つて旅に出た、その途中一人が道に落ちてゐた斧を拾つて、

「これはわたしが拾つたのだから、わたしのものにしよう」

と云ふと、もう一人の方が口を尖らせて、

「二人一所に見付けたのだから二人のものさ」

と云つて喧嘩をしてゐるところへ、うしろから斧の持主が飛んで來て、何故他人の品物をとつて行くと怒鳴りつけた、そのとき、

「俺は知らない」

と斧を拾つた男が云つた。

「俺も知らない」

ともう一人の男が云つた。

【訓言】樂しみを同じくし、憂ひを共にしないのは眞の友達ではない。

犬と影

が一片の肉を口に啣へて、流の上に架けわたした板橋を渡つて行くと、ふと水の上に映つてゐる自分の影を見付けた。それを馬鹿な犬は、外にもう一匹犬がゐて、しかも自分の肉より二倍も大きな肉を啣へてゐるのだと思ひ、肉を口から離していきなり向ふの犬にとびかからうとした。けれども、勿論、おかげで、犬はなんにも手に入れることはできなかつた。それもその筈一つの肉は水に映つた影だつたし、もう一つのほんたうの肉は流されて行つてしまつたから。

【訓言】影に欺かれて本體を失ふ勿れ。

の眷族がのこらず集つて、どうしたら猫の攻撃を防ぐことができるか、といふ大評定を開いた。いろ／＼跡から跡からと名案が出て、負けず劣らず議論が闘はされた後に、身分もあり、經驗も積んだ一匹の鼠が立ち上がつて云ふには、

「わたくしは一つ、これならばといふあつぱれの妙案を考へ出しました。皆さんがこれに賛成せられて、早速實行の方法をとられるならば、吾々鼠族はこれに依つて將來永く猫のわざはひを絶つことができようと考へます。それは即ちかのわれ／＼が不倶戴天の怨敵たる猫奴の頸ッ玉に鈴をぶら下げることであります。ちりんちりん鈴が鳴る、それ猫が來た、と直ぐ分かるやうにすることであります。」

この提案は大喝采を以て迎へられ、旣に採用と決定した、そのとき一匹の年とつた鼠が、後足で立ち上がつて演說して云ふには、

「わたくしは滿場の諸君と同じく、こゝに提出せられた議案をばまことに立派なものであると考へます。しかし乍ら、一體誰が猫の頸ッ玉に鈴をぶら下げるので

ありますか、それをまづうかがひたいのであります。」

かう聞いて鼠達は今更のやうに顏を見合はせた。そのとき年寄りの鼠がかう云つた。

【訓言】言ふことは容易いが行ふことはむづかしい。

肉屋と客

二人の男が市場へ出て肉屋の店で肉を買つた。肉屋がちよいとうしろをふり向いたひまに、一人の男が牛肉の一節を取つて手早くもう一人の男の外套の下へ隠した。肉屋がまたこちらを向いて見ると直ぐ肉の紛失したことが分かつたから、二人の客に肉を盗んだらうと云つて責めた。けれど肉を取つた男は、俺は肉なんぞは持つてゐない、と叱るやうに云つた。また肉を隠して持つてゐる男は、俺は肉なんぞは取らないと云つた。肉屋は二人とも眞實らしい言ひ拔けを云つてゐるのだとは分かつたが、たゞおとなしく、

「お前さん達は虚言をついて私を欺すことはできるだらうが、神様を欺すことはできないよ。ところで神様はさうやすやすと、お前さん達を許すものではないぞ」

と云つた。

【訓言】言ひ拔けはどうかすると詐欺と同じことになる。

狐と蟋蟀

冬蟋蟀が樹の枝の上で啼いてゐた。その聲を狐が聽いて一番彼奴を罠にかけて引ずり下し、一寸おいしいお點心にしてやらうと思つた。そこで蟋蟀のゐる眞下の所へ來て、歌を唄ふ聲の美しいことをいろ〳〵と甘い言葉を並べてほめあげた末、こんなにも美しい聲をもつた方と御昵懇になつて頂いたらどんなに名譽なことだらうと煽て上げた。けれども蟋蟀もさるもの、仲々その甘い手には乗らない。

「さう仰しやるお言葉に從いて、私が直ぐ下に下りて行くものと御考へでしたら、あなた大變な間違ひですよ。私は或るところで狐の穴の入口に、蟋蟀の羽が大變に落ちてをりましたのを見てからは、あなたや、あなたの御仲間の傍には決して近寄るまいと決心してゐるのでございますもの。」

119 鴉と水瓶

が喉を渇かして探しまはるうち、やつと水の入つた水瓶を見付けたけれど、底の方にほんの少したまつてゐるだけなので、どんなに骨を折つて見ても嘴がとゞかない。みすみす眼の前に水を置きながら渇えに死なくてはならないやうな氣がした。しかし到頭鴉はあつぱれの名案を思ひついた。鴉は小石を拾つては水瓶の中へ落しはじめた、一つ落し二つ落しする間に水が少しづゝ上がつて、終ひには口元まで水がくるやうになつた。それでこの利口な鴉は咽をうるほすことができた。

【訓言】塵も積れば山となる。

120 盗坊と鶏

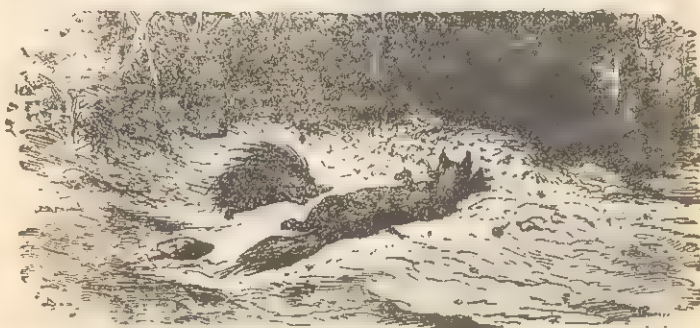
盗坊が一羽の鶏を攫つて行つた。やがて晩食の用意にかゝつて盗坊の一人が鶏を掴んで頸を捻らうとすると、鶏は「どうぞわたくしを殺さないで下さい。わたくしがこの上ない重寶な鳥だといふことは直ぐお分かりになりますよ。何故と申すと、わたくしは毎朝時を作つて、正直な方の眼を醒まして、お仕事にとりかゝるやうにして上げるのですからね」と云つたが盗坊は却つて喜ぶどころか、ぷりぷりして、「さうだ、そのとほりだ。だがおかげで俺達は飯の代をかせぐ邪魔をされるんだ。畜生、鍋の中へ入つてしまへ。」

【訓言】善人を護るものは惡人に憎まれる。

狐と蝟

が早瀬を泳いで渡らうとして、瀬が強いので川下へ押流され、體中に怪我をしてやつと陸の上へ上りは上つたものゝ、身動きもできないでゐると、藪蚊が眞黑に固まつてやつて來て、狐が振り拂ふ氣力もないのを幸ひに、思ふ存分血を吸つた。それを蝟が氣の毒に思つて、蚊を追つて上げようかと云つたが、狐は「あゝいやそれには及ばないよ。何故と云つて今ついてゐる蚊はもう腹一杯わたしの血を吸へるだけは吸つてしまつて、ちびりちびり跡を甞めてゐるだけだが、こゝでお前さんにこの蚊を拂つて貰ふと、此度は外の腹の空いた奴が一度にたかつて來て、殘つてゐる血を吸ひ盡して了うだらうから」と斷つた。

狼と羊飼

飼が狼の迷兒を見つけて連れ歸り、犬共の中に入れて一所に育てた。この狼の子が一人前の大きさに成長して後も、狼が來て羊を盜めば、きつと犬の群に交つて狼を追つた。どうかして犬共が盜坊を追つかけ損つたり、追つかけるのを止めて、中途で歸つて來たりなんぞする、そんな場合でも狼の子は一匹で追つかけて行つたが、追ひつくと立止まつて、そこでその狼に御馳走をわけてもらひ、何喰はぬ顏で羊飼の家へ歸つた。そのうちに狼が來て羊を盜んで行くことが暫く打絕えると、到頭此度はこの狼

の子が自分で羊を盗んで、犬共と獲物を分配するやうになつた。羊飼もさてはと段々勘付くやうになつたが、到頭或日のこと現場を見付けられてしまひ、狼は首に繩をつけて、近所の樹の上から吊り下げられた。

【訓言】骨髓から生まれついた性質はいつか皮肉の上に現はれずにはすまぬ。

* * * * *

が長い間、羊の群に目をつけてゐたが、わざと無邪氣らしく知らん顏を裝つてゐた。羊飼は無論狼のことだから惡いことをするに違ひないと思つて、始めは油斷なく見張つてゐたけれど、暫く時日が經つても狼は一向羊の群に振りむいても見ない樣子だつたので羊飼も段々安心して、しまひには狼が羊達の大敵だと云ふことは忘れて、却つて一つぱしの番人でも置いた位の氣になつた。それで或る日のこと、用事が出來て町へ行くことになつたが、

—ドレエ畫—

狼と羊飼

羊飼はなんの氣もなしに狼を羊と一所に置去りにして出て行つた。けれど羊飼が背を向けると一所に、待つてゐたといはぬばかりに狼は、羊の群の中へ飛び込んで、片ッ端から喰ひ殺してしまつた。羊飼がやがて歸つて來て、狼の散々荒らして行つた跡を見ると、ぼんやりした顔で

「狼なぞを信用した罰をわたしは受けたのだ」

と云ふ外はなかつた。

* * * * * *

飼が狼の仔を見つけて育てた。段々大きくなるとこの狼の子に敎へて近所の羊を盜ませた。狼は敎えられたよりも一倍甘くやつて見せた末に、

「おかげでわたしも盜坊することが甘くなりましたが、これからは精々あなたも

—ドレエ畫—

御用心なさらないと、此度は御自分の羊が失く
なりますよ」
と云つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

がふと羊飼の住むでゐる小家の前を通
りかゝると、羊飼共が寄り集つて羊の
肉を煮て、おもしろさうにお酒を飲む
でゐた。狼は忌々しがつて、
「何だ、これで俺が中へ行つて、御馳走の仲間
に入れてくれろと云つたら大騒ぎだらう」
とつぶやいた。

歌を唄ふ小鳥が窓の外に吊つた籠の中に入れられてゐたが、どういふものか
夜中、外の鳥が眠に就いた跡でばかり歌を唄ふ。ある夜のこと、一匹の蝙蝠
が來て籠の戸につかまり乍ら、その小鳥に、何故晝のうちは默つてゐて、夜にな
つてから歌ふのだと云つて訊ねた。
「さうするにはわけがあるんですよ」
と小鳥は云つた、「わたしがはじめて鳥さしにつかまつたのは、眞晝間歌を唄つて
ゐるときでした。鳥さしはその聲を聞いてわたしを捕へたのです。それからとい
ふもの、わたしは決してもう、夜中でなければ、歌をうたはないことにしまし
た。」
それを聞いた蝙蝠の云ふやう、
「お前さん、もう捕まつてしまつてから、今さらそんなことをしたつてしやうが
ない。せめてそれだけの氣が捕まる前に注けば、今でもお前さんは自由な身分で
ゐられたかもしれなかつたのさ。」

【訓言】後悔先に立たず。

百姓の娘が牛の乳を搾りに出て、乳を入れた桶を頭にのせたまゝ乳小舎へ歸つて行つた、その途中こんなことを考へ考へ歩いた。

「この桶の中の牛乳に乳皮ができる、それを乳酪に作つて市場へ賣りに出よう。賣つたそのお金でわたしは卵子を澤山買ふのだ、この卵子が孵ると雛兒になる、その雛兒が育つとやがて隨分大きな鷄小舎ができる。それからわたしはその鷄の中をいくらか賣つて、そのお金で新らしい上着を買ふ、それを市場へ着て行くのだ。すると若い男の奴等が驚いたやうな眼をして、わたしの傍へやつて來て、わたしに思ひつかれようとする、けれどわたしはこんな風に反り身になつて、なんにも物なんか云つてやるもんちやない。」

そんなことを言つてゐるうちに、頭に乳桶をのせてゐることなどは、とうの昔忘れてゐたので、つひ言つてゐる言葉に釣られて、思はずほんたうに反りつかへつた。勿論乳桶は直ぐころげ落ちた。中の牛乳は一滴ものこらずこぼれてしまつた、そして女の折角築き上げた空中の樓閣は、たゞ一瞬間に跡もなく消えてしまつた。

【訓言】雛の孵らぬ前に汝の鷄を數ふることなかれ。

124
乳搾りの女と乳桶

駄驢馬と山驢馬

のらくらとそこらを歩きまはつてゐる宿なしの山驢馬が、ある日一頭の駄驢馬の、さもいい心持さうに長々と日向に寢轉んでゐるのに出會ふと、傍に寄つて來て、

「お前さんは仕合せな驢馬だなあ。お前さんの毛並の艶々としてゐる樣子は、どんなに甘い物をたべてゐるかと思ふよ。ほんたうに羨ましい身分だなあ」

と云つた。その後間もなくこの山驢馬は、また先日のおなじみの驢馬に逢つたが、その時は打つて變つて重たい荷物を背負はされ、馬方がうしろからついてゐて、太い棒で尻を叩いては追立てられて行つた。山驢馬はつく〴〵嘆息して、

「いやはや私はもう君を羨まないよ。君は平生食物に不自由をしない代りには、隨分高い代價を拂つてゐるのだなあ」

と云つた。

【訓言】高い價を拂つた割に利益のありがたみの疑はしいことがある。

腹の膨れた狐

お腹の空いた狐が、木の空洞になつた中に、パンと肉の澤山入れてあるのを見附けた、これは羊飼が歸つて來て食べるつもりで、隱して置いたのだか、狐はこの獲物を見つけると咽を鳴らし、涎を垂らし乍ら、狹い狹い隙間から身體を差込むでしたたかに食べあらした。しかし食べられるだけ食べてしまつてからまた外へ出ようとすると、これは〳〵、あんまり食べたものだからお腹が膨れて、元々狹い穴に押し込んだ體がどうしてもぬけない。情ないことになつたと思つて、しきりと哀れつぽい聲を出して吼えたり唸つたりしてゐると、もう一個外の狐が通りかかつて、一體どうしたのだと譯を聞いて、かう云つた。

「まあ、君、外にどうも仕方がない、さうやつてゐるうちにはお腹がこなれて元のやうに細くなるだらう、それまで待つんだね、さうすれば譯なくぬけるよ。」

【訓言】不義の富は身に付かぬ。

獅子が年をとつて、もう自分の力で獲物を捕まへる力がなくなつたので、狡猾にも坐つてゐて獲物を釣る工夫を考へ出した。それは、自分は洞穴の中に引籠つて、病氣のふりをして寢てゐる、そして誰れでも外の動物が、病氣の見舞にと云つて中へ入つてくる奴を捕まへては食べてしまふのだ。かういふ手段にかかつて、幾頭となく獅子のために命を落すものができたが、ある日のことである、一匹の狐がこの洞窟を訪問したとき、どうも樣子がをかしいと思つて、わざと外から聲をかけて御機嫌は如何とたづねた。獅子は、どうもひどくいやな氣分だと云つて、

「でも」

と言葉を改め、

「なんだつて君は外に立つてゐるのだ。まあ中へ入つてくれたまへ。」

といふと、

「それはさうしたいのですが」

と、狐は答へた、

「どうもこゝの足跡がみんな洞の中へ向つたものばかりで洞の外へ出た物が一つも見當りませんからなあ」

と云つた。

と狆とを飼つてゐる人があつた。驢馬は廏の中に住んで、澤山に燕麥と乾草をあてがはれて、驢馬の身分としては不足のない暮らしをしてゐた。狆はまた大層主人に可哀がられて、主人の膝にじやらついたり、前掛の中に寢たり、主人が食事に行くと、きつと何かおいしいものを一品二品持つて歸る、狆は飛びついて迎へるといふ風だつた。驢馬はこれとはちがつていかにも澤山仕事があつた、穀類を車につむで運んだり、臼に入れてついたり、その他何くれと畑の物を背負はされて、歩きまはらなくてはならなかつた。そこでいつしか驢馬は自分のはげしい勞働の生活と、狆の氣樂な怠惰な生活とを引きくらべて、羨ましい心がおこつて來た。到頭或る日、驢馬はつながれてゐる羈絡を引き切つて、主人が食事をしてゐる最中いきなり家の中へ飛び込んだ、そしてそこらをやたら無上に跳ねまはつたりじやれついたり、狆のふざけるとほりの眞似をして、どたどたと不器用に動き廻つては、テエブルをひつくり返すやら、皿小鉢を打ち破すやら大變な騷ぎを

はじめた。それでもまだ滿足せず、此度はいつも狆のするのを見やう見眞似に、主人の膝のうへに飛び上がらうとまでした。召使共は主人が大變な目に逢はうとしてゐるのを見て、手に手に棒切だのステッキだのを持つて來て、驢馬をめちやめちやに叩き伏せ、半死半生の目に逢はせて、やつと廏の中へ追ひ込んだ。そこで驢馬がつくづく嘆じていふには、

「いやはや、何事も自業自得だ。わたしはやはり自分の本來に持つてゐる名譽の地位に滿足して、あんな役にも立たぬ小犬などの馬鹿な道化の眞似をするのではなかつた。」

【訓言】惡い冗談はもう冗談ではない。

樅樹と木苺

樅樹が木苺に向つて自慢をし乍ら、少し馬鹿にした口振で云ふには、
「貴様みたいな小つぼけな奴なんの役にも立ちはしない。ところで、俺を見ろ。俺はどんな種類の事にも役に立つ。とり分け人間が家を作るにはなくつてはならないものなのだぞ。」
しかし木苺はおとなしく云つた。
「なるほど、それは大層結構なことですね。だがまあ今に人間が斧を持つて、あなたを切り倒しにやつて來るまで待つてゐらつしやい、そのときになつたらあなたはつくぐ、俺は樅の樹でゐるより木苺であつたはうがよかつたと考へるにちがひありません。」

【教訓】貧乏はしても苦勞のないはうが、お金を持つていろく面倒なことにわづらはされるより優しである。

鷲と甲蟲

に追はれた兎が、夢中になつて逃げ出したが、もう何處へどう逃げていいか百計つきた。そのときそこに甲蟲が一匹ゐるのを見付けて、兎はこれにも縋らうとした。
そこでいよいよ鷲が追ひついて來たときに、甲蟲は、この兎は自分が保護してゐるのだから、手を付けてはいけないと云つたが、何分甲蟲の姿が小つぼけなので鷲の目にはいらず、構はず兎を喰べてしまつた。これを甲蟲がいつまでも遺恨に思つて、隙さへあれば鷲の巣に目をつけてゐて、鷲が卵を巣に生むと、のそのそ這ひ上が

鷲と甲蟲

つて行つては、卵を轉がしてこはしてしまつた。しまひには鷲も、かう度々卵をこはされてはたまらないと思つて、平生特別の御世話になつてゐるユピテルの大神の許へ出掛けて、何處か安心して卵の生める場所をこしらへて下さいと云つてねだつた。そこで大神は御自分の膝の上に鷲の卵を生むやうに取計らつて下すつた。ところが甲蟲はもう早速にこれを嗅ぎつけて、鷲の卵の大きさに泥の團子を作り、それを持つてとび上がつては大神のお膝の上に落した。大神は泥の塊をごらんになると、思はずこれを拂ひ捨てようとなさるついでに、うつかり忘れて鷲の卵をも一所に拂ひ落してしまつたので、相變らず卵は碎けてしまつた。かういふわけで、さすがの鷲も小さい甲蟲にすつかり降參してしまひ、それからと云ふものは、甲蟲の出る時分に、決して鷲が卵を生まないと云ふことだ。

【訓言】弱い者でも、一念の力は強い。

山羊飼と山羊

飼が、日が暮れたので山羊の群を小屋へ連れ歸らうとすると、そのうちの一匹がふと群を放れて、どうしても一所に歸らうとしなかつた。山羊飼は暫くの間、呼んで見たり、口笛を吹いて見たり色々やつて見たが、山羊はまるで耳にもかけないので、到頭我慢がしきれなくなつて石を打つけると、それが山羊の角に當つて、一本ぽつきと折れてしまつた。山羊飼は途方に暮れて、決してそれを主人に云つてくれるなと山羊に頼んだが、山羊は憎らしい程澄ました顔をして、

「馬鹿だなあお前は。おいらがいくら口をつぐんでゐたところで、折れたこの角が大きな聲で口を利くだらうとは思はないか」と云つた。

＊　＊　＊　＊　＊

飼が牧場に出て山羊の番をしてゐると、野山羊が五六頭其中へ交つて來て一所に草を食べてゐる。日が暮れると山羊飼は、自分の山羊と一所にお客に來た野山羊をも追ひ立てて同じ小家の中へ入れてしまつた。その翌日は大層天氣が惡く、いつもの通り牧場へは出られないので、みんな小屋の中へ入れたまゝ草を食べさせてやつた。それで山羊飼は自分の山羊にはお腹のへらないだけの食

物しかあてがつてはやらなかつたが、お客に來た野山羊には餘るほどの食物をくれてやつた。山羊飼の腹ではかうして澤山恩をかけて置けば、この野山羊もこのまま手許に止まつて自分のものになるだらうと思つたからである。やがて二三日して天氣になつたので、山羊飼はまたいつものやうに山羊を牧場へ連れて行つた。すると山の下まで來るか來ないに、野山羊の群はいきなり飛び出して跡をも見ず、砂を蹴立てて逃げて行つた。これを見た山羊飼はすつかりあてが外れたので怒るまいことか、逃げて行く山羊のうしろから大きな聲でどなりつけた。

「碌でなし奴、あれほど大事にしてやつたのに何と思つて逃げ出すのだ。」

この聲を聞いて、中の一匹がうしろを振りむき、

「なるほど、あなたはわたし共を大層大事にして下さいました。勿體ないほど大事にして下さいました。それだから餘計わたし共は不安心になつたのです。何故と云つてごらんなさい、偶々他處から新しく紛れ込んだわたし共を、元からゐるものより餘計大事にすると云ふのでは、この後又新しく入つて來るものがあれば、そのために此度は私共が捨てられるでせうからねえ」と云ひ乍ら逃げて行つた。

狼を追ふ犬

が狼を狩り立てて、一生懸命走り乍ら、腹の中で思ふには、かうして見ると、いかにも俺は立派なものだな、いかにもこの脚は丈夫なものだな、そしてこの地の上を走るのゝ早いことはどうだ、――

「ところであの狼といふ奴は」

と思はず口に出して獨言を云つた、

「なんといふいくぢのないざまだい。とても俺の相手ぢやない。彼奴自分でもそれを知つてゐるものだから、どうだい、あの逃げることは。」

これを聞いた狼はそのとき振り返つて、

「おい大將、お前さんがこはくつて俺が逃げるのだと思つたら大ちがひだらうぜ。俺はお前の主人がこはいのだよ」

とせゝら笑つた。

獅子と牝牛

肥えて脂づいた牝牛が、家畜の群の中に交つて草を食べてゐるのを見た獅子が猫撫聲で、羊を一匹料理したから奥さん、一所に來て晩食をやりませんかと云つた。牝牛はこの招待に應じて、獅子の洞窟へ行つて見たがフライ鍋だの魚串だの、ソオスだの御馳走の道具ばかり大袈裟に並べ立ててはあるが、肝腎の羊は影も形も見えない。そこで牝牛は早速背中を向けて、どんどん歸つて行かうとした。獅子はこの樣子を見て、肝癪聲に何故歸るのだと詰ると、牝牛はのそりとうしろを振り向いて、かう云つた。

「お支度を一目見て御馳走は牝牛であつて羊でないことが分りましたから。」

134
軍馬と水車屋の主人

長年軍人を乘せて戰場に出た軍馬が、自分ながら老衰したと思つて、奉口先を變へて或る水車小屋に住み込んだ、境遇が變つて見れば、もう今までのやうに勇ましい太皷の拍子に連れて廣い野原を濶歩する樂しみもなくなつた。日がな一日穀物を挽いて汗みづくになつて働かなければならぬ。吾身ながらつくづく吾身が厭になつて、或る時主人にかう云つて愚痴をこぼした。

「いやはや情ないことですよ。わたしも元は立派な主人に使はれた軍馬の身分で、派手な衣裳を着飾り、掛かりきりで世話を燒いてくれる馬丁が始終傍についてゐたものです。それに引きかへ今の有様はどうです、かうと知つたら戰場の奉公を止めて水車小屋なぞへ來るのではなかつたのです。」

その時主人は不愛相に答へて云つた。

「昔の事を悔んだとて始まるかい。浮き沈みのあるのは浮世の常だ。あきらめる外に仕方があるものか。」

135
犬と屠者

屠者がせつせと肉を切つてゐるところへ、一疋の犬がそつと人目を掠めて忍び寄り、そこにあつた羊の心臟を奪つて逃げた。それでやつと屠者も氣がついて、

「此奴太い畜生だ。だが此度からおかげで己れも用心をするぞ」

【訓言】 經驗には價が要る。

狼とその影

が日の暮れ方、或る廣野の上を通ると、ちやうど太陽が沈みかける前で、自分の影が野原の上に長々と射した、それを見て自分ながら影の大きいのにびつくりして、

「俺はこんなに大きな獣だとは自分でも知らなかつた。それほどの俺があの獅子なんぞをこはがつてゐるとは、なんのざまだい。なんの、これでは獸の王になるのは彼奴ではなくて、この俺に違ひない」

とかう獨言を云ひながら、急に反身になり、世の中になんの恐いものをも知らぬやうに、大股に威張りかへつて歩いて行くと、ちやうどその時一匹の獅子がそこに現はれいきなり狼をめがけてただ一口に噛み殺さうとした。狼ははふはふの體で、

「いやはや。目の前にこの立派な事實を見屆けなかつたら、俺は見す見す空想に欺されて命を失くすところだつた。危いこと、危いこと」

と恐毛を振つた。

狼とその影

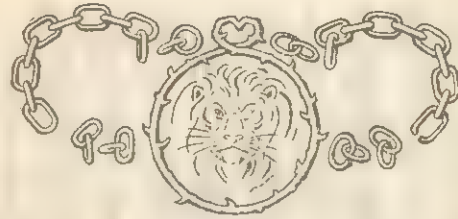
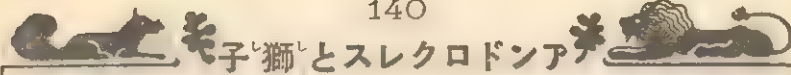
葡萄畑の主人が或る日いつもの通り仕事に出ようと思つて見ると、鍬が見えない。これはてつきり小作の男が盗んだに違ひないと思つて彼等を一人一人きびしく訊問したが、一同口々にそんなものは見たこともありませんといふばかりであつた。それでも主人はその言葉を信用せず、この上は一同打ち揃つて町の氏神様のお社へ行つて、罪のない證を神託に伺つて來よう、といふことになつた。何故村の神様のところへ行かないかと云ふに、田舎の神様だからぼんやりしてゐてわけが分からない、町の神様なら目端が利いてゐるから、きつと盗坊を見現はして下さるにちがひないと思つたからである。ところが一同町の門に入ると、一番先きに耳に入つたのは、何か町の氏神の廟から寶物を盗坊した者があつて、その罪人を捕まへた者には褒美が出ると云つて、町の番太が觸れて歩くのだつた。

「なるほど」とその時鍬を盗まれた男は云つた、「こりやあいつそ早く引返す方が無事らしいわい。この町の神様は現在自分の廟から、寶物を盗んで行つた盗坊さへ見現はすことができないやうでは、とても私の無くなつた鍬の行方を當てることなぞは、出來ない相談らしいからなあ。」

の子が納屋の屋根の上に上ぼつて、茅葺の間に生えてゐる草や芥を拾つて喰べてゐると、屋根の下を一匹の狼が通りかかつた。それを見て、いくら狼でも、とてもこゝまで上がつては來られまいと高を括つたので、いい氣になつて小山羊は、やあい、やあいとからかつた。狼は顔を少し上げて、

「分かつてるよ、お前の云ふことは。だがそこでこのわたしを馬鹿にしてからかつてゐるのはお前ではない、お前の立つてゐるその屋根だといふことを知らないか」

と云つた。

鳩小屋の中の鳩が、時々鳶が高い所から下りて來ては仲間を浚つて行くので弱り切つてしまつた。そこで一同相談の結果、鷹を加勢に頼んで鳩小屋の番をさせることになつた。けれども間もなく、つく〴〵馬鹿なことをしたと後悔しても追つつかなくなつたと云ふわけは、鳶が一年かかつてとるだけよりも餘計な鳩を、鷹はたつた一日で捕まへては喰べるからである。

奴隷のアンドロクレスが殘酷極まつた主人の待遇に居堪れず逃げ出して、追手をよけて沙漠の中へ入つた。食物と寢所を探してうろ〳〵と彷徨ひ歩いた末、一つの洞窟を見付けて中へ入つた。ところが空家だと思つたこの洞窟が實は恐ろしい獅子の巣だつたので、程なく一頭の大獅子がそこに現はれて、可哀さうな駈落者の魂を宙にとばしてしまつた。奴隷はもうとても助からぬものと諦めて半分死んだやうになつてゐると、獅子は却つてしほしほと奴隷の傍へやつて來て、御機嫌をとるやうにしながら哀しい聲を出して、前足を上げて見せる、奴隷がふと見ると蹠の柔かいところに大きな刺がささつてゐる。そこで奴隷は刺をぬいてやつて、自分の着物を裂いて傷を包んでやると、五六日で全然直つた。獅子の喜びは言葉に盡くせないほどで、それからは奴隷を友達のやうにして、仲よく暮らした。そのうちに奴隷はまた人間の仲間が戀ひしくなつたので、獅子に別れを告げて町

へ歸つたが、町へ入ると一所に、奴隷は早速見付けられて、鎖につながれて元の主人に引き渡されてしまつた。主人はこの奴隷を外のものの見せしめにしてやらうといふあくまで邪慳な決心をして、可哀さうに奴隷は、劇場で開かれる猛獸角力の競技會の折、猛獸の中に投り込まれて、餌食にされることになつた。いよいよ當日になると檻を開いて猛獸共は一齊に土俵へ放たれた、その中に一際群をぬいて見るから猛惡な様子をした一頭の巨獅子があつた。やがて不仕合せな奴隷はこの恐ろしい群の中へ追ひ込まれた。しかしこの奴隷の姿を見ると、かの巨獅子は躍るやうに駈けて行つてその脚下に横になり乍ら、舐めてやつたり身體をこすりつけたり、いろいろして、うれしさうな、なつかしさうな様子をして見せたとき、見物の驚きはまあどんなであつたらう、この獅子こそはあの沙漠の洞窟のお友達だつたのである。見物は口々に奴隷の命を助けろといつて罵り立てた。町の長官も猛獸の志を奇特に思つて、獅子も奴隷も二個ながら自由をゆるすことを宣告した。

【訓言】恩に報ゆるは高貴な精神の表徴である。

140
アンドロクレスと獅子

豚と羊

の群が艸を喰べてゐる牧場の中に、一匹の豚が迷ひ込んだ。それを羊飼が捕まへて、屠者の手に引渡さうとすると、豚は一生懸命キャアキャア啼聲を立てて逃げ出さうともがいた。この様子を見て羊が、そんな騒ぎをすることはないと云つてたしなめた。

「羊飼はいつもきまつて俺達をもそんな風にして引張つて行くのだが、それでも俺達は一度だつて騒いだことなぞはありはしない。」

かう羊が云ふと、豚はいまいましさうに、

「ふむ。俺だつて何もさわぎたくはないさ。だが俺とお前達とは事情がまるでちがふのだぞ。お前を引いて行くのはただ毛を切るだけだが、俺を連れて行くのは殺して鹽漬にするためなのだ」

と云つた。

鹿の水鏡

ドレエ畫

142

鹿の水鏡

が喉が渇くので、池の汀に下りて水を飲みながら、ふと澄んだ水の面に寫すともなく自分の姿を寫して見て、自分ながら見事に生えた兩の角に見惚れてゐたが、それに引きかへこの見窄らしい痩脛には本當に厭になつてしまうと、獨言を云つてゐるところを運惡く獅子に見つけられた。さあ大變、此度は今まで馬鹿に

142

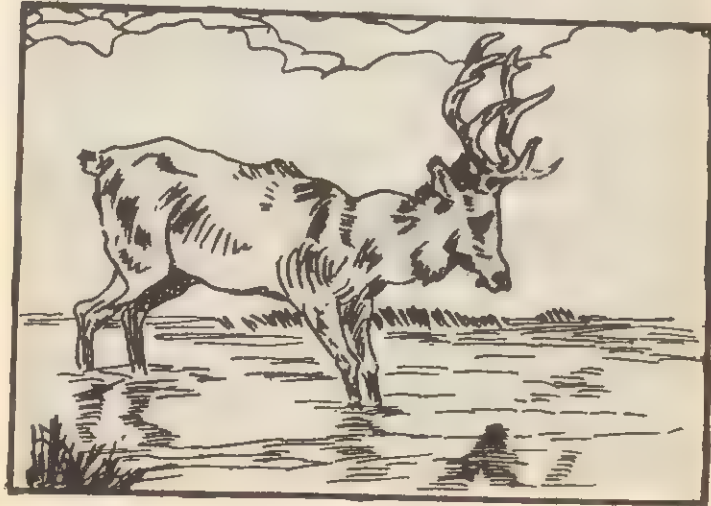
鹿の水鏡

した痩脛にまかせて一生懸命逃げ出したが、そのうち林の中の道にさし掛かると、忽ち樹の枝に角を引つかけて、可哀相に到頭獅子の鋭い牙にかかつてしまつた。そのとき鹿は、

「あゝ情ないことだ」と最後の苦しい息をついて、「わたしは散々惡く云つた脚のおかげで命を助かることができたのに、却つて自慢にした角のためにこの身の破滅を招かうとは」

と嘆いた。

【訓言】一番價値のあるものが一番價値を低く見られることがある。

143 雄辯家と喩言

希臘の名高い雄辯家が、或る時アテネの町の集會で演說をしたが、公衆はこの人の云ふことを一向身に入みて聞いてくれない。そこで辯士はふと演說を止めて、言葉を改め、

「諸君、わたくしはみなさんにイソップの昔話を一つして上げようと思ひます」

と云ふと、聽衆は皆牛變つたやうになつて熱心に耳を立てた。その時辯士は徐ろに

「五穀の神と燕と鰻とが或る時連れ立つて旅に出ました、その途中一つの河に差しかゝりましたが、その河には橋が架つてをりませんでした。しかし燕は飛んで向ふ岸へ渡りました。鰻は泳いで越しました」

と、こゝまで云つて言葉を切ると、

「五穀の神はどうした」

と聽衆の中から五六人こらへ切れなくなつて叫んだものがあつた。

「五穀の神は」と辯士は答へた、「苟も公共の事業について演說をする時には一向耳にも入れず、却つてたわいのないお伽噺を聞きたがるやうなものをば、大層腹を立てゝおいでゞした。」

144 驢馬の荷物

を一頭持つてゐる行商人が、或る日町から鹽を澤山買ひ込んで、驢馬の背に耐へられるだけの荷物にして背負はせた。家へかへる途中、小川の流をわたるとき、驢馬は過つて跌いて水の中にころがつた。それで鹽はすつかり水にひたつて、大抵は溶けて流れてしまつたので、再び驢馬が起き上がつたときには背中の荷はげつそり輕くなつてゐた。けれども持主は、これに懲りてそのまゝ家へ歸るかと思ふと、どうしてまたまた驢馬を町へ追つ立てて行つて、流れてしまつただけの鹽をもう一度買ひ足して荷馱につけ、元の道へと引つ返した。ところが驢馬は先刻で味をしめたので、やがて例の流をわたる段になると、此度はわざと横倒しに轉げて、再ひ起き上がると、もう荷物はすつかり輕くなつてゐた。しかし、このときは持主も驢馬の計略を悟つたので、忌々しがり、またまた、驢馬を町ま

狐と鴉

驢馬の荷物

で追つ立てて行き、此度は海綿を澤山買込んで、驢馬の背中に山のやうに背負はせた。やがて例の流にかゝると、驢馬はまた横倒しに轉げた。けれども此度は、海綿がおびただしく水を吸込んでしまつたので、やがて再び驢馬が起き上がつて見ると、こは如何に、背中の荷は前よりも一層重くなつてゐた。

【金言】 二度と同じ手では行かぬ。

145

鴉と狐

枝に棲つた鴉君、
啣えた乾酪のうまさうな
匂ひに[illegible]をぴよこすかと
誘はれて來た狐さん
いつものお世辭出るまゝに
「おやまあお早う、鴉さん
いつも見事な羽ですね、
黑びらうどの肌ざはり
光りかゞやく美しさ、
これで立派なお聲をば
森の女王の鴉さん、
一つ聞かせて下さいな。」

145 鴉と狐

馬鹿な鴉はだまされて、
一聲高くカアと啼く
大きな嘴からほろほろと
落ちた乾酪を早速に
狐は拾つて嘲み顏、
「分かりましたか、自惚の
人を煽てて世を渡る
追從者の恐ろしい
道理が分かれば鴉さん
乾酪位は廉いもの。」
聞くほど口惜しい馬鹿鴉
泣いて塒へ飛んで行く。

〔ラ・フォンテエヌに依る〕

犬と獣の皮

が五六匹、餓えきつて凹んだ眼をきよときよと光せながら河の縁を通り掛かると、水の中に獣の皮の漬けてあるのを見つけたが、水が深くつて口が屆かない。そこで河の水を飲み干して、淺瀨にして置いて、皮を取らうと云ふので、一同首を水の中に突つ込んでがぶがぶ吞みはじめた。けれども水は一向淺瀨にならぬうちに、犬のお腹が水ぶくれにふくれて到頭破れてしまつた。

【訓言】出來ることと出來ぬことを分別せよ。

羊飼の童と狼

羊飼の童と狼

飼の子供が或る村の近くの野原で羊の番をしてゐたが、ふと、一番狼が羊を取りに來たといつて、村の者をおどかしてやらうと、惡いことを思ひつき、大きな聲を出して、

「狼だ、狼だ」と呼び立てた。そして村の人達がびつくり仰天足を空にして駈けつけて來るのを見て、大きに御苦勞樣、あははははと笑つておもしろがるのであつた。かういふことを二度三度とやるうちに、いつ行つても狼なぞはゐない、村の人達もすつかり子供に欺されたといふことが分つかてしまつた。

羊飼の童と狼

到頭しかし、本物の狼がやつて來た。この時は子供も一生懸命「狼だ。狼だ」と怒鳴り立てたが、村の人ももういつものおどかしに馴れきつてゐるので、又かとばかり耳にもとめなかつた。おかげで狼は自由自在、片つ端から羊の御馳走に舌鼓を打つて、悠々と引き上げた。

【訓言】虚吐きがたまに眞實を語つても人は信じてくれぬ。

牝鹿が、今はもう大分大きくなつて、力も強くなつた仔鹿に向つて、

「お前はまあ天然にそんな立派な身體と、丈夫な角を二本までも貰つて生まれたくせに、獵犬の姿を見さへすればあはてゝ逃げ出すなんて、ほんたうに憶病でしかたがないよ」

と、云つてゐるところへ、大分遠方で獸を追出す勢子の聲が聞えた。すると牝鹿は、

「お前はここにじつとしておいで。わたしのことはおかまひでないよ」

と云ふが早いか、長い脛のつづく限り一生懸命駈け出して行つた。

* * * * * *

の子が獵犬に追はれて逃げて行く途中に洞穴があつたので、この中に隠れれば大丈夫と中へ入つて行くと、不仕合はせなことには、そこに一頭の獅子がゐて、鹿はわけもなくその餌食にされてしまつた。

「ああなんといふ不幸な身の上だらう、獵犬の勢の届かないところまで逃げのびたと思へば獅子の爪にかゝるとは」

と鹿は苦しい聲で叫んだ。

百姓と狐

が毎晩裏庭に忍んで來ては、鷄を取つて行くので、百姓も業腹でたまらず、罠を仕掛けて狐を捕へた。憎さも憎し、この復讐には一番ひどいめにあはして呉れようと云ふので、狐の尻尾に麻屑を固めて縛り着け、それに火を付けて放してやつた。けれども運の惡い時には惡いもので、狐は苦しまぎれ、背中に火をしよつたまゝ、もうその時すつかり熟り切つて刈るばかりになつてゐる穀物の畑の上を、まつしぐらに飛んで行つた。忽ち畑には一面に火が移つて、作物はすつかり燒けてしまつた、そして百姓はその年の收穫を殘らず無くしてしまつた。

【諺言】 復讐は双刄の劍だ。

お婆さんと醫者

お婆さんが眼病をわづらつて、盲目同樣になつてしまつたので、醫者と相談の上證人を立てゝ、若し眼がなほつたら高い藥代を拂ふし、なほらなかつたら一切、代はとらないといふ約束をした。そこで醫者はせつせと療治にとりかかつたが、毎度療治に行く度毎に、婆さんの家の品物を一つづつさらつて行くので、しまひに婆さんの眼がすつかりなほつた頃には、家の中に大抵品物はなくなつてゐた。婆さんは眼が明いて見ると家中ががらがらになつてゐるのを見て、これでは醫者に藥代を拂ふことはできぬと言ひ出した。それで、醫者も困つて裁判所に訴へた。裁判所へ呼び出されると、婆さんはすらすらと辯解して云ふには、「相手方の申立てた通りに事實のちがひはありません。わたくしはあの人が眼をなほしてくれたら藥代を拂ふし、しくじつたら一文も拂はぬといふ約束をいたしました。それであの人はわたくしの眼を直したと申し立てゝ居りますが、どう致して、わたくしは前方よりも尙々眼が見えなくなりました、その證據には、前には却つていくらかございました道具類や何かがよく分かりましたのが、只今ではいくら眼が直つたと云はれましても何んにも見えなくなつてしまひましたから。」

飼が或る日海岸へ出て羊を放して遊ばせてゐると、折柄春の海はおだやかに晴れわたつて、紺青をたたえた水の面がうららかに日をうけて光つてゐた。それを見るとぞくぞくするほど羊飼の心は浮き立つて來て、もう羊も何も要らない、海だ、海だと、氣ちがひのやうに持つてゐた羊をのこらず賣つてしまひ、そのお金で棗を買つて船に一抔積んで、海上貿易に出かけた。すると運わるく途中で大きな時化を食つて、船は一寸も進まないので、泣く〳〵積荷のこらず海に投げ込み、空船に命一つをのせてはふはふの體で歸つて來た。それからと云ふものは海濱に立つて穩かな海のけしきに見とれてゐる人を見る度毎に、

「お前さん欺されてはいけない。あんなやさしさうな様子を作りやがつて、また人をだまして棗をとらうといふんだ」

と云つた、

【訓言】經驗は良い教師。

—ドレエ畫—

蟻と蠅とが、どつちが身分が高いと云つて、お互ひに劣けじと爭つた。蠅がまづ云ふには、

「とてもわたしとお前とは持つて生まれた位からして比べものにはならない。神樣に備物が上がる、第一にそれの毒味をするのはわたしぢやないか。祭壇はわたしが常住の住居、ひろい神殿はわたしの家だ。わたしは王樣の嚴かな冠の上にもとまれば、お姫樣の淸らかな唇にも觸れる。しかもわたしは少しも働かない、それでゐて毎日世界第一の美味に飽きてゐるのだ。どうだね、田舍の先生、お前なんかはそんな仕合はせを夢にも見たことは無いだらう。」

蟻はその時答へた。

「成る程神樣の御膳を一所に頂く、といふことはこの上もない立派なことに違ひない、だがそれはお客樣として招待された上の話、他所の紛れ者が來たと云つて嫌はれるのではつまらない。王樣の冠の、お姫樣の唇のと、えらさうなことをお前さんは云ふが、わたしがかうして冬の支度に穀物を貯へていつまでも困らぬ用

152
蠅と蟻

意のしてあるとはちがつて、お前さんは年中壁のまはりをうろついて、汚いものの上にたかつてゐるのではないか 祭壇が常住の住居だと、大きなことを云ひなさんな、どうかするとうるさがられて追ひ拂はれてゐるではないか。お前さんは働かない、さうさ、それだから入用ができて來ても、いつも無一物で困るのぢやないか、當然隱すべきことをまで却つて自慢にしてゐるとんだ恥しらずめ。夏の間こそ元氣で飛び廻つてわたし達の仕事の邪魔をするが、冬になるとぐうの音も出ないぢやないか、お前さんが寒空に凍えてみじめなのたれ死をする時、わたし達はあの溫い穴の中で、樂しい正月をするのだよ。いい氣味いい氣味。どうだ、これで少しは高慢の鼻が折れたらう。あははは。」

この喩言の教へは、さした手柄もないのに、空しい虛名に浮かされてゐるものと、眞實に德を積んで堅い地位を築き上げたものとを、比べて見せたところに在る。

（ファイドルスに依る）

蛙の藪醫者

が或る時沼の中の家からのそのそ這ひ上がつて、拙者こそは東西の藥方に精通し、萬病の療治に妙を得た名醫でござると云つて、そこらぢゆうに大風呂敷をひろげた。この大風呂敷におどかされた仲間の中に一匹の狐がゐて、大きな聲でかう云つた。

「おやおや、お前さんがお醫者樣をやるのかね、お前さん、自分の跛ひいた足も、かさぶただらけの身の皮も滿足に直すことも出來ないで、他人の病氣をどうして直すつもりだね。馬鹿々々しい。」

【訓言】醫者はまづ自分の病から直せ。

爺さんと死神

貧乏な爺さんが森へ行つて薪を束に伐つて家へ背負つて歸つた。何しろ家までは仲々の遠路なので、半分も行かないうちに爺さん、へとへとに疲れてしまつた。薪の荷を地面に下して爺さんは思はず溜息をつきながら、死神の名を呼んで、こんなに苦勞して生きてゐる位ならいつそ死んだ方がましですと愚痴を云つた、その言葉が終るか終らないに、これはしたり目の前に恐ろしい形相をした死神が現はれて、爺さんに向ひ、望の通り直ぐ連れて行つてやるから、支度をしろと呼び立てた。爺さんは、びつくりしながら氣を取り直し「旦那樣、とても御深切序でにどうかこの薪を一所に手傳つて家まで持つて行つて、わたくしの命はお助けなすつて下さいまし。」

が羊の許へ使者を立てて、今後、羊の番犬を卽坐に死刑に處する條件で、永久の平和を結ばうと申込んだ。馬鹿な羊達は何の考もなくこの申込に應じようとしたが、その時一匹の牡羊が、年の功で知慧もすぐれてゐるものだから、これを遮つて、狼の使者に向ひ、

「一體どうしてわたし共があなた方と平和に生活して行けるでせう。さうぢやありませんか、このとほり、番犬共が手近にゐてわたし達を保護してゐて吳れてさへわたし共はあなた方の殘酷な攻擊を免れることができないのではありませんか」

と云つて斷つた。

* * * * *

が犬に追はれて、ひどく咬みつかれ、しばらくは死んだやうになつて寢て居た。そのうちにやつと元氣が出て來ると、大變空腹を感じて來たので、通りがかりの羊を呼びとめてかう云つた。

「おい後生だからそこらの川へ行つて水を汲んで來てくれないか、何か飲むものさへ貰つたら、そのうちどうにかして肉も口に入るだらうと思ふから。」

155
羊と狼

けれど羊はそんな手にのるやうな馬鹿ではなかつた。

「どうもわたくしが水を持て來て上げたら、その上であなたは早速肉の御料理に取り掛かるお積りのやうですね。さようなら」と云ひながら行つてしまつた。

* * * * *

の子供が狼に追ひつめられて、お寺の中に逃込んだ。狼はどうかして小羊を外へ誘ひ出さうと思つて、

「早く出て來ないと坊主に捕まつて、祭壇の犧牲に上げられてしまふぞ」

とおどかした。小羊はそれを聞いて、

「有難う。ですが私はここにゐようと思ひます。ここにゐればいつか神樣の犧牲に上げられることがあつても、狼なんぞに喰はれるよりは優しですからねえ」と云つた。

偏盲の鹿

偏盲の鹿が、濱に出て餌を拾つてゐた。滿足の方の眼を陸の方へ向けて、惡い方の眼を海の方へ向けて、こちらからは大丈夫危險の襲ふ氣遣ひはないと安心してゐた。けれども災難は何處から來るか分からないもので、ちやうどその時濱邊を漕いでゐた船頭が、この鹿を見付けて矢を射たのが、あやまたず鹿の胴中に中つて、鹿はひどい痛手を負つた。その時最後の苦しい息をつきながら、鹿はかう獨り言を云つた。

「俺は情ない馬鹿だつた。俺は陸の方ばかり用心してゐたが、なんにも危險はやつて來なかつた。それに引きかへ、海の方は大丈夫と安心してゐたのに、却つてそちらから俺の破滅が來るとは。」

【訓言】不幸は時として意外の方角から來る。

悲哀の分け前

萬物の主ユピテルの大神が諸の神達にそれ〳〵の權利を分けてやつたときに、どうした拍子か、悲哀の神だけがその席に居合はせなかつた。そして外の神達が一同に分配をうけて歸つて行つた跡へ、悲哀の神がひよつこり出て來て、わたしにも權利を分けて下さいと云つて請んだ。けれどその時大神は有りつたけのものを出してやつた跡なので、どうすることもできず困りきつてしまつた。しかしやつとのことで思ひついて、死人のために流した涙を悲哀の神にやることにした。これで悲哀の神も他の神達と同様の分け前にあづかることになつた。

【訓言】死人のための涙が眞實の涙。

蚤と人間

蚤が人間を刺した、二度刺し、三度刺しするうちに、人間も我慢が出來なくなつて、蚤取眼で探した末、到頭うまく捕へてしまつた。捕へた蚤を人間は拇指と人指指の間に摘んで、云つた――といふよりは、何しろひどい怒り方だつたから――殆んど怒鳴りつけた。

「貴様何んだ、そんなちつぽけなけちな風をして、俺の體を一體何だと思つてゐるのだ。」

蚤は、びく／＼ふるへながら、細い哀れな聲を出して、

「ああ旦那様、どうか勘忍して下さいまし。どうか命だけはお助けなすつて下さいまし。わたくしはこのとほりのけちな奴で、あなた様に何も大したわるいことをいたさう筈がございません。」

けれども人間は笑つてとりあはず、

「俺は直ぐに貴様の命を取つてやる。他人に與へた害はどんなに小さいにせよ、惡い奴は必らず亡ぼしてしまはなくつてはならないのだ」と云つた。

【訓言】 惡人に慈悲をかけるのはむだだ。

蚤と人間

兎の耳

或る時獅子の王様が、牡鹿の角で怪我をして、
逆鱗の餘り、これからは、角をかついだ獸ども
王國の住居禁制と、嚴しい御布令を出しました。
牛や羚羊、羊、山羊、殊さら牡鹿は足早く
こりや大變と逃げて行く、中に兎は生れつき
憶病者の習ひとて、月の光に我れとわが
姿をそつと映し見て、慴え上がつて思ふやう、
これでは角と誤へて、捕へられたらどうしよう。
兎はその時蟋蟀に、「君とももはやお別れだ、
駝鳥の首には及ばねど、こんなに耳が長くては
獅子の王國には居られない。」蟋蟀聞いて不審がり
「兎の耳の長いのは、今はじまつたことぢやない」
「否々耳では通らない、角だと他人は云ふだらう、
それを耳だと言ひ張れば、癲狂院に送られる。」

〔ラ・フォンテエヌに依る〕

鼠と蛙と鳶

と蛙とが、友達になつたが、鼠は陸の上の動物、蛙は陸の上でも水の中でも自由自在の動物といふので、どうも甘く道連になれない。そこで二個が決して離れないやうに、蛙は糸片で自分の脚を縛り、鼠も一所に結付けてしまつた。でも二個が陸の上にゐるうちは萬事好都合に運んだが、やがて池の縁まで來ると、蛙は行成鼠諸共ぼちやんと水の中へ飛込んでしまつた。そしてやたらに泳ぎ廻つて大浮れに浮れて歌を唄つたり踊を躍つたりした。可哀さうなのは鼠で、蛙のお蔭でチュウともいはず土左衛門になつて水の上を浮いてゐた。それを高い所から見付けた鳶がさつと下りて鼠を攫つて行つた。勿論蛙も御相伴に引上げられて喰はれた。

孔雀が、自分の聲が鶯のやうに美しくないことを不平に思つて、ユノオの女神に苦情を申し立てた。

「鶯の歌はどんな鳥でも羨まないものはございません。それに引きかへ、わたくしが何か一言でも云はうものなら、みんなの笑ひものにされるばかりです」

と孔雀は云つた。

女神はそのとき言葉靜かになだめて、

「なるほどお前には歌を歌ふ能はないが、その代り體の美しいことでは誰れも及ぶものはないのだよ。お前の頭は寶石のやうに光り輝いてゐるし、お前の尻尾は眼の眩むやうな美しい錦襴模様を織り出してゐるではないか」と諭された。

それでも孔雀はやはり强情を張つて、

「いくら美しくつても、わたくしのやうな惡い聲ではなんにもなりは致しません」と分からないことを言ひ募るので、さすがの女神もむつとされて、言葉も荒しく、

「誰も彼も持つて生まれた運がある。例へば、お前には美しい器量、鷲には强い

力、鶯には朗かな聲といふやうに、それぞれ身分に應じて運を授けられてゐるのだ。それをお前一人、不服をいふ奴があるものか。もうこの上苦情をいふことはなりません。今のお前の願ひを叶へてやれば、此度はまた別の不服を申立てるに相違はない」と叱られた。

百姓家の獅子

が百姓家に飛び込むだ。百姓は獅子を捕へるつもりで戸を閉めきつた。獅子は逃道が塞がつてしまつたと見ると、やけになつてそこにゐた羊に飛びついて咬殺してしまつた。それから牡牛をやつゝけた。百姓は此度は自分の身體が劍呑になつたので、あはてゝ門を開けたから、獅子は早速驅けて行つた。獅子が出て行つてしまふと百姓はがつかりした顔をして、羊と牛を亡くした愚痴を云つた。初めから始終の様子を見てゐた百姓の女房はそのときかう云つた。

「お氣の毒だがお前さんみんな自業自得だよ。何故といつて物に積つても分かりさうなものぢやないか、いつもは遠方で獅子の吼える聲を聞いてさへ胴震ひのでる位のお前さんが、かりにも自分と一所に獅子を門の中へ閉め込まうなとゝは、飛んでもない思ひ付きをしたものさねえ。」

蟻

蟻といふ虫も昔は人間で、土を耕やして今日の生活を立てゝゐた。けれどもどういふものか生まれつき慾が深く自分で働いて作つたゞけでは滿足せず、始終近所の畑を羨ましさうにながめてゐて、機會さへあれば作物を盗坊して、自分の蓄への中へしまひ込んだ。到頭あんまりの慾張にユピテルの大神も愛相をつかされ、人間の姿を變へて蟻にしてしまつた。けれども形はいかに變つても持つてうまれた精神は直らぬものと見えて、今日までも相變らず穀物畑の中を這ひずり廻つて、他人の作つた穀粒を集めてはせつせと自分の穴に引つ込んでゐるのである。

【訓言】 盗坊をいくら罰してもその天性は直らぬ。

狼と山羊

狼と山羊

がぶらく歩いてゐると、頭の上で山羊の啼く聲がする。顔を上げて見ると、險しい切崖の天邊のちよぼくと牧草の生えてゐるところに、一匹の山羊が草をたべてゐる。とてもそこまで上がつて行く望みはないので、欺して下へ下さうと思ひ、猫撫で聲を作つて、

「奥さん、まああなたはとんでもないあぶないところに上がつておいでゞすね。そんなところは止してこゝへ下りていらつしやい。もつとずつと甘いものが澤山ありますよ」

と呼び立てた。山羊は何を狼が云ふかといふやうな顔をして、

「わたしの今喰べてゐる草がまづからうが甘からうが、あなたのかゝはつたことではないでせう。それよりかあなたのほんたうの御用は、わたしを食べることでせう」

と云つた。

兄と妹

或る人が男の兒と女の兒と二人の子供を持つてゐた。男の兒の方の器量善しには似合はず女の兒の方は至つて不器量だつた。或る日二人の兄妹は母親の部屋で遊んでゐるうち、ふと何氣なくはじめて鏡といふものを見た。男の兒は自分の器量の美しいのを見て大得意で妹に向つて威張りちらしたが、それに引きかへ妹の方ははじめて自分の顔の醜いのを見つけて口惜し泣きに泣き出した。そして父親の部屋へ驅け込んで行つて、兄さんがいぢめていけないと云ひつけた。その時父親はにつこり笑つて、兄弟を接吻しながらかう云つた。

「お前達二人はこの後この鏡を役に立つやうに使はなければならないよ。坊や、お前は顔が美しいと同じやうに、心も美しく持たなければなりません。それから孃や、お前は器量が惡いかはりには、氣立を美しくしてその償ひをするやうに心掛けねばならないのですよ。」

蛇と鷲

が高い空の上からさつと蛇の上に舞ひ下りて、その體を爪に包んで持つて行つて悠々食べようとした。ところが蛇も去る者、早くも體をすると鷲の羽の上から巻きつけて、忽ちのうちに羽がひしめを食はしたから、そこで二個の動物の間に命のとりやりの大爭鬪が始まつた。この場の様子を見てゐた百姓が、その時近くへ寄つて來て、やつとのことで蛇の體を引きはなして鷲を助けてやつた。蛇は鷲の味方をされた口惜しまぎれに、百姓の持つてゐた角盃に毒を引つかけて行つた。今の大仕事で百姓もすつかり大汗をかいたので、咽のかはくまゝに角盃を出して水をのまうとしたが、これを知つた鷲は早速に百姓の手から盃を叩き落して、中の水を雫もあまさず地面の上へこぼしてしまつた。

【訓言】善には善の報ひがある。

百姓と幸運の神

百姓が或る日畑を耕きかへしてゐると、金貨の一杯詰まつた壺が鍬の尖にかかつた、百姓は思はぬ拾物をして大喜び、それからは毎日土地の女神の洞に、御禮の供物をあげることにした。幸運の神はこの體を見て腹を立てて、百姓のところへ小言を云ひに來た。

「やい男、貴樣は何と思つて、折角わしが貴樣にくれやつた幸運の禮を、見當ちがひな土地の神に持つて行つたのだ。貴樣は幸運を掘りあてながらわしに感謝することを忘れたか。」

植木屋と鍛冶屋の犬

植木屋の飼犬が過つて深い井戸の中に落ちた。この井戸は植木屋がいつもバケツを繩の先に垂らしては水を掬上げて庭の植木に灑いでゐたので、その時もバケツを下して犬を救はうとしたが甘く行かない。自身井戸の底へ下りて行つて引上げてやらうとすると、どう思違へたか犬は主人が自分を水の中へ陷めて、殺すのだと思つて、いきなり噛みついた。主人は驚いて犬のことは諦めて外へ出た、そして溜息をつきながら云ふやう、

「あんなに覺悟をきめて身投をしたものを無理に助けようとしたのが惡かつた」

* * * * *

鍛冶屋が小犬を飼つてゐたが、此犬、主人がせつせと仕事をしてゐる時にはぐうぐう眠つてゐて、御飯時になるときつと大きな眼玉を明いてゐる。そこで鍛冶屋も憎らしくなつて、或日骨を投げてやりながらわざと癇癪聲を振立てて

「貴樣のやうな碌でなしののらくら犬は見たことがないぞ。俺が鐵砧を叩いてトンカンやつてゐる最中は、とぐろを卷いて寢てゐやがつて、俺が一寸でも仕事を休めて何か口に頰張りでもすると、もうすぐ飛び起きて來やがる」と叱つた。

がもう老衰して洞窟の中に閉ぢ籠つたまゝどつと病の床に就いてゐると、いろ〳〵の獸が代る代るお見舞にやつて來たが、たゞ一匹狐だけはちつとも顔を見せなかつた。狐に舊い怨のある狼が、これこそ狐の奴をとつちめる好機會だと喜んで、獅子に向つて狐の來ないことに就き、いろ〳〵惡し樣に讒言してかう云つた。

「陛下、わたくし共この通り一同打ちそろつて御病氣の御見舞に上がることでございますが、たゞ一つ不都合千萬なのはあの狐の奴で、今に一度も姿を見せませんのは、陛下の御病がよくならうが惡くならうが一向氣にもかけぬのでございませう。」

さう云つてゐるところへちやうど狐がやつて來たが、この狼の云つたお終ひの文句だけをちらと小耳に引つ挿んだ。獅子は狐の姿を見ると、今も今とて噂のあつた跡と云ひ、以ての外の不機嫌でどなりつけたが、狐はしづかになだめながら、まづ御無沙汰の申譯を聞いて下さいと云つて、

「どういたしまして、誰がなんと申しましてもわたくしほど心底から陛下の御病

――ドレエ畫――

氣を心配いたしてをるものはございませぬ。わたくしは只今まで醫者といふ醫者の許を駈け歩いて陛下のために、最上のお藥を求めてをつたのでございます」

と云つた。

「では何かいい藥を求めて來たか」

と獅子は重ねてたづねると、

「えゝ、えゝ、無類の藥が見付かりました」と狐は落ち着いて云つて、獅子のせき立つ色目を見ながら、そこにゐた狼を指して、

「それその藥と申すのは、あれでございます。さあ陛下早く狼奴の生皮を剝いで、まだ温味のございますうちに、その皮でしつかり體をお巻き遊ばせ。御病氣は即坐に平癒です。」

これを聞くと獅子はいきなり前足をあげて狼を撲り殺し、早速狐の勸告通りにした。けれども狐は腹の中で笑ひながらひとり言に、

「惡い意地をつけやがつた報ひさ」と云つた。

【訓言】 惡には惡の報ひがある。

蜂が蛇の頭の上に止まつて、つゞけざまに二三度したゝかに刺した上に、いつまでもしつゝこく噛りついて離れない。あまりの痛さに蛇は狂氣のやうになり、どうにかしてこの蜂を追ひ退けようといろ〳〵にやつて見たが一向手答がなかつた。到頭蛇もやけくそになつてしまひ、

「かうなつては俺の命と釣り替へにしてもきつと貴様を殺してやるぞ」

とどなりながら、蜂を載せたまゝそこを通りかゝつた荷車の下にいきなり首をつゝ込んだからたまらない、蜂も蛇も二個ながらめちやめちやに壓潰されてしまつた。

【訓言】 命を捨てゝかゝればどんなことでもできる。

蛙と野牛

上々の身分のものが爭へば
下々の身分のものが難儀する。——
沼で野牛が闘ふを——
蛙が啖いて云ふやうは、
「そりやこそ珍事出來ぞ。」
外の蛙はふしぎがり、
「何が大變、あれこそは
向ふ河岸の喧嘩にて
吾等の知つたことぢやない。」
「いや〳〵それは大ちがひ、
二匹の中の一匹は
必らず敗けて逃げて來る。
癇癪まぎれに頭から
踏み潰されては耐らない。」〔ファイドルスに依る〕

無頼漢と神託

無頼漢が友達と賭をして、デルフォイの神廟で神託を取つて見よう、そしてどんな神託が出ても、きつとそれを當らなくして見せようと約束した。そこでこの無頼漢は愈試驗をする當日に、前方から小鳥を一羽仕入れ、外套のひだの下に隱して神廟に赴いた。この男の腹ではこの小鳥が生きてゐるか、死んでゐるか神樣に伺ひを立てゝ見て、それでもし神託が「死んでゐる」と云へば、小鳥を生きたまゝで出す、「生きてゐる」といへば、そつと頸を捻つて出すのであつたが、神託はさすがにこの男の上手を越してかう現はれた。

「他所の男よ、汝の手に握れるものゝ生死は共に、汝自身の心に在らむ。」

牡の山羊と髯

ユピテルの大神が、牝の山羊のねだるまゝに、腮の下に髯をのばすことを許してやると、牡の山羊が承知せず、これこそ理由なく自分達の權利を侵し、威嚴を損ふものだと云つて抗議を申立てた。ところが大神はしづかに彼等を諭して云はれるやうは、

「一摑の髪の毛ぐらゐどうでもいいではないか。牝どもが欲しいといふのならくれてやるがよい。くれてやつたところで牝共が力業でお前達に叶ふわけはないのだからな。」

車力とヘルクレス

車力が重荷を積んだ車を曳いて泥濘の路に差し掛かると、轍が深く泥の中にはまつて、一進も三進も行かなくなつたので、ぼんやり途方にくれて腕を組んだまゝ、大力のヘルクレス神様のお助けを呼むでゐた。そのとき神は姿を現はして、懇ろに諭されるやう、

「これ馬方よ、まづ其方の肩に一杯の力をこめて車を押して、馬にも鞭をくれて見よ。その上でわしの名を呼ぶがよい。其方自身に指一本動かして見ようともしないで、いくらヘルクレスの名を呼んでも、また外々の神の名を呼んでも、誰れが言ふことを肯くものか。」

【訓言】天は自ら助くるものを助く。

175

馬と狼

馬が牧場で草を喰べてゐると、彼方から何より大敵の狼のやつてくるのが目に入つた。これは大變だと思つたが、馬は早速の頓智で急に跛の様子をして、さも苦しさうにひよこりひよこり歩き出した。やがて狼が傍までやつて來て、どうしてそんなに跛を引くのだと云つて聞くので、ここぞと馬は悲しさうに、實は蕀の垣を越すときに、足の裏に踏み拔きをして痛くつて痛くつて歩けません、どうか御慈悲にこの刺を拔いて下さいと云つて、

「このまゝではあなたに喰べられても、きつと刺が喉へささりますよ」

と脅かした。さすがの狼もうつかり釣り込まれて刺を拔いてやる氣になり、どれどれと寄つてくるところを、ここぞと馬はいきなり前足をあげて、力一杯したたかに狼の口を蹴上げたから、狼の齒はほきりと折れてしまつた。それを見向きもせず、馬は一目散にとつとと駈けて行つてしまつた。やつと口が利けるやうになつてから、狼は獨り言に唸つて云ふには、

「罰が當つたのだ。俺は親父から馬を喰殺せと云つて敎へられた。その本分を忘れて、却つて馬のお醫者にならうなぞとしたのが惡いのだ。」

175

馬と狼

ドレエ畫

驢馬と買客

或る人が驢馬を一匹買ひたいと思つて市場へ出掛けて見たが、よささうなのが一匹見つかつたので、その持主に向ひ、ためしに少し連れて行つて樣子が見たいから貸してくれと云つて賴んだ。さて家へ歸るとこの驢馬を厩へ連れて放して見たが、新入の驢馬はそこらをずらりと見わたすと、とことこと歩いて行つて、中でも一番なまけもので大食ひな驢馬の傍へ行つて腰を落ちつけた。この有樣を見た主人は、もう早速その驢馬に手綱をかけて引出し、またまた元の持主の所へ連れて戻つた。持主はあんまり早く歸つて來たのでびつくりして、

「何んですね、もう試驗は濟んだのですかい」

とたづねると、その人は、

「この驢馬がどんな奴だといふことは、此奴の擇んだ友達の人柄で分かりますのさ」

と答へた。

【訓言】人はその擇ぶ友達に依つて知れる。

狐と蕀

が生籬を通りぬけようとして足を取られてひつくりかへりさうになつたので、そこの蕀に捉まつて體を支へた。しかし捉まつたものが蕀だから勿論小つぴどく引つかかれたので、狐は腹を立つて蕀にむかひ、

「俺はお前に助けて貰はうと思つたのだ。それに何だ、そんなひどい目にあはせるとは。これではいつそひつくり返つた方が怪我が少なかつた」

と愚痴を並べると、蕀は皆まで云はせず、

「全體お前さんがわたしのやうなものに捉まらうとするのがどうかしてゐるのだ。一體他人に捉まるのはわたしの天性ぢやないか」

と云つた。

【訓言】意氣地の無い友達に賴るとあべこべに賴れる。

守錢奴

守錢奴が持つてゐるだけの品物をのこらず賣つたその金と、蓄へてゐる金とをのこらず溶して黄金の塊にして、人知れず庭の隅に埋めた。そして毎日毎夜その顔を見に行つては、何時もそこに居ずくまつてほればれと見つめてゐることも度々あつた。それを召使の一人が、主人は毎日何をしに庭へ出かけるのだらうと不審に思つて見張つてゐる間に、到頭秘密を發見してしまつた。そこで何がな好機會をと覗ひながら、到頭或る夜ひそかに土をほり返してさしもの大金塊を盜み出してしまつた。その翌日いつもの通り守錢奴は庭へ行つて見ると、大事な大事な金塊が奇麗に紛失してゐた。さあ大變、守錢奴は一時に天も地もひつくり返つたやうになつて、髮を

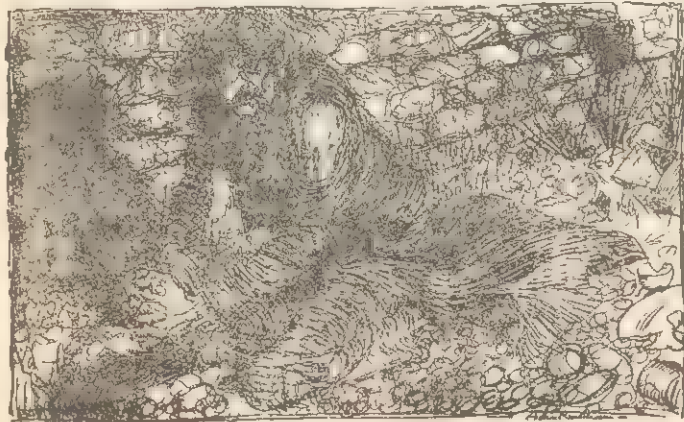
守錢奴

掻きむしるやら、聲をあげて唸るやら大さわぎをしてゐると、それを隣の人が見てどうしたわけだと云つて聞いた。守錢奴は口惜しさうに、寶物の亡くなつた次第を話すと、その人は笑ひ乍ら、

「お前さんまあそんなに口惜しがらなくてもいいさ。代りに煉瓦の塊を穴の中へ入れて毎日毎晩ながめておいでなさい。それでもちつとも變つたことはないでせう、どうせ黄金で持つてゐたところが、あなたのためには石瓦同様、何のお役にも立たないのだらうから」

と云つた。

【訓言】使はぬ寶は無いも同然。

醫者と病人

病人が醫者の見舞をうけて、どんな容體ですかと聞かれた。
「先生、大分よろしいやうですが大變に汗が出て困ります」
と病人は答へた。醫者はうなづいて、
「ははあ、それはよくなる徴候です」と云つた。
その次に見舞に來た時にも、醫者は同じやうなことを云つて聞くので、病人は、
「一向變りもありませんが、どうも時々悪寒がして體中寒くつて困ります」と答へた。
さて三度目にまた醫者が來て、やはり體の工合をたづねるので、病人は、
「大層熱が出たやうです」と云つた。
「いやあ、それは大變いい徴候です」と醫者はやはり同じやうな答へをした。
その後この病人の友達が見舞に行つて、どんな摸様だと云つて聞くと、病人の答へるには、
「君、僕はよくなる徴候だ徴候だとばかりで、段々死にさうなんだよ。」

踊猿

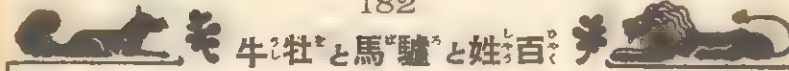
に踊を仕込むでなぐさみにしてゐた殿様があつた。人眞似の上手な猿のことだから直ぐに上達して、身振手拍子おもしろく、いつも一座の興を添えてゐた。
或る時殿様がお客を招いて宴會を開いたが、例に依つて猿の踊り子もその席へ出て、さまざま藝當を演じていつものやうに大喝采であつた。そのうちお小姓の一人がふとした過ちで懐から胡桃をばらばらと取落した。猿の役者達はこの胡桃に目を着けるが早いか、早速猿の本性に返つて、錦繍の晴衣裳も何もかなぐり捨て、我勝ちに駈けて行つて胡桃を拾つてはばりばり喰べはじめた。
これで折角の舞踏會も、われるやうな哄笑の聲の中に幕を閉めた。
【訓言】衣裳をいかに着飾つても生地は隠せぬ。

獅子の戀

……が或る百姓の娘の器量にすつかり迷ひ込むで、夫婦になりたいと云つて申込んだ。けれども娘の父親はどうしても、可愛い娘にこんな恐ろしい夫を持たせる氣にならない、さうかと云つてなにしろ相手が獅子のことだから、すげなく斷ることも跡がこはくて出來ない。そこで一つの計略を思ひ付き、獅子の申込に向つて言葉丁寧にかう答へた。

「あなたのやうな立派な方を夫に持ちますことは、娘のためにもまことに喜ばしいことではございますが、ただ一つ困りますのは、あなたのその大きな牙と爪で、それを娘が何よりもこはがつて居りますゆゑ、それをさへ拔いて下さるならいつでも娘は差上げませう。」

獅子はもう戀に心がくらんで居るとゆゑ、なんの分別もなく言はれるまゝに牙も爪もみんな拔かせてしまつた。けれどかうして大事な得物をみんな亡してしまつた上では、なんの、獅子も恐ろしいことはない、百姓の爺は打つて變つて氣が強くなり、棒をふり上げて獅子を追つ拂つてしまつた。

【訓言】戀にはどんな猛しい心も弱る。

百姓と驢馬と牡牛

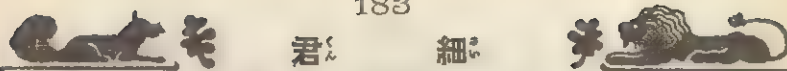
百姓が牡牛と驢馬とを一緒に犂につけて、田を鋤く仕事につかつた。驢馬と牡牛とでは、いかにも情ない、間に合せの組合ではあるが、この百姓はたつた一匹しか牡牛を持たないので、これより甘い工夫はなかつたのだつた。さて一日の仕事を終つて、驢馬も牡牛も軛から放されると、驢馬は一人で働いたやうなほつとした顔をして、牡牛に云ふには、

「おい、お互ひに今日は働いたな。そこでもう一つ、旦那を家への せて歸る役目は誰がするのだい。」

この言葉を聞いた牡牛は呆れたやうな顔をして、

「さあね、どうも君だらうね、いつもの通りに」

と答へる外はなかつた。

細君

或る男が細君を持つたが、家中のにくまれもので困りきつてゐた。でも實家の人達はどう思ふだらうと思つて、口實をこしらへて細君を實家へやつた。しばらくすると細君が歸つて來たので、實家の樣子はどうだつた、彼方の召使達は親切にしてくれたか、と云つて聞いて見た。すると細君は、

「彼方では牛飼や羊飼までが、わたしに厭な顏をしました」

と答へた。男はこれを聞いてつくづくと感心したやうな顏をしながら、

「いやはやお前といふ人も、朝早くから羊や牛を連れて出て、夕方遲く歸つてくる人達にまで、さうやつて愛想をつかされる位では、朝から晩まで一所にゐるものが厭がつてさわぐのも無理はないなあ」

と云つた。

石榴と林檎と木苺

石榴と林檎と木苺

石榴と林檎とが、名々器量自慢をして、われが美しい、かれが美しいと云つて争つた。大分劇しい言葉が双方の間に交されて、あはや掴み合ひの喧嘩にもなりさうな形勢を見てとつた木苺が、生意気にも隣の生籬の間から首をつき出して高慢らしく、

「まあ、君達、その位で澤山ぢやないか。僕のゐる前で喧しいよ」

と云つた。

185

狐と山羊

が井戸の中に落ちて出ることができず困つてゐた。そこへ咽を渇かした山羊が通りかかつて、狐が井戸の中にゐるのをのぞき込んで見て、その水は佳いかねと云つて聞いた。

「佳いとも佳いとも」

と狐は答へて、

「わたしは生まれてはじめてこんなうまい水を飲んだ。どうだ、君も下りて來て一口やらないか」

と云つた、山羊はどうかして渇きを止めたい一心で、前後も考へず井戸の中へとび込んでしまつた。やがて腹一杯水を飲んでしまふと、山羊もまた狐同様、そこらを見廻し

185 狐と山羊

て外へ出る道を探したけれど、何にも足掛りはなかつた。そのとき狐が云ふには、

「僕にいい考がある。君はその後足で立つてゐたまへ、そして前足をしつかり井戸側につけてゐるのだ、さうすると僕は君の背中に上ぼつて、それから君の角を傳はつて外へ出る。とにかく僕が出られさへすれば、此度は僕が君を出して上げる工夫はいくらもある。」

山羊は狐の云ふとほりにした、狐はその背中に上ぼつてうまうま外へ出てしまつた。外へ出ると澄ました顔をして、後をも見ずに行かうとするので、山羊はおどろいて大きな聲をして呼び立てながら、自分を助け出す約束はどうしたと責め立てたけれども、狐は一寸うしろを振り向いただけ、平氣な顔をして、

「お前さんもそんな長い天神髯を生やして分別くさい顔をしながら、井戸の中へ入つたら、出られるものか出られないものか、ちつとは考へてからしたらよささうなものぢやないか」

と言ひ捨てて、すたすた行つてしまつた。

【訓言】前後を考へてからやれ。

186 子供の行水

子供が河の中で行水を使つてゐるうちに、身長の立たないところまで入つてしまつて、もう少しで溺れ死なうといふ大事な場合になつた。そのとき通りかかつた一人の旅人が、子供の救ひを呼ぶ聲を聞いて、河の縁へ下りて行つたが、何故そんな危い所に入るのだと云つて劇しく小言を云つたばかりで、一向手を出して助けようともしなかつた。

「でもをぢさん」と子供はあぶあぶやり乍ら、「まああたいを助けて、それから跡で小言を云つておくれよ。」

【訓言】死ぬか生きるの瀬戸際で忠告を受けるより手を取つて助けて貰ふ方が嬉い。

北風と太陽

北風と太陽

北風と太陽とが、勢力の爭ひをした。到頭二個は勢力をくらべることになつて、旅人の外套をどちらでも早く脱がせた方が勝ちだと云ふことになつた。最初まづ北風が試して見ることになつて、なんのただ一めくりといふ勢ひで、力一杯颶風のやうに吹きまくつたけれども、北風がはげしく吹きまくればまくるほど、旅人は一生懸命外套の襟を押へて放さなかつた。やがて太陽の順番になつた。はじめのうち太陽はやはらかにそろ／＼と溫い光をおくつた。旅人は直ぐ外套の襟をあけて、肩の上に輕くかけたまゝ歩いて行つた。そのうち太陽は有りつたけの力を出してカッと照りつけると、旅人は二足三足行つたばかりで外套を奇麗にかなぐりすて、身輕になつて相變らず旅行をつゞけた。

【訓言】溫情は暴力に勝る。

獅子と兎

が丸くなつて寢てゐる兎の姿を見て、一ト口に食べてしまはうとしたが、その時ふとそこを通る鹿の姿を見つけた。この方が大物だと思つて獅子は兎を放り出して鹿を追つかけた。ややしばらく追つて見たがとても追ひつけないので、諦めてまた元の兎のゐるところへ戻つて來た。けれどそこへ歸りついた時分には、もうどこへ行つたか兎の影も形も見えないので、到頭御馳走にはぐれてしまふことになつた。獅子はつくづく嘆息して、

「俺が惡かつたのだ。もつといい獲物にありつかうなどといふ慾心をおこさずに始めの獲物で滿足してゐればよかつたのだ」

と云つた。

【訓言】あまり慾を張ると損をする。

狼と羊と鹿

が或る時羊に向ひ、麥を五合貸して呉れ、保證人には狼を立てるからと申込んだが、羊は本氣にせず、

「あの狼と云ふ奴は欲しいものと見ると直引浚つて、代も拂はずに行つてしまう癖があるし、お前さんだつてわたしよりは足が疾いでせう。それぢやあもしか貸の取れない時になつて、わたしにはとても追つかけて行く見込が立たない」

と云つて斷つた。

【訓言】黒いものを二つ合はせても白にはならぬ。

190 牛と屠者

が或る時自分達の仲間に害を加へる屠者共に對して復讐をもくろみ、定めた當日には一齊に飛び掛かつて屠者共を突き殺してしまふ手筈を打合せた。それについて牛達が集つて會議を開き、その手筈をどういふ風に行ふのが一番よいか、といふ相談をした末に、中でも猛惡な牛が撰び出され、研ぎすました角尖を揃へて、一息に相手の息の根を止めてしまふことになつた。その時、一匹の年をとつた牛が立ち上がつて云ふには、

「皆さん、なるほど皆さんがあの屠者を惡い奴だと仰しやるのは至極御尤もで、それには何の異議もないが、とにかく彼奴等は自分の商賣には賢い奴で、吾々の仲間を殺すにも餘計な苦痛をさせないやうに甘くやつてくれる。ところが今彼奴等を殺してしまふと、此度は一向に腕におぼえのない素人がやつて來て、吾々の身體をめつたやたらに切りさいなむに違ひない。まあ、いくら屠者といふ屠者を殘らず亡ぼしてしまつたところが、人間が牛肉を食ふことを止める氣づかひは決してないのだからね。」

191 遊獵家と樵夫

遊獵家が森の中で獅子の足跡を探してゐたが、彼方に一人の樵夫が樹を伐り倒してゐるのを見て、傍へ寄つて來て、この邊で獅子の足跡を見なかつたか、または獅子の洞窟が何處かにあるか、知つてゐるなら教へてくれと云つた。樵夫は聞いて、

「なんの足跡よりもお前さんわしと一所に來なさりやあ、本ものの獅子を見せて上げますよ」と云つた。遊獵家はこれを聞くと忽ち眞靑になつて、がたがた震へ出し、齒の根も合はない聲で、

「ああいやどうして、僕は獅子を探がしてをるのではないので、その、ただ獅子の足跡が見たいだけなんだ」

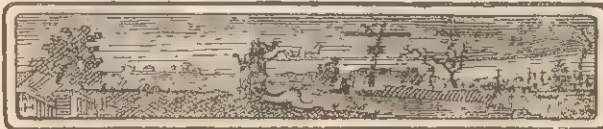
と云つた。

町の鼠が田舍の鼠と知り合ひになつた。或る日田舍の鼠から招待の手紙が來て、田舍の家を見に來てくれといふので町の鼠が出て行くと、やがて晝飯時になつて、田舍の鼠は麥殼だの、土の臭ひのプンプンする草の根だのを御馳走に並べた。この御馳走はいかにも町のお客の口に合ひかねたので、町の鼠は遠慮なく〳〵、

「君はどうも氣の毒だがこんな田舍に居て、まるで蟻同然な生活をしてゐるのだねえ。まあ、一度僕の生活を來て見てくれたまへ。君が一晩泊りに來て呉れば、きつと甘い物の食飽をさしてあ

げるよ」と云つた。そして町の鼠は歸り際に、田舍の鼠と一所に連立つて町の自分の住居に歸ると、パン粉だのオオトミイルだの、無花果だの棗だのの種々ある貯藏室を見せた。田舍の鼠はただもう目ばかり丸くしながらながめてゐた。さて愈々落ち着いて、こはごはながら御馳走の箸をとらうとすると、扉が開いて誰かが入つて來た。二匹の鼠はびつくり敗亡、狹くるしい、恐ろしく不愉快な穴の中に逃げ込んだ。やがて外が靜かになつたので二匹はまた懲りずまにのこのこ這出した。間もなくまた誰か入つて來たので直ぐ又周章駈出した。再三の事でもう田舍のお客には我慢が出來ず、

「さようなら」と到頭田舍の鼠が云つた。「わたしは歸りますよ、成る程お前さんは贅澤三昧に暮らしてはゐるやうだが、しかし、かうか、四方八方劍呑ではやりきれない。こんなあぶない思ひをするよりか、家へ歸つて、草の根や麥の殼のまづい御馳走でも、ゆつくり氣樂に食べてゐる方がどの位優しだか知れないから。さようなら」

193

獅子と野猪

夏の眞盛りの、暑い日中に、獅子と野猪が、名々水を飲みに來て、泉の傍で搗ち合つた。忽ち、二頭の間にどちらが先に水を飲むかと云ふので劇しい口論が始まつた。口論はそのうち取組合ひになつて、お互ひに我劣らじと恐ろしい勢で鬪つた。するうち疲れて息を繼ぎ乍ら、鬪をやめてふと見ると、向ふの巖の上に鷲が一羽、爪を磨いでゐて、どちらか一頭鬪つて倒れたら、その屍骸を喰ふと云ふので待ちかまへてゐる。この光景を見て、さすが熱くなつてゐた二頭の猛獸も我に還り、

「俺達は喧嘩をして鷲の餌食になる位なら、仲善くしてゐる方が優しだね」

と云ひ乍ら、鬪を中止した。

194

蟻と蛹

蟻が日向に出て食物を獵つてゐるうちに、ちやうど脱け變る前の蛹に出合つた。蛹はほんのわづか生きてゐるしるしだけに尻尾を動かしてゐた。

「可哀さうな奴だ」と蟻はさげすむやうに云つた。「なんと云ふ情ない身の上に生れたのだ。俺を見ろ、この通り行きたいと思へば何處へでも自由だし、高い樹の天邊までも上ぼらうと思へば上ぼれる。それには引き變へてお前は、この小さな殼の中に閉ぢこめられたぎり、そのケチな尻尾の尖をむづ〳〵やるだけの力しか無いのではないか。」

蛹は何を云はれても默つてゐた。五六日して蟻が同じ道を通ると、先日の蛹はゐたが中は空洞になつてゐた。どうしたかと思つて不思議がつてゐる眼の先に、突然目のさめるやうに美しい羽をした蝶がひら〳〵と舞つて來た。

「今日は、蟻さん」と蝶々が云つた。「相變らず御自慢話をなさいまし、精々高い聲を張り上げて、空の上のわたしに聞こえるまで」

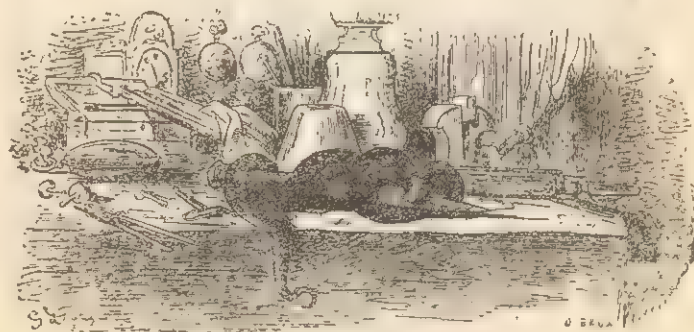
かう云ひ棄てゝ蝶は、折から輕く吹いてくる夏の風に戯れるやうに、蟻の目もとどかない空へ、高く高く飛んで行つた。

195 蝮蛇と鑢

蝮蛇が鍛冶屋の店に入つて、そこに並んでゐる諸道具を一つ一つ訪問して、何か食べるものを呉れと云つて頼んだ。その中には鑢もゐたが、蝮蛇はこれにも食物の無心を云つた。鑢は可哀さうな奴がと馬鹿にした口振で、

「お前も俺から物を貰はうといふなあ、随分間抜けだなあ、俺ばかりは他人の物を削つて取ることは知つてゐても、こちらからは決してくれてやつたためしがないのだぞ。」

【訓言】欲張りは人に物をやることは知らぬ。

196 父と子

或る人が五六人息子を持つてゐたが、どういふものか兄弟同士始終喧嘩が絶えない。その中父親が老病で愈々命も今日明日に迫るといふ時、子供達に吩咐け、一束の木の枝を持つて來させ、三人を枕邊に集つて一人々々順々にそれを束のまゝ膝に敷いて折つて見よと云つた。みんなやつて見たが、みんな失敗した。そこで此度は束を解いて、一人々々に一本づゝ折らせると、これはなんの造作もなく折れた。

「どうだ、子供達」とその時父は云つた「お前達が一所に力を協せてやれば、どんな敵にも敗ける氣遣ひはない。けれどお前達が喧嘩をして分かれ〳〵になつてゐれば、一人の弱い力でどうして敵の攻撃に耐えることができようぞ。」

驢馬の惡ふざけ

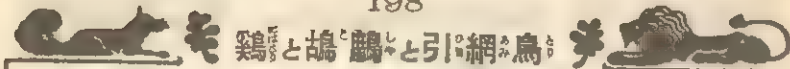
が何と思つたか、或る日のこと屋根の天邊へ上ぼつて、むやみやたらくそこらを跳ねまはつた。おかげで瓦をめくるやら、煙突をこはすやら大變なさわぎになつた。

主人はじめ家中の人達は、手に手に棒切や竿を持つて集まつて來て、やつとのことで驢馬を下に追ひ落し、頭といはず尻尾といはず滅茶々々にどやしつけた。驢馬は半死半生の目に遭つて厩に押しこめられた。そこでつくづく溜息をついていふには、

「いやはやとんだことだつた。俺が今日した通りのことを、昨日猿がやつて見せたときには、家中引つくりかへつて笑つたぢやないか。俺がそれをやつたのがあの人達には面白くはないのか知らん。」

【訓言】己れの分を知らぬものはたしなめられる。

198

鳥網引と鷓鴣と鶏

鳥網をかけて商賣にしてゐる男が、或る日野菜とパンばかりの貧しい晩食をやつてゐると、思ひがけなく久しぶりの友達が飄然訪ねて來た。何か御馳走をしたいと思つたが、生憎肉部屋には肉一片の貯へもないので、是非なく男は囮に馴らして飼つてある鷓鴣を捕へて首を拈らうとすると、鷓鴣は叫び聲を立てて、

「旦那、とんでもない、どうしてわたくしをお殺しなさるのです。わたくしがゐなくなつては、明日から商賣の小鳥を取りに行くことができないではありませんか。囮が無くつてあなたはどうして外の鳥を網の中へ引きよせるつもりです」

と云ふので、それも尤もだと思つて、此度は鶏小屋の肥つた若鶏のところへ行つた。鶏は主人が何をしに來たといふことが分かつたのであわてゝ哀しい聲を出し、

「あなたはまあ、わたくしを殺したらどうして夜夜中でも時がわかります。朝になつてお仕事にいらつしやるにしてもその時を誰が知らせてくれます」と云つたが、

「なるほどお前は時を知るには重寶な鳥に違ひない。だがそれだけのことで、大事な友達を久方ぶりで迎へながら、晩食もたべさせずに寢床へやることはできないのだ」と主人は云ひつゝ鶏を捕へて首を拈つてしまつた。

199

鷹と鳩

鷹が野良で鳩を追つかけてゐるうち、あまり夢中になつてそこに仕掛けてあつた鴉の網に引つかかつた。それをこの邊で仕事をしてゐた百姓が見付けて傍へ驅けて行き、網の中でばたばたやつてゐる鷹を一拉ぎに拉ぎ殺さうとした。鷹はびつくりして、哀れつぽく助けを乞ひながら、

「わたしは人間になんにも惡いことはしません。鳩を追つかけたばかりです」

と云ふと、百姓はなほおこつて、

「それでは鳩が何をお前に惡いことをしたのだ」

と云つて鷹の首を絞め上げた。

200 犢と牡牛

牝の犢が、汗みづくになつて田を犂きかへじてゐる牡牛のところへ出かけて行つて、哀れがるやうな調子で、牡牛の勞苦を慰めた。それから程なく經つて村に祭があつて、百姓達はみんな仕事を休んで遊びさわいだ。その時牡牛も牧場に出されてゆつくり草を食べてゐたが、それとは違つて例の牝の犢は捕へられて犧牲に上げられてしまつた。これを見た牡牛はにやりと苦笑ひしながら、「ははあ、これで彼奴が平生のらくら遊んでゐられた譯が分かつたわい。いつか神樣の前に供へられるつもりで、飼ひ殺しにされてゐたゞけのことだつたのだ」と云つた。

201 鳥と獸と蝙蝠

鳥類が獸類と戰爭になり、双方一勝一敗があつた。その間に蝙蝠は挿まつてどちらの味方に付くと云ふことはなく、鳥の方の旗色がいいと見るとその方の味方をする、さうかと思ふと獸の方に勝色が見えて來ると、此度は獸の加勢をした。それでも戰爭の續いてゐる間は、双方共に蝙蝠のことをなんとも云ふものもなかつたが、愈々戰爭が濟んで平和が回復されると、もう蝙蝠のやうな二股武士の裏切者は、鳥からも獸からも相手にされない。さういふわけで今日でも蝙蝠は一人ぼつち、世界の餘され者にされて、何處へ行つても疎まれてゐるのである。

【訓言】二心のある者は敵にも味方にも嫌はれる。

202 蛙と井戸

二匹の蛙が沼の中で一所に住まつてゐた。ところがある夏大變熱い日がつづいて、沼の水が干上つてしまつたが、何分蛙といふものは水氣のないところに居たゝまれないので、どこか場所を變へて住まうぢやないかと相談してさがしに出た。しばらく行くと一つの井戸があつた、そのとき一匹の蛙は中をのぞいて、もう一匹に向つていふには、

「ここは冷たくつて住みよささうだ、一つここへとび込むとしようか。」

かう云つてすゝめたが、もう一匹の方は少し利口な蛙だと見えて、

「まあ君、さう急くことはないよ。若し此度この深い井戸の水が沼のやうに干上がつてしまつた時、我々はどうして外へ出ることができよう」

と云つた。

【訓言】行ふ前にまづ再思せよ。

203 兎と獅子

が獣の會議に出かけて行き、これからはどうしても萬獣平等の世にならなければならぬと、むきになつて論じ立てた。獅子の大王はこれを聞いてにこにこ笑ひながら、

「兎どん、お前のいふのはなるほど尤だの、だがそれにはまづわしどもと同じに、立派な爪と齒を揃へてからやつて來るがいい」

と云つた。

【訓言】實力の世の中。

漁師

漁師が濱邊へ出て地引の網を引いた。網の手答へが大分重いので、これは大漁だぞと小躍りしながら、大層な元氣でえいさえいさ曳き揚げて見ると、何のこと、砂や石塊が一杯網に引つかゝつて、魚といつては雜魚が二三匹ぴよんぴよんはねてゐた。あんまり當てが外れすぎたので漁夫達はがつかりして、急にしよげ返つてゐるところへ、仲間の年寄の漁夫が通りかゝつて、「まあまあさう力を落すには及ばないよ。善い跡には惡いと云つて、あまり物事が甘く行きすぎると跡がこはい」と云つてなぐさめた。

百姓と鶴

百姓と鶴

種を播いたばかりの穀物畑へ鶴が下りて來ては種をほじくつて仕方がないので、それを捕へるために百姓が罠を仕掛けて置いた。その後百姓が罠を見に行くと、鶴が五六羽かゝつて居た。その中に一羽の鸛が交つてゐたが、百姓の顔を見ると、哀れつぽい聲を出して命乞ひをして云ふには、

「あなたどうかわたくしの命を取らないで下さい。わたくしが鸛であつて、鶴でないといふことは、この羽の色を見てもお分かりでせう、わたくしは鳥の中でも一番正直な一番おとなしい鳥なのです。」

かう云つて頼んだけれど百姓は承知せず、

「お前がどんな鳥であらうとわしの構つたことではない、お前はかうしてわしの穀物畑を荒らした鶴の仲間に入つてゐるからには、同様に罰を受けなくてはならないのだ」

と申し渡した。

【訓言】惡友の仲間に交れば、惡人ではないと云つても人は信じてくれぬ。

魔法使ひの女

魔法使ひの女が、自分秘法の呪さへ受ければ、神様の怒を避けることができると云ひふらして、愚民を惑はしては金儲をしてゐた　ところが　この魔女の魔法をにくむものがあつて、婆さんを法廷に引つ張つて行き、これは惡魔と交通する魔女だから死刑にして下さいと云つて訴へた。裁判の結果、婆さんは有罪ときまり死刑を宣告された。この宣告をうけて魔法使ひの婆さんがすごすご白洲を退出するのを見た一人の男がその時かう云つた。

「お前は神様の怒を避ける呪を知つてゐると云つたさうだが、人間の怒をすら解くことができぬとは一體どうしたものだ。」

豪猪と蛇

豪猪が蛇の穴に同居を申し込んだ、蛇はなんの氣もなく承知して、一所に置いてやつたが、二三日すると、豪猪の針のやうな毛にさはられて體中傷だらけになつてしまつたので、これではとてもたまらない、親切づくも命には換へられないと思つて、豪猪に氣の毒だが他處へ立退いてもらひたいと請求した。ところが豪猪は、體中の針毛を愈々尖らかして、

「いんや、厭な者はそちらから、いつ出て行つてもかまはないよ。わしはこの住居が大層氣に入つたから、いつまでもここで至極結構さ」

と云つた。

猫と鼠

のあばれてしやうのない家があつた。ある猫がその話を聞いて、

「それはわたしには持つて來いだ」と獨言を云ひながら、早速その家へ出かけて行き、そこの一間に陣取つて片つ端から鼠を捕つて食べた。これにはさすがの鼠もやり切れなくつて、愈〻穴の中に引き上げて籠城の覺悟を極めた。それと知つて、猫は、拙いことになつたと思ひながら、

208 鼠と猫

「よしよし、かうなつては、一番罠をかけて釣り出すより外にしやうがない。」
そこで暫らく考へた末、壁に駈け上がつて、後足を天井の梁に引つかけ、まつ倒さまにぶら下がつて、死んだまねをしてゐた。外が靜かになつたのでやがて一匹の鼠が、穴の中からこはごは首を出してのぞいて見ると、猫が宙返りをしてゐる。
「おやおや」
と鼠は嘲るやうな聲を出して言つた、
「猫の奥さん、あなたはほんたうにお利口な方ですね。ですがあなたがそこにさうしていつまででも、ぶら下つてゐらつしやることは御勝手ですが、それを饂飩の袋と間違へて、わたくしどもがお傍にまゐつて捕まへられるやうなことは、まあございますまいよ。」
【訓言】賢い者は、二度欺されぬ。

209 のらくら者と燕

のらくら者が身代をつかひはたして、着のみ着のまゝの情ない姿となつたときに、ちやうど春の初めの天氣のいい日で燕がひら〳〵とんでゐた。のらくら者は燕が來たからもう夏だといふので、早速上着をぬいで古着屋にうりとばして若干かの金に代へてしまつた。ところがまた天氣が變つて、ひどい寒さが冴え返つて來たので、可哀さうに燕は死んでしまつた。のらくら者はがた〳〵震えながら小鳥の死骸を見てから叫んだ。
「ろくでなしめ。貴様のおかげで俺までが凍えさうだ。」
【訓言】燕は夏を作るものぢやない。

猿の王様

動物の會合の席で、猿が踊をおどつてみんなを大層愉快にしてやつたので、みんなは喜んで猿を王にした。すると狐が、猿の出世を見て大きに忌々しがり、ある日、途中で肉を仕込んだ罠を見付けると、狐は猿をそこへ連れて行つて、

「陛下、わたくしは計らず山海の珍味を發見いたしましたが、わたくし風情が頂きますのはあまりに勿體ないことゆゑ、態々陛下を御案内申上げました。どうぞわたくしの志を御受け下さい」

と云つたので、猿は何の考もなく行成御馳走に手をかけると一緒に罠にかゝつてしまつた。猿の王様は眞赤になつて怒つたが狐は鼻の先で冷笑つて

「おい、お猿さん、お前は獸の王だなぞと高慢な顔をして其位な分別もないとは呆れた大馬鹿者だ。」

鼠と鼬鼠

と鼬鼠と戰爭になつたが、どうも鼠方はいつも旗色が惡く、味方の多勢が鼬鼠のために殺されて食はれてしまつた。

そこで鼠方は軍評定を開いてどうしたものだらうと相談をすると、中に年寄りの鼠が立ち上がつて、

「かやうに味方が打つゞいて敗けるといふのも、畢竟味方の軍勢を率ゐて戰場の采配を振る大將軍がないからである」

と云つた。

鼠と鼬鼠

この評定はいかにも尤もであるといふので、鼠方は早速仲間のうちでも一番大きな胴體をした鼠を總大將に選び出し、平の兵卒共と見分けるため、大將には特別に大きな麥藁の兜をかぶせることにした。さて此度こそは味方大勝利疑なしといふので、この急ごしらへの大將を眞向に推し立て、勢ひ込んで繰り出したが、運惡く此度もやはり大敗北、例によつて、我がちに、おのが穴を探して逃げ込んだ。

たゞこゝに一匹、哀れを止めたのは例の急ごしらへの大將軍で、外のものがこそこそと命無事に逃げおほせた中に、立派な大將兜が邪魔をして穴の中に潜り込むにも込まれず、まご〳〵してゐるうちに、むざ〳〵敵の手に取られて敢へない最後をとげてしまつた。

【訓言】人は偉くなればそれだけの苦勞が伴ふ。

狼の兒

大層勘のいい盲人があつて、どんな動物でも一寸手でさはつて見たゞけで、それが何だといふことをあてた。ある日、狼の兒を盲人にさはらせて、これは何だと聞いたものがあつた。盲人はしばらくそれをさすつてゐたが、やがて、かう云つた。

「さやうさ、狼の兒だか、狐の兒だか、その邊はたしかではないが、どちらにしてもこれは、行々羊小屋へ安心して出すことの出來ない奴にちがひない。」

【訓言】惡人は生れ立から知れる。

* * * ■ *

牝の狼が今にも落さうな腹を抱へて羊飼の所へ行き、暫らく子供を産み落すまで小屋を貸してくれと云つて頼んだ、羊飼は親切な男なので、可哀さうに思つて貸てやつた。やがて子供を安々と産み落してしまふと狼は、此度はこの子供が育つまで置いてくれろと云つた。それも羊飼はゆるしてやると、そのうちに狼の子供はめき〳〵と大きくなつて來たので、母親の狼も段々氣が強くなつて、その後は羊飼の家を自分のものにしてしまひ、羊飼が傍へ寄ると牙を怒らして追拂つた。

慾張つた男と嫉妬深い男とがユピテルの大神の前へ出て、どうかわたくし共の心願をお叶へ下さいますやうにとせがんだ。大神はこの二人をば手前勝手な憎い奴等だと嫌つていらしつたが、何んにも言はず、よし〳〵お前達の心願は叶へてやらうが、その代りお前がた二人の内、一人に當つた運のちやうど二倍だけをもう一人が貰ふことになるのだぞと言はれた。そこで慾張つた男は心ひそかに、これは急いで自分から口を出しては損だ、相手の男の言出すのを待つて、その倍額をせしめる工夫をする方が利方だわいと考へて、わざと默つて差控へてゐると、この樣子を見た嫉妬深い男は、結構な福運を授かるのはあり難いが、自分から切り出して見す見すその二倍を向ふにしてやられる、その時の相手の得意顔を思ふと忌々しくつてたまらず、いつそ向ふの計略の裏をかいてやれと云ふ氣になつて、大神樣、どうかこのわたくしの眼玉を片方だけ抉り出して下さいと云つた。そこでこの男は生まれもつかない偏盲になつた代り、相手の慾張り男は兩方の眼玉が失くなつて全くの盲目になつた。

【訓言】嫉妬の惡念は他を傷けると共に自らをも傷ける。

樹と斧

牛と心棒

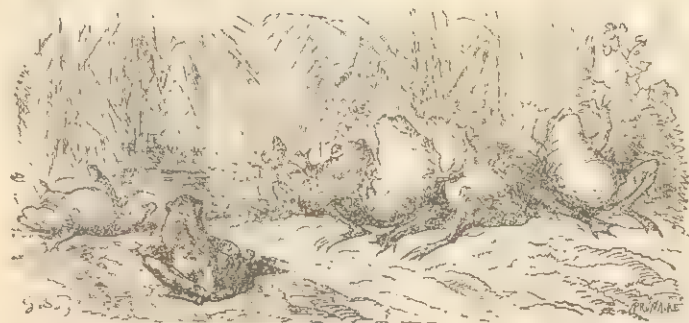
が二匹重い荷を積んだ車を曳いてうんすん云ひ乍ら一生懸命坂を上がつて行くと、車の心棒がキイキイしめ殺されるやうな聲を出して唸つた。

さすが辛抱強い牛もこれには我慢ができなくなつて、背後をふり返り乍ら、疳癪聲を出してどなりつけた。

「やい、しつかりしろ。俺達がかうやつて何もかも引受けて苦しんでゐるのに、貴様なんだ、そんな御大相もない聲を出しやがつて。」

【訓言】ろくに働かないものが一番苦情を云ふものだ。

216

蛙共太陽を怨む

或る時太陽がお嫁さんを貰はうとした。これを聞いた蛙共はびつくりして一同天に向ひ、あらん限りの聲を上げてガアガア啼立てた。すると萬物の主の大神がこの聲に驚いて、何を蛙共はさわいでゐるのかとたづねた。そのとき蛙共が云ふには、

「太陽は獨身でも、あのとほりひどい熱氣でわたくしどもの住む沼の土を乾かしてしまふので困りきつてをります。それがお嫁さんを貰つてもう一つの太陽を生みでもしたら、一體まあわたくしどもの命はどうなるでせう。」

争ひの林檎

力の神のヘルクレスが、或る時狭い小路を歩いてゐると、眼の前の往來に林檎のやうな形をしたものが轉がつてゐるのをうつかり踵でふんづけた。驚いたことには、ふんづけられてその林檎はぴしやりとつぶれると思ひの外、二倍の大きさに膨れ上がつた。それからまた足で踏んで、杖でぶんなぐると、林檎は段々見る間に膨らんで來てしまひには往來一杯に塞がつてしまつた。これを見てさすがのヘルクレスも杖を投り出したまゝ、たゞぼんやりとながめてゐると、その時商の神のミネルヷが、そこへ來て、

「君、打つちやつて置き給へ、君の前にあるのは爭ひの林檎だよ。こちらから係り合ひにさへならなければ、はじめの通り小さいまゝでゐるが、下手に手出しをすると、それその通り膨れ上がつて始末に負へなくなるのだよ」

と敎へた。

【訓言】相手になればなるほど喧嘩は大きくなる。

人間と獅子

人間と獅子とが道づれになつて旅をした、いろ〳〵話をしてゐるうちに、二個は自分達の力自慢をはじめ、名々自分の方が力もあれば勇氣もあると云ひ張つた。かうしてお互ひに眞赤になつて爭ひながら行くうちに、とある四つ角に、一人の人間が獅子を絞め殺してゐる銅像が立つてゐた。その時人間は大得意で、「ほらどうだ。あれを見ろ。あれを見ても俺の方が貴樣よりも強いことが分かるだらう」と云ふと、

「どつこい、仲々さうはいかない」と獅子は抑へて、「あれはほんのお前さん達人間の考でできたものだ。若し吾々獅子仲間がやはりあゝいふ銅像を作るとすれば、きつと獅子が上になつて人間が下に組み伏せられてゐるに極まつてゐる」

と云つた。

【訓言】どんな問題にも二樣の見方がある。

槲樹と蘆

槲樹と蘆

河緣になつてゐた槲樹が、はげしい暴風のために根こぎにされて、流の上に横倒しに倒されてしまつた。そこの汀には澤山の蘆が生えてゐたが、その中に槲樹は轉げ込んで、

「お前達のやうにそんなしなしなな細ッこい奴が、あの恐ろしい暴風に助かつて、却つてわしのやうな、こんなに强い立派な大木が、根ごと放り出されて河の中へはまりこむといふのは、どうも譯の分からん話だ」

と云つた。

蘆はこれを聞いて笑ひ乍ら、

「お前さんは馬鹿强情を張るから惡いんです、力づくではいくら暴風と角力を取つたつて敵やしない。それとはちがつてわたしどもは、どんな弱い風にも負けていつも頭を下げてばかりゐますから、いかに怒りッぽい暴風でも何のこともなく頭の上を通りすぎて行くんですよ」

と云つた。

【訓言】柳し枝に雪折なし。

220 鴉と白鳥

が雪のやうに清い白鳥の羽を見て羨ましいことに思ひ、あれは急度白鳥が始終浴びてゐる水のせゐにちがひないと思つた。そこで、住み馴れたお寺の近所の住居を捨てゝ、白鳥のゐる池へ來て水に漬かつて見た。そして毎日何度となく水の中で、ごしごし羽を洗つて見るけれども一向に色が白くはならなかつた。そのうちに到頭お腹が減つて死んでしまつた。

【訓言】 習慣を變へることはできる、しかし生れつきを變へることはできない。

221 獅子と蛙

が夜歩いてゐると、そこらのの闇の中から變に聞き馴れない聲で、クワツククワツと叫び立てるものがある。びつくりして振り回つて見たが誰れも見えなかつた。そこでまた歩いて行くと、またクワツククワツと鳴き立てる、さすがの獅子も薄氣味が惡くなつて思はず立止まつてがたがた震へてゐると、そこへひよつこり一匹の蛙が田圃の中から上がつて來て、獅子の眼の前を跳ねてゐた。それであやしい聲の主がこの小つぽけな奴だといふことが知れたので獅子は苦笑しながら、いまいましさうに、蛙を捕へて踏み潰してしまつた。

【訓言】 口は禍の門。

222

蜜蜂と飼主

盗坊が養蜂所へ入つて、飼主の留守を幸ひ、ありつたけの蜜を淡つて逃げて行つた。やがて飼主が歸つて來て見ると、蜂房は空つぽになつてゐるで、びつくり仰天、しばらくは開いた口も塞がらなかつた。そこへ蜜蜂共が蜜を集めて歸つて來たが、巣はめちやくちやに引つくり返され、その傍にぼんやり飼主が立つてゐるので、おこつて劍で飼主を刺した。刺されて飼主は大きに腹を立ち、

「この恩知らずの畜生め、貴樣達は俺の蜂蜜を盗坊した奴を默つて歸して置いて、こんなに好く貴樣達の面倒を見てやつてゐる俺を刺すとは何と云ふ馬鹿な奴だ」

と赤くなつてどなりつけた。

【訓言】人は好く友達を敵と誤ることがある。

223

死にかかつた獅子

が年と共に老いぼれた上に大病をわづらつて、今は立上がる氣力もなく、死ぬばかりになつて地面に倒れてゐた。長年獅子の威光に壓されてゐた獸達はこゝぞと思つたか、猪が牙で穴をあける、牛が角で突きかける、跡から跡からやつて來て獅子の身體をめちや〱にした。到頭しまひには驢馬までがひよこりひよこり驅けて來て、後足の蹄で獅子の額をひどく蹴つけた。その時獅子は苦しい息をつき乍らいま〱しさうに、

「俺もかうなつては、せめて猪や牛位にはどんな事をされても仕方がないとあきらめるが、貴樣のやうなやくざものにまで馬鹿にされるかと思ふと、死んでも死にきれぬ」

と齒を咬んで口惜しがつた。

旅人が二人連れ立つて歩いて行くと、一匹の熊がいきなり彼方に現はれた。熊がまだ二人を見付けないうちに、一人は逸早く路傍の樹の上にかけ上がつて葉の茂みに隱れてしまつた。もう一人の方はさうはしつこく行かないので、外にしやうがないと見ると、地面の上にうつぶしになつて、死んだまねをしてゐた。やがて熊がやつて來てその男の體を齅ぎ始めたが、その男はじつと靜かに息をつめてゐた。そのわけは、熊といふ獸は決して死人の體に手をつけないといふからだ。熊は果たして死人だと思つて諦めて出て行つた。もう大丈夫と見ると、樹の中に隱れた旅人は下りて來て、もう一人の旅人に、熊がさつき耳の邊に口を寄せて何を囁いたと云つてたづねた。相手の男は冷淡な顏をして、「熊はなあ、危くなると早速友達を捨てゝ、自分だけ逃げ出すやうな男とは決して一所に旅をするなと云つたよ」と答へた。

【訓言】艱難に遭つて友情の眞僞を知る。

—ドレエ畫—

梟といふ鳥は大層賢い鳥である。これは昔のこと、或る時檞の芽が森の中に初めてふいたのを見て、梟は鳥類をのこらず呼び集めて、かう云つた。

「みなさん、こゝに小つぽけな樹があるでせう、あなた方は今わたくしのいふことを聞いて、この樹の小さなうちに踏みつぶしておしまひなさい。若しこれが大きくなると、その樹の上に寄生木が寄生します、さうするとそれから鳥黐が出來て、みなさんの身を亡ぼすことになりますから。」

また或る時、初めて麻の種が蒔けたのを見て、梟はかう云つた。

「さあ早くこの種をほぢつて喰べておしまひなさい、これは麻の種ですから、今に人間がそれで網を作つてあなた方を捕へることになるのですからね。」

もう一度、初めて弓を射る人が出て來たのを見て、梟は鳥達に向ひ、これこそお前達の怨敵で、お前達自身の羽毛で矢を矧いで、お前達を射殺すのだと云つて警めた。けれど鳥達は梟の云つたことを一向氣にも止めなかつた。全くの話、彼等は梟を却つて氣ちがひあつかひにして、笑ひものにしてゐたのであつた。ところが、後になつて一切萬端、果たして梟の豫言した通りになると、彼等は初めて悟つて今更のやうに梟の智慧を尊敬しはじめた。それからといふものは、梟が出て來ると、鳥達はその傍に集つて來て、何事に依らず自分達のためになることを聞かして貰はうと云つてさわいだ。しかし梟はもう何んにも忠告はしてくれない、たゞじつと默つて坐つたまゝ、仲間のものゝ馬鹿なことを心配するやうに、いつも思案顔をしてゐるのである。

軍人と馬

或る軍人が、戰爭の最中は乘馬に澤山麥を宛てがひ、手篤くいたはつてやつて、かうして置けば戰場の辛苦にも耐えられるし、危險の迫つた時には主人をのせて逸足早く逃げ出す元氣もあるだらうと得意になつてゐた。ところが一度戰爭がすんでしまふと、主人は打つて變つて馬を虐待しはじめ、やたらに雜用に追ひ使つて、そのくせ食物といつては籾殼や糠ぐらゐで一向腹にたまるやうなものも呉れなかつた。そのうちまたもや戰爭が始まつた、軍人は例の馬に鞍を置き、重い鎧具足に身を固めて馬に跨つた。ところが、一足も行かないうちに、可哀さうな馬は背中の重みに押されて、いくぢなくへたばつてしまつた。へたばりながら馬はうらめしさうな顏をして云つた。

「旦那樣、此度の戰爭にはあなた一人で歩いておいでなさい。ひどい仕事をさせられて、まづい食物を頂いたおかげで、わたくしはたゞの馬から驢馬に化けてしまひました。それを今急にまた元の馬に還さうとなすつてもうだめですよ。」

鴉と蛇

がお腹を空かしてへとへとになりながら、日向ぼつこをしていい心持さうに眠つてゐる蛇を見つけて、爪の先に摘まみ上げ、誰もゐない小陰へ持つて行つてゆつくり御馳走に有りつかうとすると、眼の醒めた蛇はそのとき鎌首を擡げて、鴉をしたたか噛んだ。この蛇は毒蛇であつたので、毒は忽ち鴉の五體に廻つた。鴉は苦しい息をついてのたうちまはりながら、

「わたしはなんと云ふ情ない目に逢ふのだらう。いいものを見つけて運が向いたと思つたらおかげで命を棒に振つてしまつた。これと云ふのもむやみに、幸福さうに寢てゐるものをとつてくはうとしたからだ」と云つた。

【訓言】他人の權利を重んぜよ。

樹と斧

樵夫が森の中へ入つて、そこに並んでゐる樹に、斧の柄を一本切らして下さいと頼んだ。親分株の老木達は、その位のことならば、お安い御用だと承知して、わけもなく一本の秦皮樹の若樹をくれてやつたので、樵夫は早速それで斧の柄を作つた。斧の柄ができ上がつてしまふと、もう直ぐ樵夫はそれを持つて森の仲間でも一番立派な樹を撰んで伐りはじめた。自分達がくれてやつた道具をこんな風に使ひはじめたのを見た老木達は驚ろくまいことか、叫びごゑを立てて、

「おや、おや、俺達はもうだめだ。だが今更誰を責めようぞ。俺達がわづかのことだと思つてやつたものが、そのおかげで元も子も亡くしてしまふ種を蒔いたのだ。俺達があの時勢ひをかさに着て、あの若い秦皮樹の權利を侵さなかつたなら、俺達も千年萬年生きながらへることができたのだつた。」

お婆さんと酒瓶

お婆さんが空の酒瓶を拾つた、この瓶にはもと大變結構な直段の高いお酒が入つてゐたので、まださすがにプンと芳ばしい匂ひが鼻を撲つた。お婆さんは瓶を鼻に當てて、しきりと鼻をクンクンやりながら、

「匂ひだけ嗅いでもこのくらゐ芳ばしい香りがするのだから、元のお酒はどんなにうまかつたらうねえ。」

230 獅子と驢馬

と驢馬とが仲間になつて一所に獲物狩りに出かけた。暫く行くうちに、一個はとある洞穴に來かかつたが、そこには野生の山羊が澤山に集つてゐた。獅子は洞の入口に立つて中から山羊の出てくるのを待つた。その間に驢馬は穴の奥深く入つて行つて、有りつたけの聲を振り絞つて務し廻り、片つ端から、山羊を洞の外へ追ひ立てるやうにした。それを獅子は入口に待ち構へて一匹一匹と傍から噛み殺してしまつた。かうして洞の中がすつかり空になつた時に驢馬はのそのそと出掛けて來て、

「どうです、甘くやつたでせう」

と自慢すると、

「うむ、うまいものだよ。この俺でさへ、中でどなつてゐるお前が驢馬だと云ふことを知らなかつたら、一所に務かされて逃げ出すところだつたよ」

と獅子は云つた。

231 牛小屋の鹿

が獵犬に穴から獵り出されて百姓家の庭に逃げ込み、牛小屋の中の澤山枯草を積んだ中にもぐつて、わづかに角の尖だけを出して小さくなつてゐた。そこに大勢寢てゐた牛の中の一匹が、そのとき聲を掛けて、

「どうしてお前さんはこんなところへ這入つて來たのだい。お前さんは今に牛飼につかまることを知らないのかい」と云つた。

これを聞いて鹿は、

「まあしばらくここへ置いて下さい。夜にさへなれば、黑闇にまぎれて逃げ出しますから」

と答へた。

午後の間、百姓が二度三度家畜の飼料をと

牛小屋の鹿

りに入つたが、一人として鹿のゐることに氣の付くものはなかつた。それで鹿は大喜び、おかげで首尾よく逃げおほせたと云つて、牛にも御禮をのべた。

「どうか甘く行くといいがねえ」と先刻口を利いた一匹の牛が云つた、「だが君はまだ仲々危險からのがれたとは云へない。今にここの主人が來て見たまへ、君はきつと見付けられるよ、何しろここの主人の鋭い眼をのがれるものは何もないのだからなあ。」

さういふ口の下に果たして主人がやつて來た。そして牛の世話をいろいろ燒いてゐたが、大きな聲で、

「牛は腹がへつてゐるぞ。もつと澤山飼料をやれよ。それから寢床の下に澤山藁をしいてやれよ。」

かう云ひ乍らも、自身枯草の積んである中へ手をつつこんで一掴み草をつかんだ、所が運惡くそこはちやうど鹿のかくれてゐた場所だつたので、鹿は直ぐ見つかつてしまつた。主人は早速召使共を呼んで、鹿を捕へて殺して食べてしまつた。

【訓言】主人の眼は奉公人の眼の及ばぬ奥を見る。

兎と犬

が兎を獵出して、捕へると行成齒で咬みついて今にも一口に喰ひ殺しさうな勢ひを見せた。かと思ふと押へた手を緩めて、まるで外の犬とふざけるやうに兎にじやれついたりした。そこで兎が云ふには、

「どうか敵なら敵味方なら味方と旗色をはつきりさせて下さい。あなたがほんたうにわたくしの味方なら何故わたくしに咬みついたのです。あなたがわたくしの敵なら何故わたくしとふざけるのです。」

【訓言】二心のある友達よりは二心のない敵の方がいい。

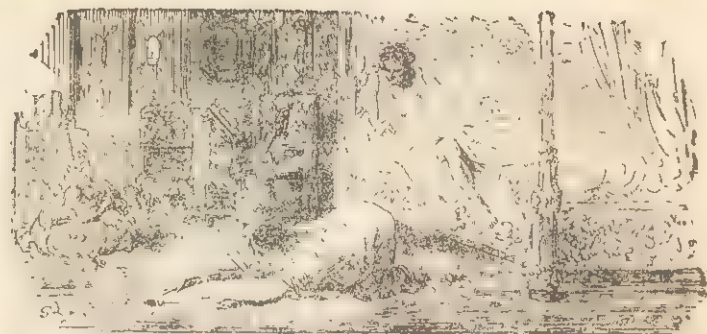
笛が吹くことの上手な漁師が或る日笛と網を持つて濱邊に出かけて行き、高い巖の上に腰を掛けて笛を吹きはじめた、漁師の考ではこの音樂に浮かれて魚共が海の上に躍り出して來るだらうと思つたのである、で、かうしてやゝしばらく吹き續けてゐたけれど、ただ一匹の魚も姿を見せなかつた。そこで到頭根負けがして笛をはふり出して網を打つと、忽ち澤山の獲物があつた。魚共が引き上げられて陸の上でぴよんぴよん踊をおどつてゐるのを見て、漁師はそのとき忌々しさうに、

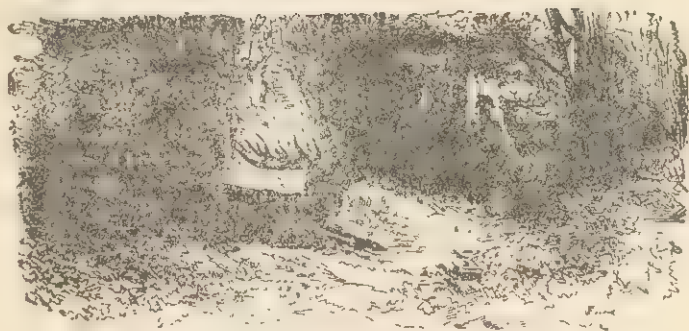
「この碌でなし奴、俺が折角笛を吹いてやつても踊をおどらうとはしないで、笛をやめると、もう早速に貴樣達は踊らずにはゐないのだ」

と云つた。

【訓言】商賣繁昌の秘訣は本業を守るに越したことはない。

[illegible]心と牛

猫の少女

が美しい人間の青年に思ひを掛けて、美の女神のギイナスに、わたくしを女の姿にして下さいと願つた。ギイナスは優しくその願ひを聞き入れて、猫を早速美しい少女の姿に變へてやつた。青年はこの少女を一目見るよりなつかしく思つて、間もなく二人は結婚してしまつた。或る日のこと、女神はふと、あの猫はああしてどうか姿は變へてやつたが、昔の癖まで[illegible]が變つたであらうか、見てやりませうと思つて、二人のゐる部屋の中へ鼠を一匹放した。すると、これを見るなり猫の少女は我を忘れて飛び上がり、まるで彈丸のやうに駈け出して鼠を追ひかけた。これを見た女神は熟々愛想を盡かし、早速また元の猫の姿に返してしまつた。

病氣の鹿

が病氣になつて、森の中の明地に寢たなり身動きもできないほど弱りきつてゐた。その知らせを聞いた仲間の獸達が、打揃つて病氣のお見舞に來てくれたのはいいが、その邊の草を一つのこらず奇麗に喰べて歸つてしまつた。二三日して鹿は漸くよくなりかけて來たが、まだとても遠方まで身體を動かして、食物を探しに行くことなどはできなかつた。そのために到頭病氣では死なず、饑え死に死んでしまつた。その本は友達が心なしに草を食べてしまつたためである。

狡猾な獅子

が野原で草を食べてゐる野牛のいかにも脂づいて甘さうな肉付を見て、あれを一番〆めたら素敵な御馳走にありつけるなあと思つて涎をだらだらと垂らしながら、さすがにその鋭い角を恐れて容易に掛からうとはしなかつた。けれど何分お腹が空いて來るのでやり切れなくなつて、どうにかしなくてはならないと思ひ、とても力づくでは成功はおぼつかないのだから、何がな計略をといろいろ知慧を絞つた末、さも馴れなれしい様子をして、獅子は野牛の傍に近づき、

「どうもお見うけ申すところ君の御姿は實に立派ですなあ。がつしりと据わりのいい首といひ、むつくりと力のこもつた肩つきから、太股の工合といひ、全く申分はないよ。だが君、たゞ一つ、どうもまづいのはその頭の角だねえ。第一見つともないばかりぢやない、實に間がぬけてゐて、折角の立派な風采をすつかり打ちこはしてしまふよ、惡いことは云はない、こりやあ取つてしまふ方がいい。」

かう云はれて馬鹿な野牛はすつかり獅子の甘い言葉に欺され、折角の角を切り落してしまつた。かうして唯一つの防禦の道具を取られてしまつた野牛はわけもなく獅子の餌食になつた。

鷲と鴉と羊飼

が或る日空の上から舞ひ下りて來て、爪の先に小羊をさらつて行つた、それを見た鴉が「よし俺も一つあの眞似をしてやらう」と云つた、そこで鴉は鷲のやうにまづ勢ひよく空の上へ舞ひ上がり、それからまた一生懸命大きな羽搏きをさせて中でも肥つた小羊を擇んでその背の上にのしかかつた。ところが折角羊の背の上に降りは降りたものゝ足の爪が毛の中に引掛つて二進も三進も行かない。鴉は驚いて羽をばたばたやるが足は餘計にからまるばかりでどうすることもできない、さうかうしてゐるうちに、羊飼がやつて來た。

「おやおや、貴様かそんな生意氣なまねをするのかい。」

かう云ひ乍ら羊飼は鴉を捕へて羽を切り子供の手遊にもつて行つてやつた。羽を切られた格好がいかにも變手古なので、何の鳥だかわけが分からなくなつた。

「父さん、これは何の鳥なの」と子供達は聞いた。

「鴉だよ。ただの鴉だよ。だが此奴は鷲でもないくせに鷲のやうな風をしようとした鴉だよ」と羊飼は云つた。

【訓言】身に及はぬ願ひを起こすものは災難の上に物笑をうける。

兎と蛙

達が或る時一所に集つて、自分達はどうしてかう意氣地がないだらう、人が來たといつては驚き鳥が飛んだといつては駈け出す。右を見ても左を見ても自分達より弱いものばかりだ。いつまでかうしてびくびくもので危い世間を渡らうよりいつそ一思ひに自分で自分のみぢめな生涯をおしまひにしてしまふ方がましではないか―かういふ捨てばちな決心をきめてしまふと、兎達は一團になつて近所の池へ驅け出して行つて、あはや一同身を投げようとした。その池の汀には澤山の蛙が列を作つて並んでゐたが、大勢の兎の押しよせてくる足音をきくと、吃驚敗亡、ばらばらと水の中へとび込んで水底に深く姿を隱してしまつた。「待つた待つた諸君」とその時一匹の兎が叫んだ、「この世界にはまだ吾々を見て逃げるものもある、世の中は仲々捨てたものぢやないぞ。」

―ドレエ畫―

梟と蟋蟀

梟といふ鳥は晝中に眠つて夜になつて食事をする習慣になつてゐるのだが、ちやうど梟の棲んでゐる同じ樹の枝に蟋蟀が棲處を構へて、晝中にやかましく啼き立てるのでおちおち眠付くことができない。梟は弱つて蟋蟀に少しこちらの都合をも考へて遠慮してくれと云つたけれど、相手は一向氣にもとめず、相變らずやかましく啼き立てる。そこで梟も我慢がしきれず一番計略にはめてこの煩ひを除かうと決心した。梟はまづ出來るだけの上機嫌を作りながら蟋蟀に、

「どうもあなたのお上手なお歌をうかがつてゐると、何がなし、アポロン神の琴の音を聞くやうで、浮かされて眠ることもできません。どうもこんなに美しい音樂をただ聞いてゐるのは勿體ないと思つて、先日ミネルヴの神から下つた神酒を頂きながらゆつくりうかがふことにしようと思ふのです　あなたもどうです、一つこちらへいらしつて一所に上がりませんか。」

蟋蟀は自分の歌を褒められたので、得意になり、その上結構な神酒の話を聞いたので口から涎を流しながら、早速この招待に應じた。しかし蟋蟀が梟の穴の中へ體を入れるや否や、梟はいきなり飛び掛かつて、蟋蟀を喰べてしまつた。

猫と鶏

が鶏に出會つて、どうかして此奴をせしめてやりたいと思ひ、

「お前は夜る夜中コケッコッコやかましく啼き立てて他人の安眠を妨げる不都合な奴だ」

と云ふと、鶏は眞顔になつて、

「わたしの啼くのは人間に、もう起きて早く仕事をしろと云つてやるので、人間もわたし共の啼聲を聞かない中は起きることができないのです」と辯解したが猫は耳にもかけず、

「そりやそうかも知れない。だが人間がお前のおかげで目が醒めようとさめまいと、とにかく俺は晝飯を喰べなくてはならないのだ」

と云ふなり飛び掛つて喰ひ殺してしまつた。

【教訓】　口實はどうでも惡黨は矢張惡い事をする。

河と海

或る時、世界中の河が相談の結果、海といふ奴は怪しからぬ、みんな河の水を鹽辛くしてしまふと云ふので、連合して海に抗議を申込んだ

「吾々が君の世界へ入るまでは、まことに淡い、いい味で、誰の口にも入るやうにできてゐる。それが一度君と一所になると早速に、鹽辛くされてしまつて、とても口に入れられたものではない。」

この言葉を聞いた海は素氣なく、

「ではわたしのところへ流れて來るのはお止しなさい、さうすればお前さん達はいつまでも元のまゝの味でゐられるだらう」と答へた。

騾馬と強盗

二頭の騾馬が各々重い荷を鞍につけて道を歩いた。一頭には金銀の箱を付け、他の一頭には麥粉を入れた袋を付けた　金銀を荷つた方の騾馬は大得意で反り身になり、勢好く脚拍子を踏む度毎に頸につけた鈴が高い音を立てゝ鳴つた。やがてとある林の中に來かゝるといきなり横合から一夥の強盗が現はれて、騾馬の持主達と爭ふはずみに金銀を付けた騾馬はひどい痛手を負つて倒れると、強盗等は我勝ちに騾馬の背中から金銀を取り卸して引つ擔いで行つたが、もう一頭の背負つた麥粉の袋には目も呉れなかつた。荷物は奪はれる、體には重傷を負ふ散々な目に逢つた騾馬はつくづく自分の不幸を嘆いて今更馬鹿にした友達の幸福を羨んだ

243

胡桃樹

道端に立つてゐる胡桃樹が、毎年澤山實を結んだ。通り掛かる人はみんな、ステツキで打つたり石を投げたりして枝を叩き落しては實を取つた。おかげで胡桃樹は毎日ひどい目にあはされてばかりゐる。そこで胡桃樹が嘆いて云ふには、

「わたしの實を御馳走になり乍ら　わたしに向つてこんな打つたり叩いたり亂暴を働くのはほんとにひどい。」

244

狼と狐と猿

が盗坊をしたといつて狐を責めたが狐が飽くまでしらを切るので、猿のところへこの事件を持ち出して裁判をして貰ふことになつた。猿は原告被告双方の申立を聞いたのち、次のやうな判決を下した。

「さて狼よ、本官は其方がこれまでにただの一度でも目をつけた品物を手に入れ損ねたことがあらうとは信ずることができないぞ。しかし乍ら、狐よ、同時に、其方もいかほど否定いたしても、決して盗坊の罪を犯したことがないとは考へられぬことであるぞ。」

【訓言】平生不正直なものはたまに正直にしても人の信用を得ることができぬ。

245
鶴と鵞鳥と鷹

鶴が或る公園の池に來て見ると、一羽の鵞鳥が水の中に首を突つ込んだり出したりしきりと水を浴びてゐる、何故そんなことをするかと云つて聞くと鵞鳥は答へて、

「これがわたし共の習慣です。かうして泥の中から食物を探すのです。それにかうやつて水の中にもぐつてしまへば、あの恐ろしい鷹が來てもつかまへられることがないのです」

と云つた。その時鶴は、

「なあんだ鷹なんぞが」と嘲るやうな聲を出した、「あんなものはわたしの敵ではない。いいからわたしの仲間におなり。鷹なんぞは決してこはいことはない。」

かう心丈夫さうに云つたので鵞鳥はすつかり安心して、それからは鶴について畑の方へ行つた。するといきなり高いところから鷹がのして來て、鵞鳥をつかむが早いか一口に啣えてしまつた。鶴はその間にかまはず何處かへ飛んで行つてしまつた。鵞鳥は悲しい聲をあげて最後まで鶴を呼んでゐた。

【訓言】保護者にはしつかりした人物を擇ばねばならぬ。

246
狐と豹

と豹とがお互ひに器量自慢をして、我が美しい彼が立派だと云つて爭つた。豹が云ふには、

「これ見ろ、俺の上着の縞のいかにも氣の利いてゐることは。」

すると狐も負けてはゐず、

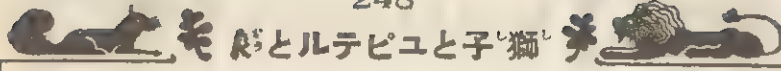
「なるほどお前さんの上着は氣が利いてゐるね、だがわたしの腹に蓄へた智慧は上つ面だけの綺麗とは比べものにならぬ」

と云つた。

【訓言】貌の美よりも心の賢。

鳶と鷲

がぼんやり樹の上に棲まつてゐると、そこへ鳶が來て、「鷲さん、何故そんなにふさいでゐます」と聞いた。鷲は「いいお上さんがほしいと思ふが見當らないので困つてゐるのだ」と云つた。鳶はその時、「ぢやあわたしをお上さんにして下さい」と云つた。「わたしはこれで仲々働き者なんですよ。」
「ぢやあお前、自分の力で獲物をとつて來てわたしを養ふことができるか。」
「えゝえゝ、わたしはあの駝鳥でさへこの爪にかけて押へて見せますよ」
鷲はこの言葉を聞いてすつかり感服して夫婦になる承諾をした。二個がやがて婚禮をすませてから間もなくのこと、
「さあ約束通り駝鳥を浚つておいで」と鷲が云つた。
鳶は早速ヒヨロヒヨロと掛聲だけは勇ましく舞上がつて行つたが、やがて薄汚い小鼠の、しかもプンと臭いのを大事さうに持つて來た。
「何だこれは」と鷲が癇癪をおこして、「こんなものをとると約束したか。」
「旦那様の御氣に入るためですもの、わたしはとてもできないお約束でもいたさねばなりませんでした」と鳶は答へた。

獅子とユピテルと蚋

といふ獸はあの通りの大きな體をして、力は飽くまで強く、その上牙と爪の鋭いこと、いかにも百獸の王と畏れられるだけはあるが、ただ一つ不思議にも、この獸王に苦手と云ふやうな弱いところがあつて、鷄の啼聲が何より禁物、これを聽くとふるへ上がつて逃げ出すといふ始末である。俺ほどのものがそんなことでと、これだけは獅子も口惜しくつてならないけれども、どうもしかたがない。到頭思案に餘つて獅子はユピテル大神の所に苦情をもち出し、何故こんな弱いものに造つてくれたのだと訴へた。しかし神樣の力でも今更これをどうも出來ないので、お前については隨分念入に拔けめなく造つたつもりだが、そんな弱い所がまだ殘つてゐるのは氣の毒だつた、しかし今更どうにもならない、どうせ世の中に萬全と云ふものはないのだから、一つ位の弱味はまあ不勝せよと云つて慰めた。それでも獅子にはどうも諦めがつかず、こんなに意氣地がない位ならいつそ死んでしまつた方が優しだとさへも思つた。そんなことを思つてゐる

獅子とユピテルと象

最中獅子はふと象に逢つていろ〳〵話をした。話をしながら見てゐると、この大きな動物は始終しきりなしに耳を押立てゝは　何かの物音に氣をとられるやうな様子をするので、どういふわけかと聞いて見た。ちやうどその時、一匹の虻がぶんぶん唸つて飛んで來た。すると象が云ふには、

「君、あすこにぶん〳〵云つてゐる虫けらを見ましたか。わたしはどうもこの虫が實におそろしい、彼奴に耳の中へ入られやうものなら、即座にわたしは聾にされてしまつて、もうそれつきりになつてしまふのですからね」

と云つた。この言葉を聞くと、獅子は急に勇み立つた。

「なるほどさうか」と獅子は腹の中で、「象の奴こんな大きな胴體をし乍らやつぱりあの虻位がこはいのだな。この分では俺も鷄が苦手だと云つて恥づかしがるには當らない。何故と云つて、鷄は虻に比べたら百層倍も大きいではないか」

とつぶやいた。

249

鷲と猫と野豚

が高い樹の天邊に巣を作つた。そこへ猫が家族をつれて樹の幹の中邊の空洞を占領した。それから最後に野豚が子供と一所に樹の根方に住居を定めた。これで猫さへ惡だくみをしなかつたら、みんなお隣同士仲よく暮らして行ける筈だつたのであるが、猫の奴が最初まづ鷲の所へ行つてかう云つた。

「あなたとわたくしの身の上にはそれはそれは大變な危險が迫つてゐるのですよ。あの豚といふひどい奴、いつでもあの通り樹の根をほじくつてゐる、あれは樹をひつくりかへして、あなたの御家内もわたくしの家内をも、思ふ存分喰ひつくさうとする惡くだみなので

鷲と猫と野豚

す。」

かう云つて鷲を正氣を失ふほど脅かして置いて、猫は樹を驅け下りて、此度は豚の所へ行つた。

「あの鷲といふ奴はおそろしい奴だからお氣をつけなさい。彼奴は隙さへあれば下りて來て、あなたの御子さん達を浚つて行つて、自分の子供の餌にしようと待ちかまへてゐるのです。」

これでまんまと鷲同様、豚をもすつかり脅しつけてしまつた。それから猫は相變らず樹の空洞の中へ引籠つて、わざと物を恐れてゐるやうに、晝中は決して外へは出ない。ただ夜になるとそつと見つからないやうに空洞を出て、子供達のために食物を探した。一方に、鷲はすつかり脅しつけられてからは巣の中にすくんだきり身動きもしないし、豚も住居を動かなかつた。さうしてゐるうちに、兩方とも自分はじめ家内一同殘らず饑え死に死んでしまつた。そしてその死骸は、猫の餌食になつて、猫はおかげで段々殖えて行く子種を十分に養ふことができるやうになつた。

熊と狐

といふ獸は人間の死體には決して手を掛けないと云ひ傳へてゐる。それで或る時、一匹の熊がこのことを云ひ出して、

「これは全く吾々の禮義で、どうも人間の體に害を加へるなどといふことは吾々の高潔な天性としてできぬことだ」

と一人で自慢の鼻を高くした、これを傍で聞いてゐた狐が、薄笑ひをしながら、

「まあうかがつて見ると大層殊勝らしいお心掛のやうですが、どうか死んだ人間の體だけでなく、生きた人間の體をも同樣にいたはつておやんなすつてはいかがですね。」

【訓言】 僞善者は自分の外の誰をも欺くことはできぬ。

がぶらぶら歩いてゐるうちに燕麥の畑の上に出たけれども、燕麥では一向狼の御馳走にはならないから、つまらなさうに通りぬけて行かうとすると、そこへ一頭の馬が來た。その時狼は、

「どうだね、立派な麥畑だらう、君が來るだらうと思つて、實は手をつけずにとつて置いた、さあ大いにやりたまへ。僕は君のいい齒でこのやうに熟した燕麥をぱりぱりやる音を聞くのが全く愉快だよ」

と云つた。けれども馬は馬鹿にするなといふ顏で、

「いやありがたう。だが君、狼に燕麥が喰べられるものなら少しも遠慮は要らない、何も自分の腹を減らしてまで耳の樂しみをするがものはな無さうだがなあ」

と云つた。

【訓言】自分に用のないものを他人にやると云つても相手は深切とは思はない。

虻が或る時獅子の鼻の先へ來て云ふやう、

「獅子だなんてわたしはちつともお前さんをこはいとは思はないよ。いやそれどころか腕づくでもお前さんに負けようとは思はないよ。お前さんがいくら豪さうな顏をしても、それが何だと云ふのだい。お前さんが爪を出して引つかく齒を剝き出して喰ひつく——まるで女が疳癪をおこしたやうに——だがつまりそれだけのことしかお前さんには出來ないのぢやないか。それにくらべてはわたしの方がどのくらゐ強いか知れやしない。噓だと思つたら喧嘩しようか、ええおい。」

かう云ひ乍ら、虻は先づブーンと角笛を高く鳴らしながら、飛び込んで行つて獅子の鼻の先をちぎれるほど刺した。獅子はアッ痛いと云つてあはてゝ虻を叩く拍子に自分の鼻をしたゝかに打つて血を出すほどのさわぎをしたが、當の虻は澄まして高いところに飛び退き、夢中になつてぶんぶん凱歌をあげてゐた。そのうち、

あまり調子づいて飛びまはるはづみに、その近所に網を張つてゐた蜘蛛の巢に引つかゝつて食はれてしまつた。

かういふわけで虻は百獸の大王には大勝利を得たものゝ、つまらない同類の蟲けらの餌食になつてしまつた。

【訓言】勝つて兜の緒を〆めよ。

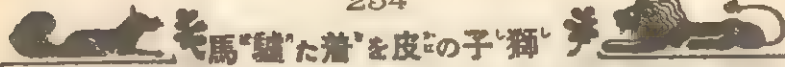
富

力の神のヘルクレスがオリムポスの神達の仲間に加へられることになつて、ユピテル大神はそのために披露の祝宴を開かれたが、ヘルクレスは祝宴に連つた神々の誰彼に一人殘らず慇懃な答禮を返した中に、たゞ一人、富の神のプルウトスだけには振り向いても見ようともしなかつた。プルウトスの方から傍へ寄つて來ても、じつと地面に眼を向けたつきり、やがてふいとそのまゝ横をむいてわざと顔を見ないやうにした。ユピテル大神はこの樣子を御覧になつて不思議に思はれ、何故外の神達にあれほど丁寧に會釋を返し乍ら、プルウトスにだけはそんなおもしろくない樣子を見せるのだと聞かれると、ヘルクレスは、

「御不審で恐入りますが、わたくしはどうもあのプルウトスといふ神を好みませぬ。わたくしがあれと一所に人間世界に居りました時分、あれはいつも惡黨共の仲間にばかり交つてをりました」

と答へた。

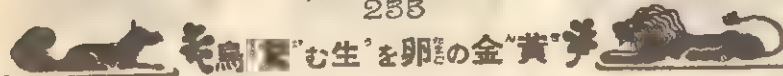
【訓言】 富と品性とは多く一致しないことがある。

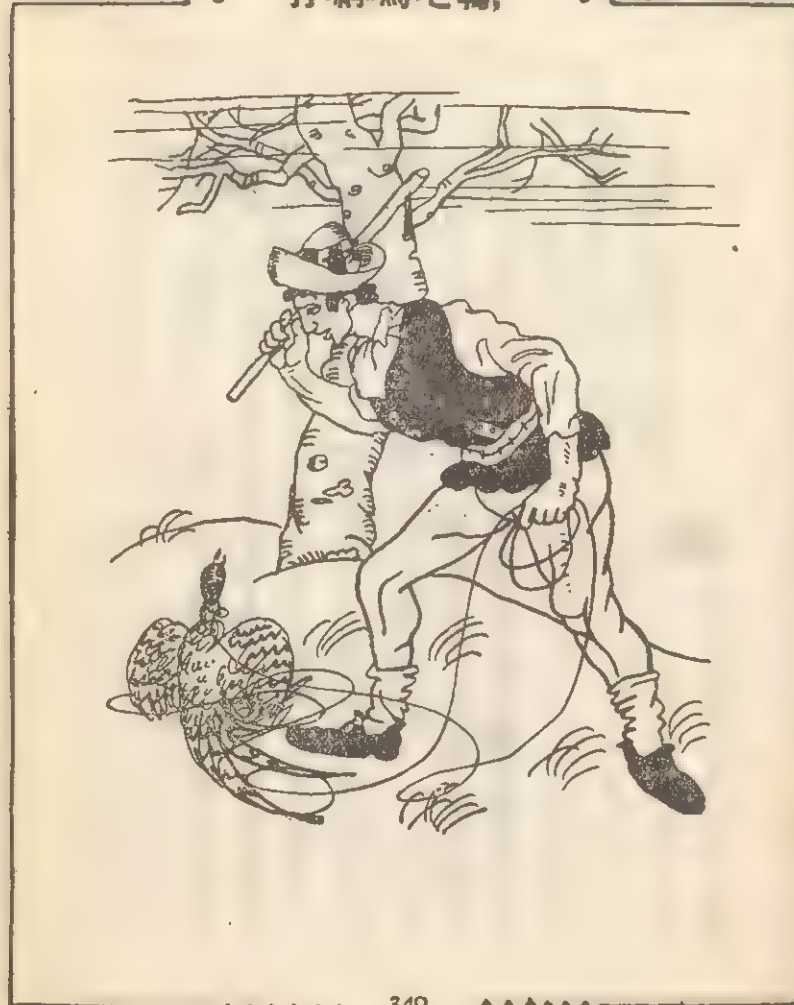
獅子の皮を着た驢馬

が獅子の皮を見付け、こいつはいいものが手に入つたといふので、それを頭から冠つてそこらをのそりのそり歩きまはつて見ると、人間といはず獸といはず、みんなはんものの獅子が來たと思ひちがへ、びつくり仰天、足も空に逃げ散る。驢馬はおもしろくつてたまらないので、すつかり調子づいてしまひ、一つばし獅子になつた氣でううと吼えて見た。それを狐が聞いて、一聲で、はゝあと正體を悟つて、

「おやおや、お前さんだつたのかい。わたしも今の聲を聞くまでは、危く見そくなふところであつたよ。はははは」

と笑つた。

【訓言】 衣裳をいかに着飾つても天性は隱されぬ。

仕合はせな夫婦が毎日一つづゝ、黄金の卵を生む鵞鳥を一羽飼つてゐた。けれど、慾には限りのないもので、夫婦はどうかして一遍に大金持になつてしまひたいとあせつた末に、何んでもこの鵞鳥のからだはすつかり黄金で出來てゐるにちがひないといふ

ので、可哀さうに、鵞鳥のお腹を割いて見ると、何んのこと、中はやはり、あたりまへの鵞鳥とちつとも違つたところはなかつた。さういふわけで夫婦は一遍に大金持に成るあてが、まんまと外れたばかりではなく、毎日、少しづゝ財産をふやして行く福運までもとり外してしまつた。

【訓言】滿は損を招く。

小鳥を捕る人が網を仕掛けてゐるところへ一羽の鵯がやつて來て、何を爲てゐるのだと云つて聞くと、その人は、

「町を建てゝゐるところだ」

と答へたまゝ、直傍へ引込んでしまつた。鵯は大變不思議さうな顔をして網を引つ張つたり、つゝいたりいろいろしらべてゐるうち、ふと餌を見つけたので、それを取らうと思つてその上に飛びかゝると、早速網の目に引つ掛かつてしまつた。鳥を捕る男はその時飛び出して來て、鵯を捕へてしまつた。

「わたしはとんでもない馬鹿だつた」

と鵯は云つた。

「だがそれにしてもお前さんの建てる町といふのがこんなものだとすると、この町中に一杯入るだけの馬鹿な小鳥を見付けるのは仲々大變だらうぜ。」

羊飼と羊

飼が森の中へ羊を追つて行く途中大きな槲の樹に一杯實のなつてゐるのを見て、上着を脱いで樹の下にひろげ自分は樹の上にのぼつて實を振り落した。それを羊が下にゐてひろひ乍ら、敷いてあつた羊飼の上着をびりびりに嚙み破つてしまつた。羊飼は下へ下りて來てこの始末を見ると、大變に怒つて、

「この恩しらずの畜生奴、他の人間のためには自分の毛を分けて着物を造つてやりながら、平生世話になつてゐる俺の着物を滅茶々々にするとは」

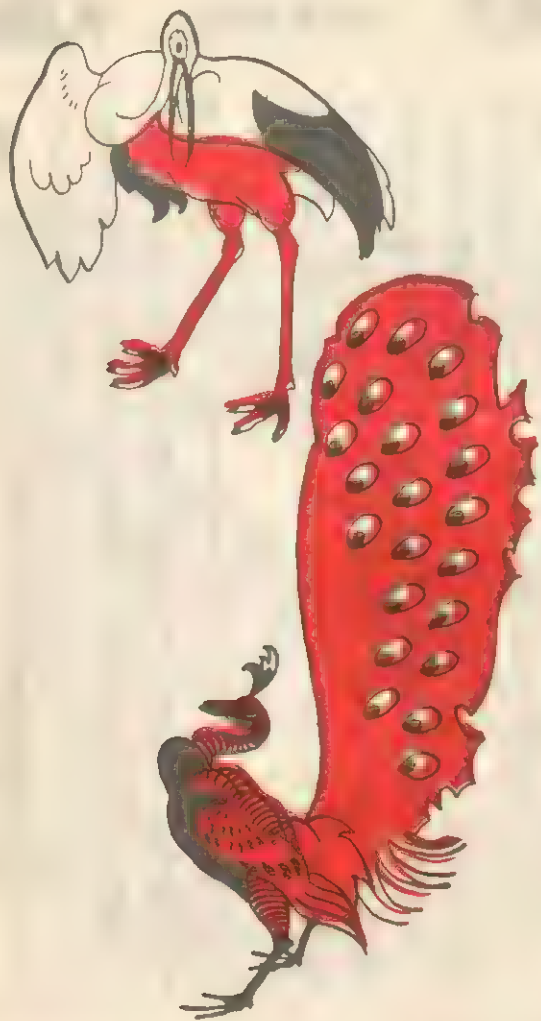
と罵つた。

【訓言】不注意は一種の惡事だ。

猿と駱駝

森の獸の大集會に猿が餘興の舞踏を演じて滿座の大喝采を博した。その拍手喝采の勢があまり盛んだつたので駱駝が羨ましがり、自分も一番猿の眞似をしてみんなにやんやと云はれようと思ひ付いた。そこで駱駝はいきなり立ち上がつて眞中に躍り出し、めつたやたらに舞踏をはじめたが、なんにせよあの胴體でどたどた不格好に跳ねまはるのだから馬鹿々々しくつて見られたものではなかつた。到頭みんな寄つてたかつてなぶりものにして外へ追ひ出してしまつた。

【訓言】徒らに他人の長所を眞似るは愚なり。

孔雀と鶴

孔雀が鶴に出會ふと、得意らしく奇麗な羽を一杯にひろげて、自慢をした。

「まあこのかがやくやうな僕の美しい羽毛を見るがいい」と孔雀は云つた。「そして君のそのみすぼらしい羽毛にくらべて、どの位違ふか比べて見るがいい。」

「全くさうだよ」と鶴はおとなしく、「そりやあ君の羽毛はどの位立派だか知れやしない。だが空を飛ぶ段になるとどうだね、僕は雲の中までも翔つて行くが、君は掃溜をあさる鶏同様に、地面の上を這ひまはつてゐるだけではないか。」

【訓言】 身なりの派手をほこるほど馬鹿なことはない。

孔雀と鶴

の子が仲間にはぐれてうろうろしてゐるうちに、狼に追ひかけられた。もうどうしても捕まる外はないと見ると、早速の頓智で小羊はくるりとうしろを振りむいた。そして狼に、

「あなた、わたくしはもうどうしてもあなたに喰べられる外はないと覺悟いたしてをります。さうきまればもう長くない命でございますから、せめて死際だけも賑かに、踊つて死にたいと思ひます。あなたわたくしのために笛を吹いて下さいませんか。」

狼も御馳走の箸をとる前に音樂を用ゐるといふことに、なんの異議もある筈がなかつた。そこで笛をとつて吹き始めると、小羊はその節につれて振おもしろく踊り出した。段々賑やかにやつてゐる中に、羊の群の番に當つた神樣達が不審に思つてやつて來た。神樣達は狼の姿を見るや否や、一も二もなく追つ拂つてしまつた。追立てられて狼はいまいましさうに驅け出しながら、振むいて小羊にかう云つた。

「考へると俺は馬鹿だつたよ。俺の商賣は肉切だ、それが何も餘計な笛吹の眞似をして貴樣の御機嫌をとる必要はなかつたのだ。」

旅人と運の神

長の旅路にすつかり疲れ切つた旅人が、往來の井戸の縁に腰をかけて休んでゐるうちに、つひうと〳〵と寢込んでしまつた。するうちだんだん體が傾いて、今にも深い水の底に陷りこみさうになつたのを見兼ねた運の女神が、旅人の眼の前に現はれて、體をゆすぶつて、もつと側へ寄るやうに心配してやりながら、

「お前さん、どうか目をさまして下さいよ。お前さんがそれで井戸へ落ちれば、人間どもはお前さんが足りなくて落ちたとは云はない、みんなわたしのせゐになるのだからね」と云つた。

蛙と鼠の戰

の眷族と鼠の眷族とが或る古沼の縁に國を構へて、廣い土地をお互ひに自分の領分にしてしまひたがつて、永い年月の間戰爭の止む時がなかつた。併しいつまで經つても双方の兵力が互角で勝負のつく時がない。そこで敵味方相談の上、兩方から大將を一人づゝ出して一騎打の勝負をさせ其結果に依て戰局の勝敗を定めることになつた。選ばれた兩軍の大將は蘆の森、水草の林の中の平地を晴の場所として互ひに槍の鎬を削り人交もせず戰つた。其内急に天の一方から一羽の鳶が舞ひ下りたと見ると、兩戰士を爪の間に摑んだまゝ高く翔け上がつた。跡は敵味方の死屍累々、亂軍になつた戰場の始末を見物の鴉共がしてくれた。

蛇が何分あのとほり體が長いのと、常住地面から一寸も離れることのできないため、しよつちゆう人間や獸の足にふんづけられるので困り切つて、萬物の主のユピテル大神の許へ出掛けて行き、難儀な目にあはされてゐる次第を訴へて救ひを求めた。しかし大神は一向蛇の境遇に同情しては下さらないで、

「まあさうだな、それにははじめてお前を踏んだ男に噛みついてやつたらいいだらう、さうすると外の奴も自分の足を地面の何處へ出したらいいか、そのくらゐの面倒は見るやうになるだらう」

と云はれた。

と鷄とが大層仲善しになつて、一所に旅に出る相談がまとまつた。夜になると鷄は樹の枝にとび上がつて休むと、犬は空洞になつた樹の幹に入つて丸くなつた。夜が明けると、鷄は起き上がつていつものとほり時を作つた。するとこの聲をきいた狐が、一番こいつを〆めて朝飯にしてやらうと思ひ、樹の下へやつて來てどうか下へ下りてくれるやうにと賴んだ。

「さやういたしてわたくしは、こんな美しいお聲の方とお近付に願ひたいと存じますのですよ」と狐は猫撫聲をした。

鷄は答へて云つた。

「ではあなた、この樹の根方に門番が寢てをりますからお起こし下さいまし、それが戸をあけてあなたをお入れ申すでせうから。」

狐はさう云はれるまゝに樹の空洞を叩いた、すると犬がいきなりとび出して狐をずたずたに咬みさいてしまつた。

醫者に化けた靴直し

腕のできない靴直しが本職で食べられなくつたので、醫者に商賣換へをして、家傳不思議の解毒劑の秘方を持つてゐると吹き立てたが、その法螺が圖に當つて大層な評判になつた、其内この俄醫者が急に病出した、そこでこの國の王はかういふ時こそと、まづ茶碗をとりよせ、例の秘方の解毒劑をその中に入れて、それと一所に毒藥だと稱して實はただの水を少し注ぎ入れて、それを飮めと云つて醫者に命じた。所がこの茶碗の中は毒だと聞くと俄醫者はおびえて一切を白狀した。そこで王樣は人民を集めて、かう諭された。靴の繕ひさへ賴まぬ靴直しに、大切な命までも平氣で預けるとは沙汰の限りぢや。」「凡そ貴樣達のやうな馬鹿ものはないぞ。

鴉と羊

鴉と羊

がしつつこく羊の背中に棲まつたまゝいつまでも下りようともしなかつた、羊は癪に觸つてたまらないので、彼方へ走り此方へ走り、ややしばらくあばれまはつて見たが、對手は一向平氣なので業を沸かして、

「これがわたしだからいいやうなものゝ、犬にでもそんなまねをして見るがいい、お前はあの鋭い歯にかかつて一口に咬み殺されてしまふのだぞ」

と云ふと鴉は、小馬鹿にしたやうな顔をして、

「ふむ、かう見えてもわたしは誰がきつい、誰が弱いと云ふことも、誰にはお世辭をつかつて、誰は馬鹿にしても大丈夫だといふこと位は、とうから知つてゐるのだ。それだから長生もするのだよ」

と云つた。

【訓言】それだけの實力の無いものがいかに擬勢を張つても笑はれものになるばかりだ。

旅行家と犬

旅行家が旅に出ようと云ふので、戸口に長々と寢てあくびをしてゐた犬に向つてかう云つた。

「おい、何だつて貴様はあくびなんぞをしてゐるのだ。大急ぎで支度をしろ、旅の供をするのだ。」

けれども犬は尾を振つて落ち着いた顔をして答へた。

「旦那様わたくしはいつでもよろしうございます。わたくしこそあなたをお待ち申してをります。」

兎と狐

と兎とが神様に祈願をかけた。
「どうか兎のやうな長い足をお授け下さいまし」
と狐は云つた。
「どうか狐のやうなはしこい知慧をお授け下さいまし」
と兎は云つた。
その時萬物の主ユピテルの大神が現はれて、
「お前達には銘々一つ一つすぐれた長所を授けて置いた。それを一個で何もかも慾張らうとするのは神の本意に反く」
と云つて叱つた。

植へかえた老木

植へかへた老木

或る百姓の裏庭に一本の古い林檎樹があつて、毎年美しい果實を結んだ。百姓はこの樹を大事にいたはつてやつて、それが熟るときつと地主のところへも果實を分けて持つて行つた。ところがこの實があんまりよく熟るので、地主が慾心をおこして、いつそみんな自分のものにしたくなり、地主の權利を主張してその樹を自分の家の庭へとつてしまつた。さて移し變へて見ると林檎の樹は今までとちがつてとんと勢がなくなり、間もなく枯れてしまつた。

これを見て地主は嘆息しながら、

「己は定まつただけの分配で滿足をしてゐれば何のこともなかつたのに、つまらぬ慾をかいて大事な樹を元も子もなくしてしまつた。これで來年から樂しみにしてゐた林檎もたべられない」

と云つた。

【訓言】大慾は無慾に似たり。

蜜壺と黄蜂

黄蜂の群が蜜の壺を見付けて、これは意外の御馳走と、我がちに壺の中へとび込んで甘い蜜の味に思ふ存分舌鼓を打つた。そのうちに、あんまり喰べすぎて腹が破れるほど膨れ上がつて、はあすう云つてゐるうちに、此度は羽が蜜にべつたりとついてどうにも身動きができなくなつた。黄蜂は今更後悔しても、追付かず、あたら限りのない慾心のために命を落とした。

難船して濱邊へ打ち上げられた男が、劇しく波と闘つた勞れでぐつすり寢込んでしまつた。眼が醒めてからその男は口惜さうに海を罵つて、あのやうにおだやかな笑顔をして人を誘つて置きながら、愈々船に乗り込んでしまうと、忽ち氣ちがひのやうに荒れ廻つて、船も人もめちやめちやに打ち破してしまうとはなんと云ふひどい詐欺だらうと怨言を並べ立てた。これを聞いた海は女の姿を借りて、すつくとこの男の前に立ち現はれ、

「舟乗よ、わたしを怨んでおくれでない。怨むならあの風を怨むがよい。生まれつきは、素直でおだやかなことは海も陸も變つたことはないのだよ。ただ風があらしのやうに猛り立つて海の上に襲ひかかつて來ると、元々わたしの生まれつきでない氣ちがひみたまねをさせられるのだよ」

と喩した。

天文學者

むかし天文學者があつて毎晩外に出ては大空の星を眺めてゐた。或る夜のこと、いつもの通り市外の寂しいところへ出て、頭の上の星に見とれてゐるうちに足の方がお留守になつて井戸の中に落ち込んだ。天文學者は中でうんうん唸つてゐると、そこへ一人の男が通りかかつて井戸の中をのぞき込み、中に落ちた始末を聞いたとき、その人は、

「お前さんがさうやつて夢中になつて空ばかり見詰めてゐて、自分の踏んでゐる足下の地面を忘れてゐたのだから、そんな目に逢ふといふのも當り前ではないか」

と云つて笑つた。

カメレオン

カメレオンと云ふ動物は不思議に體の色を變へる。或る時二人の男がカメレオンの話をして、一人は色の靑い動物だ、大變天氣のいい日に裸の樹の上に棲つてゐる所を見たと云ふと、他の一人は、いやあれは綠色をしてゐる、無花果の大きな葉の上で長い間隨分細かく見て置いたから違ひはないと云ひ爭つた。

そこへ更にもう一人の男が來て、二人の話を聞くと、

「そりやあちやうどいい折だ」と云つて、得意らしい微笑を見せた、「實はそのカメレオンを、僕が昨夜捕まへたばかりでね、ここへ持つて來てゐるから證據としてお目にかけよう。だがお氣の毒だが君達二人とも間違つてゐる、カメレオンは靑くもなければ綠色でもないのさ」

「ぢやあ何だ」と二人は一所に詰めかけた。

「何でもない黑いのさ、ほうらね」と云ひながらかくしから小さな箱を出して見せた、ところが蓋を開けて見ると驚いた、中の動物は雪よりも白かつた。

野牛が三匹牧場で草を喰べてゐた、それを獅子が遠くで窺つてゐた、一番〆めてくれようとは思ひながら、それにしても三匹一所ではさすがの獅子もとても敵はないと考へた。そこで三匹の間に中傷を云つたり惡い意地を付けたりして、嫉妬をおこさせ敵意を抱かせるやうにたくらんだ。この計略は甘く圖に中つて、野牛共は段々お互ひに氣まづくなり、仲間われがして來て、到頭分かれ分かれになつて一人ぼつちで草を食べるやうになつた。この有樣を見た獅子は占めたぞとばかり早速飛んで行つて、一匹づゝ順々に飛び掛かつて喰ひ殺してしまつた。

【訓言】友達同士喧嘩をすれば敵に乘ぜられる。

274
獅子と三匹の野牛

275
二匹の蛙

が二匹知合ひになつた。一匹は沼の中に住んでゐて、そこには蛙の好きな水があまるほどあつた。もう一匹は少し離れた往來に棲んでゐて、そこには雨降り揚句に水たまりができる位のものだつた。沼の蛙はこの友達に勸めて是非とも早く沼へ來て一所に棲まないか、その方がどの位愉快だか知れないし、それに何よりも傍が靜かで、全く安心だからと云つた。けれども相手はどうも住みなれた所を離れることは出來ないからと云つて云ふことを聞かない。そのうち五六日して或る日のこと、重い荷車が往來を通つた、そして例の蛙はその車輪の下に壓されて、ギュウとも云はず死んでしまつた。

276
鶴と狐

が鶴を晩餐に招待した、その御馳走といふのは大きな平たいお皿にスウプを盛つただけだつた。それを狐は長い舌を舌なめづりし乍ら甘さうに吸ふが、鶴は長い嘴でどう骨を折つて見ても匂を嗅ぐ計り、一滴も喉へ入れることはできない。その樣子を狡猾な狐が傍で見て面白がつてゐた。その後間もなく、此度は鶴が狐を招待する番になつて、その時食卓に並べたものが、長細い口のついた水瓶で、その底までも鶴は樂々と嘴をつき入れることができるのであつた。かういふわけで鶴は思ふ存分意地のわるい御馳走をしてやつてゐる傍で、狐はお腹を空かして、ぼんやり見てゐる外はなかつた。一體この瓶の中には何の御馳走が入つてゐたのであらう。狐は知らない。

橄欖樹が無花果樹を嘲つて、

「お前さんはさうして秋になると葉が脱け落ちて、春が來るまでは見すぼらしい赤裸になつてしまふのだが、どうだ、わしを見るがいい、いつも〳〵青々と茂つて、ちつとも元氣が衰へないのが羨ましいだらう」

と高慢な口を利いたが、間もなく、ひどい大雪が降つて、橄欖樹の葉末までもしたゝか積つたので、樹の枝は重みに押されて段々と首を垂れ、そのうち到頭幹ごとがつくり折れてしまつた。けれども無花果樹の方は、葉を振つた枝の隙間からずん〳〵雪は漏れて落ちて、なほ幾年か後々の春まで殘つて榮えた。

或る後家さんが一羽の牝鷄を飼つてゐた。それでどうかしてこの牝鷄が卵を一度に二つづゝ產んでくれる工夫はないかしらと考へた、その結果やつとのことで、これは鷄の毎日の食物を倍にしてやるのが一番だと思ひついた。おかげでその日から牝鷄は日にましずん〳〵肥つて脂づいて來たが、もし決して卵を生まなかつた。

或る貴族の催しで公衆の娯樂のために大演藝會が劇場で開かれた。さま〴〵なめづらしい演藝の數を盡くした中にも殊にめづらしい技藝を見せたものには特別の祝儀が出ると云ふことであつた。この觸出しを聞いて玉乘やら手品使ひやら輕業師やらいろいろな藝人が諸方から集まつて來たが、名々藝盡しの趣向を凝らしたその中に、世間にもひろく名前を賣つた物眞似師があつて、此度こそはいつも出さないとつて置きの秘藝を見せるといふ觸れ出しであつた。この評判が高まるまゝに、人氣が盛に立つて、愈々當日となるとはや木戸口の開かない前から見物は押し合ひへし合ひ詰めかけて、忽ちのうちに場内は二階も下も爪の立たないほどの大入になつた。幾人かの藝人が入れ代り立ち代り前藝を演じた後、最後に眞打の格で現はれた例の物眞似師は、空身のまゝ無造作に舞臺へ出て來た。忽ち場内はしんと鳴を鎭めた。物眞似師はやがて首をちよいと懷中に差し入れて一聲豚の啼聲を出した。その聲はいかにも眞に迫つてゐるので、見物は口々に本物の豚を持つて來たのだらう、何處へ隱した何處へ隱したと言ひ募る。物眞似師は一向に落ち着き拂つて懷をすつかり明けて見せたので、見物は拍手喝采躍り上が

279
物眞似師と田舎者

つて喜ぶものもあつた。その時群集を押分けて一人の田舎者が舞臺の上にノコノコ上がつて行き、この物眞似師の藝當には一向感服しないから、明日は一番わしがもつと甘い藝を御覽に入れようと大きな聲で廣告した。そこで翌日も人氣一層湧き立つて劇場は忽ち滿員。例の物眞似師はまた今日も現はれて十八番の豚鳴を首尾よく勤めて前日に劣らぬ大喝采であつた。さて例の田舎者は、舞臺に出る前から一匹の子豚を上衣の下に忍ばせ、さあこれから本當の豚を鳴かして御覽に入れると云ふと、見物は口々に甘くやらないと承知しないぞと罵り立てる。田舎者はその時豚の耳を一つつねると、豚は痛い痛いと大聲で鳴き立てたが、見物は大變な不滿足で異口同音に、拙い拙い、詐欺だ、詐欺だと騷いだ。そこで田舎者はやつきとなつて上衣の下から勿體らしく豚の子供を引出し何が詐欺だこれを御覽本物と僞物の差別がつかないやうでは、お前さん方の耳も慥なものさと嘲つた。

年をとつた獵犬

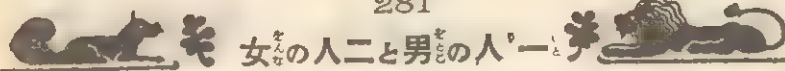
が永年主人に仕へて、獵場では數々の功名を現はしたが、寄る年には勝てず、力も衰へ脚も鈍つた。或る日、いつものやうに獵に出ると、主人は强さうな野猪を驅り出して犬を嗾しかけた。犬は獲物の耳を啣へることは啣へたが、齒が脱けてゐるので押へる力がなくつて、まご〳〵してゐるうちに、野猪は逃げてしまつた。主人は大層きびしく犬を叱つた。けれども犬はうらめしさうに、

「旦那様、わたくしの氣力はたしかなのでございますが、何分にも體が年を取つていくぢがなくなりました。どうか只今のわたくしをお叱りなさらず、昔のわたくしを思ひ出して褒めてやつて下さいまし」

と云つて、主人に抗つた。

【訓言】昔の情義を忘れてはならぬ。

一人の男と二人の女

や

や胡麻しほになりかけた中年の男が、年をとつたのと、若いのと、二人のお上さんを持つてゐた。年をとつた方は、自分の大事な男が自分より餘り若く見えるのが厭なので、逢ふ度毎に氣にしては男の頭の黒い毛を拔かせて貰ふ。それとは反對にもう一人の若い方は、自分と大變年のちがふ男を夫に持つことを厭がつて、何ぞといふと男の白髮を目の敵のやうにして引き拔いた。この二人の間に挾まつて、ついにはこの男の頭には一本の髮の毛もないやうになり、全くの禿頭になつてしまつた。

よく長旅の折などの退屈凌ぎに、手飼ひの狆や猿などを連れて行く人がある。

これもその一つで、東洋からアテネへ歸國の旅に向ふ人が猿を一匹連れて船に乗り込んだ。船がやがて本國アチカの海岸に近づかうといふ時になつて、不幸にも俄かに時化がおこつて、船はひつくり返つてしまつた。船中の客は殘らず海の中に放り出されたが、各自に一生懸命泳いで、どうかして命を助からうとあつぷあぷやつてゐた。その中に例の猿も居たが、その時一匹の海豚がそこを通りかかつてこの猿を人間だと思つて背中に載せてやつて、海岸に向つて泳いで行つた。やがてアテネの港のピレエウス近くなつた時、海豚は猿に向つて、お前さんはアテネのお人かと云つて聞いた。猿はその通りだと答へた上に、自分はアテネでも立派な身分のものだと餘計なことをつけ加へた。

「それでは無論、あなたはピレエウスを御存じでせう」

と海豚は重ねて聞いた。

猿はピレエウスを知らなかつたけれど、これはきつと羽振のいいお役人か何かの名前だらうと當推量して、

282
猿と海豚

「あゝ知つてるとも、あの男はわしの昔からの友達さ」

と高慢らしく云つた。この言葉を聞いて海豚は直ぐに猿の虚言家だといふことを悟つて、忌々しさうに、なんにも云はずそのまゝすつと海の底へ深く潜つてしまつた。仕合はせの惡い猿は早速溺れて死んでしまつた。

【訓言】 虚吐きは必らず見得坊だ。

葡萄と鹿

葡萄と鹿

が猟人に追はれて葡萄の樹の茂みに身を隠した。猟人は鹿の行方を見失つてから、つひうつかりと鹿の隠れた茂みの前を通りすぎてしまつた、もうすつかり危険がなくなつたと鹿も安心して、のそのそと首を上げて葡萄の葉を食べはじめた。それでがさがさ葉が動く音がその時帰りかけた猟人達の耳に入つたので、何処と云ふことはわからないが、何か隠れてゐるに違ひないと思つて、その見當を目がけて一本矢を射込んだ、その矢が不仕合はせにも鹿の頸元に深く立つて、今は息もたえだえになつた鹿が最後にかう云つた。

「わたしがこんな情ない目にあふのも、自分を保護してくれたあの葡萄の葉を喰べるなどゝいふ恩しらずなまねをした報ひだ。」

【訓言】恩を知らないものには自づと罪が報つて来る。

驢馬と百姓爺

百姓の爺が牧場で驢馬の番をしながら、草を喰はせてゐた。戰爭のある最中でちやうどそこへ甲冑を着た敵方の武士が一團向ふから砂煙を立てゝやつて來た。爺はそれを見るより忽ちふるへ上がつて、驢馬の手綱を引つぱりながら、少しでも早く自分を載せて逃げてくれと頼んだ。

「それでないと、二人とも敵の俘囚になつて了う」

けれども驢馬はけろりとした顔を振向けて、

「でもわたしが俘囚になつて行つたら、今の二倍も重い荷物を背負されるでせうかね」と聞いた。

「そんなことはない」と主人は云つた。

「あゝさうですか」と驢馬はすました顔をして、

「そんならわたしのくらしは別に惡くもならないのですね」と云ひながら草を喰べてゐた。

285 山羊と葡萄樹

が葡萄畑の中をぶらつき乍ら立派な房が鈴生りに下がつてゐる葡萄の蔓を引つぱつて咬みはじめた。すると、

「そんなにわたしをいぢめて一體何をわたしはお前にしたといふのだ」と葡萄樹が怒つて云つた。「お前さんの喰べる草は澤山あるぢやないか。だがそんなにしてお前さんがわたしの蔓に生えた葉を喰ひ荒らして、すつかりわたしを坊主にしてしまつても、わたしの方ではやつぱり仇を恩で返してやる。いつかお前さんが犧牲の羊になつて祭壇に上げられるときには、わたしはたつぷり葡萄酒をお前の頭にかけてあげるよ。」

286 尻尾の無い狐

が或る時罠に掛かつて、それでもやつとのことで體は抜けたが、尻尾を取られてしまつた。それからはどうも自分の姿が恥しくつて堪らない、どうかして外の狐共もみんな自分と同じ尻尾のない姿にして氣を休めなければ生きてゐる空はないやうに思つた。そこで狐は狐の一類の大會を召集し、以後はみんな尻尾を切ることにしようといふ議案を出した。狐の言草はかうである。

「とにかくこれはみつともないものであります。それに重たくもありますし、こんなものをいつもいつもうしろに引ずつて歩くといふことは實に厄介千萬ではありませんか。」

けれどもその時集まつた狐の一個が云つた。

「しかし君、君自身そのやうに尻尾を無くされなかつたならば、何もそんなに性急に我々共の尻尾まで切つてしまへとは云はれなかつたでありませう。」

【訓言】甘い言葉に欺されるな。

が大病を煩つて自分で食物をとることもできず、弱りきつて洞の中に寢てゐた。そこへ友達の狐が見舞に來たので、

「ねえ君、一つ御苦勞だがあの彼方の森まで行つてね、あすこにゐる鹿を欺してこの洞まで連れて來てもらひたい。あの鹿の心臟と腦漿で晩餐をやりたいと思ふのだから」

と云つた。そこで狐は森の中へ出掛けて行つて、鹿を訪ねてかう云つた。

「旦那、あなたはお仕合はせな方ですせ。ほら御存じの獅子の王樣な。ねえ、あの通り大病で死にかゝつてゐるでせう、そこで死に際に旦那を一番自分の跡釜に据えて獸の國の大王にして上げたいと仰しやるのです。どうかこんなおめでたい報知を第一番に持つて來たのはこのわたくしだといふことを覺えてゐて下さいまし。そこでこれからわたくしも獅子の王樣の所へ歸らなければならないのですが、どうです、わたくしと一所においでになつて、獅子王の御臨終に逢つてあげては。」

鹿はこの甘い言葉にすつかり欺されていい心持になつてしまひ、ちつとも疑はずに狐のいふとほり獅子の洞へついて行つた。しかし鹿が洞の中へ入るといきなり

獅子は鹿をめがけて飛びついたが、ねらひが外れて鹿は片耳を少し破られただけ、這々の體で森の中へ逃げて歸つた。狐はつまらない顏をする、獅子も何しろ病氣はしてもお腹の空ききつてゐるところだから、見す見す好い餌をとり外してひどくがつかりしてしまつた。そこで獅子はもう一度鹿を欺して連れて來て吳れるやうにと狐に賴むと、狐は

「此度はとてもだめだらうとは思ひますが、まあやるだけはやつて見ませう」

と云つてまた森へ出かけて見たが、鹿はせいせい息を切つて逃げて來た跡の疲れを休めてゐる。それで狐の姿が見えると鹿は尖がり聲を振り立てて、

「この惡黨め、わたしを欺かしてよくも獅子の餌食にしようとしたな。さあ畜生、行つてしまへ、行かないとこの角にかけて殺してしまふぞ。」

かう云はれても狐は一向洒々した顏付をして、

「おいおい、お前さんはなんといふ臆病者です。獅子の王樣が何かお前さんに怪我でもさせようとしたと思つたのですかい、馬鹿々々しい。だつてさ、大王樣が何か內所でお思召をお傳へなさらうと思つて耳の所へ口を持つて行くと、いきなり兎

が鐵砲で打たれでもしたやうに、夢中で驅け出して行くのだもの。あれで大王様はすつかりおこつておしまひなすつたから、事によると獸王の位は狼にでもおやりになるかも知れない、だから早くもう一度行つてほんたうの精神を見せておかないと、折角の寶をむざむざ外の奴に占られて了ひますよ。大丈夫あの方がお前さんをどうなさりやう筈はない、そりやあわたしがちやんと請け合つて置きますよ。」

鹿は馬鹿な獸でまたもうまく〳〵と狐に釣出されて、さてはさうかと、性懲もなくのこのこ獅子のところへ出かけて行くと、此度は獅子もねらひを外さず一息に鹿の息の根を止めてしまひ、跡はたらふく御馳走の食べあきをした。この間狐はそつと傍から隙をうかがつてゐたが、獅子が一寸食べすぎて眠くなつた間にこつそり鹿の腦漿を引いてしまつた。その跡で獅子が思ひ出して鹿の腦漿を探しはじめたが勿論ある筈はなかつた。狐は傍でこの樣子を見て、

「あなた鹿の腦漿などをお探しになつてもむだでせうよ。二度までも釣られて獅子の洞窟へ出てくるやうな大馬鹿者に、元より腦漿なぞのありやう筈はないぢやありませんか」と云つて笑つた。

鳥が病氣で鳥屋についてゐるといふことを猫が耳に入れた。そこで猫は醫者のやうな身形をとゝのへ、商賣用の道具を携へて鳥屋の扉口に現はれ、御病氣のお見舞に參つたと申入れた。しかし鳥は猫をば中へは入れずに、

「わたしどもはあなたがまるで御見舞下さらなかつた方が、却つて安心のやうに存じます」

と答へた。

【訓言】惡者がいくら姿を飾つても、賢い者を欺くことはむづかしい。

腹と手足

手足が腹に向つて謀叛をおこした。彼等は腹に向つて宣言して云ふには、

「お前は毎日為ることもなくぶらぶらと贅澤三昧に暮らしてゐる、それに引きかへ吾々は、明けても暮れても働きづめに働いて、それでつまるところはお前の奴隷になつて、お前を養ふためにむだ奉公をしてゐるやうなものだ。もう吾々もいつまで我慢してはゐられない。さあこれでお前と吾々との縁は切れた。これからどうでもお前はお前だけの身の振り方を付けるがいい。」

彼等はその宣言の通りを實行して、その日から食

事も運ばず、湯茶も取次がず腹が餓ゆるまゝに打ちすてゝ置いた。けれど結果は云ふまでもなく分かりきつてゐる。體は日に増し衰へて來て、手足は元より體中の何處も彼處も一度にだめになつてしまつた。そしてもうかうなつては手足も今さらつくづく馬鹿なまねをした、と悔んでも追つつかないことになつた。

【訓言】世の中は相持ち。

父親と二人の娘

或る人が二人娘を持つてゐたが、一人は植木屋へ一人は瀬戸物屋へお嫁にやつた。しばらく經つてから一體娘達はどうしてゐるかしらと思つて、父親は様子を見に出掛けた。最初まづ姉さんの嫁いてゐる植木屋へ行つて、どんな様子だ、旦那様との間はむつまじく行つてゐるかいと云つて聞くと、娘はえゝえゝ大變都合好く行つてゐますと云つて、

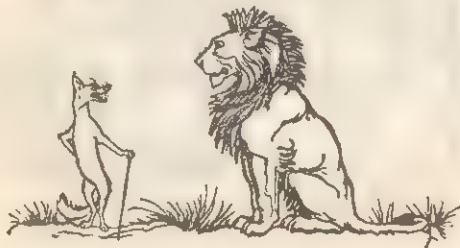
「ただ一つの望みはどうかして、ざあッといいお濕りがあつてくれゝばいいと思ひます。植木に水が足りなくつて困るんです」と云つた。

それから父親は、此度は瀬戸物屋のお嫁さんになつてゐる次の娘を訪ねて、同じことを云つて聞いた。娘は夫婦の仲にちつとも不足はありませんがと云つて、

「ただどうかいいお日和がつづいて瀬戸物がよく乾くやうにしたいと思ひます」と云つた。父親はそれを聞いて思はず娘の顏を見ながら、さもをかしさうに

「お前はお天氣であればいいといふし、姉さんは雨が降ればいいと云ふ。わしはお前達の願ひをどうか叶へて頂くやう神樣にお願ひしようと思つたが、こりやあ何んにも云ひ出さなかつた方がよかつたわい」と笑つた。

狐と獅子

生まれてまだ獅子といふものを見たことのなかつた狐が、或る日はじめて獅子に出會つて膽魂も身に添はず、命から〳〵逃げ出した。その後しばらくして狐はまた獅子に逢つたが、恐さは恐いが初めての時のやうなことはなかつた。それから三度めに逢つた時には、なんのもう恐がるどころか傍へ寄つて馴々しく昔からのおなじみででもあるやうな口を利いた。

が或る時咽喉に骨を立てた。そこで狼は鶴のところへ出掛けて行つて、その長い嘴を咽喉の中へ突込んで、骨をぬいてくれと頼んだ。鶴は頼まれるとほりにしてやつて、わけなく骨を抜いた。狼はいや有難うと云つたまゝ行かうとすると、鶴は呼びとめてかう云つた。

「ちよいと、療治代はどうしてくれるんです。」

「何がどうしたと」

と狼は打つて變つて嚙みつくやうに、歯を剝き出し乍ら、

「貴様、狼の口の中へ首を突つ込んで置きながら、嚙み切られもせず、無事に生きて返つたことを手柄話にして吹聴しろ。それだけでも有難いことだと思ふがいいのだ」とどなつた。

【訓言】貪慾と感謝は兩立せぬ。

「善」と「惡」

世界がまだ若かつた時代に「善」と「惡」とが同じやうに人間の會社に入つて來た、從つて「善」も人間をすつかり樂しくせず「惡」も人間をすつかりみぢめなものにできなかつた。けれど人間が馬鹿だものだから、その中に「惡」が大變數を增して勢も强くなり、終には人間界の一切の事柄から「善」は取除られてこの地球の上に「善」の影をも見ないやうになつた。そこで「善」はオリムポスの神座に赴き萬物の主のユピテル大神に自分の境遇を訴へた。大神は「善」に諭して、これからは決して「善」の仲間が公然に大勢固まつて人間の前へ出ることをやめるがよい、それでは却て敵の「惡」の攻擊をうけやすい、それよりか單身で、人間の眼に掛からないやうにして、時々ひよつこり思ひもかけない隙をねらつて出るやうにしろと言ひ渡された。かやうなわけで、この地上には今日「惡」が一杯にはびこつてゐて、所かまはず勝手に出入する、決して遠くへ行つてしまふといふことがない。それとは違つて、情ないことには、「善」はやつと一人々々こつそりと來る、しかも遙々の道をオリムポスからやつてくる、それがためこの世に善の姿を滅多に見ることができないのである。

虻と牡牛

虻が牡牛の角に止まつて、やゝしばらくそこに休んで居た。十分に休息してくたびれもすつかりぬけたので、また飛んで行かうといふ時に、虻がお禮心で牡牛に云つた。

「ではわたしはお暇をいたしますよ。」

牡牛はちよいと上眼をあけて、何のつまらないと云つた風で、

「どちらでも御勝手だ。わしはお前の來たことも知らなかつた。それが出て行つたところで何のかはつたこともない」

【教訓】吾々はごうかするご自分の眼にばかり偉さうに見えて他人には何ごも思はれないこごがある。

駱駝

駱駝といふ獸を初めて見たときには、さすがの人間もその異形にびつくりして逃げ出した。そのうち段々この獸の見かけによらないおとなしい素直な性質を見ると、こはいことは忘れて傍へ寄つて來た。間もなくこの胴體ばかり大きな駱駝が、一向氣力も何もないことが分かると、すつかりずう〳〵しくなつて、口に轡をはめ、重い荷物を背負はせて子供に追はせるやうになつた。

矢と鷲

鷲が高い巖の上に下りて、鋭い眼を光らせながら獲物を待ち構へてゐた。それを山の狭間にかくれてゐる獵師が見付けて矢を放した。矢はあやまたず鷲の胸をぐさと射貫いた。鷲は必死の痛手に狂ひ廻りながら、ふと自分の胸に刺さつた矢羽を見て、

「あゝ、情ない目に逢つたものだ。俺はこのまゝ命を失くさなくてはならないのか。それぱかりぢやない、これはどうだ、情ない上にも情ないのは、現在俺の命を取つて行く矢羽は、同じ仲間の鷲の羽だつたのだ。」

馬と驢馬

馬が燃え立つやうな朱總の手綱に美しい黄金の鞍を置いて貰つて、大威張で往來を走つて行くと、よぼよぼした驢馬が重い駄荷に押されてうんすん云ひながら、彼方からやつて來た。驢馬は勢ひ好く走つてくる馬の通路を避けようとしたが仲々はかどらないので、馬は肝癪をおこして、ぐづぐづすると蹴飛ばすぞとどなりつけた。驢馬はじつと虫を抑えて、おとなしく側を通つて行つたが、馬の云つたことは忘れずにゐた。その後間もなく馬は脚を痛めて乘馬の役に立たず、百姓の手に賣られてしまつた。或る日のこと、例のとほり馬は肥車をひいて行くと、先日の驢馬にばつたり出會つた。驢馬はここぞと嘲笑つて、

「いやはや、お前さん先達ては大した威勢だつたつけが、もうそんなにおちぶれたとは知らなかつた。あの奇麗な手綱やぴかぴか光る鞍はどうしましたね」

と云つた。

蜂と鷓鴣と百姓

蜂と鷓鴣とが咽が渇いてたまらないので一軒の百姓家を訪ねて水を惠んでくれと頼んだ。その代りには何でもいいものをお禮すると云つた。鷓鴣は、わたしは葡萄の樹のまはりを堀つて、葡萄がよく實るやうにして上げようと云つた。蜂は、ではわたしは門番になつて、盜坊が來たらこの劍で刺してやらうと云つた。

百姓はそのとき、まあまあと遮つて、

「わたしの家には二匹の牛がゐて、別段そんな約束もしないが、お前さん達の今云つただけのことは默つてしてくれます。わしにとつてはこの牛に水をやる方がよつぽど役に立ちさうだ」

と云つた。

【訓言】言立はかり言ふものに碌な働きはできぬ。

狼と人間の母子

が、お腹を空かしてうろ〳〵獲物をあさり歩いてゐると、一軒の小屋から子供の泣聲が洩れて來た。狼はそつとその家の窓下に忍び寄つて耳を立てると、母親が子供を叱つて、

「お泣きでない。泣くと狼に喰べさせてしまふよ」

と言つてゐる。狼はこれを聞いて、こいつは占めたとほくほくしながら待つてゐた。そのうち夕方になると、母親は子供をあやしながら、何をいふかと思ふと、

「あのいけない狼の奴なんかにどうして可哀い坊やをやりませう。狼の奴が來たら坊や打ち殺しておやりよ」

と云つた。狼はぷんぷん怒つて立ち上がりながら、

「人間位噓吐きはないぞ」とつぶやきつぶやき出て行つた。

【訓言】敵の約束位當てにならぬものはない。

蝙蝠と茨と鷗

蝙蝠と茨と鷗とが組合つて、海上貿易に出た。この企業のために蝙蝠は多額の金を借金した。茨はいろいろの衣服類を貨物船に積込んだ。それから鷗は鉛を、これも多量に仕入れた。一同は船出をしたが、ところが運悪く途中大時化に出遭つて、船は貨物を積んだまま下の海底に沈んでしまひ、三個は辛うじて命からがら陸に泳ぎついた。それからと云ふものは、鷗はいつも海の上をあちこちと飛び廻つては時々水の下へ首をつつこんで失くなつた鉛の行方を尋ねてゐる。蝙蝠はまた借金取がこはいので晝間は隠れて姿を見せず、夜になつて食物を漁りに出るだけだ。それから最後に茨はと云ふと、やたらに傍を通る人の着物を引張つては、いつか失くした衣服を見付けたら、取り返さうとばかりしてゐる。

【訓言】人は足りないものを新らしく造らうとはしないで無くしたものを取りかへすことばかり考へてゐる。

獅子と鼠

の寝顔の上を鼠が駆け上がつた。獅子は腹を立てて鼠を一摑みに殺さうとした。「どうぞ命だけはお助け」と鼠は哀しい聲を出した、「いつかきつとこの御恩返しは致しますから。」「こんなちつぽけな奴が」と獅子は笑ひ出しながら、上機嫌で放してやつたが、或日のこと獅子はふと獵師がかけておいた網にひつかかつて、さすがの獸王もどうすることも出來ないで困つてゐた、そのとき鼠は獅子の怒つて吼える聲をきくと、直ぐに駆けつけた。もう一刻の猶豫もない、小さな歯で縄を咬みきりきり獅子を首尾よく助け出した。「ほら御覧なさい」と鼠は云つた、「いつか私が御恩返しをすると云つたらあなたはお笑ひなすつたが、此通鼠でも獅子を助けることができるのです。」

獅子と鼠

──ドレエ畫──

不仕合せな結婚

のおかげでさすがの獅子王も、命が助かつたのを大變有りがたく思つて、この恩返しには何でも望むものを褒美にやらうと云つた。

鼠は體の小さいくせにとんでもない大望をおこして、獅子のお孃さんをどうかわたしの奧さんに下さいと云つた。氣のひろい獅子はよしよしと鷹揚に笑つて、娘の獅子をちよいとここへおいでと呼んだ。獅子の娘は何の氣もつかす、いつものやうに大股に走つて來るうちに、脚下に小つぽけな鼠のゐるともしらず、いきなり前足で踏みつけて殺してしまつた。

【訓言】身に及ばぬ非望をおこすな。

犬

が冬の間は寒さにいおけて一生懸命體を縮めて丸くなつて寢ながら
これでは一軒小さい家を作らねばならぬと考へてゐた。やがて冬がすぎて夏が還つてくると、犬は體をのびのびと長くして、急に自分の體が倍も大きくなつたやうに思つた。そしてこんなに體か大きくなつては、もうそれに釣合ふやうこ家をこしらへることも容易ではないし、むだなことだと思ふやうになつた。

* * * * * *

に咬まれた男が療治の方法はないかと云つてそこらを聞いて歩いた。
そのとき友達の一人が、
「さういふことなら、麪麭を一片ちぎつてそれに傷の傷口から出る血をひたして、その咬んだ犬にやるといいよ」
と云つて敎へてくれた。この忠告を聞いたその男が笑つて云ふには、
「はあてなあ、そんなまねをしたら、町中の犬がのこらずわたしを咬みに來て困るだらうよ。」

薊を食ふ驢馬

がちやうど刈入時で、畑に出てゐる百姓達の晝飯の御馳走を背中に一杯積んで行く途中、丈の高い頑丈な薊の路傍に生えてゐるのを見付けて、むしやむしや食べながら、
「かうして背中に餘るほどの食物を背負ひながら、その御馳走には手もつけないで、こんなものを食べるのを他人はをかしいと云ふかも知れないが、わたしに取つてはこの苦いとけとげした薊が第一の御馳走なのだからなあ」とつぶやいた。

猿の母子

猿の母子

の母親が二匹の子猿を生んだ。どういふものか一匹の方をひどく可哀がつて大事にかけて育てたが、もう一匹をば厭がつて構ひつけなかつた。ところが大事にされた方は、あんまりいたはりすぎたために病氣をおこしてひくひくしてゐる。それとはちがつて構はれない方はずんずん育つて丸々と丈夫な兒になつた。

或る日、母猿は二個の子供を連れて人里近いところまで食物をあさりに行つたが、犬に見付つて追つかけられた。猿はあはてながら、可哀がつてゐる方の子供を後生大事と抱きすくめて、逃げ出す途中、あまり夢中で駈けて、木の根に跌き、子供の頭をしたたか打つたので、可哀さうに、子供の腦漿はとび出してしまつた。それとはちがつてもう一個可哀がられない方の子供は、かまはず置去りにして行かうとする母親の背中に、無理としがみ付いて走つたので、却つて命は無事に助かつた。

306

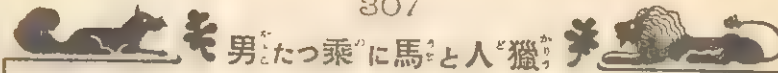
燕と鶯

燕が鶯と話をして、どうだね、君もいつまでも森の中に隱居してゐないで、私達と同じやうに人間の中に出て來て、人間の屋根の下に巣を食つてはと勸めた。鶯は答へて、

「なあにわたしだつて昔は君達のやうに、人間の中に入つてくらしたこともある。だがあすこではわたしも隨分ひどいめに逢はされてゐるからね、どうもそのいやな舊棲へ二度と近寄る氣にはなれないのよ」

と云つた。

【訓言】　昔ひどいめに逢つた場所には厭な記憶が甦つて來る。

獵人と馬に乘つた男

獵人が獵に出て兎を一匹捕へたので、大威張で肩にかついで家へ歸つて行かうとすると、途中で馬に乘つた男に出逢つた。

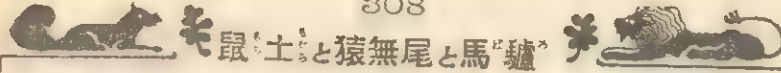
その男は聲をかけて

「いよう、仲々すばらしい獲物ですね」

と云ひながら手を出してその兎を賣つてくれと云つた。獵人は一も二もなく承知して兎を渡すと、その男は手にとるが早いか、馬に拍車をくれて全速力で駈け出した。獵人はしばらくは跡を追つかけて見たが、やがてこれは一杯はめられたと覺つたので馬に乘つた男を追つかけることはあきらめた、それでも負け惜しみにわざとありつたけの大きな聲を出して、

「よし、よし、兎は持つて行きたまへ。君に上げるつもりでゐたのだから」

とどなつた。

驢馬と尾無猿と土鼠

驢と尾無猿とが或る日寄つて愚痴をこぼし合つた。

「わたしの耳はあんまり長すぎるので他人が笑つて仕方がない」

と驢馬が云つた、

「どうかして牛のやうな角がほしいなあ」

「わたしもお尻を他人に見られるのが恥づかしい」

と猿が云つた、

「狐の奴ほんたうに澤山さうに尻尾をぶらさげてゐるのがうらやましい」

―もうお默りなさい、二個とも―

この二個の愚痴を傍で聽いてゐた土鼠が口を出した、

「わたしを見るがいい、角もなければ尻尾もない、その上まるつきり目の見えぬ盲目ぢやないか」

燕が或る時鴉に向つて自分の身分の尊いことを自慢して、

「わたしは元アテネの王様の娘で、多勢の侍女に侍づかれた身の上だつたのだよ。それがね、わたしの夫になつた男がひどい人間でね、わづかの過ちのためにわたしの舌を断つてしまつたのだよ、それをユノオ様が御覧になつて、この上またどんな目に逢ふかもしれないといふのでわたしを鳥にして下すつたのだよ」

と云つた。鴉はしかし、

「まあおしやべりもいい加減にしろよ。お前に舌がなくならずにゐたとしたところで、今よりもどれほどお見上げ申すことができるか、わたしには考へがつかないからなあ」と云つた。

＊　＊　＊　＊　＊

燕と鴉が各自にわれの羽が奇麗だ、かれの羽が美しいと云つて争つた。しかしおしまひに鴉が、

「お前さんの羽の奇麗なのは春だけだ。俺の羽は一年中黒い」

と云つたので喧嘩もおしまひになつた。

309
鴉と燕

310 狐と猿

と猿とが一所に歩きながら、お互ひに自分の方が家柄が良いと言つて喧嘩をした。かうして喧嘩をして行くうちに、墓石の一杯並んでゐる墓地をぬける道に出た。そのとき猿は立ち止まつて、そこらを見廻しながら大きな溜息をついた。

「なんだつて溜息をつくのだ」と狐が聞くと、

「ここにこんなに並んでゐる墓碑は、みんな僕の先祖の名譽を記念するために建てられたもので、それぞ〳〵その時代には偉かつた人達なのだ。」

さすがの狐もしばらく呆氣にとられて口も利けなかつたが、氣を變へてかう云つた。

「なるほどね。まあ君、なんでも吐けるだけ嘘をついて見るさ。大丈夫、君のえらい先祖が墓穴の中から出て來て、君の嘘を目の前にひきめくる氣づかひはないのだからなあ。」

【訓言】法螺吹は見破はされる虞がないときに、出來るだけの大法螺を吹く。

311 荒馬と人間

或る若者が一廉馬術家になりすました氣で、碌に馴らされてゐない荒馬に乘つた。馬は背中に何か乘つたと思ふと、いきなり駈け出してもういくら止めても止まらない。この氣の毒な馬術家の友達が通りがゝりに、一生懸命逆さになつて鞍にしがみついてゐる若者の姿を見て、

「君、なんだつてそんなに夢中になつて何處まで駈け出して行くのだい」と聞くと、若者は辛うじて自分の馬を指さしながら、蚊の泣くやうな聲で、

「僕にも分からない。馬に聞いてくれ」

と云つたまゝ相變らず駈けて行つた。

獅子と熊と狐

と熊とが同時に小羊にとびかゝつて獲物爭ひを始めた。段々長びくほど喧嘩は猛烈になつて、しまひにはお互ひに勞れ切つて、双方したゝか重い傷を負つたまゝ地の上にぶつ倒れて、はあはあ息を切つてゐた。この間始終一匹の狐がそこらをうろうろして、喧嘩の勝負如何にと見張つてゐたが、愈々兩戰士ともへとへとになつて身動きもできなくなつたと見ると、ちよこちよことそこへ出て行つて、小羊を浚つたまゝ跡も見ずに駈けて行つてしまつた。殘つた二個は顔を見合はせて、

「俺達は一生懸命死ぬほどの喧嘩をして、狐にみんなしてやられた」と嘆息した。

牝豚と狼

牝豚が子を產んだのを狼が見て、或日豚小屋を訪ねて、子供に乳をやつてゐる母親に馴々しく言葉をかけた。

「奥さん、今日は、御機嫌は如何。お子さん方もお丈夫で結構ですね。だが毎日お產所に入りつきりでは毒でせう。少し風に吹かれていらつしやい。私がお守をしてあげますから。」

「どうも御親切様」と牝豚は鼻の先で答へた。「あなたがまあどんなお守をして下さるでせう。いつそもうどうぞ後生ですからお顔をお出し下さらないやうに。その方が勝手です。」

といふ獸は誰にも如才なく付き合ふので、何處へ行つても友達や知合のあることを自慢にしてゐた。すると或日のこと獵犬が大擧して押しかけて來るといふ噂を聞き、かういふ時こそあの澤山な友達に助けて貰ふ時だと思つて、まづ第一に馬を訪ねて、犬の來ないうちに背負つて逃げてくれと賴んだところが、馬は主人の用で暇がないといつて斷はつた。

「まあ澤山ある友達だ」と馬は云つた。「外へ行つて聞きたまへ。」

そこで兎は牛のところへ行つて、その強い角にかけて犬を追拂つて下さいと云つた。

「いやあどうも」と牛は頭を掻いた。「今日はわしは奥樣の御用を勤めなきやならない。山羊のところへ行つたらどうだ」

ところが山羊のところへ行て賴むと、山羊は兎をのせてやつてもいいが怪我を

させると惡いからと斷つて、牡羊なら大丈夫だらうと云つてくれた。それで又もや牡羊のところへ出かけてわけを話すと、

「氣の毒だがそりや此度にしてもらひたいな」と牡羊は云つた。「君、獵犬から見りやあ羊も兎も同じことだからねえ。」

もう兎は氣が氣でなく、愈々最後の心賴みに犢を訪ねて同じことを賴んで見た。しかし犢は、まだ自分は親がかりの身の上で、どうして年をとつた人達のみんな辭退された跡などを自分が引受けるどころぢやないと云つた。さうかうする中に獵犬は間近く追ひ迫つて來たので、兎はもう他人を賴んでゐるひまはない、足に任せて逃げ出した。

【訓言】友のあまり多きは友なきに同じ。

犬と羊の訴訟

が羊に向つて貸金請求の訴訟をおこした。すると狼が裁判官になり、狐と兀鷹が證人に立つた。事件の審理をするまでもなく、忽ち原告に勝訴の判決が下り、債務も、裁判費用も、證人の報酬も、何もかも一切可哀さうな羊の軀で償却された。

【訓言】私利を計る裁判官に公平な裁判は出來ぬ。

熊と蜜蜂

が花園の中に入つて、蜜蜂の巣を見付けると、引繰返して中の蜜を甞めようとした。蜜蜂は大變腹を立て、忽ち群つて來て熊を取圍んだ、熊は何を小癪なといふ勢ひで右に左に叩附けたが、敵は入れ代り立ち代り何千ともしれぬ新手が紛紛と凄じい唸聲を立てゝ、熊の頭の周にたかつて、眼といはず鼻といはず喙立てるので、さすがの熊も到頭氣ちがひのやうに躍り狂つて、自分で自分の爪を頭に立てゝ皮を引き裂いてしまつた。

占ひ者が盛り場に占ひの店を出して、迷つて來る男女の身の上や運勢の判斷をやつてゐた。そこへ突然近所の男が飛んで來て、占ひ者に、たつた今お前さんの家に盜坊が入つて、手當り次第家財道具を引つ擔いで行つてしまつたと注進した。これを聞くなり占ひ者はびつくり仰天、往來に飛び出して髮の毛を掻き挘るやら、地圖太を踏むやら、大聲を揚げて災難をくやみながら、盲目滅法駈け出して行つた。往來の見物はこの樣子を見ておもしろがつてゐたが、そのうちの一人が、

「あの先生は高慢な顏をして他人の運勢を見通したやうなことを言ひながら、占ひ者身の上しらずとは笑止千萬」

と云つて笑つた。

頭の毛がすつかり失くなつたので假髮をかぶつてゐる紳士が、或る時獵に出た。折々ひどい風が吹く日で、たんとも行かないうちに、さつと吹きまくる一陣の風と共に紳士は帽子をさらはれた。帽子だけならいいが、それと一所に頭の假髮まで空高く吹き上げられてしまつたので、一所に行つた人達は思はず哄と笑つた。けれども紳士は澄ました顏をして冗談らしくかう云つた。

「いやはや。あの假髮の毛は舊の主人の頭にさへも落ち着いて付いてはゐなかつた位だから、新らしい主人の頭に付かないのもふしぎはありませんよ。」

蟹と狐

が或る時海邊の住居を捨てゝ、陸の上へ上がつて見て、青々と草の美しく生えた牧場を見つけ、かういふ所に住んだら、食物も澤山あるだらうし、どんなに愉快だらうと考へてゐると、そこへひよつこりお腹を空らした狐が出て來て、蟹を見つけると、直ぐつかまへてしまつた。愈々食べられようとする段になつて、蟹が嘆息して云ふには、

「こんなことになるもみんなわたしが惡かつたのさ。何もわたしは海邊の古い家を捨てゝ、元元陸の者でないのにこんなところへ來て住まはうなどとしたのが間ちがつてゐるのだ。」

【訓言】自分の運命に安んぜよ。

蟬と蟻の事

蟬と蟻——龍と人

(萬治版本「伊曾保物語」插畫)

狼と狐 —— 鳩と蟻

（萬治版本「伊曾保物語」挿畫）

たつと人の事

或冬の半に蟻ども數多穴より五穀を出して、日に曝し、風に吹かするを蟬が來てこれを貰うた。

蟻の云ふは、

「御邊は過ぎた夏秋は何事を營まれたぞ。」

蟬の云ふは、

「夏と秋の間は吟曲に取紛れて、少しも暇を得なんだに由て、何たる營もせなんだ」

と云ふ。蟻

「實にも其分ぢや、夏秋謠ひ遊ばされた如く、今亦秘曲を盡されてよからうず」

とて散々に嘲り、少の食を取らせて戻した。

下心

人は力の盡きぬうちに、未來の務をすることが肝要ぢや。少の力と閑ある時、緩樂を事とせる者は必ず後に難を受けいでは叶ふまい。〔文祿古譯本〕

* * * *

河の邊を馬に乘て通る人有けり。其傍に龍と云物、水に離て迷惑する事有けり。その龍今の人をみて申けるは我今水にはなれてせんかたなし、哀みをたれ給ひ、其馬に乘て水有所へ付させ給はゝ、其返報として金錢を奉らんと云。彼人誠と心得て、馬に乘て水上へおくる、そこにてやくそくの金錢をくれよといへば、龍いかつて云何の金錢をか參らすべき、我を馬にくゝり付ていため給ふた上に、金錢とは何事ぞとあらそふ處に、狐はせ來て、扨もたつ殿は何ごとを諍ふぞと云ふに、龍右の趣をなん云ければ、狐申けるは、我公事を決すべし、先にくゝり付たる樣は、何とかしつるぞと云に、たつ申けるはかくかくのごとしとて又馬に乘程に、狐人に申けるは、いかほどかしめ付らるゝぞと云程に、是程とてしめければ、たつの云く、まだ其位なし、したゝかにしめられけるといへば、これ程かとていやましにしめ付て、人に申けるは、かゝる無理無法の徒者をば本の所へやれとて追立たり。人實もと悦て本のはたにおろせり。其時たついくたび悔め共かひなくして失にけり。其ごとく人の恩をかうふりて、それを報ぜぬのみならずかへつてあだをなせば、天罰たちまちあたる物なり。これを覺れ。〔萬治古譯本〕

狼と狐の事

或狐、川端に居て魚を食するところに、狼上に臨うで其處へ來て云ふは、「われに其魚を食はせい」
狐答へて云ふは、
「それがしの食殘したをば何として參らせうぞ、籠を一つ下さらば、お望の儘に魚を捕る調義を敎へ申さうずる」
と云ふ。狼
「それは何より容易いことぢや」
とて近い里より籠を取つて來た。狐かの籠を狼の尾先に括附けて、
狐「これを此川の中で先へ曳かせられい、吾等後より魚を追入れうずる」
と云へば、狼實にもと喜うで、水の中に跳入つて、泳ぎゆく。狐後から石をひたもの取入るゝに由て後を見て遐り、
「魚が多く入つたやら、はや先へ行くことが叶はぬが何と」
と問うた。狐
「まことに過分に魚が入つてござるに由て、吾等が力では引上げ難い、さらば誰ぞ合力に雇はう」
とて近い里に往いて、
「この邊に羊を食ふ狼、唯今水に溺れて死せうとするぞ、人々來て殺せ」
とのゝしれば、吾先に走行いて、川の中な狼を散々に打擲するに、或人刀を拔いて斬うとしたが、斬り外いて尾を打切つたれば、辛い命ばかり生きて山へ入つた。又その時分獸の王である獅子病して大事に極ろに由て、いづれも獸ども踵を接いで、其山に伺候する。其中に狼も出て云ふは、
「われ此程名醫に傳へ申したことがある、この御煩の病症には唐物も和藥も用ゆるに足らぬ、唯狐の生皮を剝いで、まだその暖まりの去らぬうちに、皮肉を包み暖めさせられれば御平癒あらうずる」
と。然るを其邊に狐の穴があつて、竊に聞いて、或略をせうとて全體を泥の中に投げて、見苦しく汚れて獅子王の前に敬跪つた。獅子、狐を招き、
「近う來い、言はうずることがある、今日より汝を我妻と定めう」
と云うたれば、狐答へて云ふは、
「仰は天山辱いと雖も、御覽ぜらるゝ如く餘に泥

鳩と蟻の事

に汚れて御座をも不淨になし奉らば愈お煩の案ともならうず、然らば罷歸つて身をも淸めて參らうずる」
と言終つてから、
「われ此頃これらのお煩に妙藥があることを習うてござる、但しあるまじいことなれば良藥と申しても益ないことか、千萬に一つもあるに於ては狼の尾の切れたを取つて、生皮を剝いで、また暖かまりの冷めぬうちに、皮肉を包ませられれば、最も奇妙不思議な藥ぢや」
と云うたところで其傍に件の狼が居たを忽ち摑うで引寄せ、面と手足の皮ばかりを殘いて、丸剝に剝いで、獅子の全體を包み、狼をば其儘差放いた。折節夏のことなれば蠅蝿が群つてせゝるほどに、狼の悲は唯一つでもなかつた、さて件の狐或岡に休んで居るところに、彼狼あはれといふもおろかな體で過行くを見て狐が呼掛て云ふは、
「唯今彼程の炎天に頭巾を被ぎ、足袋を穿き、弓懸を佩いて、此處を過ぐるは誰ぞ」
と散々に嘲り、
「いかに狼奢つ聞け、人の上を訴ゆる者は、血を銜んで人に吐掛くると同じことぢや、吐掛けうとするよりも、先その口を汚すと云ふことがある、忠言をこそえ言はずとも、せめて讒言を吐くな」
と云うたと申す。

下心

讒者の終に身を害するは、其身の口ゆゑぢやといふことを思へ。〔文祿古譯本〕

• • • • ● ●

或時蟻が海邊に出てゆくところに、俄に大きな浪が打つて來て、引遂れられ既に命も危い體に漂ひゆくを、梢から鳩が見たが、それが難儀を救はうと思うたか、樹の枝を喰切つて、蟻の邊へ投げ落せば、蟻は大に便を得て、其枝に上つて水際に上つた。暫して或人が來て其の樹の枝に鳩の羂を刺いたれば、かの蟻ただ今の恩賞を報ぜうずると思つてか、その人の足をしたゝかに喰うたれば、羂を投棄てて先その足を撫摩る間に鳩はこの由を見及んで、忽ちそこを立つて往んだと申す。

下心

人より恩を蒙つては、そなたもそれを報ぜう志をお持ちあれ、恩を知らぬ者は蟻蟲にも劣るといふことぢや。「文祿古譯本」

孔雀と鴉の事

孔雀と鴉——獅子と馬

（萬治版本「伊曾保物語」挿畫）

或鴉おのれが人物を驕慢し、孔雀の羽根を見付けて此處彼處に纏ひ、自餘の鴉をば大に卑しめ、わが上はあらうまじいと飛廻り、孔雀の中に交れば、孔雀安からず思ひ、

「汝は我一族でないに、何故に我一門の衣裳をば盗んで着たぞ」

と取囲いて、剝取り、散々に打擲して、羽中で恥を被かせたれば、泣く泣く鴉の中に加はり、尾羽を縮めて屈みまはつた。

下心

德も無うて欒を揚げうずる者は必ず恥に逢はうず、惡人まぎれて善人の中に交るといふとも、言語進退に忽ち惡が露れて、恥に及びて退かうずることは疑もない。〔文祿古譯本〕

獅子と馬の事

或馬野の邊に出て草を食むところに、獅子王これを見て、喰はうと思へども、

「左右なう走出るならば、それも逃げうず、所詮武略をして近かうずる」

と思ひ、いかにも靜かな柔軟な振で馬の傍に歩んで來、

「われは此頃醫道を稽古した、其方は痛い處があらば見せい。藥を施さう」

と云ふところで、馬この計略を推察して、

「さては天の與ゆるところぢや、吾この程足に杖を踏立てて、歩むことも叶はぬ、憚ながら療治して下されい」

と云へば、

「いと容易いことぢや、先見やう」

と云ふほどに片足を上げれば、獅子王振上げて見るところを、眼と覺しいあたりをしたゝかに踏めば、さしもに猛い獅子王も眼が眩うで心氣を失ひ、彼處にかつぱと倒れたれば、其間に馬は遙に逃げのび、

「ヤアしたりや」

と嘲つて行つた。〔文祿古譯本〕

下心

謀を以て人を誑し、おのれが依怙を勝たう者は、一度は必ずその羂に遇はぬといふことはあるまい。

或時きつね、餌食をもとめかねて、こゝかしこをさまよふ處に鷄に行あひたり。えたりやかしこしと、是を取てくらはんとす。鷄此事を覺て或木の枝にとびあがりぬ。狐手をうしなふて、せんかたなさに、所詮たぶらかしてこそ喰めと思ひて彼木の本に立寄て、いかに鷄聞召せ、此比禽のけだものゝ中なをうする事有、御邊は知給はぬか、久敷申承はらねに依て、態と是迄參りて候、といとむつまじげに語ければ、鷄狐のぶりやくをさとつて、誠にかゝる折節に生れあひぬる事こそめでたう候へ、能あひたり、犬能様にはからひ給ふべしといひて、更におりず。狐重て申けるは、先此所へおりさせ給へ、ひそかに申べき事有と、しきりによべ共終におりず。鷄用有さうにあなたをながめければ、狐下よりみあげて、御邊は何事を見給ふぞと申ければ、されば只今御邊の物語し給ふ事を告しらせてとや思はれけん、犬二疋はせ來られ候と申しければ、きつねあはてさわいで、さらば先某は御いとま申とて去んとす。鷄申けるは、いかに狐、鳥けだものに中なをりしけるに、其折節何事かは候べき、そこに待て、犬とまじはり給へときこへければ、きつね重て申やう、若彼犬、中直の事知ずば、我ためにあしかりなんと逃去ぬ。其如くたとひ人にあだをなすべき者と覺共あだを以て不レ可レ向。武略にてむかはゞ、我もぶりやくをもつてしりぞくべし。〔萬治古譯本〕

＊　＊　＊　＊　＊

むかし正直なる人、そらごとのみいふ人と有けり、此二人、猿の有所に行みける。然るに或木のもとに、猿の數多なみ居る中に、秀各つやまふ猿有、かのうそつく人、猿のそばに近付て例のうそを申けるは、是にけだかく見えさせ給ふは、ましら王にてわたらせ給ふか、其外面々見えさせ給ふは、月卿雲客にてわたらせ給ふか、あないみじさ有様ぞとほめける、ましら此由を聞て、にくき人のほめやうかな。是こそ誠の帝王にておはしませとて、引出物などしける。然を彼正直なる者思ふやう、是はうそを云だに引出物出したりければ、實をいはんに何したかは得ざらんとて、彼猿の邊に行て申けるは、面々の中に年たけよはひをとろへてくびのはげたるも有、盛にしてよく〱物まねするべくも有なんどゝ、有のまゝに申ければ、ましら大きにいかつて猿共いくらもむさぶりかゝりて、終にかき殺ぬ。その如く、人ゝよに有事も媚諂ふものはいみじくさかへ、すなほなる者はかへつてがいをうくる事あり。此故をさとつてすなほなる上に任せて侮る事勿れ。〔萬治古譯本〕

狐と鷄 ―― 猿と人

（萬治版本「伊曾保物語」挿繪）

童と盗人の事

或井のそばに、童子一人ゐたりしが、あなたこなたを詠ける間に、盗人一人走來り、此童を見て心におもふ樣、あなうれし、此者のいしやうをはぎとらばやと思ひて、近付侍る程に、盗人の惡念をさとつて、いとかなしき氣色をあらはして、鳴々ゐたりしが、盗人これを見て何事共知ず、よのつれのかなしみにはあらず、いぶかしく覺えてきしよりていかなることを悲むぞといへば、童云樣、何をかくし申さん、心にうき事有、たゞ今黄金のつるべを持て水をくまんとする所に、俄になわきれて、井戶の中に落入ぬ。千度尋もとむれ共せんかたなし、いかにしてか、主人の前にて申べきやと云ければ、盗人是を聞て面には哀にかなしきふりをあらはして、なぐさめて云、いと安事かな、われそこへ入て引上べければ、汝いたくなげくべからず。童是を聞てうれしくて、涙をのごひて願けり、其時盗人きる物をぬぎ置、井どの中におりて、ここかしこ尋るひまに、童此きる物を取て、いづちともなくにげ去けり。盗人やゝひさしくつるべを尋けれども、これにあはず、かゝる程に上にあがりしかば、置たるきものも、童も、せに見え侍らず。其時われとわが身にいかつて、獨言を云樣、誠に道理の上より之を、天道計ひ給ふ。其故は人の物を盗んとするものは却て、ぬすまるゝ物也とて、赤裸にて歸りにけり。(萬治古譯本)

* * * * *

或土器を作りて、未やかざるさきにほしけり。此かはらけ思ふ樣、扨も我身は、果報めでたき者かな、或は田夫野人のふみたりし土なれども、かゝるめでたき折節にあひて、人にあいせらるゝ事のうれしさよと、まんじゐける處に、夕立かのかはらけのそばに來て申けるは、御邊は何人にておはせしぞととひければ、土器答云、我は是帝王の土器也。いやしき者のすみかに至ることなしと申ければ、夕立申けるは、御邊は本を忘れたる人也。今左樣にいみじくほこり給ふ共、一雨あたまにかゝるなれば、忽本の土と成て。かまや。かき、かべにぬられなんず、人もなげにまんじ給ふものかなと云て、俄かに夕立かみなりさけびて、彼土器をふりつぶしければ、本の土とぞ成りたりける。是如く人の世に有て、世路に誇ると雖、忽土器の雨に砕るが如、不定の雨に誘引て、野邊の土とぞ成にける。我身をよくよく觀ずれば彼土器に異らず恩愛の親きいもせの中も、思へば根本土也。穢しき土をのみ愛して當來の勤をせぬ人は、無常の夕立に打んと、千度悔共劾有まじ。兼て此事を案ぜよ。(同」

土器慢氣を起す事

童と盗人——土器の慢氣

(萬治版本「伊曾保物語」挿繪)

330

饗餐に招た犬の話

（猩々暁斎筆「通俗伊蘇普物語」挿畫）

或大家饗餐を設け友人を招きしに、友人の飼犬主の後に尾て同じく其家に入來れり。其とき主家の飼犬も我主の脇に立て、友犬を出迎へ、「これはようおいでなされた。今晩は御一所に山海を食ませう」といへば、客方の犬謝辭をのべ、饗餐の用意があるのを見て、「イヤア盛んな御料理だ。それは好時候に參りました。緩々と拜借まして、今晩多量食溜をしませう。明日はなにも食物がありますまいから」と獨言をいひながら、嬉しまぎれに尾を揮と、其揮た尾が料理人の目に留り、料理人「イヤアこれには何處の犬だ」とズッと寄て引摑へ、窓の外へ投り出すと近所の犬が數疋駈寄り、「コヤどんな佳味を食ひなさつた」ときけば、投り出された犬は痛さをこらへ冷笑ひをしながら、「私はどうして内から出たか知れぬほど飲過たから、イヤモウ、頓とわすれました。」

他の尾に附てはいるものは、窓から投り出される憂があります。（明治五年版通俗伊蘇普物語）

331

驢馬と園夫の話

或る驢が園夫に追れて、路を歩いてゐた處が、どうした拍子だか前かゝりにかけ出して、熟路から逃て仕舞つて、只一途に斷崖に臨んで、すでに落んとしたる際へ、園夫が喘々追駈て來て、尾を握て引戻さんとすれども、驢はなか〳〵ひきもどされず、向の方へと引張たり。さうすると、園夫が怒を發て、握つてゐた尾をつきはなして、

「エヽ呆驢、汝が汝のしたい樣にするのなら、我はなにも助けやアしれへぞ。强情な畜生は汝が勝手の方へ往がれ。」（明治五年版通俗伊蘇普物語）

或人黐竿にて小鳥をさして、是を殺さんとなしけん時、鳥かなしげなる聲をたてゝ「いかに君、わが如き小さきもの食し給へばとて、何程の益か候べき。助け給はゞ三ツの大事を教へ奉らん」といふ。鳥さしさらば申せとありければ、小鳥よろこびて「第一に有まじき事をあらんと思ひ給ふな。第二にもとめがたき事をもとめんと思ひ給ふな。第三に去てかへらぬ事をなくやみ給ふな。此三つをよくまもり給へ。終身あやまちあらじ」といふ。鳥さし是をきゝて、いかにも理ある言條なりとて、其鳥を放してけり。其時小鳥は高き梢に飛あがりて、下の方を見おろし「さても御邊は愚なる人かな。わが腹には無比き玉を持てり。これを取給ふものならば、世にならびなき富貴を得給ふべきものを」といふにぞ鳥さし足ずりしてくひなげき、ふたゝびこれを捕へんとねらへば、鳥はなほ一段高き枝にうつりて「いかに君、御身よりまさりて拙き人は世にあるまじきぞ。その故

は、只今わが命にかへて傳はり給ひたる事をば何と聞給ひたるにや。第一にあるまじき事をあらんと思ひ給ふなといへり。たとへわれ我腹に玉ありといへばとてあるべき事にや如何に。第二にもとめがたき事をもとめんと思ひ給ふなといへり。我をひと度はなちたる後にくひなげき給ふは如何に。すべて人は御身のみならず、みな此三つの事にまよひて、終身心定まらぬものぞ、ゆゑにくるしみ給へと云て、林の内に飛入にけるとて

子曰、止におひて其止る所を知る。人を以て鳥に如ざるべけんや。

〔明治九年版渡部温「通俗伊蘇普物語」〕

＊　＊　＊　＊　＊

於止知止　（同上譯文）

有一個人、用黐竿子、粘了個小鳥兒、要殺的時候兒、那小鳥兒哀哀切切的說、怎麼您縱然喫了像我這様兒的小東西兒、有甚麼好處呢、要是您饒了我、傳給您納一件大事、那人說、那麼個說一說、小鳥兒歡天喜地的說、第一、別把應無的事當做有的、第二、別把難求的事打算去求、第三、別懊悔既往不復的事情、能守這三件事、終身必沒過錯、那人聽了、說、眞是有理的話呀、於是就把那鳥兒放了生了、這時候兒、那小鳥兒落在樹的高枝兒上、望下瞧着說、哎、你眞個癡愚的人哪、我的肚子裡頭、有顆無雙的珠子、若取了這個、能得世上無敵的富貴、那人跺着腳數悔、就又想拿他、拿了竿子、輕起准兒來、那小鳥兒又挪到比先高一層兒的樹枝兒上、說、眞世上再沒有比你還拙魯的人了、甚麼緣故呢、剛纔折了我的性命傳受的話、聽了所爲如何、第一說、莫把應無的事當做有的、假如我說我肚子裡有珠子、是聽有的麼、第二說、別把難求的事打算去求、然而求這難求的我、是怎麼様、第三說、別懊悔既往不復的事、在放了我之後、又懊歎是甚麼意思、大凡人不獨是個一個、都爲這件事、總一生心意不定的、着實的謹愼能、說完、飛進林子去了。

子曰、於止知其所止、可以人而不如鳥乎。〔明治十一年版中田敬義譯、北京官話伊蘇普喩言〕

鶏闘

鶏闘

某邨外有兩雄鶏相闘、卒分勝負、其勝者立於高處揚揚自啼、適有鷲飛過、闘鷄遂攫而去之、其負者反得安然、可知兩雄不並立、世事豈能繚科、朝暮宜自慎、榮辱不足憂、所謂螳螂捕蟬、不知黄雀在後、得意須防失意時、即此之謂也。（波澤「意拾喩言」）

鶏公珍味

昔有雄鷄、於亂草中尋食、忽獲一明珠數顆、光芒奪目、嘆曰、惜哉如此寶物委於坭中、人或見之不知貴重何如、今我得之、一無所用、反不如一粟之爲美也、俗云、何以爲寶合用則貴是也。（波澤「意拾喩言」）

フリジアの人、イソップが傳

（十三世紀ビザンツの學僧マキシモス・プラヌウデエス作と傳ふる原文ならば十七世紀フランスの詩人ラ・フオンテエヌが改修せしものに依る。）

かのギリシア最古の詩聖ホメロスの場合と同じやうに、私達はわがイソップに就いても、その出世の時をも所をも明かにせず、況してその生涯の事蹟に關して何一つ正確な記錄をも持たない。それにしても多くの罪なき國民を亡ぼした帝王諸侯のことにも足らぬ逸事までも細々しく書き傳へ乍ら、却つてこの凡ての人間のために巧みな言葉を以てまことの智慧を教へた古賢の消息をば空邈に委せて顧みなかつた歷史家の愚昧を呪はなくてはならぬ。しかし乍ら謂はゆる正史の記述を離れて口碑傳說の世界に入れば、こゝにもホメロスと同じくイソップについても興味の深い幾つかの話が傳はつてゐる。かの中世ビザンツの高僧マキシモス・プラヌウデエスの筆に成つたといふ「イソップ傳」は正しくその著しいものであるが、學者は一概にこれを妄誕の假作として排斥するために

今は古賢を記念すべきこの唯一の手掛かりをすら失はうとしてゐる。しかし私の思ふところはこれらの學者達とは違つて、恐らくこの書は、上代から中世に口傳てに傳はつたイソップに關する斷片的の說話を集成したもの、却つて所々にその人らしい眞情を盡くしてゐると考へられる。こゝに再びプラヌウデエスの古傳をば、そのあまりに子供らしき、又はあまりに野卑に陷る記事を避けて、餘を殆んどそのまゝに再錄しようとする所以である。

イソップは**フ**リジアの人、第五十三回の**オ**リムピア祭の頃、羅馬建國を距る二百年にして**ア**モリウムと呼ぶ町に生れた。**イ**ソップは自己を生んだことを天に謝すべきかはた呪ふべきか、彼は千萬人に俊れた精神を享けたと共に、千萬人に劣つた形貌――殆んど人間の形を備へない醜い形貌を持つて生れた、その上吃りで口が利けなかつた。かやうに肉體の上に天惠が薄かつたばかりでなく、生まれながら卑しい奴隷の境界に置かれた。それにも拘はらず彼の高貴な精神は殘虐な運命の煩ひから遙かに超越してゐた。

初めて**イ**ソップを買ひ取つた主人は、外に能が無いと思つたか又はこの醜い猿のやうな男を傍に近く見るのが嫌だつたか、とにかく彼を畑へ出して野良仕事をさせた。或る時小前の百姓がとり立ての美事な無花果を持つて來たので、それを主人は料理番に預けて浴後の果實に出せと言ひ付けたが、料理番が惡い奴で二三人の仲間と一所に盜んで食べた上に、ちやうどその時母家に歸つて來た**イ**ソップにその罪を塗り付けた。おかげで**イ**ソップはひどい仕置に合はうとしたが、仕置に合ふ前**イ**ソップは熱い湯を一杯のませて貰ひ、胃を揉むで腹中の食物を吐逆して見せた。しかし今飲んだ

白湯の外には勿論何も出なかつた。それで此度は同じやうにして料理番はじめ**イ**ソップを訴へた召使の者に吐逆させると果たして夥しい無花果がまだ消化しきれぬまゝでとび出した。**イ**ソップは赦され惡い召使共は罰せられた。口も利けず阿呆のやうな**イ**ソップが氣轉はこの時から現はれた。

その翌日である。主人は町へ用事があつて出て行つた。その留守にいつものやうに**イ**ソップは野良へ出て仕事をしてゐるところへ旅人が二人通り掛かつて、**ジ**ョオブの神樣にかけて町へ出る道を敎へてくれと云つて賴むだ。**イ**ソップはまづ二人を小蔭へ連れて行つて、ゆつくり休むで氣を落ち着かせ、それから自身先に立つて案內し、これからは一本道といふ本通まで送つて別れた。旅人は再び**ジ**ョオブの御名を呼んで、この親切には必ず善い報ひがあらうと云つて感謝した。**イ**ソップは旅人と別れて歸る途で急に睡氣が催して來たので、路傍の樹蔭に休んでうとうとまどろむだ。その夢に運命の女神が現はれて、**イ**ソップの結ばれた舌を解きほごし、この後は辯舌を以て身を立つべしと訓されたと思ふとうれしさに眼が醒めた。そして躍り上がりながら叫んだ

「どうしたといふことだ。私は聲が出る、(鵞と燕子)、さあ何んでも云へるぞ」

イソップはかうして人並に口が利けるやうになつたが、そのために主人を替へなくてはならぬことになつた。その頃**イ**ソップの主人の番頭で奴隷達の取締をしてゐる**ゼ**ナスといふ男があつたが、或る日一人の奴隷を捕へてひどい仕置をするところを**イ**ソップが見かね、その亂暴を詰つた。すると**ゼ**ナスは怒つて主人に**イ**ソップを讒言して、前代未聞の怪異出來、**イ**ソップの奴が口を利いてゐる、しかも神を汚し人を凌ぐやうな冒瀆をしきりに口走つてゐると云つたので、主人は腹を立つて**イ**ソップを**ゼ**ナスに與へ、其方の勝手にせよと云ひ渡した。**ゼ**ナスは**イ**ソップを連れて畑へ歸る途中一人

の商人に逢つたが、その男はゼナスに、駄馬があつたら一匹賣つてくれと云つた。ゼナスは、駄馬は生憎持合はせないが人間の奴隷ではどうだ」と云つてイソップを見せると、商人は冗談を云つちやいけない、こりやあ猿だ」と云つてぶつぶつ口小言を云ひながら行かうとするので、イソップはうしろから呼び止めて「若し若し、奮發して私をお買ひなさい、買つて置いて御損の行かない代物ですよ。あなたのお子供衆が徒らで、云ふことを聞かなかつたら、私の顏を見せるとすぐ温しくなります。これがほんとのお妖のをぢさんだ」と云つたので、商人も笑つては三オボリ（五錢銀貨三つ）でイソップを買ひ取つて「とんだ厄介物を背負ひ込むだが何にしろ安い物だ」と云つて連れ歸つた。

このイソップを買取つた商人は奴隷の賣買をする男なので、それから途々も奴隷を多勢仕入れて、道中の日用品はこの奴隷達の背中に銘々その膂力に應じて背負はせた。イソップは生まれつき體は小さし力はないから中でも一番輕いものを持たして下さいと願つて、自分から一番嵩張つた重たいパンの包を背負つた。外の者は何だ此奴は馬鹿みたいな男だと思つて嗤つてゐると、この大きな荷物はその日の晝飯に減り夕飯に減りして、翌日にはもうすつかり無くなつてしまつて、イソップは空身になつたので、なるほど氣の利いた男だと皆が今更のやうに感心した。

さてこの商人はサモスの都へ、イソップと、外に作文の學者と唱歌師と各一人の奴隷をつれて市場に賣りに出た。澤山買手の集つた中にクサントスと呼ばれた哲學者がゐた。この哲學者は先づ作文の學者と唱歌師とに何か出來るかと云つてきくと、二人ながら「何んでもできる」と答へた。これを傍で聞いてイソップがにやりと笑つた、その氣味のわるい笑顏を見て人々は危ふく逃け出しさうにした。さて右の作文の學者は千オボリ、唱歌師には三百オボリといふ高價を商人は吹いてゐた。そ

してこの二人の中の一人を誰でも早く買つた人には、もう一人の見つともない奴隷をお負けにして遣ると云つた。クサントスはあんまり價が高いので厭になつたが、さりとて手ぶらで家へ歸るのもつまらないと思つてゐると、一所に來た弟子共が、では今奇妙な顏をして笑つたあの男をお買ひなさいと勸めた。あの男は案山子の代りになるでせう、と一人が云つた。道化の代りにもなるともう一人が云つた。クサントスは到頭この勸めに任せることにしてイソップを六十オボリで買ふことに相談ができた。愈々この取引をすます前に哲學者は前の通りイソップに何が出來ると聞いた。「なんにもできません」とイソップは答へた。そのわけは前の二人が「何んでも出來る」と云つて自分達一手にみんな引き受けてしまつたからである。

さてイソップを家へ連れて歸るについてクサントスに一つの難儀と云ふのは、細君がひどい癇性で召使などの樣子や顏立を恐ろしく氣にする質なので、イソップをこのまゝ默つて細君の前へ出したらどんな騷ぎになるか分かつたものではない。そこでクサントスは一計を案じて、前以て今日は主人がすばらしい美男の奴隷を買つて歸るといふ噂を家中にひろげさせて置いた。それで細君付きの婢共はどんないい男が來るかと思つて胸を躍らせて待つてゐた。ところへ主人と一所について來た奴隷を見ると、これはまた人間並外れた異形の人物なので、第一の婢は顏を隱し、第二の婢は逃出し、第三の婢は金切聲を立てた。それよりも大變なのは細君で、こんな怪物を連れて來たのは、私をこの家に居たゝまれないやうにする策略であらう、夫が私に飽きてゐることはとうから感付いて知つてゐると云ふやうなことから言葉爭ひがはげしくなつて、かうなれば何んでも實家へ歸つてしまふと云ふのを、クサントスもじつと蟲を抑へる、イソップが頓智で取り成す、それで細君も我を折

つてこの怪物も居ついたら馴れるかも知れない、まあ置いて御覧なさいと云ふことで結末が付いた。

それから暫らく夫婦仲がどうにか納まつてゐると思ふと、忽ち大喧嘩がはじまつて別れ話になつた。その騷ぎの本は、クサントスがさる所の宴會に呼ばれて、あまり美事な御獻立だつたので、その中を分けて細君への土産にする積りで、供に連れて來たイソップに渡して、これを私の可哀い奴にやつてくれと云ひ付けた。イソップは早速歸ると、これをのこらず、主人の可哀がつてゐる小犬にやつてしまつた。クサントスがやがて歸つて來て先刻の御馳走は甘かつたかいと細君にきくと、細君はけげんな顔をしてゐるので、イソップを呼び出した。イソップは澄ました顔をして「私の可哀い奴」と仰しやつたから、てつきりあの犬のことだらうと存じてをりました。何ぞと云ふと二言目には言葉を返して、出るの引くのと仰しやる奥方に比べれば、いかに荒い言葉を云はれてもおとなしく辛抱しますし、打ち叩かれてもやはり人なつこく寄つて來る、あの犬の方がよつほど可哀い奴だらうと思ひちがひをいたしました、失禮は御免と云つた。それで細君は愈々辰巳上がりになつて、此度こそはほんたうに家を出てしまつて、それからはいくら仲人を頼んでも親類を中に立ててもいつかな強情を張つてゐる。これにはクサントスもあぐんでゐると、イソップが、では私が甘くやつて見せますと云ふので、どうするかと思ふと主人から金を貰つて町へ行き、雀、鴨などの御馳走の材料をしこたま買集めて、わざと見せびらかすやうに大路を持つて歩いてゐる、それを細君の實家の召使が見付けてふしぎがると、待つて居たと計りに、旦那樣は久しく、奥樣が御機嫌を直して歸られるやうに心を盡くされたけれども、愈々諦めて他所から嫁御を貰はれることになり、今夜が即ち祝言だと告げた。この話が實家にゐる細君の耳に入ると、果たしてのぼせ上がつてしまひ、かうして獨りゐ

るも腹が立つのに、眼の前に他の女などを代りに貰はれてたまるものかと云ふので、此度はなんでも戻る々々と云出して戻つて行つた。それでまたまた夫婦の仲は納まつたが、それよりクサントスは愈々イソップの智慧に降參し、細君は又イソップが何かと云ふと惡戯をして、しかも結局人を馬鹿にして、ぬけぬけした顔をしてゐるのが、小面が憎くてしやうがなかつた。

その後或る日何かの祝ひ事に、クサントスは友達を呼んで御馳走をする積で、イソップに命じ、町へ行つて最上の品物を仕入れて來い、外のものは要らぬと云つた。イソップは「主人め、自分でこれこれと極めて云ふことができないものだから、奴隷の好みに任せきりにして、後悔しても知らないぞ」と腹に思ひ乍ら、承知して獸の舌を餘るほど買つて來た。そしてこれにいろいろ味を付けて客に薦めた。客も始めは舌の料理だといふので珍重して賞翫したが、それから出る料理も出る料理も舌ばかりなのでうんざりしてしまつた。クサントスは氣が氣でなく何故こんな馬鹿げた料理をこしらへたと云へば、イソップは澄まして、「旦那樣は町にある最上の物だけを求めて來い、その外は要らぬと仰しやつたではございませぬか、抑も舌こそは文明の世の手形でございます、百科の學問を開く鍵、道理と眞實を用ふる機關でございます。このお蔭で國家も出來れば、國家の政治も出來る。殊更大事な舌のつとめは、神樣にお祈を申上げるになくてならないものではございませぬか。」

これでクサントスはまたしてもイソップにやり込められたので苦笑しながら「よしよし。では明日は町へ行つて一番下等な品物を求めて來い。もう一度今日のお客樣方を呼んで變つた御馳走を上げたいから」と云つた。

翌日になつて、イソップは相變らず以前のとすつかり同じ獻立をこしらへた。そしてから說明し

た——。
「舌といふものは世界で一番悪い物だ、戰爭も舌、訴訟をするのも舌、凡て不和の元は舌からおこります。舌は眞實をひろめる機關には違ひないが、同時に虚僞をも傳へますし、なほ悪いことは誹謗讒誣の道具に使はれます、このお陰で國家も亡び、國民が非道を働きます。神樣のお名を讃へてる舌が、やはり神樣のお名を汚すやうな非禮をいふのではございませぬか。」
客はこれを聞いて主人に向ひ、この下男はあなたには無くてならぬ男だ、辛抱して使つておやんなさいと云つた。
クサントスが或時ぼんやり浮かぬ顔をしてゐる。「何を考へてゐらつしやる」と**イソップ**は聞いた。「何をされても氣にしないのんきな人間を連れて來い」と主人は云つた。翌日**イソップ**は市場から一人の至つて無神經らしい百姓の男を引つ張つて來た。「へい、これが御注文の人物です」と**イソップ**は紹介した。主人は細君に命じて湯を沸かさせ、細君の手づからこの百姓の足を洗はせた。百姓は多分これがこの邊の風儀なんだらう位に考へて氣の毒らしい顔もしない。主人に恭しく上席を薦められて、御馳走を山と積まれると、有り難うとも云はずに食べてゐる、その傍で主人はやたらに料理番の庖丁加減を罵り、召使の無作法を口汚く叱りとばすけれど、客は何の苦勞もなささうであつた。しまひに細君の御手製で食後のお菓子が出ると、主人は愈々癇癪玉を破裂させて「女房の古猫めがなんといふまづいものをこしらへるのだ。薪に火をつけて燒き殺してしまへ」とどなると、百姓が始めて「まあ待つて下さい」と呼立てたので、主人は占めた、到頭降參したと思つたが、百姓はけろりとした顔をして「わしも行つて女房を連れて來ます。一所に燒いて貰ひませう」と云つたので

二度呆れた。これで主人はまたまた**イソップ**に兜を脱いだ。
イソップが冗談の相手は主人だけではなかつた、或る日往來を歩いてゐると、町で羽振のいい役人が向ふからやつて來た、**イソップ**を捉へて何處へ行くと聞くので、**イソップ**は面倒くさかつたかぶつきらぼうに知りませんと云つた。それが役人の癪に觸つて、無禮な奴だ、牢屋へ引けとなつた。家來がバラバラと驅け寄つて來ると、**イソップ**は大きな聲で「知らないと申上げたわたくしのお答は嘘ではありませぬ。牢屋なぞへ行かうとは今の今までもどうしてわたくしが知りますものか」と叫んだ、役人はこの頓智に感じて**イソップ**を放免した。
イソップはよく主人をからかつては嬉しがつてゐたが、主人の爲めになることも多かつた。或る時**クサントス**は弟子達を大勢集めて大宴會を開き、べろべろに醉ひ潰れた末に、氣ばかり大きくなつて、これ計の酒がなんだ、大海の水でも飲み干して見せると豪語した。客はおもしろがつて、日を定めて主人と賭をすることになり、主人が負けたら、家屋敷を差出す、その契約のしるしにと云ふので**クサントス**は嵌めてゐた指環を出した。
その翌日醉が醒めてゐると、**クサントス**は手から指環が失くなつてゐることに氣がついた。それと共にこの廣大な家屋敷まで馬鹿な賭物になつてゐることを思ひ出した。どうしようかと思案に餘つてまた**イソップ**に相談して智慧を借りた。さて約束の當日になると都の貴賤老若、今日はめづらしい賭事があるといふので先を爭つて海邊に集まつた。その時**クサントス**は山のやうな群集の前に現はれて、得意らしい大聲を張り上げ、「お約束の通り只今大海の水一滴のこさず飲み干して御覧に入れる。但しその前に申上げて置くことは、約束外の河の水が外から入つて來ぬやうにそれをまづせき

止めて頂きたい」と云つた。これで相手はあやまつてしまつた。

イソップの頓知でクサントスは家屋敷と共に名譽までも失ふことを免れたので、その禮には日頃願つてゐる自由の身分に此度こそはしてくれと云つて頼んだが、主人はやはり許さなかつた。だが若し、それが神意だつたら許してやる、例へば二人がこれから外へ出る、途中で鴉が二羽鳴き合つて來るやうなことがあつたら許してやると云つた。それでイソップは主人の供をして行くと、主人が一寸森蔭に入つたひまに鴉が果たして二羽カアカア云つてやつて來た。イソップはあはてゝ主人を呼んで見せようとしたが、その戻つて來た時には一羽の鴉はもう何處かへ飛んで行つてしまつた。主人はいつもいつも己をなぶりものにすると云つて、大變腹を立つて我家へ歸ると外の召使ひに吩附けてイソップをひどく折檻させた。その折ちやうど主人に迎へが來て、或る神殿で行はれる婚禮の式に呼ばれて行つた。イソップはうらめしさうに主人を見て、二羽の鴉を見た私がこのやうに打たれて、一羽の鴉しか見ない主人が神樣の前に呼ばれて行く、これでは神意もあてにはならぬと叫んだ。この言葉に主人も悟つて鞭の手を休めさせた。しかし相變らず暇はくれなかつた。

或る日クサントスは從僕と墓石の中をぬけていろいろの碑銘を讀み歩いてゐると、一つの碑面にどうしてもよめない文字が彫つてあつた。これをイソップが釋いて「四足下がれば寶がある」と云ふ文句の頭字だけをとつて並べたものだと云つた。果たしてその言葉に違はず寶が隱してあつた。これを見ると主人は慾心がおこつて、初めにイソップと約束した通り寶を山分けにすることも惜しくなり、その上棄ての願ひの暇をやる約束までとり消してしまつた。その樣子を見たイソップは、いやこの碑文にはもう一つの意味がありますと叫んだ。この寶は帝王のものだと書いてある。それで

シャント(クサントス)……謀をエソポに敎へられ、翌日海邊に出て、大海を飮まうと爭ふ程に見物の貴賤海の邊に市を成した。其時シャント器物に潮を汲んで、高座に上つて言ふは、「吾昨日の約束の如く、海の水を悉く飮み盡さうず、然れども先づ諸の川の流を堰留められい、其後海を悉く飮まうずる」というたれば、其時爭うた人は問訊して、シャントの足元にひれ伏し「只今に及うで聊爾を申した、右の賭物をば御赦免あれ」と頼むに由て、其處に聚集つた萬民も共に赦されいと乞受くるに由て、乃ち赦免せられた。(「文祿舊譯伊曾保物語　エソポが生涯の物語略」)

シャントうしほをのまんこけいやくの事
(萬治二年版本「伊曾保物語」挿繪)

は私は行つて訴へて來ます。これを聞いた主人は蒼くなつて、では貨を分けてやるから他人には云ふなと口止めした。しかしイソップは一向うれしくないやうな顔をして「いやそれをして頂いても別に有り難いこともありませぬ。碑文にはもう一つの意味があつて、寶を發見したる者は歸りてこれを人に分かつべしと書いてあるのだから」と云つた。それでも飽迄我慾のクサントスは家へ歸るとイソップを捕まへて鐵の牢へ押し籠めた。イソップはしかし「おやおや、旦那様、これがお約束の御褒美でしたか。まあたんとしたいことなさるがいい。今に厭でも私を赦さなければならないから」と云つた。

間もなく果たしてイソップの言葉の通りになつた。クサントスの住むサモスの都に容易ならぬ奇異が現はれて、大切な國璽に用ふる指環を鷲がさらつて奴隷の懐に落した。この前兆の善惡如何が國中の騒ぎになつて、クサントスはこの國での學者と云ふのでその判斷を命ぜられたが、クサントスの智慧ではどうにもならないので、またもや臆面もなく牢の中へ放り込んでおいたイソップの所へ行つて頼むだ。しかしイソップは考へる所があつたか、直ぐには應じないで　此度は私をそこへ出して下さい、若しうまく行けば主人の名譽、萬一しくじつてもその時は私が罪を背負ひますからと云つたので、手前勝手なクサントスは一議もなく承知して、イソップをつれて行つて國中の立派な人達の集まつた眞中へ押し出した。すると人々がイソップの異形を見てやかましく嘲り騒ぐのでイソップが皆さんは酒瓶の形の雅でないといふ理由で中の酒の美味までを疑ふかといつて演説したのでやつと靜かになつた。そして此度は口々に遠慮は要らぬ。早く善惡の判斷をせよと迫つた。イソップはわざと落ち着いて、しかしその前に申し上げたいことがある。私は奴隷の身分で主人と

私とは不思議な運命に置かれてゐる。何故と云ふに、私がここで、まづいことを云へば傑でない奴といつて打たれます。若し又主人よりも立派なことを申上げてもやはり生意氣な奴だといつて打たれます。私の身分がどうかならぬうちは、進退兩難まことに困る、と訴へると、一同それは尤だと云ふので、到頭衆の權力でクサントスを無理往生に承知させ、イソップはここに初めて自由の身になつた。そこでイソップは徐ろに、奇瑞の所以を釋いて、これはサモスの都が他國に征服せられるしるしである。鷲が國璽を持ち去つたのは或る武力の旺んな國王がこの國を侵さんとする兆であると判斷した。

この豫言に違はず、リヂアの王クレエソスはサモスの國に使を送つて貢物を入ることを命じ、若し背けば武力を以て征服すると脅した。サモスの人は意氣地なくこの要求に應じようとしたが、イソップは、運命が人間に示す道は二つしかない、自由の道は初にこそ荊棘が茂つて岩石が險しいが後には段々と樂になる。それとはちがつてもう一つの屈從の道は初めこそ氣樂であるが後には苦しくなるばかりだと云つたので、國人も成る程と悟つて敵國の使を罵り歸した。それでリヂアの王も愈々干戈をとりのへてサモス征伐の軍議を開いたが、その時サモスへの使節に立つた男が王を諫めて、彼國にはイソップと云ふ賢人がある、あの者のゐるうちは征服もおぼつかないと言上したので、王もそれに聞きおぢして、再びサモスに使をやり、イソップといふ男を當方に送れ、さすれば自由をゆるしてやると言ひやつた。サモスの人は此度も二言といはず、恩人のイソップを敵國に送らうとしたが、その時イソップは「狼と羊」の喩言を引いて、狼が羊に向つて番犬をまづ人質に送れ、さすれば羊と永久の平和を結ばうと云つた。羊がそれに欺かれたゝめに自分達を守る大切な犬を

失つた上に、みな狼の餌食になつてしまつたと云ふ話をすると、サモスの人も道理に感じて前議を變へた。しかしイソップは別に思ふところがあつて、此度は自分から進んでリヂアの王宮へ赴いた。

クレエソス王はイソップの卑しい風采を見ると、何だ貴樣のやうな奴が私の意志に戻るやうなことをさせたか、とひどく口惜しかつて直にも仕置に行はうとした。イソップはその時、「蝗を捕る男が序に蟋蟀を捕へて殺さうとすると、蟋蟀は哀しい聲を絞つて、私は何の罪で殺されるのです。私は田畑を荒したことはありませぬ。私はたゞ大な聲で罪の無い歌を歌つてゐるたけだと申したと云ふ、王樣、私はこの蟋蟀のやうにたゞ物を言ふ力をもつてゐるだけで　それてあなたを傷けた　ことはないのです」と云つたので、王の心も釋け、イソップをゆるした上にサモスの國の征伐も思ひ止まつた。

イソップがその深山の喩話を作つたのはこの頃の事であつた、彼はこの喩話をば置土産にしてリヂアの宮廷を去つてサモスに歸り、そこで名譽の地位を與へられた。その頃イソップは諸國を遍歴して國々に名高い學者達と議論を鬪はして見たいと思ひ立つた。しかし其後緣があつて彼はバビロンの王宮に足を駐め、リケロス王の顧問となつた。その時分ギリシアの國々の間には互ひに使者を遣はして難題を送り、これを甘く言ひ中てたと中てぬとに由つて、双方禮物を取つたり取られたりしてゐた。この遊戲にイソップは王を助けて屢々その奇才を諸國の宮廷の間に現はした。

年久しく經つ程にイソップも妻を迎へたが、子が無いのでエンノスと云ふ者を養子にした。しかしこの男は心性の曲つた者で、イソップの名譽を傷ける所行があつた。イソップは怒つて家から追ひ出した。これを怨みに思つてこの惡漢はリケロス王の讐敵の或る王とイソップの往復した僞の手紙と僞の印章を作つて王に讒言した。それで王は碌に調べもせず、イソップを捕へて直に死刑に處す

ることを命じた。ところがこの殘酷な命令をうけ取つたヘルミッポスといふ人はイソップの親友だつたので、死んだと見せてイソップを墓窟の中に隱して置いた。その後間もなくエジプトの王子クチナボはイソップの亡くなつたことを聞き、今は憚る者がないと云ふので、バビロンの王に難題を持ちかけ、これが釋けずは貢を入れて屬國になれと言ひ送つた。その難題と云ふのは空中に塔を築いて見せろと云ふのであつたが、國中の學者を集めて相談しても一向名案も浮かばぬので、王も今更イソップを失つたことを後悔した。そこへちやうど折も好しとヘルミッポスが、隱して置いたイソップを暗い墓窟から連れ出して王の赦免を願つた、王も今は却つてイソップの寃罪を氣の毒に思つて、早速元の身分に歸してやつた。さて例の難題をイソップは聞いて呵と笑ひながら、では明春當方から空中に塔を作る職人を送るからと云つて返事をさせた。

王は沒收したイソップの財産調度をのこらず返してやつた上に、腹の黑い養子を自由に處分せよと云つて引き渡したが、イソップは別に復讐の手段もとらず、却つて穩かな言葉でいろいろの教訓をした、その教訓は、神と王とを崇めよ、敵をして畏れしめよ、他人のために有用の人となれ、妻に親切にせよ、されど大事の秘密を語るな、言少く話せ、饒舌家の群に入るな、不幸に屈するな、明日の計を立てよ、生きて友のわづらひとならんよりは死して敵を喜はせんに若かじ、徒らに他人の幸福と才能を羨むは却つて我身を傷くるに終らむ——かういふ教訓をいくつとなく云つて聞かせた。エンノスは恥ぢて自殺した。

さて翌春になつて約束の期日が迫ると、イソップは兼ねて馴らして置いた鷲五六羽の足に籠を結びつけ、籠には各五六歲の子供を入れて、エジプトの王宮に赴き、王の御前においてこの鷲を放す

と、鷲は籠ぐ押へたまゝ塔の上へ高く翔つた、その時子供は口々に上にゐるエジプト王の家來達に向つて「さあ塔を建てます、石を運んで下さい、土を持つて來て下さい」とどなつた。

エジプト王は死んだと思つたイソップにまた出て來られて、眼の前で譯も無く鼻を折られてしまつたので口惜しくてたまらず、どうがなしてイソップを取り拉いでやるつもりでいろいろ難題を持ちだした。まづ「バビロンの馬が嘶くを聞いて當國の牝馬が孕むことがある、これはどうだ」と聞くと、イソップは後刻まで返答を待つてくれと頼んで、家へ歸ると子供達に吩咐けて猫を一匹捕らせ往來を引張り歩いて打ち叩かせた。エジプトでは元來猫を神にして崇る風習があるのでこの事忽ち都中の騷ぎとなり、王の許へ訴へ出るものが跡から跡からと押しかけた。王は大きに立腹してイソップを呼び出して責めた。イソップは平氣で「いやあの猫は昨晩バビロン王の大切にせられる鷄を盜んで喰べました」と云つた。王は愈々熱くなつて「馬鹿にするな、エジプトの猫がバビロンの鷄を喰べるか」とどなりつけると「それだからバビロンの馬の嘶きがエジプトの牝馬の耳にまでとどくのでせう」とイソップは答へた。

その後エジプト王はなほ懲りずまに、國中の賢人智者を集めて、その席でイソップに向ひ、さまざま難題を持ち出させた。その中の一人が云つた「ここに一本の柱で支へた大伽藍がある、その周りには十二の都市があつて、その都市には三十の外廓がある。その周りを一人は白衣、一人は黒衣をまとつた二人の女が代る代る歩いてゐる。これを何と釋く」。イソップは嗤つて「これは子供だましの謎だ。大伽藍は即ち三千世界、一本の柱は一年、十二の都市は十二ヶ月、三十の外廓は即ち日、その周りを往來するのは晝と夜だ」と答へた。

エジプト王、出すものも、出すものも、片つ端からイソップに言ひ開かれて、思案に盡きた揚句、此度は開闢以來見も聞きも及ばないものを出せと云つた。イソップは明日、それをお目に掛けませうと約束して家へ歸つて、一片の紙に何やら書いてそれを王の前に差出した。王が見ると、エジプトの王がバビロンの王から二千タレントの借金證文で、まざまざしく双方の玉璽が捺しておつた。王はびつくりして思はず「さてもこんなあざとい詐欺は見たことも聞いたこともない」と叫ぶと、群臣一同異口同音に「全く見も聞きも及ばぬことでございます」と答へた。イソップはその時「それがお約束の品物です」と平氣な顔をしてゐた。王もこれですつかり我を折つて、イソップを厚くねぎらつて國に歸した。

バビロンへ歸ると、イソップは王はじめ諸人の盛んな渴仰を受け、この國最上の名譽を與へられた上にその記念像が都に建てられた。けれどもイソップは兼ねて諸國行脚の宿望をこの折に必ず果たす決心を立て、一切の名譽を辭して飄然雲水の旅に出た。

まづギリシアの國に赴いて、デルフォイの神都に入つた、しかし神々の鎭座まします靈地には似氣なく國人の心はねぢけてゐて、イソップの智慧におそれて、狐疑の心ばかり徒らに深く、心からこの賢人を歡迎するものもなかつた。それでイソップも失望して、「海邊の旅人」の喩言を引き、遠くから沖をながめて美しい船だと思つたものが、濱邊に近づいて見ればつまらぬ腐れ材木であつたと云つて、暗に國人を譏つたので益々その怨恨を深くした。それがため到頭神廟の寶器を盜んだといふ寃罪を被せられて捕はれ、死罪に處せられることになつた。

最後の場合になつて、イソップはまた「鼠と蛙」の喩言を用ひて國人の反省を求めた。蛙が自分の足と鼠の足とをつなぎ合はせて、一所に池の中へ引込んだ。鼠は直ぐ溺死したが、蛙がその肉を味ふひまもなく鳶が上から下りて鼠の死骸を捕へた、それと共に蛙も引き上げられてこれも鳶の餌食になつた。デルフォイの國人がこのイソップを捕へて殺すのは蛙が鼠を捕るよりも容易いことながら、今にもつと強い鳶が來てお前逹を亡ぼすに違ひない――かう言つて說いたがデルフォイ人は嘲笑つてとり合はず、イソップを引立てゝ仕置の場所と定めた山の上に連れて行つた。この間際になつてもイソップはなほ逃け道を考へて、その邊に立つてゐたアポロン神の廟にとび込んだが直ぐ引き出されてしまつた。ここでもイソップは最後の「鷲と甲蟲」の喩言を語つて、兎が鷲に追はれて百計盡きて小さな甲蟲の助けを求めた。甲蟲は兎のために楯になつてやつたが鷲は甲蟲を馬鹿にしてか平を取つた。それを甲蟲が怨んで鷲が卵を産むと殼のまゝ落して殺した。鷲も困つてユピテル大神の膝の上に兒を隱したがやはり甲蟲の執念ぶかい復讐を免れることができなかつた、そのやうに、このアポロンの祠は私のためには甲蟲同然の小さな避難所にはすぎぬけれど、お前逹がこれを冒せば、この後ユピテルの大神殿の中にても、お前逹は隱れ家を求めることはできなくなるぞ――かう云つて說いたが、デルフォイ人は耳にもかけず、到頭イソップを高い巖の上から突き落してしまつた。

その後間もなく、デルフォイの都一國に惡疫が流行して國人は大に苦しんだ。そこでデルフォイの神託を伺ふと、罪なきイソップを苦しめた天罰だ、早くイソップの靈を慰めよと云ふことであつ

イソホ人にせうぜらる〻事及び
イソホの最期
（萬治二年版本「伊曾保物語」挿繪）

イソホ人にせうぜらる〻事

エジツトの都に、やんごとなき學匠有けり、おほかたちみぐるしきこと、イソホにまさりてみにくく侍れど、おのれが身の上は知ず、イソホが姿のあやしきをみて笑なんとす。或時綾と金銀れうらを以て座敷をかざり、玉をみがきたるが如くにして、山海の珍物を調、イソホをなんせうじける。イソホ此座敷のいみじき有様を見て云、かほどにすぐれてみごと成座敷世にあらじとほめて、何とか思ひけん、彼主のそばへつゝとよりて顔につばきをはきかけけるに、主いかつて云、是はいかなる事ぞととがめければ、イソホ答云、我此程心ち悪事有、然につばきをはかんとここかしこを見れ共びびしく御かざられけるざしきなれば、いづくにおいても御邊のかほにまさりてきたなき所なければ、つばきをはき侍るといへば、主答云、彼のイソホに増りて才智りせいの人あらじと笑ひ諂ける。〔萬治版本伊曾保物語〕

た。國人はイソップのためにピラミットを作つて懇ごろに囘向した、しかし人間の罪惡は神ばかりが罰するものではない。ギリシアの本國から間もなく使が來て、事情を糺しく糺彈した上、惡人共を捕へて嚴刑に行つた。

――なはり――

むかしむかし黄金時代には
鳥獸がみんな言葉を聽き分けて
森の會議に大雄辯を揮ひました
巖石も松の樹も啞ではなく
海は船頭に話かしかけ
燕は百姓に面白い物語をする
地は働かずによろづの實を結びます
それで人間と神樣とは友達同士
これこそはあの昔の賢人イソップが
敎訓話の世界です。

――バブリウス希臘韻文イソップ喩言集序歌――

イソップ物語終

喩言索引

――音引五十音順――

（日本數字は喩言番號、アラビヤ數字は頁付）

オ

カ

キ

ク

コ

サ

シ

發行者寄贈

昭和24年11月20日 印刷
昭和24年11月30日 發行

〔イソップ物語〕

定價 ¥280.00

譯者 楠山正雄

發行者 合資會社 冨山房
代表者 坂本守正
東京都千代田區神田錦町二ノ九

印刷者 株式會社 三集社
代表者 伊藤哲治

發行所 合資會社 冨山房
東京都千代田區神田神保町1の3
電話 神田(25)2171～8

製本 大勇社

情操教育や藝術教育にふさはしい課外讀本に
高貴な智慧と優雅な感情の芽をはぐくむ源泉

☆冨山房の書とお話の本☆

こども聖書 **舊約物語**　中村星湖 編
定價 ¥400　包送料 65
B6 538頁 別刷多數 きれいな裝幀
★天地のはじめ・エデンの園・ノアの箱船…41話

ロビンソン漂流記　平田禿木 譯
定價 ¥360　包送料 65
B6 450頁 別刷多數 きれいな裝幀
★驚くべき描寫 ・ 永續的興味 ・ 世界的名著

トルストイ童話集　水谷まさる 譯
定價 ¥380　包送料 65
B6 576頁 別刷多數 きれいな裝幀
★子供たちのために・イワンの馬鹿…………33話

日本芝居物語　岡本綺堂・額田六福 著
定價 ¥350　包送料 65
B6 530頁 別刷多數 きれいな裝幀
★修禪寺物語・勸進帳・假名手本忠臣藏……23幕

西遊記　中島孤島 譯
定價 ¥350　包送料 65
B6 507頁 別刷多數 きれいな裝幀
★雄大な構想 ・ 奔放な空想 ・ 盡ない興味

アメリカ發見物語　波多野完治 著
定價 ¥180　包送料 65
B6 208頁 別刷多數 きれいな裝幀
★ふしぎな地圖 ・ アメリカ發見物語…… 7話

こども世界歴史　中島孤島 著
定價 ¥280（上卷）　包送料 65
B6 488頁 別刷多數 きれいな裝幀
★子供のための世界歴史　下卷近刊

請求番号
受入番号
○貸出期間は二十日以内
○転貸しないで期間内に御返し下さい
○左の場合は保証金で弁償しなければなりません
(1)図書を亡失、又は毀損した場合
(2)督促を受けてから十日以内に返さない場合
国立国会図書館